

茨城県教育財団文化財調査報告第67集

一般県道友部内原線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

五 平 遺 跡
蔵 田 千 軒 遺 跡
権 現 古 墳 群

平 成 3 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第67集

一般県道友部内原線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

こ へい 遺 跡
くら だ せん げん
蔵 田 千 軒 遺 跡
ごん げん
権 現 古 墳 群

平成 3 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、産業・経済の発展に伴い、交通量の著しい増加による交通渋滞の緩和と地域の活性化を図るため、県内の道路網の整備を進めております。県道友部内原線道路改良工事もその一環として計画されたものです。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、昭和63年10月から平成元年3月にかけて県道友部内原線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、五平遺跡、蔵田千軒遺跡、権現古墳群の調査成果を収録したものであります。本書が考古学的な研究資料としてはもとより、教育・文化向上の一助として広く活用されますことを希望致します。

なお、発掘調査及び整理に当たり、委託者である茨城県をはじめ茨城県教育委員会、内原町教育委員会等の関係各機関や関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、心より深く感謝の意を表します。

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 磯 田 勇

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、昭和63年度に発掘調査を実施した茨城県東茨城郡内原町五平1242-2番地ほかに所在する五平遺跡、蔵田千軒遺跡、権現古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 五平遺跡、蔵田千軒遺跡、権現古墳群の調査及び整理に関する当教育財団の組織は次のとおりである。平成2年度初めの組織替えにより、従来の調査課（企画管理班、調査一、二、三班、整理班）は埋蔵文化財部となり、その下に企画管理課、調査課、整理課を置き、調査課には、調査第一・二・三班の三つの班をおくこととなった。

理 事 長	磯 田 勇	昭和63年 6月～	
副 理 事 長	小 林 元	昭和63年 4月～	
常 務 理 事	小 林 洋	平成元年 4月～	
事 務 局 長	坂 場 庸 克	昭和62年 4月～平成元年 3月	
	一 木 邦 彦	平成元年 4月～	
埋蔵文化財部長	石 井 毅	平成2年 4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行	平成2年 4月～
	課 長 代 理	水 飼 敏 夫	平成2年 4月～(昭和62年 4月～平成2年 3月企画管理班長)
	主 任 調 査 員	山 本 静 男	(昭和62年 4月～平成元年 3月企画管理班)
	主 任 調 査 員	小 河 邦 男	(平成元年 4月～平成2年 3月企画管理班)
	主 任 調 査 員	小 山 映 一	平成2年 4月～
	係 長	園 部 昌 俊	昭和63年 4月～
	主 事	山 崎 初 雄	(昭和60年 4月～平成元年 3月企画管理班)
	主 事	大 部 章	(昭和61年 4月～平成2年 3月企画管理班)
	主 事	吉 井 正 明	平成元年 4月～
調 査 課	主 事	大 貫 吉 成	平成2年 4月～
	課長(部長兼務)	石 井 毅	平成元年 4月～(昭和63年度 調査第一班長)
	主 任 調 査 員	柴 正	昭和63年度調査
	主 任 調 査 員	斎 藤 弘 道	昭和63年度調査
整 理 課	課 長	沼 田 文 夫	平成2年 4月～
	主 任 調 査 員	斎 藤 弘 道	平成2年度 整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第4章の項を参照されたい。

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査方法	11
第1節 調査区設定	11
第2節 基本土層の検討	11
第3節 遺構確認	15
第4節 遺構調査	15
第4章 遺構・遺物の記載方法	17
第1節 遺構の記載方法	17
第2節 遺物の記載方法	17
第5章 五平遺跡	18
第1節 遺跡の概要	18
第2節 遺構と遺物	18
1 古墳	18
2 竪穴住居跡	24
3 土坑	35
4 溝	53
第3節 その他	66
1 包含層の調査とその出土遺物	66
2 遺構外出土遺物	112
第4節 小結	114
第6章 蔵田千軒遺跡	116
第1節 遺跡の概要	116

第2節 遺構と遺物	116
1 竪穴住居跡	116
2 土坑	121
3 井戸	125
4 溝	127
第3節 その他	130
1 遺構外出土遺物	130
第4節 小結	132
第7章 権現古墳群	133
第1節 遺跡の概要	133
第2節 遺構と遺物	133
1 古墳	133
2 竪穴住居跡	138
3 土坑	151
4 溝	153
第3節 その他	155
1 遺構外出土遺物	155
第4節 小結	156
第8章 考察	158
第1節 遺跡の変遷について	158
第2節 遺物について	160
1 土器	160
2 石器	165
結語	169

挿 図 目 次

五平遺跡

第1図	五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群周辺地形及び周辺遺跡位置図……………	8	第27図	第6号溝実測図……………	62
第2図	調査区呼称図……………	11	第28図	第7・8・9号溝実測図……………	63
第3図	テストピット1……………	12	第29図	土坑・溝出土遺物実測図……………	64
第4図	五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群微地形及び調査区域図13~14		第30図	古墳・土坑・溝出土遺物実測・拓影図……………	65
第5図	テストピット2……………	15	第31図	G2区包含層出土遺物実測・拓影図(1)……………	70
第6図	五平遺跡遺構配置図……………19~20		第32図	G2区包含層出土遺物拓影図(2)…	71
第7図	第1号墳周溝実測図……………	22	第33図	G2区包含層出土遺物拓影図(3)…	73
第8図	第1号墳主体部実測図……………	23	第34図	G2区包含層出土遺物拓影図(4)…	74
第9図	第1号住居跡実測図……………	25	第35図	G2区包含層出土遺物拓影図(5)…	76
第10図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	27	第36図	G2区包含層出土遺物拓影図(6)…	77
第11図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	28	第37図	G2区包含層出土遺物拓影図(7)…	79
第12図	第1号住居跡出土遺物実測図(3)	29	第38図	G2区包含層出土遺物拓影図(8)…	80
第13図	第2号住居跡実測図……………	31	第39図	G2区包含層出土遺物拓影図(9)…	82
第14図	第2号住居跡出土遺物実測図(1)	33	第40図	G2区包含層出土遺物拓影図(10)…	83
第15図	第2号住居跡出土遺物実測図(2)	34	第41図	G2区包含層出土遺物拓影図(11)…	85
第16図	土坑実測図(1)……………	46	第42図	G2区包含層出土遺物実測・拓影図(12)……………	87
第17図	土坑実測図(2)……………	47	第43図	G2区包含層出土遺物拓影図(13)…	90
第18図	土坑実測図(3)……………	48	第44図	G2区包含層出土遺物実測・拓影図(14)……………	92
第19図	土坑実測図(4)……………	49	第45図	G2区包含層出土遺物実測図(15)…	93
第20図	土坑実測図(5)……………	50	第46図	H3区包含層出土遺物拓影図(1)…	96
第21図	土坑実測図(6)……………	51	第47図	H3区包含層出土遺物実測・拓影図(2)……………	97
第22図	土坑実測図(7)……………	52	第48図	H3区包含層出土遺物実測図(3)…	99
第23図	土坑実測図(8)……………	53	第49図	石器実測図(1)……………	104
第24図	第1・2号溝実測図……………	59	第50図	石器実測図(2)……………	105
第25図	第3号溝実測図……………	60	第51図	石器実測図(3)……………	106
第26図	第4・5号溝実測図……………	61			

第52図	石器実測図(4)……………	107	第67図	遺構外出土遺物実測図(3)……………	131
第53図	石器実測図(5)……………	108			
第54図	石器実測図(6)……………	109			
第55図	石器実測図(7)……………	110			
第56図	石器他実測図(8)……………	111			
第57図	遺構外出土遺物実測・拓影図…	113			
	蔵田千軒遺跡			権現古墳群	
第58図	蔵田千軒遺跡・権現古墳群遺構 配置図……………	117~118	第68図	第1号墳実測図……………	135~136
第59図	第1号住居跡実測図……………	119	第69図	第1号墳出土遺物実測図……………	138
第60図	土坑実測図(1)……………	123	第70図	第1号住居跡実測図……………	139
第61図	土坑実測図(2)……………	124	第71図	第1号住居跡出土遺物実測図…	141
第62図	土坑実測図(3)……………	125	第72図	第2号住居跡実測図……………	143
第63図	第1号井戸実測図……………	126	第73図	第3号住居跡実測図……………	145
第64図	第1号溝実測図……………	127	第74図	第2・3号住居跡出土遺物実 測図……………	147
第65図	遺構出土遺物実測図(1)……………	128	第75図	第4号住居跡実測図……………	149
第66図	遺構・遺構外出土遺物実測・ 拓影図(2)……………	129	第76図	第4号住居跡出土遺物実測図…	150
			第77図	土坑実測図……………	152
			第78図	第2号溝実測図……………	153
			第79図	第1号溝実測図……………	154
			第80図	遺構外出土遺物実測・拓影図…	157

表 目 次

	五平遺跡			蔵田千軒遺跡	
表1	五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現 古墳群周辺遺跡地名表……………	9	表4	蔵田千軒遺跡土坑一覧表……………	121~122
表2	五平遺跡土坑一覧表……………	43~45			
表3	五平遺跡石器・石製品観察表	99~103		権現古墳群	
			表5	権現古墳群土坑一覧表……………	151

写真目次

五平遺跡

- PL 1 五平遺跡全景
- PL 2 第1号墳
- PL 3 第1号住居跡
- PL 4 第2号住居跡
- PL 5 第8・20・21・25・28号土坑
- PL 6 第32・35・36・44・47・48・51号土坑
- PL 7 第55・57・59・64・65・67・73号土坑
- PL 8 第1～5号溝・第7～9号溝
- PL 9 G2区包含層
- PL 10 G2区包含層・Nトレンチ・KLトレンチ・I3区包含層
- PL 11 出土遺物(1)
- PL 12 出土遺物(2)
- PL 13 出土遺物(3)
- PL 14 出土遺物(4)
- PL 15 出土遺物(5)
- PL 16 出土遺物(6)
- PL 17 出土遺物(7)
- PL 18 G2区包含層出土遺物(1)
- PL 19 G2区包含層出土遺物(2)
- PL 20 G2区包含層出土遺物(3)
- PL 21 G2区包含層出土遺物(4)
- PL 22 G2区包含層出土遺物(5)

- PL 23 G2区包含層出土遺物(6)
- PL 24 G2区包含層出土遺物(7)
- PL 25 G2区包含層出土遺物(8)
- PL 26 G2区包含層出土遺物(9)
- PL 27 G2区包含層出土遺物(10)
- PL 28 G2区包含層出土遺物(11)
- PL 29 H3・I3区包含層出土遺物

蔵田千軒遺跡

- PL 30 蔵田千軒遺跡全景
- PL 31 第1号住居跡，第1号溝
- PL 32 第1号井戸，第1・2・5・9・10号土坑
- PL 33 第11・13・17～20・23・29号土坑
- PL 34 出土遺物

権現古墳群

- PL 35 権現古墳群全景
- PL 36 第1号墳
- PL 37 第1・2号住居跡
- PL 38 第2・3号住居跡
- PL 39 第1～4号住居跡
- PL 40 第7・9・10・12～14号土坑，第1・2号溝
- PL 41 出土遺物(1)
- PL 42 出土遺物(2)

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

県道友部内原線は、友部町大田町を起点とし、内原町鯉淵に至る全長8.75kmの一般県道である。

内原町犬塚地区は、幅員が狭く、屈曲が大きいために交通の障害となっていた。このため、茨城県は、現在の路線に沿うかたちで全長884mのバイパスを建設する道路の改良工事を計画した。

工事に先立ち、茨城県（土木部道路建設課）は、昭和62年10月9日に茨城県教育委員会（文化課）あてに工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これを受けて茨城県教育委員会では、同月19日に内原町教育委員会の担当者を同行させて、現地踏査を実施した。その結果、茨城県教育委員会は、工事予定地内に五平遺跡、蔵田千軒遺跡、権現古墳群の3遺跡が所在する旨を茨城県に回答した。昭和63年1月14日に、茨城県と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を開始し、道路工事の公共性と埋蔵文化財の重要性に鑑み、両者の整合性をもとめて協議を重ねた。現状保存について困難との判断に達し、記録保存の措置を講ずることとなり、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。それを受けて、茨城県教育委員会と茨城県教育財団は、調査面積・調査範囲・現況等を把握するための現地踏査を行い、昭和63年10月から平成元年3月までの6か月間で発掘調査を実施することとなった。

茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、昭和63年10月1日から発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

五平遺跡外2遺跡の調査は、昭和63年10月1日から平成元年3月31日までの6か月間実施した。

調査区域が道路幅のためにきわめて細長く、調査の困難が予想されたために、事前の準備を周到に進めた。以下発掘調査の経過を記述する。

10月上旬 発掘調査を開始するための諸準備を行なう。発掘用器材を搬入し、現場倉庫・便所等を設置しながら、調査区域内の清掃・除草・整地等の作業を実施した。

10月中旬 10月11日に発掘調査の円滑な推進と作業の安全を祈って、関係者列席のもとに「鍬入れ式」を挙行した。同日から五平遺跡のトレンチによる試掘作業を開始し、併行して伐開・除草・焼却等を進め、テストピットの掘削を行なった。試掘により、縄文時代草創期・早期・前期の土器片と土師器・須恵器片が確認され、10月13日には、古墳の主体部が検出された（第1号墳）。

10月下旬 五平遺跡の試掘作業を継続し、テストピットの記録を行なう。10月25日からは権現古墳群の伐開・焼却作業を進め、27日には発掘前の現況写真を撮影し、トレンチによる試掘を開始した。蔵田千軒遺跡についても伐開・焼却を行ない、現況写真を撮影した。また、五平遺跡と蔵田千軒遺跡の中間に位置する土捨て場の除草・焼却を行なった。

11月上旬 3遺跡の方眼杭打ちを行い、蔵田千軒遺跡と権現古墳群の試掘を継続して行なった。

11月中旬 表土除去を行なう重機の進入路にあたる五平遺跡北端部の遺構調査を実施した。また、権現古墳群の調査区域内に現場倉庫を設置するために、その部分の遺構調査も行なった。

11月16日より五平遺跡の北端部から重機による表土除去を開始した。

11月下旬 五平遺跡の表土除去と遺構確認作業を中心に作業を進め、あわせて方眼測定の準備も行なった。この時点で、古墳は主体部と北側の周溝が確認され、他に平安期と思われる住居跡2軒、土坑30基などが認められた。

12月上旬 五平遺跡の表土除去と遺構確認作業を6日に終了し、7日に遺構の確認状況を写真撮影した。8日からは蔵田千軒遺跡の表土除去に入り、続いて遺構確認作業を実施した。

12月中旬 蔵田千軒遺跡、つづいて権現古墳群の表土除去を行ない、14日をもって終了した。15日には、両遺跡の遺構確認状況の写真を撮影した。19日からは五平遺跡の遺構調査を開始した。

12月下旬 五平遺跡の第1号墳および第1～6号溝と土坑等の調査を進めた。

1月上旬 5日から調査を開始した。五平遺跡の土坑の調査を中心に作業を行い、9日からは権現古墳群の第1号墳の墳丘の調査を開始した。

1月中旬 権現古墳群の古墳の調査と五平遺跡の土坑の調査を並行して実施した。

1月下旬 五平遺跡の住居跡・土坑と古墳の主体部の調査を中心に作業を行ない、権現古墳群の古墳の調査は土層の実測等をあわせて進めた。

2月上旬 五平遺跡の住居跡と古墳の主体部の調査を継続し、権現古墳群の古墳の調査は土層コメント、ベルト除去を実施し、古墳の全容が明らかになった。

2月中旬 五平遺跡では住居跡の竈調査をおこない、16日には完了した。第7～9号溝と南部の土坑群の調査を進めた。13日からは権現古墳群の住居跡・溝・土坑の調査を開始し、15日に古墳の全景写真を撮影した。

2月下旬 22日より蔵田千軒遺跡の住居跡・土坑・井戸の調査を開始した。権現古墳群では、住居跡・土坑の調査を継続して行なった。

3月上旬 蔵田千軒遺跡と権現古墳群の遺構調査を実施し、竈調査、平・断面図作成、完掘写真撮影等の仕上げの調査にかかった。9日からは五平遺跡の縄文草創期・早期を主体とする遺物包含層の調査を開始した。

3月中旬 蔵田千軒遺跡と権現古墳群の調査も終了に近づいた11日に、現地説明会を開催し、100余名の参加者があった。15日には航空写真を撮影した。17日までに遺構の図面・写真の作成を完了し、調査の主体は、五平遺跡の包含層の調査に移った。

3月下旬 五平遺跡の包含層の調査を実施し、23日からは五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群の埋め戻し作業を行ない、27日に一切の現地調査を完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

五平遺跡外2遺跡は、東茨城郡内原町五平字台1242-2番地ほかに所在し、J R常磐線内原駅の南約3.0km、内原町役場の南々西約2.0kmに位置している。内原町は、茨城県のほぼ中央部に位置し、東は県都水戸市、西は友部町、北は笠間市、南は茨城町とそれぞれ町域を接している。現在の内原町は、昭和30年に中妻村、下中妻村、鯉淵村の三村が合併して内原村として誕生し、昭和40年に町制を施行した。東西約5.0km、南北約10.0kmの南北に細長い町域を有し、総面積は約41.3km²である。

町の地形をみると、八溝山地の一支脈に属する鶏足山塊の南東側に広がる丘陵地帯の北部と山塊に源を発する幾筋かの水系によって開析される低台地の中・南部の2地域に大別できる。北部の丘陵地帯は、標高70～100mを測り、起伏に富み、大部分が山林となっているが、丘陵の先端部近くには集落が形成され、一部が畑地として利用されている。一方、国道50号を挟んだ中・南部地域は、標高30～37mで東茨城台地の西部に当る。この地域は北方で桜川、南方で古屋川の両河川を鯉淵であわせる涸沼前川によって開析され舌状台地となっており、その流域は沖積低地で、水田として利用されている。この地域は米を主作物とし、たばこ、栗・梨などの果樹類を栽培する伝統的な農村地帯である。沖積低地と台地との比高差は、西側の友部町との境界付近では2～3mにすぎないが、南東側の茨城町との境界付近では10m以上の比高差を有している。

内原町を交通の面からみると、町の北側を国道50号線が東西に走り、J R常磐線・水戸線がその南側を併走し、内原駅がある。また、主要地方道水戸岩間線（岩間街道）、県道石岡常北線が南北および北東から南西に貫き、常磐自動車道は町の南部を水戸市から友部町方向へ走っている。最近では、常磐自動車道の開通やその他の道路網の整備に伴い、都市化の傾向がみられつつある。

五平遺跡外2遺跡は、町の南部の涸沼前川の右岸に位置し、標高33m前後の東茨城台地の西側にあたっている。当台地には中台橋方向から南西に谷津が入り込み、低地は水田となっている。水田面との比高差は1～2mにすぎない。五平遺跡は、谷津の北側に所在し、南側には蔵田千軒遺跡・権現古墳群の2遺跡が接している。調査区は道路改良工事に伴うために細長く、幅10～12mで、長さは3遺跡をあわせると640m余にも及び、面積は8,528m²である。現況は桑畑・畑・山林である。

第2節 歴史的環境

内原町には、今から約1万年近く前の縄文時代草創期から中・近世にかけての遺跡が数多く所在している。当町内には桜川・酒沼前川等の河川が貫流し、原始・古代から陸上交通とともに水上交通も発達してきたものと思われる。

以下、今回調査を実施した五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群から検出された遺構・遺物と関連するものを中心に町内の遺跡について時代を追って記載する。

内原町内からは明確な先土器時代に属する遺物の発見は報じられていない⁽¹⁾。しかし、町内遺跡の発掘調査例が極めて少ないこと、隣接する水戸市⁽²⁾、友部町⁽³⁾等で該期の遺物が報告されていることを考えれば、今後の発見は十分に期待できる。

縄文時代の遺跡は、町内の台地上の各地に分布しているが、中期を中心としたものが多い。今回の調査では、縄文時代草創期・早期の土器を主として、前・中期の土器も検出され、内原町の縄文時代について新しい知見を与えることになった。これまでは、草創期・早期・前期の遺物の発見はきわめて少なく、内原の日本農業実践大学の農場から出土した尖底土器片等が最古⁽⁴⁾の例であった。昭和54年10月～12月にかけて常磐自動車道の開設にあたって発掘調査された鯉淵の湿気遺跡からは、前期後半の浮島式土器の破片や後期の称名寺式土器などが出土している⁽⁵⁾。中期の遺物は比較的多く報告されており、倉田⁽⁶⁾、鯉淵⁽⁷⁾の他にも湿気遺跡⁽⁸⁾、杉崎のコロニー内遺跡B地点⁽⁹⁾にもみられる。下野遺跡は、平成2年8～9月にかけて発掘調査され、阿玉台式、加曾利E式土器、石器などが出土している由であるが、詳細は不明である。後期の土器の出土は少なく、わずかに前記の湿気遺跡から出土しているのみである。晩期の遺跡は未発見であるが、友部町柏井からは晩期に属する中空土版が出土しており⁽¹⁰⁾、町内でも今後発見される見込みが高い。

弥生時代の遺跡は、杉崎のコロニー内遺跡⁽⁹⁾、中原の八幡神社周辺古墳群12号墳の墳丘下⁽¹¹⁾において発見されている。前者は、コロニーの職員住宅の建設に伴って弥生後期の土器が一括出土したもので、住居跡の可能性が高い。後者では、4.3×4.2mの隅丸方形の住居跡が1軒検出され4本主柱穴と炉を有している。弥生後期の十王台式期の住居跡と報告されている。その他に、町内の内原や小林地区から弥生後期の土器の出土が報じられている⁽¹²⁾。前者は在地系のものであるが、後者は、円形貼付文や結節回転文を有する壺であり、南関東系の土器と考えられるもので、注目される。今回調査を実施した五平遺跡からは、きわめて少量であるが弥生中期の土器片が出土しており、町内の歴史に新たな一項を加え得たことは成果の1つである。

さて、古墳時代に入ると、町内には数多くの古墳が築かれ、それに伴うと思われる集落跡も多く形成されたものと思われる。町内の古墳については、筆者らが昭和63年10月に五平遺跡の調査

を実施していた時点では、町に226基の古墳の所在が確認されていた。⁽¹³⁾町内の古墳で発掘調査が実施されたものは、杉崎のコロニー内古墳群中の第86～90号、186号墳の6基⁽⁹⁾、中原の八幡神社周辺古墳群12号墳の1基⁽¹¹⁾、鯉淵と茨城町駒渡の境界に位置するドンドン塚古墳⁽¹⁴⁾1基の計8基である。コロニー内の古墳は20基あり、前方後円墳は5基で、他は円墳である。このうち発掘されたのは前方部の短い所謂帆立貝形の前方後円墳2基（第86・87号墳）と径11～20m程度の円墳4基である。前方後円墳2基と第88号墳の3基からは多量の埴輪が検出されている。人物・水鳥・鶏・馬等の形象埴輪と円筒埴輪がある。各古墳の埋葬施設は木棺を伴う土壙で、刀子・大刀・鏃の鉄製品などが出土している。各古墳からは鬼高式期に属する土師器・須恵器が検出されており、時期的には6世紀代の所産と考えられている。この「茨城県内原町杉崎コロニー古墳群」の報告中には付篇として杉崎八幡神社裏古墳および赤尾関論田塚古墳出土遺物、小林遺跡出土土師器、牛伏古墳群採集の埴輪片が掲載されている。中原の古墳は、小規模な円墳と考えられ、埋葬施設は明瞭には検出されなかったが、木棺直葬と推測されている。副葬品と思われる直刀、刀子と管玉、小玉が各6点出土していることから、本墳は5世紀代前半にさかのぼる古墳と考えられ、内原町内で調査された例としては最古の部類に属するものと思われる。ドンドン塚古墳は、直径約25m、高さ3m程の埴輪を伴う円墳で、埋葬施設は凝灰岩の切石積の横穴式石室である。副葬品としては直刀・刀子・鏃・馬具の鉄製品とメノウ・滑石・碧玉製の勾玉11点、ガラス製の小玉・丸玉110点、水晶製の切子玉4点が出土しており、報告者は本墳の時期を6世紀後半から7世紀初頭と推定している。

その他、町内の古墳について特記すべき事柄としては、石枕2点と銅鏡1面の出土があげられよう。石枕は、前記した杉崎の八幡神社裏古墳から1点、立花2点を伴って出土している。他の石枕と銅鏡は、赤尾関の論田塚古墳から直刀・鏃などとともに出土している。石枕は大型であるが、立花は伴っていない。銅鏡は小型の仿製鏡で、面径8.9cmである。両古墳とも、出土遺物から6世紀初頭を前後する時期の古墳と把握されている。なお、町内の北部に所在する牛伏古墳群は、多数の前方後円墳を有する古墳群として知られ⁽¹⁶⁾、付近に位置する舟塚古墳・二所神社古墳とともに那珂川流域における後期古墳を代表するものと言えよう。

一方、古墳時代の集落跡の調査例はきわめて少なく、前記の杉崎コロニー内遺跡で、前期の住居跡1軒⁽⁹⁾、鯉淵の蔵田千軒遺跡⁽¹⁵⁾と湿気遺跡⁽⁵⁾からは後期の住居跡各1軒ずつが検出されているのみである。

奈良・平安時代の遺跡は、町内に数多く所在するが、南部の鯉淵地区からは軒丸瓦や須恵器の円面硯の出土⁽¹⁷⁾がみられたりして、有力な集落の存在が推測されている。この鯉淵を中心として長者伝説があり、中妻・清水・蔵田の長者が居たと言われている。また、鯉淵から友部町小原付近にかけて、かつて「蔵田千軒」と呼ばれる大規模な集落跡が形成されていたとされる千軒

伝説もあり、小原付近を「上蔵田」、鯉淵の中台付近を「下蔵田」と称していたという⁽¹⁵⁾。これらの伝説の真偽についてはもとより定かではないが、当該地（今回調査の蔵田千軒遺跡も含む）周辺には、きわめて多数の須恵器・土師器片の散布がみられたり、今回の出土遺物の中に瓦や「厨」の墨書土器がみられることなどから考えると、本地域には古代の寺院址、官衙遺構群が埋存している可能性がきわめて高いと思われる。

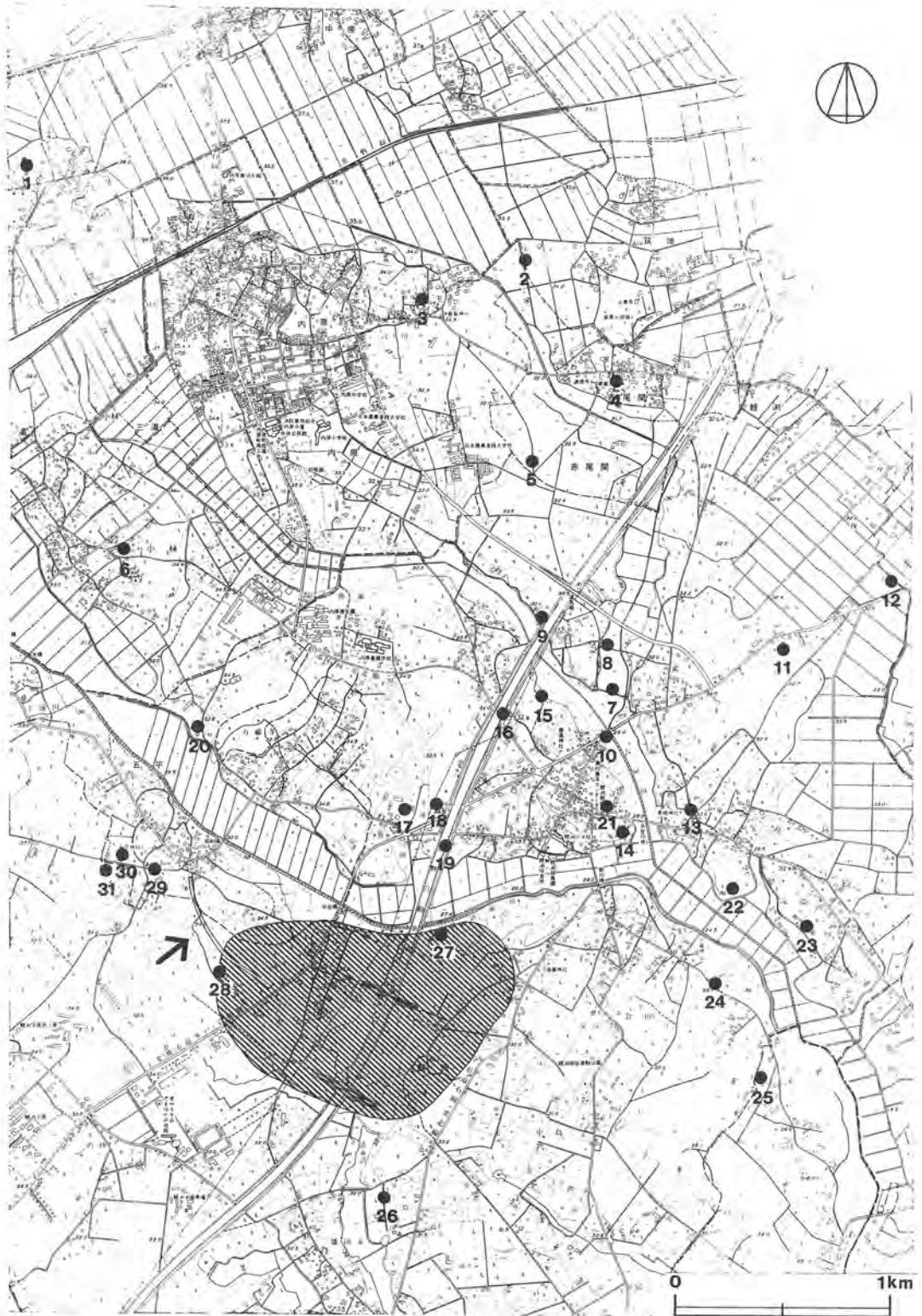
中世に入ると、町内には鯉淵城跡をはじめ田島、大足、有賀、中原、赤尾関、三湯など各所に館跡が築かれる。現在の内原町域は、江戸氏の一族が支配したものと考えられる。鯉淵城跡に隣接する湿気遺跡からは、中世の所産と推定される地下式壙が4基検出⁽⁵⁾されている。

町内には近世以降に属する目立った遺跡は発見されていないが、湿気遺跡から検出された経塚は江戸時代のもものと推定され⁽⁵⁾、また、鯉淵の中崎家住宅は、江戸時代元禄期の建築とされている。

以上に記したように町内には数多くの遺跡が存在しており、古くからの人々の生活の痕跡を連綿と辿ることのできる歴史的環境を有している。

註

- (1) 湿気遺跡出土の報告書第11図掲載の流紋岩製の縦長剝片については先土器時代のものと思われるという記述がみられるが、断定できないので保留しておく。
- (2) 金子進「水戸市周辺発見の先土器時代石器群」『茨城考古学』5 1973年
- (3) 茨城県教育財団「石山神遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第62集 1990年
- (4) 根本康弘氏のご教示によれば、草創期末の無文土器と早期の沈線文系土器片、条痕文系土器片が少量出土している由である。
- (5) 茨城県教育財団「湿気遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第11集 1981年
- (6) 根本康弘「東茨城郡内原町倉田の畑で採取した遺物について」『年報』9 茨城県教育財団 1990年
- (7) 根本康弘「鯉淵城跡掘調査報告」『郷土研究紀要』第4号 内原町郷土研究会 1986年第4図16～22は加曾利EⅣ式土器と判断される。
- (8) 注(5)に同じ。第10図2は加曾利E式土器と判断される。
- (9) 井博行『茨城県内原町杉崎コロニー古墳群』日本窯業史研究所 1980年 本書の第73図13は晩期のものとされているが、筆者には中期末葉の加曾利EⅣ式土器と判断される。
- (10) 茨城県『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』1979年に2点の中空土版の実測図が収載されている。
- (11) 伊東重敏『八幡神社周辺古墳群12号墳発掘調査報告書』内原町教育委員会 1985年



第1図 五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群周辺地形及び周辺遺跡位置図

表1 五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群周辺遺跡地名表

図中 番号	種 別	名 称	所 在 地	時 代							備 考		
				先土器	縄 文	弥 生	古 墳	奈・平	鎌・室	江 戸		明 治	
1	城館跡	三湯館跡	三湯51外							○			
2	古墳	論田塚古墳群	赤尾関大塚				○						石枕出土, 土地改良により破壊
3	城館跡	江川館跡	内原							○			
4	城館跡	赤尾関館跡	赤尾関586外							○			
5	古墳	赤尾関古墳	赤尾関前原				○						3基(全基破壊)
6	古墳	大塚古墳群	小林大塚251外				○						3基(内1基破壊)
7	古墳	平五郎治南古墳	鯉淵2236				○						1部破壊
8	古墳	物見塚古墳	鯉淵1979				○						
9	古墳	平五郎治古墳	鯉淵三の割2266				○						
10	城館跡	堀の内館跡	鯉淵宿2897							○			
11	古墳	東北部古墳群	鯉淵				○						昭和57年調査時, 未確認
12	包蔵地	二の割遺跡	鯉淵二の割1704の9		○								破壊
13	古墳	息栖台古墳群	鯉淵二の割1116外				○						3基
14	城館跡	鯉淵城跡	鯉淵宿, 根古屋		○					○			根古屋遺跡を含む
15	集落跡	湿気遺跡	鯉淵湿気				○	○	○				常磐自動車道開設に伴い一部調査
16	経塚	経塚遺跡	鯉淵湿気							○			常磐自動車道開設に伴い調査後消滅
17	古墳	寺池西古墳群	鯉淵三の割3471外				○						3基(内2基破壊)
18	古墳	寺池東古墳群	鯉淵四の割3209外				○						3基(内1基破壊)
19	古墳	宿上の台古墳群	鯉淵四の割3327外				○						2基
20	古墳	六部塚古墳	小林				○						
21	古墳	内城古墳	鯉淵				○						
22	古墳	富士山古墳	鯉淵				○						
23	包蔵地	滝淵遺跡	鯉淵滝淵			○							
24	包蔵地	倉田遺跡	鯉淵倉田		○	○	○						
25	集落跡	下野遺跡	下野		○								平成2年一部発掘
26	包蔵地	播田実遺跡	鯉淵播田実				○						
27	集落跡	蔵田千軒遺跡	鯉淵倉田・中台			○	○						中台遺跡・くずれ橋遺跡を含む
28	古墳	権現古墳群	鯉淵九の割5983の4			○	○						10基(内6基破壊)
29	古墳	犬塚古墳群	五平台1238外			○							6基(内2基破壊)
30	庚申塚	犬塚A庚申塚群	五平							○			
31	庚申塚	犬塚B庚申塚群	鯉淵							○			

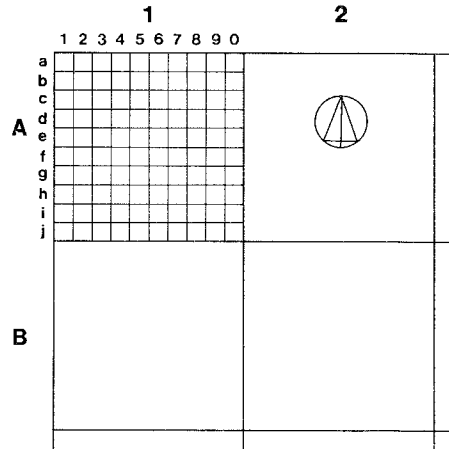
- (12) 根本康弘「資料紹介 1 考古資料」 『郷土研究会紀要』第3号 内原町郷土研究会
1984年
- (13) 内原町教育委員会『内原町古墳一覧表（改正版）』 1982年
- (14) 大森信英・高根信和「茨城県東茨城郡茨城町ドンドン塚古墳発掘調査報告」 『上代
文化』第37輯 国学院大学考古学会 1967年
- (15) 川井正一・根本康弘『蔵田千軒遺跡発掘調査報告書』 内原町教育委員会 1990年
- (16) 大森信英「牛伏古墳群」 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 茨城県 1974年
- (17) 根本康弘「東茨城郡内原町中台遺跡出土遺物について」 『年報』4 茨城県教育財
団 1985年

第3章 調査方法

第1節 調査区設定

五平遺跡外2遺跡の調査を実施するにあたり、遺跡および遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

調査区設定は、日本平面直角座標区系座標を使用した。五平遺跡は、X軸(南北)+37,880m、Y軸(東西)+46,800mの交点を基準にし、この点から東西・南北に各々40mずつ平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。蔵田千軒遺跡は、X軸+37,280m、Y軸+47,080mの交点を基準とし、権現古墳群は、X軸+37,280m、Y軸+47,080mの交点を基準として、五平遺跡と同様の方法で一辺40mの大調査区を設定した。



第2図 調査区呼称図

大調査区の名称は、北から南へ「A」、「B」、「C」……西から東へ「1」、「2」、「3」……と大文字を付し、「A1」区、「B2」区、「C3」区のように呼称した。今回の調査では、五平遺跡、蔵田千軒遺跡、権現古墳群と3遺跡がほぼ南北に連なって位置しているために、3遺跡を通しての大調査区名とした。五平遺跡はA1～I4区、蔵田千軒遺跡はK5区～N7区、権現古墳群はN7区～Q9区に相当する。この大調査区を4m四方の小調査区(グリッドと呼称)に100分割し、北から南へ「a」、「b」、「c」……「j」、西から東へ「1」、「2」、「3」……「0」と小文字を付した。小調査区の名称は大調査区の名称と合わせた4文字で表記し、「A1j0」区、「G2g6」区のように呼称した。

第2節 基本土層の検討

五平遺跡外2遺跡における基本土層を調査するために、五平遺跡の北側の平坦部と、蔵田千軒遺跡と権現古墳群の中間部に相当する平坦部に各々テストピットを設け、前者(テストピット1と呼称)は深さ3.0mまで、後者(テストピット2と呼称)は、深さ2.6mまで掘り下げ、第3・5図に示すような土層の堆積を確認した。

テストピット1は、14層に分かれ、第1層は表土層で、畑の耕作土である。20～25cmの厚さを有し、黒褐色を呈する。炭化物少量、炭化粒子微量、ローム粒子微量、焼土粒子極微量を含み粘

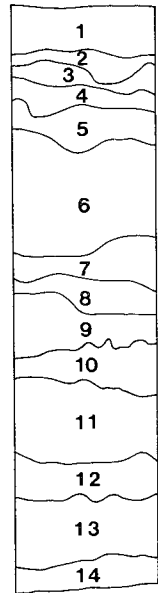
性、締まりともに弱い。第2層も黒褐色土で、炭化粒子・ローム中ブロック少量、ローム粒子中量、焼土粒子極微量を含み、粘性はきわめて弱く、締まりも無い。層厚は5～15cmと薄く、耕作は及んでいない。第3・4層は、第5層以下のローム層との漸移層で、褐色を呈する。第3層は2～15cmと厚みに差があり、黒褐色土を少量まだらに含み、炭化粒子微量、ローム粒子中量を含み、粘性・締まりとも弱い。第4層は7～20cmの厚みを有し、第3層と含有物は類似しているが、ロームの小ブロックや大ブロックが少量から微量に含まれ、締まりが弱い点で区分される。第5層は所謂ソフトロームで、7～25cmの厚みを有する褐色土である。粘性も上層に比較すると強く、締まりは強い。第6層以下はハードロームに相当する。第6層は55～60cm前後の層厚を有し、明褐色を呈する。粘性・締まりともに強い。第7・8層は、第9層の所謂鹿沼土へ移行する漸移層と把握され、黄褐色の砂の混入量の少ない(第7層)、多い(第8層)により区分した。第9層とともに粘性はあまり強くない、締まりは強い。第7層は10～30cm、第8層は6～30cm、第9層は10～35cmの厚さを有する。第9層の砂は粒径1～2mmの細かなものが多い。第10～12層はいずれも褐色のハードロームで、粘性・締まりともに強いが、第10層より第11層、第12層とわずかながら締まりが弱くなり、11層は暗い色調を示し、暗色帯に相当するものと思われる。第12層はややくずれ易い。第10層は10～30cm、第11層は30～45cm、第12層は15～30cmの層厚を有している。第13層は27～35cm前後の層厚を有する黄褐色のハードロームで、粘性・締まりともきわめて強い。粘土を少量含んでいる。第14層は最下層で、15cm以上の厚みを有する粘土層であるが、未掘のため本来の厚さは不明である。粘性がきわめて強く、水分も浸み出し始める。

34.2m

33.2—

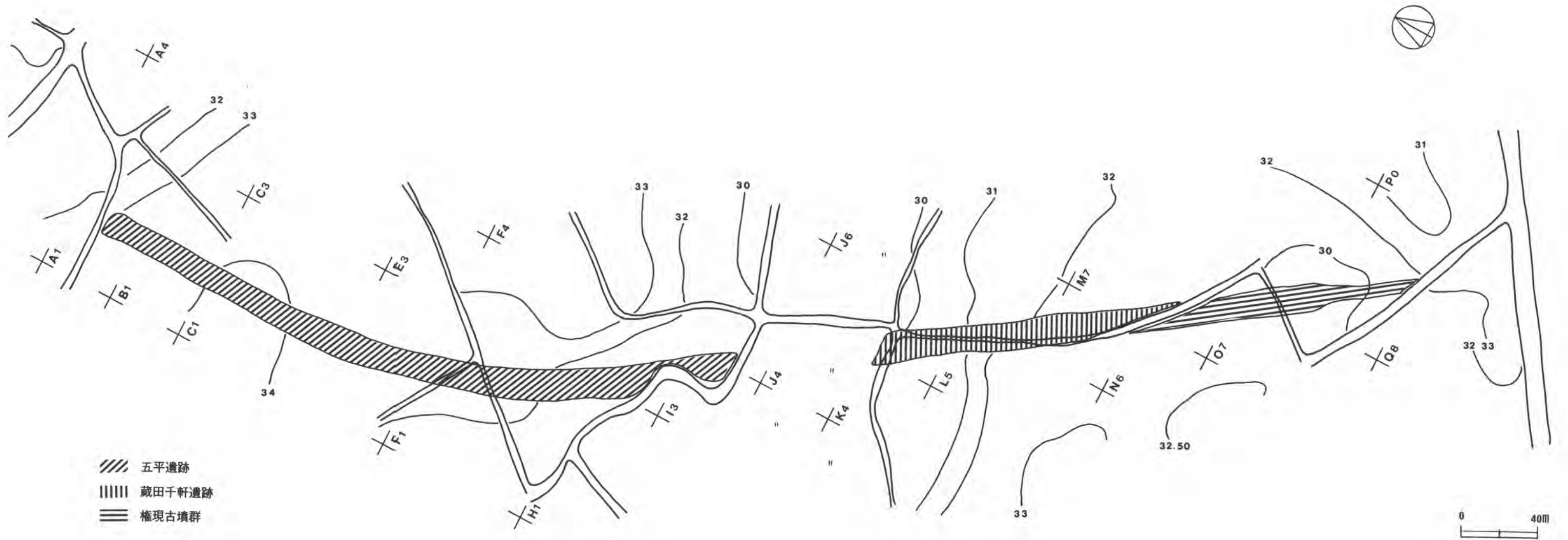
32.2—

31.2—



第3図 テストピット1

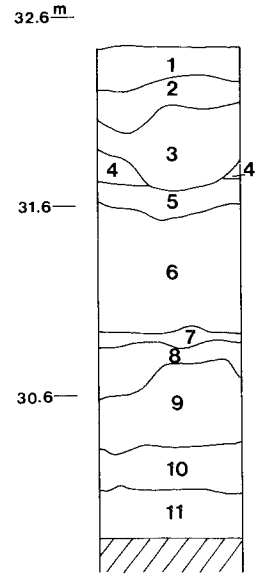
テストピット2は、11層に分かれ、第1・2層が表土で、第3・4層がロームへの漸移層で、第5層以下がロームとなる。第1層は15～20cmの層厚を有する暗褐色土で、ローム粒子少量、ローム小ブロック、炭化粒子極微量を含み、粘性・締まりとも弱い。第2層は5～21cmの層厚を有する黒褐色土で、褐色土を帯状に挟み、ローム粒子少量、炭化粒子を極微量に含む。粘性があり、締まりも強い。第3層は10～45cmの層厚を有する褐色土で、ローム大ブロック、小ブロック微量、炭化粒子極微量を含み、粘性・締まりとも弱い。第4層は断続的な層で、5～25cmの層厚を有する褐色土で、ローム粒子・小ブロック多量、暗褐色土微量を含み、粘性・締まりともにある。第5層は褐色のソフトロームで7～20cmの層厚を有しており、粘性・締まりともに強い。第6層は黄褐色のハードロームで、層厚は60～75cmと厚い。粘性が強く、締まりはきわめて強い。本層の下位には橙色のパミスを少量含み、第7層へと漸移する。第8層は第9層の鹿沼土への漸移層で、



第4図 五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群微地形及び調査区域図

黄橙色のパミスを多量に含んでいる。第7層は4～11cm、第8層は8～27cmの層厚を有し、前者は薄く、後者は部分的に厚薄がみられる。第9層は所謂鹿沼土で、第10層との境には多量の鉄分を含み、25～50cm前後の層厚を有している。第10・11層はそれぞれ黄褐色、明黄褐色を呈するハードロームで、前者には多量の、後者には少量の鉄分が含まれている。第10層は20～25cm前後の層厚を有するが、第11層は約25cm掘り下げた段階で、湧水が激しくなり、これ以上の調査はできなかった。

テストピットの土層からみると、古墳時代以降の遺構は第3層の上面ないしやや下った面で確認できるが、縄文時代の土坑は、第5層のソフトロームまで下げないと検出できなかった。



第5図 テストピット2

第3節 遺構確認

今回の調査において、伐開後古墳の墳丘が認められたのは権現古墳群の1基のみである。五平遺跡は、エリア外に古墳が現存し、周囲の畑から勾玉が採取されたとの話もあったので墳丘を失った古墳の存在を想定し、調査エリアに直交するように幅2m、長さ10mのトレンチを20m間隔で設定した。A～Pまでの16本で、その後遺構の確認のために数本追加した。その結果、古墳の主体部および周溝（第1号墳）、土坑・溝を確認し、更に南部の緩斜面部においては、縄文草創期・早期の土器群を多量に含む包含層の存在が判明した。また、蔵田千軒遺跡、権現古墳群については、調査エリアに並行するようにトレンチをそれぞれ4本ずつ設定し、遺構の検出を試みた。この結果、住居跡や土坑や溝が検出された。表土の厚さが五平遺跡で40～50cm、蔵田千軒遺跡、権現古墳群で60～70cmであることが判明した。この結果を踏まえ、担当者間で協議をおこない、調査期間が短いこと、表土が比較的厚く、試掘時での遺物の出土が一部を除いて少ないことを考慮して、古墳の墳丘の周囲を除く調査区全面を重機により表土を除去することにした。その後遺構確認作業を進め古墳・住居跡・土坑・溝を確認した。

第4節 遺構調査

古墳の調査は、墳丘を有する権現古墳群の古墳については、墳丘および周溝部にかかる土層観察用のベルトを設定して他の部分を掘り下げ、最終的にはベルトも除去して全容を露呈させた。

五平遺跡の古墳は、墳丘を失っていたので、埋葬施設および周溝部に適宜に土層観察用ベルトを設けて調査した。

住居跡については、十文字に土層観察用ベルトを設け、四分割して調査した。土坑については、大形のものには長軸・短軸の両方に土層ベルトを設け、四分割して調査し、小形のものには、長軸方向で、二分割する方法を採用した。溝については、適宜に土層ベルトを設けた。土層については、色調・含有物・締まり具合・粘性等をできる限り細かく観察し記録したが、整理・報告にあたっては、一部省略したものもある。色調の決定には、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。遺物の取り上げについては、原則として位置・レベル・出土状態を図面あるいは調査記録カードに記録したが、覆土については一括して取り上げたものもある。遺構の観察については、盛土および埋土の状況に留意した。

遺構の実測については、平面図は水糸を1 m方眼に地張りして計測し、土層および断面図は水糸を適当な高さに水平に設定して計測した。

遺構番号は、各遺跡とも調査した順に番号を付していった。

第4章 遺構・遺物の記載方法

第1節 遺構の記載方法

本書では、遺構の記載について、以下のような方法とした。

(1) 使用記号

古墳……TM 住居跡……SI 井戸……SE 土坑……SK 溝……SD

(2) 土層分類

当遺跡で検出された遺構の土層の色調については、「新版標準土色帖（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）」を使用して判断し、表示のごとく分類し、0～17の番号を付して図面中に表した。なお、土層中の含有物や粘性・締まり具合については、本文中で説明するように心がけたが、一覧表化により省略したものもある。

番号	土色名	色相 (Hue) 明度/彩度	番号	土色名	色相 (Hue) 明度/彩度
0	灰赤色	2.5YR 5/2	9	明褐色	7.5YR 5/6,5/8
1	にぶい赤褐色	2.5YR 5/4,4/3 5YR 4/3,5/3,4/4	10	褐色	7.5YR 4/3,4/4,4/6 10YR 4/4,4/6
2	明赤褐色	2.5YR 5/8 5YR 5/8	11	黒褐色	7.5YR 2/2,3/2 10YR 3/2
3	暗赤褐色	5YR 3/2,3/3	12	暗褐色	7.5YR 3/3,3/4 10YR 3/4,3/3
4	赤褐色	5YR 4/6,4/8	13	極暗褐色	7.5YR 2/3
5	極暗褐色	5YR 2/3	14	黒色	7.5YR 2/1
6	橙色	7.5YR 6/8	15	黄褐色	10YR 5/6
7	灰褐色	5YR 4/2, 7.5YR 4/2	16	にぶい黄褐色	10YR 5/4,5/3
8	にぶい褐色	7.5YR 5/6,5/8	17	明黄褐色	10YR 6/6

(3) 遺構実測図の作成方法と掲載方法

各遺構は、原則として縮尺20分の1の原図をトレースして版組し、それを更に3分の1に縮小して掲載した。

権現古墳群の古墳については、縮尺50分の1の原図をトレースして、それを更に適宜に縮小して掲載した。

水系レベルは、同一レベルの場合に限り1か所の記載で表し、それ以外は個々に表示することにした。単位はmである。

第2節 遺物の記載方法

土器の実測図は、中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。

土器拓影図は、右側に断面を示した。

遺物は、原則として3分の1に縮小して掲載したが、遺物の大きさ、形状などにより2分の1などの縮尺を使用した場合もある。

第5章 五平遺跡

第1節 遺跡の概要

五平遺跡は、昭和62年3月刊行の『茨城県遺跡地図』（茨城県教育委員会）には、記載されておらず、遺跡の北側に隣接して6基から成る犬塚古墳群が周知されているだけであった。当遺跡は今回の道路建設に伴う事前調査によって確認され、発掘調査が実施された。

その結果、遺跡の北部の平坦な畑部分からは、墳丘を失った古墳が1基検出された。これを五平遺跡の第1号墳（内原町としては犬塚古墳群の第7号墳として登録した）として報告する。

古墳は、平面形が全長9m弱の羽子板状を呈する横穴式石室を有するが、攪乱が著しくほとんど遺物は出土していない。このため時期比定は困難であるが、後期古墳と考えられる。

住居跡は2軒が、遺跡の中央部に検出された。土師器の甕や須恵器の坏を伴うもので、9世紀代のものと思われる。

土坑は74基で、調査区内に散在しており、密集するような場所はみられない。遺物を伴うものは少なく、縄文時代に属するものが数基、古墳時代の土器を伴うものが1基、平安時代の所産と思われるものが数基認められる以外は時期不明のものが多し。風倒木痕と思われるものもある。

溝は9条が検出されたが、いずれも端部が調査エリア外へ延びていて全容は把握できない。また、溝に伴うと判断される遺物の出土は少なく、第1号溝が古墳時代と考えられる以外は、時期は不明である。

その他、遺跡南部のG2区の南半分およびI3区の北端部において縄文時代草創期・早期の土器・石器を主とする遺物包含層が検出されたことは注目される。

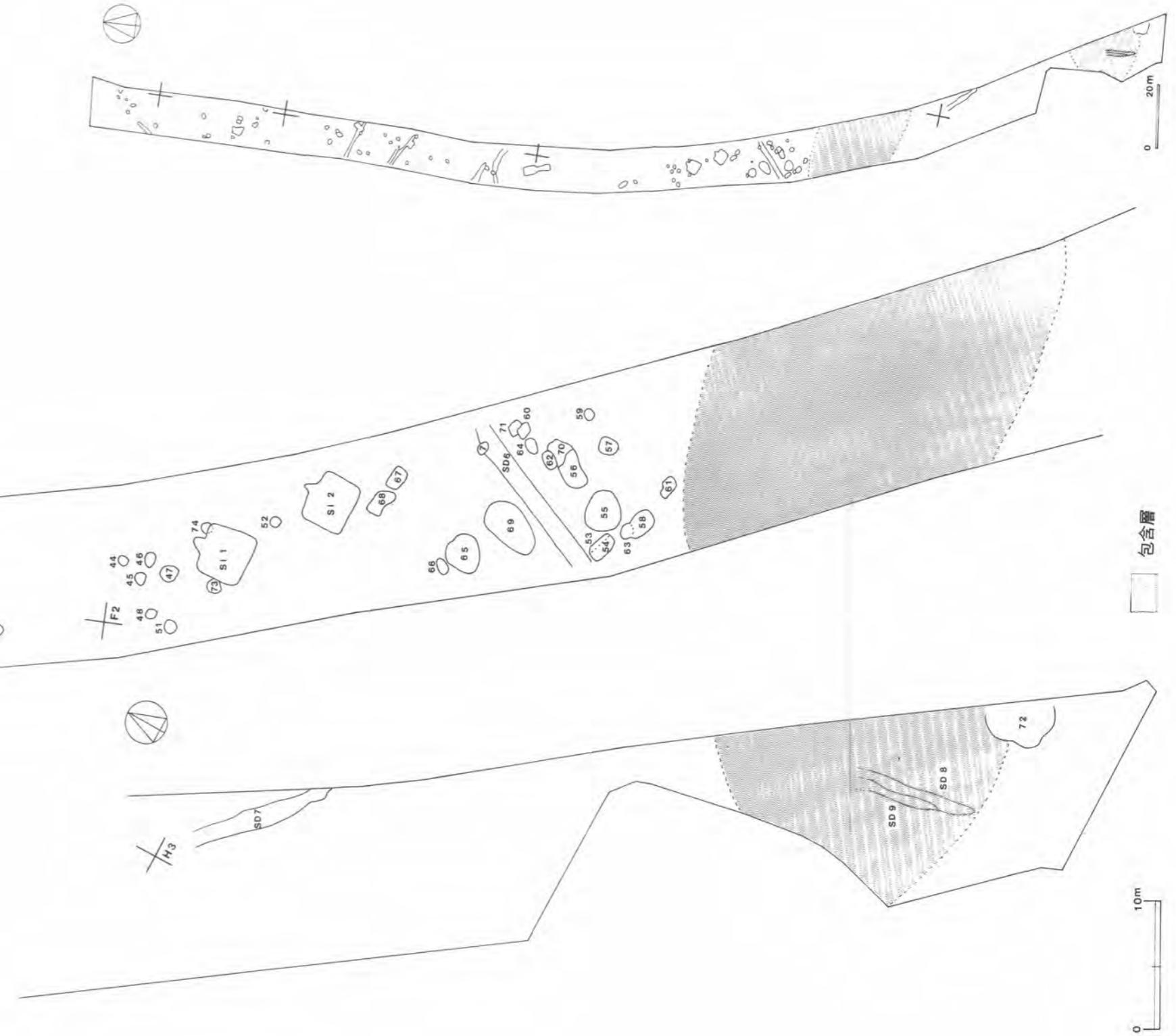
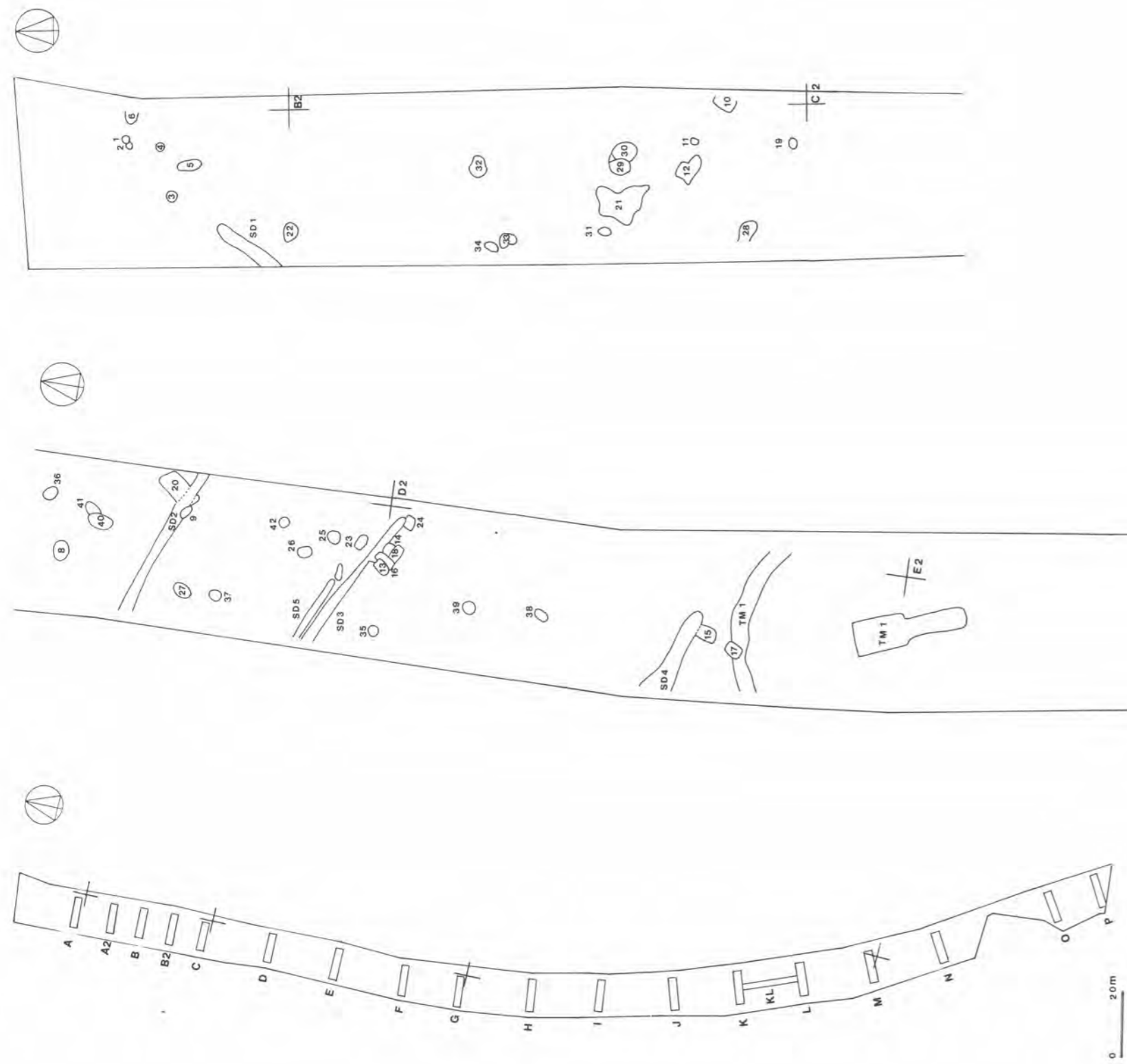
出土遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に40箱分である。内容は、古墳主体部の石材、住居跡・土坑・溝等からの土器および遺物包含層から出土の土器・石器である。

第2節 遺構と遺物

1 古墳

第1号墳（第7・8図）

本墳は、調査区の北部のD1・D2・E1・E2区にまたがって位置する円墳と思われる、北側にのみ周溝を検出した。南側は攪乱が著しく、東・西側は調査エリア外に属するため周溝は検出されていない。北側の周溝の曲がり具合から判断すると、内径で約20.8mの円墳と考えられる。本墳は、試掘時のトレンチに主体部の一部がかかったことにより存在が明らかとなり、北側に延長し



第6図 五平遺跡遺構配置図

たトレンチで周溝が認められたものである。

本墳の周溝は、北側のみ検出され、東・西の両端部は調査エリア外となる。幅は西端で105cm、中央部から東端部にかけては130～140cmである。深さは西側が浅く15cm程度で、中央部で37cm、東側で53cmを測り、東側に行くにしたがって深くなる。周溝は西側の一部が後世の第17号土坑に切られている以外は良好に遺存している。覆土は、中央部が黒褐色を呈し、壁寄りにむけて暗褐色、褐色土となり、凹レンズ状の自然堆積を呈している。各土層には中量から微量のローム粒子が混じり、炭化粒子・焼土粒子が極微量含まれている。各土層とも粘性が弱く、締まりがある。底面近くの褐色土、明褐色土は粘性が強くなる。周溝からは本墳に伴うと思われる遺物は全く出土しなかった。主体部は、本墳の中央部から南側にかけて位置している。羨道部から玄室の奥壁にかけての全長は、外法で8.8mを測り、長大である。羨道部の長さは4.6m、幅は1.5m前後で、南側の入口部の1.5mほどが浅く、30～40cmを測り、中央部で深くなって55～60cmとなり、玄門部へ行くにつれて45～50cmと若干浅くなる。底面・壁ともにロームで、底面は平坦ではなく、丸味をもっている。壁は、西側が傾きが急で、東側が緩やかに立ち上がっている。底面は特に踏み締められてはいない。玄室は、長軸4.15m、短軸2.8mで平面形は長方形を呈し、入口部の左右に花崗岩の平石が据えられた状態で残存しており、玄門部の根石を示すものと考えられる。玄門部の西側の石から続いて花崗岩の平石が数個並んでおり、以降には破碎された同種の小片が集中している。これらの石は、玄室の西壁の一部を成すものと判断される。これらの石の周囲には灰黄褐色の粘土がブロック状に散っており、攪乱の痕跡が著しい。底面の各所には凹みや小ピット状の落ち込みがみられ、粘土や花崗岩の小片が多量に散在していたが、これらも攪乱を示すものである。

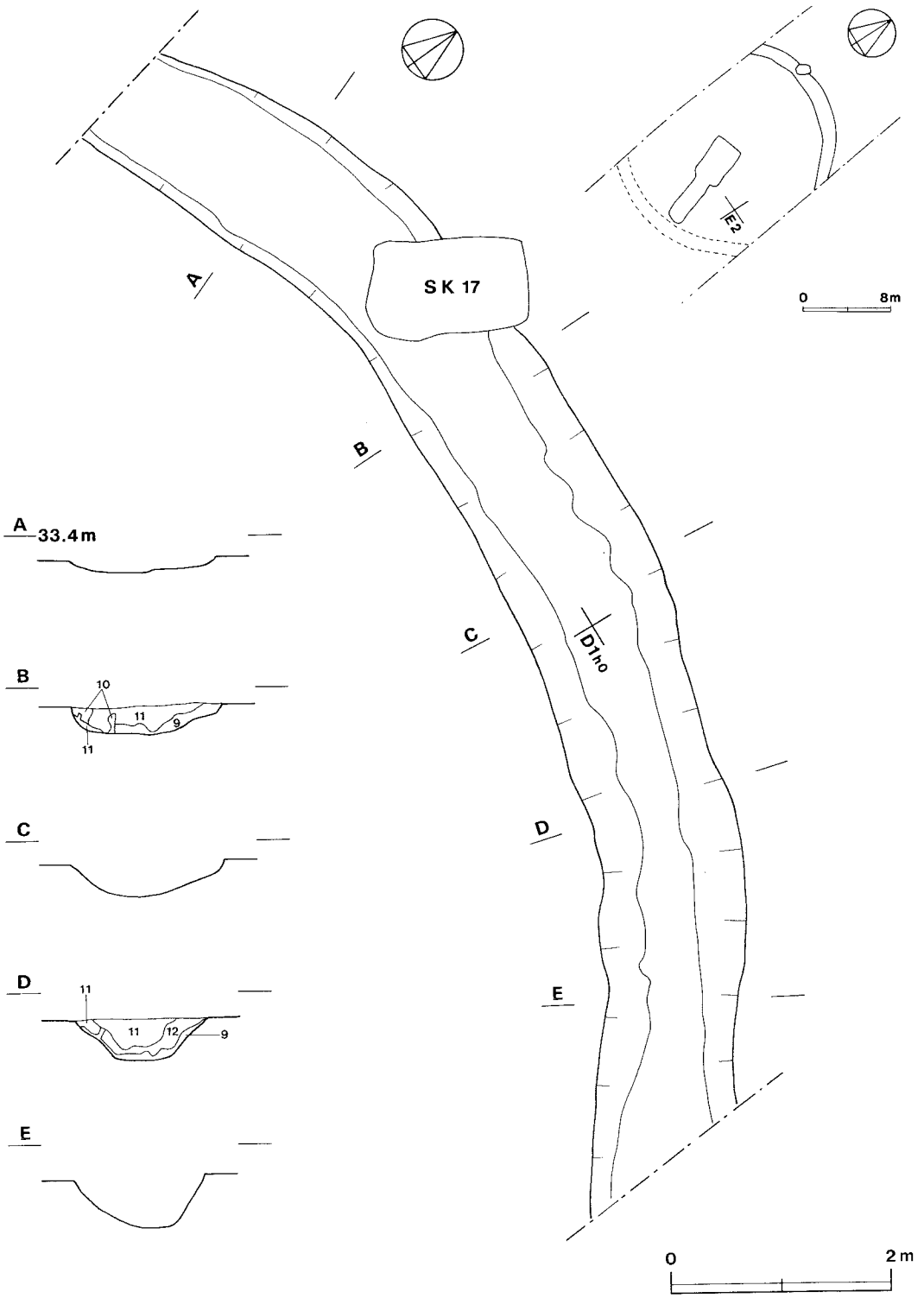
羨道部・玄室部にかけての覆土の状況を観察するために、土層ベルトを5本設けたが、いずれにも攪乱の痕跡が残っている。褐色・明褐色・にぶい黄褐色を呈する部分が多く、上位を中心に黒褐色・暗褐色の暗い色調を呈する土層が重なっている。いずれの土層にもローム粒子、ローム小ブロック、花崗岩小片や粘土を中量から微量に含んでおり、粘性は弱い、締まりはある。

本墳からの出土遺物はきわめて少なく、北側の周溝からは安山岩製の石鏃1点、流紋岩の剝片1点が出土したのみである。主体部の玄室内の入口部近くの覆土からは内外面にタタキ目を有する須恵器の甕片2点、縄文式土器片1点が出土した。後者は本墳に伴うものとは考えられない。

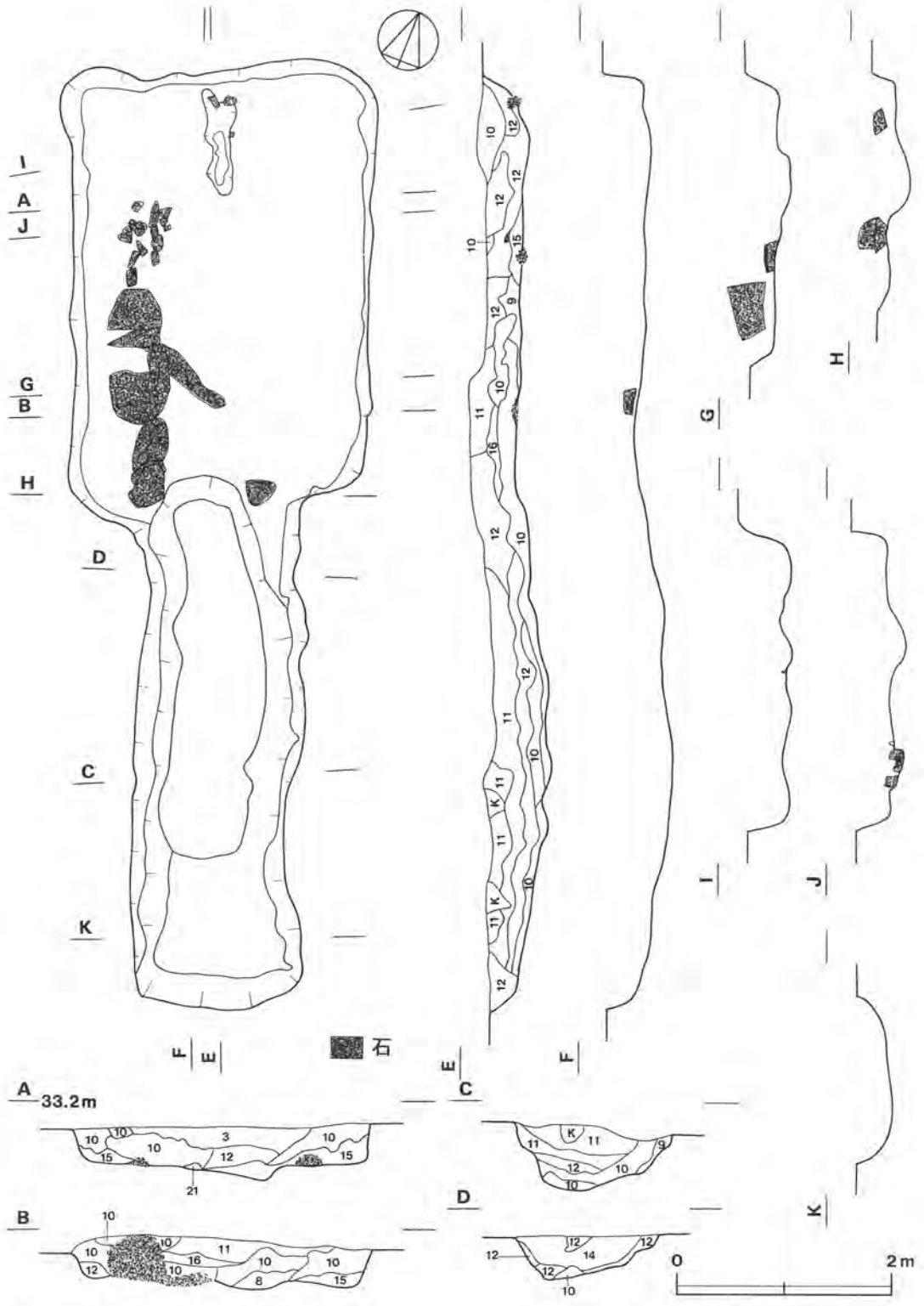
本墳の時期については、推定が困難であるが、埋葬施設の形態・設置場所等からみると6世紀後半から7世紀前半頃の年代が考えられる。

第1号墳出土遺物（第30図1・2）

1は、羨道部南端の東側の覆土中から出土した須恵器の甕の体部片で、内外面ともにタタキ目が施されている。2は、羨道部南端の西側の覆土中から出土した縄文草創期の燃糸文系土器の胴



第7图 第1号墳周溝実測図



第8图 第1号墳主体部实测图

部片で、大粒の熬糸文が施されており、稻荷原式土器に比定される。1は本墳に伴う可能性もあるが、2は本墳に伴うものとは考えられない。

2 竪穴住居跡

第1号住居跡（第9図）

位置 調査区のほぼ中央部のF2c2区を中心に確認された。

重複関係 北壁の竈の東側で第74号土坑、西壁の中央部で第73号土坑と重複しているが、いずれも本跡により切られている。

規模と平面形 長軸4.0m、短軸3.4mの不整形方形を呈する。

主軸方向 N-15°-E

壁 北壁4.0m、東壁3.8m、南壁4.0m、西壁3.4mを測る。ロームで直立ないしやや外傾しており、壁高60~70cmを測る。

壁溝 竈の部分を除いて全周する。幅10~20cm、深さ5~6cmである。

床 中央部はロームの直床と思われるが、南西隅の部分は軟らかで、貼床となっている。全体的に平坦で良く踏み固められている。

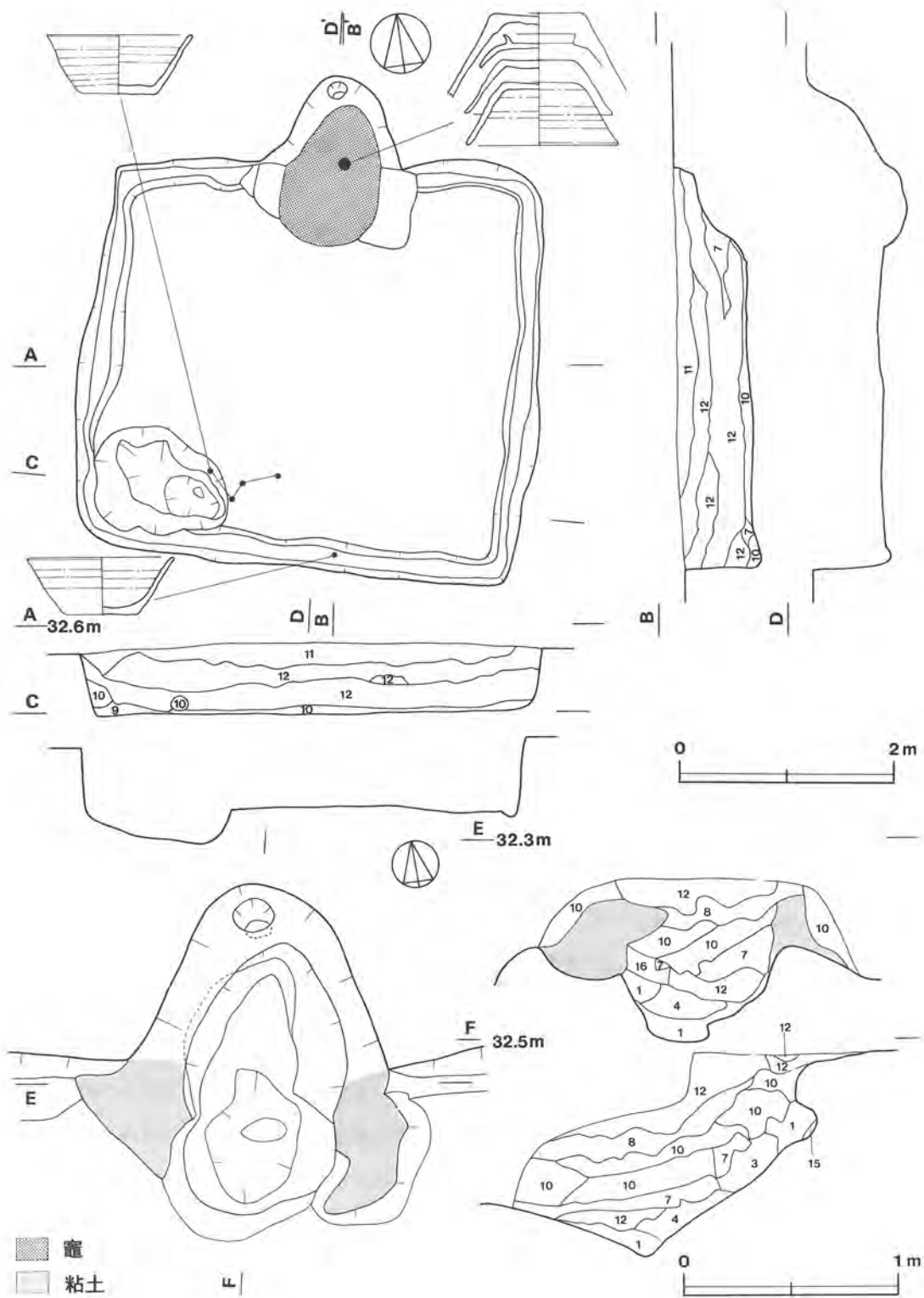
ピット 床面上、壁外ともに精査したが検出できなかった。

貯蔵穴 南西コーナー付近に付設され、長径136cm、短径104cmの不整楕円形を呈し、底面は東に向って深くなり最深部で31cmを測る。覆土は、ローム粒子・ローム小ブロックを中量から多量、ローム中ブロック、炭化物を少量含む褐色土が堆積している。

竈 北壁中央部に付設され、規模は最大長、最大幅とも168cmを測るが、形状的には楕円形を呈し、壁外へ86cm掘り込まれている。奥部には煙出しの穴（20×15cm）が斜上方へむけてあけられている。火床は床面を最深部で26cmも掘り窪めており、長径125cm、短径87cmの不整楕円形を呈し、良く焼けてロームが焼土化し、ゴツゴツしている。また、西側の袖部から奥壁部にかけての下部は焼けが著しく焼土化している。竈内の中央部火床部から奥壁にかけての上りの斜面上に土師器の甕の胴下半部片を逆位に伏せ、その中に内黒の土師器の高台付坏の底部片と須恵器の坏2点を順に伏せて重ねられた状態で検出された。これはその出土状況及び位置から判断して支脚として使用されたものと考えられる。

覆土 上位が黒褐色、中位が暗褐色を呈し、下位と壁寄りに褐色土が凹レンズ状に堆積している。各土層にはローム粒子・ローム小ブロック、炭化物・炭化粒子・焼土粒子が中量から微量含まれ、褐色土・黒褐色土をまだらにブロック状に含むことからみると人為堆積の可能性が高い。

遺物 前記の竈内の遺物の他に、須恵器の坏（第11図14）が南壁よりの覆土下位から口縁を北



第9図 第1号住居跡実測図

西方向をむけて横位で、土師器の内黒の坏（第10図15）が北東コーナー部の覆土下位から正位で、南東コーナー部の覆土下位からは鎌が出土している。その他、北東・南西部の覆土中から土師器の甕、須恵器の坏・甕片などが出土している。

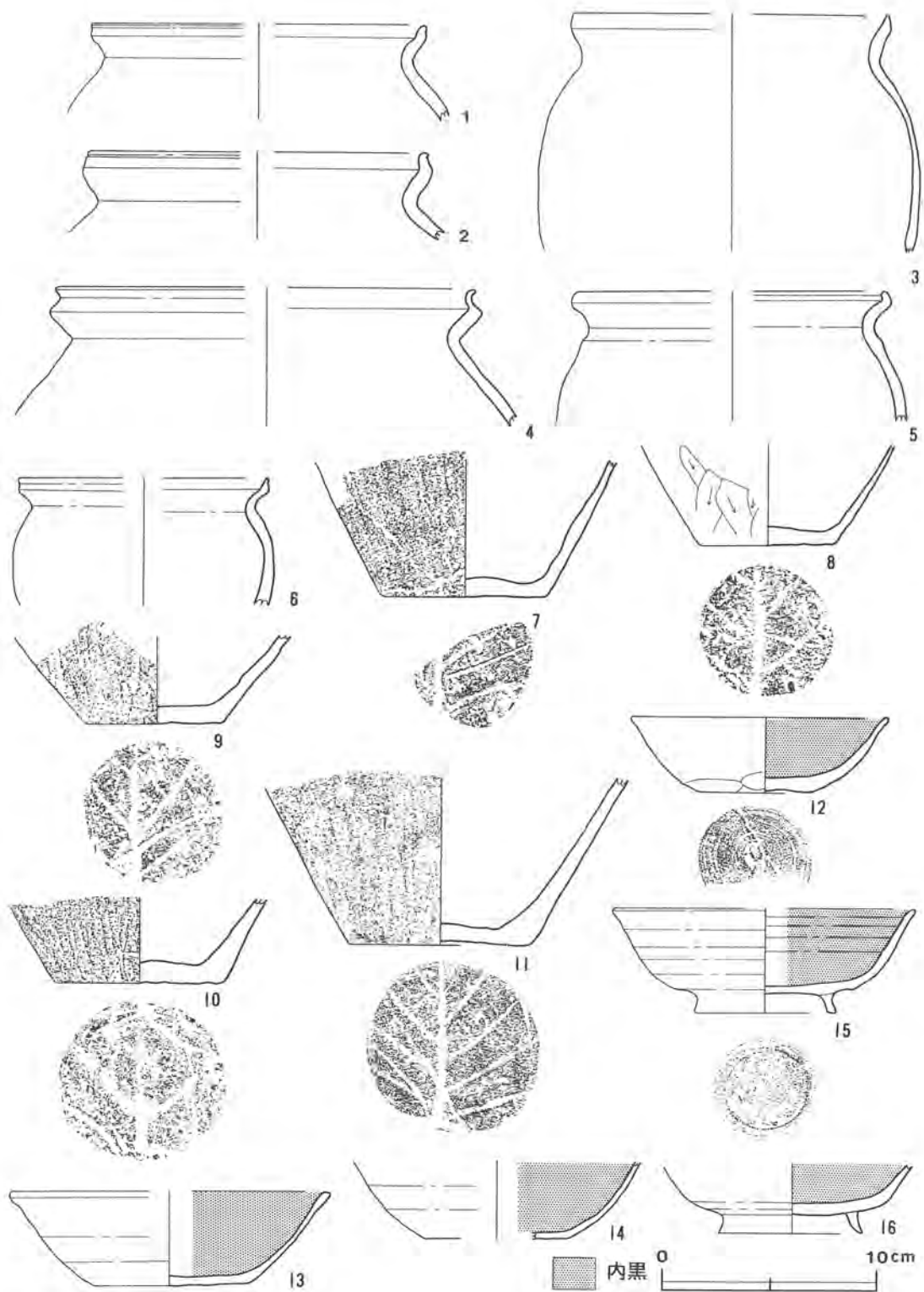
所見 本跡は、遺構の形態や遺物から判断して平安時代前期（9世紀後半）に比定される。

第1号住居跡出土遺物（第10図1～16、第11図1～16、第12図1～4）

第10図1～11は、土師器の甕である。1～6が口縁部から胴部にかけての破片で、7～11が胴部から底部にかけての破片である。3・5・6の3点は推定口径が11.6～14.7cmの小形の甕で、1・2・4は推定口径が19.4～20.6cmの中形の甕である。5を除いて口縁端部が外上方につまみあげられ、かつ内面に稜を有する特色がある。3は内面の稜が弱く、直立気味となる。5は口縁端部が内屈している。整形は口縁部の内外面はヨコナデ、胴部の内外面はナデが施されている。胎土は、長石・石英粒を多く含み、粗雑である。いずれも焼成は普通である。6の外表面は剥落が著しい。11は竈内に支脚として再利用されていた甕で、底径9.4cmを測る。7～10は、底径が6.3～7.8cmを測る。いずれも胴部下半は縦位のヘラケズリが施され、底面には木葉痕を有する。胎土・焼成は1～6と同様で、8・10の内表面は剥落が著しい。

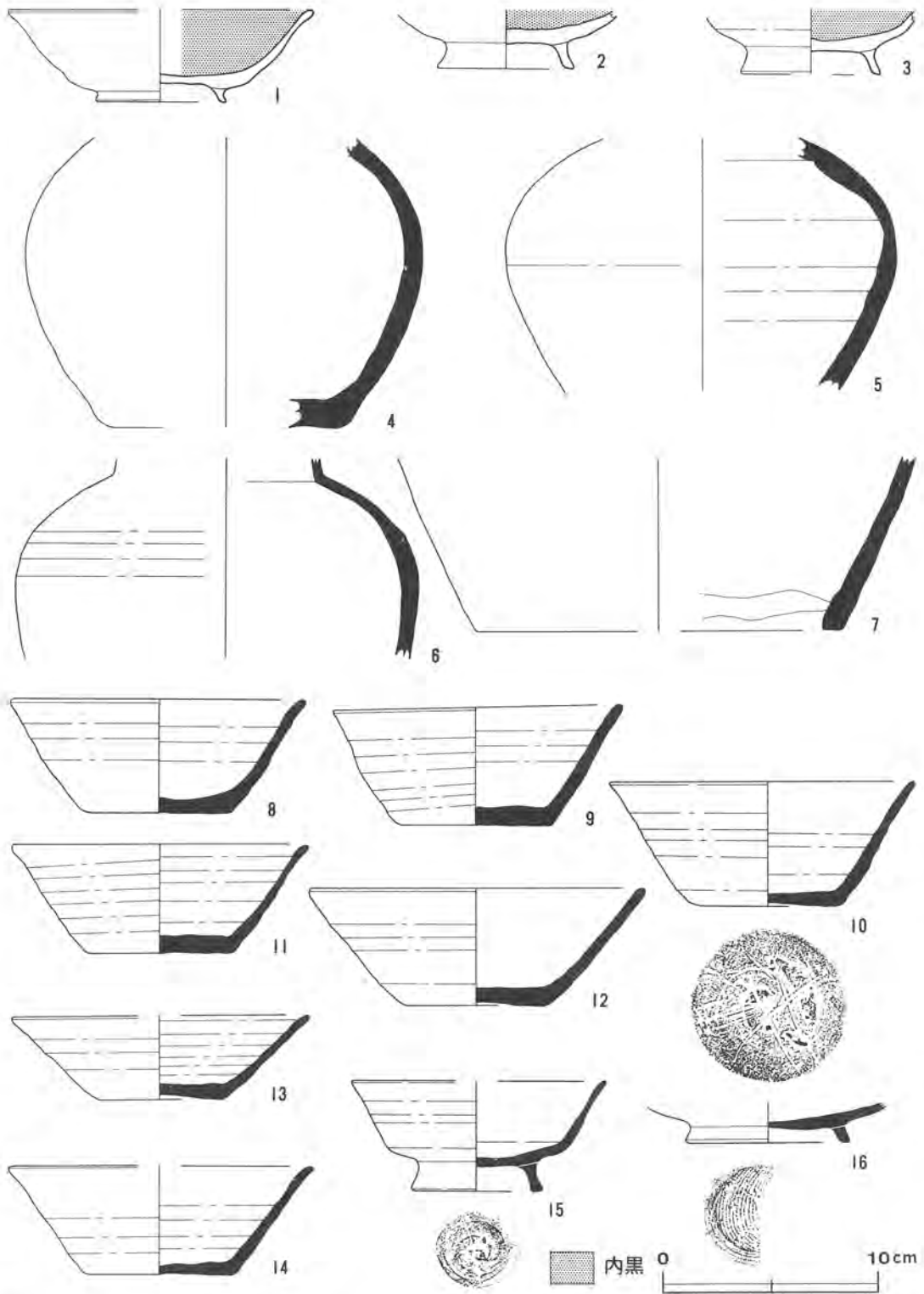
第10図12～16・第11図1～3は、内面黒色処理が施された坏で、第10図15・16・第11図1～3は高台付である。12～14のうち口径が判明するものは12・13の2点で、前者は推定口径11.8cm、後者は14.8cmを測る。12は内彎気味に立ち上がり、13は体部が直線的に外傾している。共に口縁部は端反り気味となる。整形は口縁部がヨコナデ、体部下端と底部はヘラケズリが施されている。内面はきわめて丁寧なヘラミガキが施されている。13の内面には剥落が認められる。14は口縁部を欠失するのみで、他は同様である。胎土は長石・石英粒を若干含むが、甕に比べると含有量が少なく、良好である。第10図15・16・第11図1～3のうち口径が判明するものは第10図15・第11図1の2点のみで、前者は14.2cm、後者は14.0cmを測る。15は体部下半に稜を有し、直線的に外傾する。第11図1は体部下半に明確な稜を有し、内彎気味に立ち上がり、口縁端部は端反り気味となる。整形は、口縁部はいずれもヨコナデが施されているが、体部下端はヘラケズリが施されている第10図16・第11図1・2と、ヨコナデが施されている第10図15・第11図3の2つのタイプに分けられる。底部は第10図15・第11図2のように糸切り痕を有するものと第10図16・第11図1・3のようにヘラ切りのものに分けられる。高台はいずれも貼り付けられている。内面はきわめて丁寧なヘラミガキが施されており、特に第11図2は光沢を発する程である。第11図3は先の第10図11の真下に重なって逆位で出土している。

第11図4・5・6は、須恵器の壺である。4は体部から底部にかけての破片、5は肩部から体部にかけての破片で、両者は胎土や整形技法に共通点がみられるので同一個体の可能性もあるが、

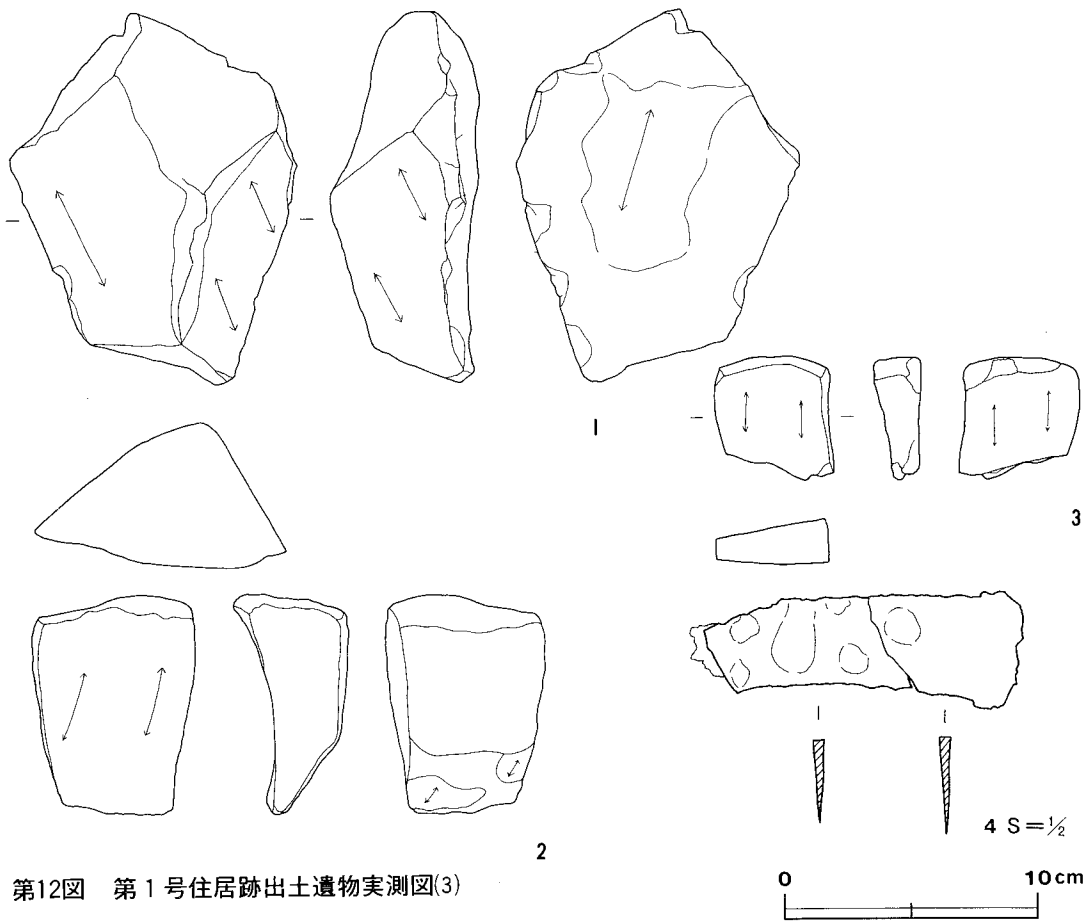


第10図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)

1・2 S=1/4



第11図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)



第12図 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

接合できないため別に図示した。4は底部から内彎して立ち上がり、体部中位で最大径を有し、肩部にむけてすぼまる。5は体部上半に最大径を有すると思われ、肩部にむかって急にすぼまる。4・5とも外面に灰釉が認められ、4の底部内面には釉溜りがある。内・外面ともヨコナデが施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、粗雑である。焼成は良好である。6は4・5に比べて薄手の小形の壺で、頸部が直立し、肩部から体部にかけてなだらかなカーブを描く。外面の肩部には灰釉がかり、内外面ともヨコナデが施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、粗雑である。焼成は良好である。

第11図7は、須恵器の甑の底部片である。推定底径16.9cmをはかり、無底式である。外面はヨコナデが、内面はナデが施され、下端はヘラケズリされている。胎土は長石・石英粒がやや多く含まれ、粗雑である。

第11図8～16は、須恵器の坏で、15・16の2点は高台付である。8～14の7点の坏は、口径が13.3～15.6cm、底径5.8～7.1cm、器高3.9～5.9cmを測る。いずれも体部が直線的に外傾し、口縁端部は丸味をもつものが多いが、8・11・14は角張る傾向を示す。11の口縁は端部が端反り気味

となる。整形は内外面ともヨコナデが施されており、底面はヘラ切りされている。8は南壁寄りの中央部の覆土下位から逆位で出土したもので、9は南西部の覆土下位から出土した破片が接合したものである。10・11は前記の土師器の甕11の下の内黒の高台付坏2の下位に11・10の順に伏せられていたものである。11は内面のヨコナデ痕が残らない程に丁寧にナデが加えられていて滑らかである。12・13は竈の覆土中から出土しており、共に器内外面の磨耗が著しい。14は南壁中央部の覆土下位から出土した破片で、薄手でシャープな作りである。色調も他の坏と異なって橙色を呈している。胎土はいずれも長石・石英粒を多く含み、粗雑である。焼成は12・13を除いて良好である。9の内外面には黒色の付着物が認められるが、詳細は不明である。10の底部にはヘラ記号がある。15は体部下半に稜を有し、体部は直線的に外傾し、口縁端部は丸味をもつ。内外面ともヨコナデが施されているが、体部下端や底部内面には凹凸があり、作りは良くない。高台は貼り付けである。胎土は長石・石英粒を含み、粗雑である。焼成はやや甘い。15は竈内出土の破片と南東コーナー寄りの覆土下位から出土した破片が接合したものである。16は高台部の破片だが、底部に糸切り痕を有するために取り上げた。

第12図1～3は、砥石の破片である。1は砂岩製、2・3は凝灰岩製である。4は鎌で、先端を欠失している。

第2号住居跡（第13図）

位置 調査区のはほぼ中央部のF2e3区を中心に確認された。

規模と平面形 長軸3.7m、短軸3.2mの不整形を呈する。

主軸方向 N-25°-E。

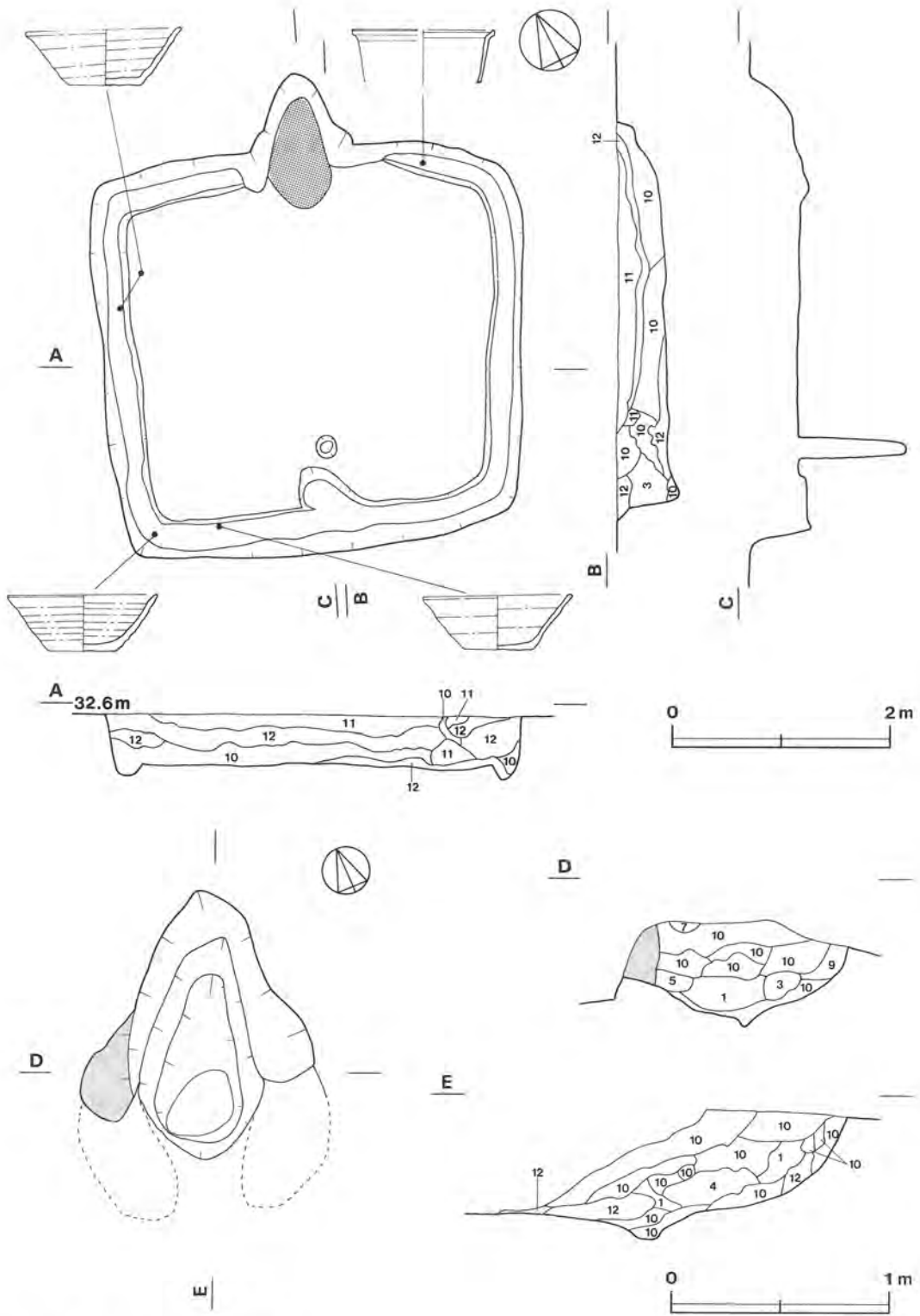
壁 北壁3.7m、東壁3.2m、南壁3.5m、西壁3.4mを測る。ロームで直立ないしやや外傾しており、壁高は45cm前後を測る。

壁溝 竈の部分を除いて全周する。幅20～25cmで、深さ5～8cmであるが、南壁中央部は25～30cmほど内側へ入り込んでいる。

床 中央部はロームの直床できわめて硬いが、四隅の部分は軟らかで、貼床となっている。全体的には平坦で良く踏み締められている。

ピット 南壁中央部近くに径20cm、深さ99cmのピットがある。位置からみて出入口施設に伴うものと思われる。

竈 北壁中央部に付設され、規模は最大長125cm、最大幅115cmの楕円形を呈し、壁外へ70cm掘り込まれている。砂質粘土を主体に構築され、両袖部の奥壁寄りには残るが、袖の前方部分や天井部は崩落が著しい。火床は床面を最深部で10cm掘り窪め、長径65cm、短径50cmの不整形楕円形を呈し、良く焼けてロームの硬化が著しくガリガリしている。



第13图 第2号住居跡实测图

覆土 上位が黒褐色，中位が暗褐色を呈し，下位に褐色土が凹レンズ状に堆積している。各土層にはローム粒子，ローム小ブロックが少量から多量に，炭化粒子，焼土粒子が微量から少量含まれ，褐色土や黒褐色土をただらにブロック状に挟むことからみると本跡も人為堆積の可能性が高い。

遺物 土師器・須恵器片が多量に出土している。須恵器の坏（第14図12・13）が南西コーナー寄りの覆土下位や，床面直上から正位で，須恵器の甗が北東コーナー寄りの覆土下位から内面を上にして出土している。また，砥石が南側の覆土中位から，鎌が南東コーナー寄りの覆土中位から，刀子が竈の覆土の上位から出土している。

所見 本跡は，遺構の形態や遺物から判断して平安時代前期（9世紀後半）に比定される。

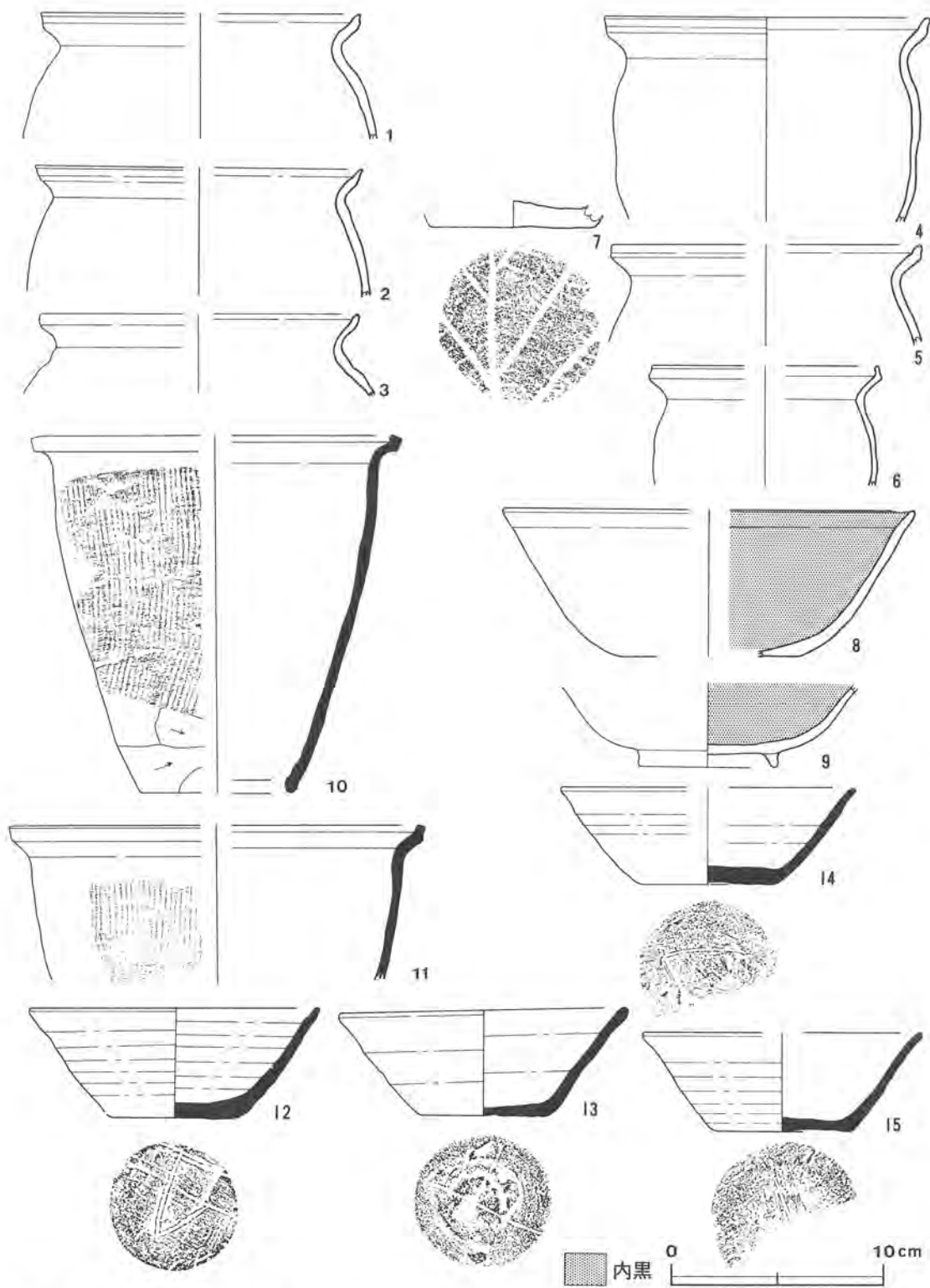
第2号住居跡出土遺物（第14図1～15，第15図1～9）

第14図1～7は土師器の甗で，1～6が口縁部から胴部にかけての破片，7は底部片である。1～3は推定口径20.0～20.7cmの中形の甗で，4～6の3点は推定口径10.6～15.4cmの小形の甗である。口縁端部はいずれも外上方につまみあげられ，かつ内面に稜を有する特色がある。3は内面の稜が弱い。整形は口縁部の内外面はヨコナデ，胴部はナデが施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み，粗雑である。いずれも焼成は普通である。7は木葉痕を有し，胎土・焼成は1～6と同様である。

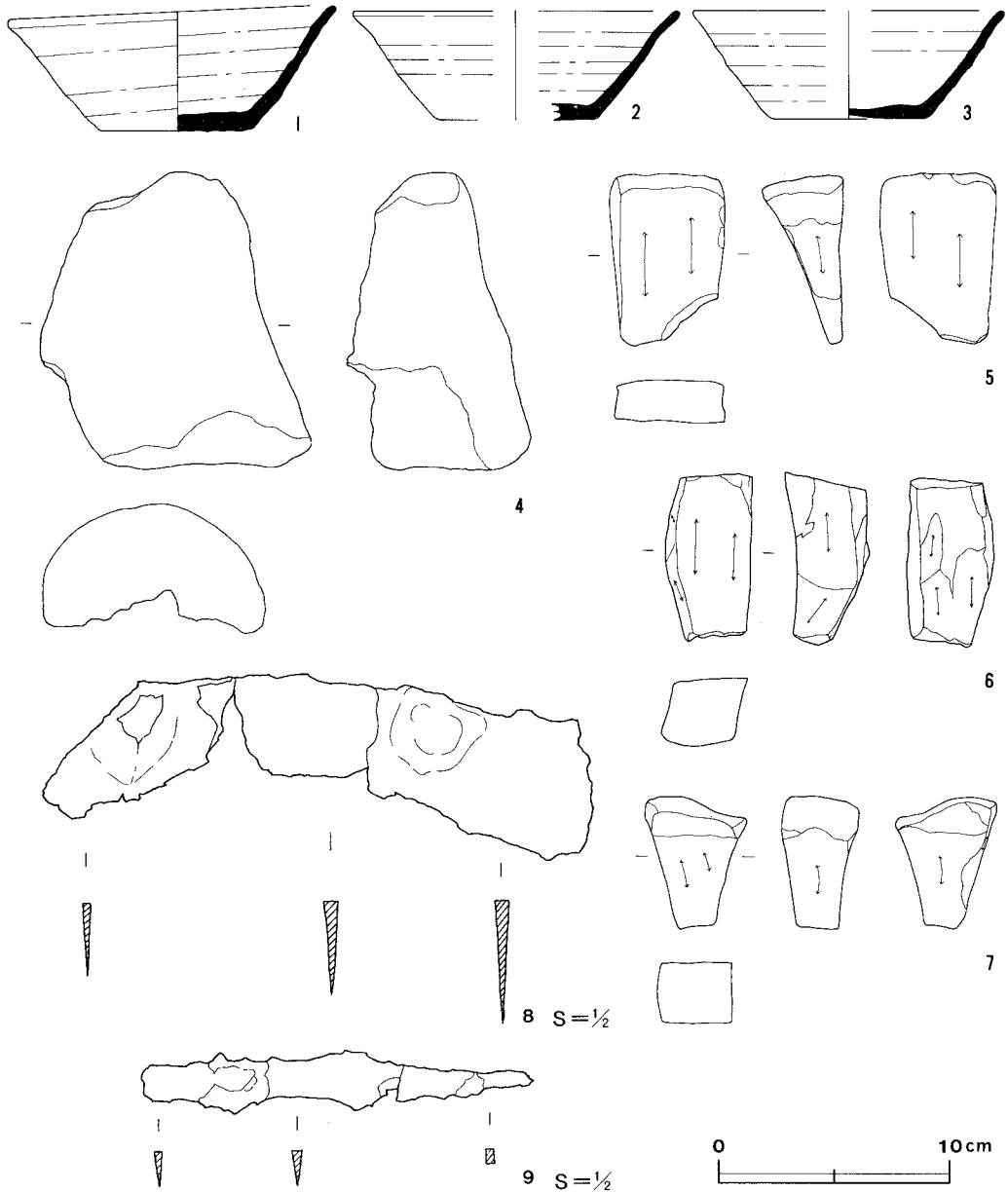
第14図8・9は，内面黒色処理が施された坏で，9は高台付である。8は推定口径19.4cmを測る大形の坏で，底部から内彎気味に立ち上がり，口縁端部は外傾する。内面にも稜を有する。整形は口縁部にヨコナデが施されており，体部下端と底部はヘラケズリと思われるが，磨耗が著しく不明瞭である。内面はきわめて丁寧なヘラミガキが横方向に加えられている。胎土は長石・石英粒が多く含まれ，粗雑である。焼成は普通である。9は口縁端部を失っているが，底部から内彎して立ち上がり，端部が端反りするものと思われる。整形は口縁部がヨコナデ，体部下端と底部はヘラケズリが施され，高台は貼り付けられている。内面は丁寧なヘラミガキが施されているが，剥落が著しい。胎土は長石・石英粒を含み，粗雑である。焼成は普通である。

第14図10・11は，須恵器の甗である。11は体部下半以下を失っているので断定はできないが，10と諸特徴が類似することから甗とした。底部から外傾しつつ立ち上がり，口縁部は強く外反する。整形は口縁部内外面はヨコナデ，体部内外面はナデの後に外面に縦位のタタキ目を施し，下端は横位にヘラケズリされている。胎土は長石・石英粒の他に雲母片の混入が目立つが，坏よりは良好である。焼成は普通である。

第14図12～15・第15図1～3は，坏である。本跡出土の坏は推定口径が13.0～14.2cm，底径5.8～7.2cm，器高4.6～5.5cmの間に納まり，規格が整っている。いずれも体部が直線的に外傾し，口縁端部は丸味をもっている。整形は内外面ともヨコナデが施されている。12～15の底面にはへ



第14図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



第15図 第2号住居跡出土遺物実測図(2)

ラ記号が認められる。12は、南西コーナー部の覆土下位から、13はその東側50cmほどの覆土下位から共に正位で出土したものである。第15図1は北西コーナー寄りの覆土中から出土した破片が接合したもの、14は南東側の覆土中位から逆位で出土したもの、15は北西側の覆土下位から逆位で出土したものである。15の内面は、ヨコナデ痕が不明瞭となる程丁寧にナデが施され、滑らかになっている。第15図2・3は覆土中出土の破片である。胎土は長石・石英粒を多く含み、粗雑

である。焼成は第14図13を除いて普通である。他に図示できない小破片として判読不能の墨書を有する内黒の坏片等がある。

第15図4は、覆土中から出土した土製支脚の破片である。5～7は、凝灰岩製の砥石である。8は鎌で、腐食が著しい。9は刀子で、先端部を失っている。

3 土坑

当遺跡からは74基の土坑が検出された。形状や規模には各々差異が認められるものの一部を除いて伴出遺物が少なく、時期や性格が不明のものが多い。ここでは、土坑のうち形状や規模、覆土の状態や出土遺物に特徴があり、所産時期がほぼ推定できるものについて、個別に解説を加え、他については一覧表とした。

第8号土坑（第16図）

位置 調査区北部のC1d9区に位置する。

長径方向 N-87°-W。

規模と平面形 173×135cmの楕円形を呈し、最深部は20cmで、浅い皿状を呈する。

壁面 北壁の一部は傾きが急であるが、その他は緩く外傾して立ち上がっている。

底面 楕円形を呈し、ロームで硬く締まっている。

覆土 レンズ状の自然堆積で、褐色を呈する。ローム粒子微量、炭化粒子極微量を含み、締まりが強く、粘性がある。

遺物 縄文草創期の無文土器の口縁部片1点が南西側の覆土中位から出土した他には磨石片や剥片が出土している。

所見 出土土器と覆土の状況から縄文草創期に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第8号土坑出土遺物（第30図3）

3は、無文の口縁部片できわめて平滑に調整されている。胎土は長石・石英粒を多量に含み、焼成は良好である。口唇部は内側に肥厚している。

第20号土坑（第17図）

位置 調査区北部のC1h0区を中心に位置する。

重複関係 南西側で第2号溝・第9号土坑に切られており、本跡の方が古い。

長軸方向 N-59°-E。

規模と平面形 320×161cmの長方形を呈し、中央の深い部分で65cmを測り、南コーナー部には径22×24cmで、深さ78cmのピットを有する。

壁面 ロームで直立ないしやや外傾して立ち上がっている。壁質は硬く締まっている。

底面 長方形を呈し、ロームで平坦で硬い。中央よりやや北側に少し凹みがある。

覆土 典型的な凹レンズ状の堆積を呈し、上位に黒褐色土、中位に暗褐色土、下位に褐色土の順で堆積している。上位を除き、ローム粒子を多量に含みザラザラして、粘性弱く締まりがある。

遺物 上位の黒褐色土中から投棄されたような状況で土師器の甕・壺が出土している。

所見 出土土器から古墳時代中期の和泉期に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第20号土坑出土遺物（第29図1～6，第30図4）

第29図1～6は本坑の覆土上位からまとまって出土した破片が接合されたもので、1は土師器の甕で、2～6は壺である。

1は底部から内彎しながら立ち上がり、胴部中位に最大径を有する球形胴の甕で、頸部で緩く括れ口縁部は外反する。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデの後に外面には斜位のヘラナデが施されているが、あまり丁寧ではない。口径14.6cm、底径6.6cm、器高21.0cmの小形甕である。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

2～6は口径13.2～14.7cm、器高5.7～7.2cmの比較的揃った規格に作られている。6を除いて丸底を意識しているものと思われる。2・3は頸部に括れを有し、4・5は半球状に立ち上がる。2は頸部の括れが緩く、体・底部はナデが施され、口縁部内外面にはヘラナデが横位に施されている。3は頸部が強く括れ、体・底部はナデの後にヘラケズリが施され、口縁部内外面はヨコナデの後にヘラミガキが施されている。4・5は共通する技法を有し、体・底部はナデの後にヘラケズリが施され、口縁部内外面はヨコナデされ、内面はヘラミガキが施されている。6は底・体部はナデの後にヘラケズリが施され、口縁部内外面はヨコナデされ、内面はヘラミガキが施されている。壺の胎土は長石・石英粒を少量、雲母片を微量に含み、焼成は普通である。

第30図4は、本坑に混入していた縄文草創期の撚糸文系土器の胴部片で、第2号溝出土の破片と同一個体である。撚糸文が縦位に間隔をおいて深く施文されている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は良好である。稻荷台式土器と思われる。

第25号土坑（第17図）

位置 調査区北部のC1i0区を中心に位置する。

長径方向 N-44.5°-W。

規模と平面形 125×107cmの楕円形を呈し、南側の最深部で16cmを測り、浅い皿状を呈する。

壁面 南から南西壁は直立するが、他は緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 不整楕円形を呈し、ロームで硬く締まっている。

覆土 中央部が褐色土で、壁寄りには明褐色土である。共にローム粒子・ローム小ブロックを微量から中量、炭化粒子極微量を含み、締まり・粘性ともにある。

遺物 縄文草創期末葉の撚糸文土器の胴部片2点とチャートの剥片1点のみである。

所見 出土土器と覆土から縄文草創期に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第25号土坑出土遺物（第30図5・6）

5・6は、粒の粗い撚糸文が縦走している胴部片で、稻荷原式土器と思われる。胎土は長石・石英粒を多量に含み、焼成は普通である。施文や胎土が類似することから同一個体と思われる。

第28号土坑（第18図）

位置 調査区北部のB1i8区を中心に位置する。

長径方向 N-62°-Wを指すものと思われる。

規模と平面形 西側が調査エリア外となるため現存の長径215cm、短径159cmの不整楕円形を呈し中央の最深部で40cmを測る。

壁面 北壁が緩やかに外傾する以外は、外傾して立ち上がっている。

底面 中央部へ向かって周囲から落ち込み、東側は浅くなるが、全体的に踏み締められてはいない。

覆土 中央部と壁寄りが褐色土で、その中間に暗褐色土が入り込む状況を示している。ローム粒子を少量から微量、炭化粒子極微量を含み、締まりは強いが、粘性は弱い。

遺物 縄文草創期末葉の無文土器の口縁部片1点のみである。

所見 出土土器から縄文草創期に比定されるものと推定され、覆土から風倒木痕の一部と思われる。

第28号土坑出土遺物（第30図8）

8は、無文の口縁部片で縦位のナデが施されている。口唇部は丸味をもち、内端に細かな刻みが加えられている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

第36号土坑（第19図）

位置 調査区北部のC1d0区に位置する。

長径方向 N-39° - W。

規模と平面形 135×84cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。底面中央やや東寄りに径8cm、深さ6cmの小ピットを有する。

壁面 ロームで各壁とも外傾して立ち上がっている。

底面 やや起伏をもつが平坦で硬い。

覆土 上位が褐色土、下位が明褐色土で、ローム粒子少量、炭化粒子極微量を含み、上位に暗褐色土をまだらに含む。締まりはあるが、粘性は弱い。

遺物 縄文草創期末葉の撚糸文土器片2点が覆土中位から出土している。

所見 出土土器から縄文草創期に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第36号土坑出土遺物（第30図9）

9は、粒の粗い撚糸文が縦走している胴下半部片で、稲荷原式土器と思われる。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は普通である。

第44号土坑（第19図）

位置 調査区北部のF2a2区に位置する。

長径方向 N-12° - E。

規模と平面形 115×101cmの不整形を呈し、深さ48cmを測る。

壁面 壁の上半は褐色土、下半はロームで各壁とも外傾して立ち上がる。

底面 ロームで硬く踏み締められており、平坦である。

覆土 上位の北半部と壁寄りが暗褐色土、他が黒褐色土で、ローム粒子を少量から中量、ローム小ブロック、炭化粒子を微量含み、締まり・粘性ともにある。

遺物 土師器の甕片を主体に、内黒の坏片、須恵器の坏片、灰釉陶器の小片の計19点である。

所見 出土土器から平安時代前期（9世紀後半）に比定されるものと思われるが、性格は不明である。

第47号土坑（第20図）

位置 調査区北部のF2b2区中心に位置する。

長径方向 N-64° - E。

規模と平面形 138×137cmの不整形を呈し、深さ62cmを測る。

壁面 ロームで西壁は直立するが、他壁は外傾する。

底面 ロームで良く踏み締められていて、きわめて硬く平坦である。

覆土 ほとんど黒褐色土で、壁寄りだけが暗褐色土となる。ローム粒子を中量から少量、ローム小ブロックを少量、炭化粒子を少量から微量に、褐色土をまだらに含み、締まりはあるが粘性はやや弱い。含有物からみると一気に埋め戻された人為堆積と判断される。

遺物 土師器の甕片、須恵器の坏片を主体に33点の土器片があり、チャートの剥片1点、焼成粘土塊3点も出土している。

所見 出土土器から平安時代前期（9世紀後半）に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第51号土坑（第20図）

位置 調査区北部のF2b₁区を中心に位置する。

長径方向 N-78°-W。

規模と平面形 126×116cmの不整形円形を呈し、南東側の最深部で38cmを測る。

壁面 ロームで各壁とも外傾して立ち上がるが、東壁は直立に近い。

底面 ロームで少し凹凸があり、あまり硬くはない。

覆土 上位が黒褐色、中位が暗褐色、下位が褐色の凹レンズ状の堆積を示すが、ローム粒子、ローム小ブロックを少量から中量、炭化粒子を微量含む他に、褐色土や暗褐色土をまだらに含むことからみると、人為堆積の可能性が考えられる。

遺物 土師器の甕片を主体に、内黒土師器の坏片、須恵器の坏片、灰釉陶器の小片の計14点が出土している。

所見 出土土器からみると平安時代前期（9世紀後半）に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第53号土坑出土遺物（第30図7・10～12）

7は幅広の無文帯下に2条の沈線が巡り、沈線間に左から右への刺突文が加えられた口縁部片で、後期初頭の称名寺Ⅱ式土器と思われる。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。10は、無文の胴部片で横位のナデが施されている。11は、口縁直下の破片で、上位に縄文原体の圧痕文が施され、以下は斜位のナデが施されている。12は斜行縄文が施されている胴部片である。10～12は草創期から早期にかけての土器である。これらは胎土に微量から中量の長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

第55号土坑（第20図）

位置 調査区北部のF2j₄区に位置する。

長径方向 N-79°-W。

規模と平面形 332×284cmの楕円形を呈し、深さ42cmを測る。北西壁寄りに径22×20cm、深さ7cmほどの小ピットを有する。

壁面 ロームで各壁とも外傾して立ち上がっている。

底面 ロームであるが、あまり締まりがなく平坦であるが、若干の凹凸がみられる。

覆土 上位が褐色土、下位が明褐色土で、ローム粒子少量、ローム小ブロック、炭化粒子を極微量ずつ含み、締まり・粘性ともにある。

遺物 縄文草創期・早期の土器片が7点、チャートの剥片等が8点、いずれも覆土の上位から出土している。

所見 出土土器から縄文早期に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第55号土坑出土遺物（第30図13・14）

13は、無文土器の胴部片で、斜位のナデが施されている。胎土は長石・石英粒を多量に含み、粗雑である。焼成は普通である。14は、無文の小片で、横位の軽いナデが施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

第56号土坑出土遺物（第30図15）

15は、内外面に横位の貝殻条痕文が施されている胴部片で、胎土に長石・石英粒の他に若干の繊維を含む。焼成は普通である。早期後半の茅山式土器に対比できる。

第57号土坑（第20図）

位置 調査区北部のF2j_s区に位置する。

長径方向 N-21°-W。

規模と平面形 170×162cmの楕円形を呈し、南東側の最深部で50cmを測る。

壁面 ロームで各壁とも外傾して立ち上がっている。

底面 ロームで北西から南東側にむけて緩やかに下り、あまり締まっていない。

覆土 褐色土のほぼ水平堆積を示し、ローム粒子を少量から中量、炭化粒子・焼土粒子を極微量に含み、締まり・粘性ともにある。

遺物 縄文草創期・早期の土器片等9点とチャートの剥片4点が覆土の上・中位から出土している。

所見 出土土器から縄文早期に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第57号土坑出土遺物（第30図16・17）

16・17は、共に無文土器の胴部片で、内外面とも縦位のナデが加えられている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

第58号土坑出土遺物（第29図8，第30図18・19）

第29図8は、無文土器の底部片，推定底径5.2cm，現存高2.7cmを測る。内外面ともナデが施されているが，風化や剥落があり不明瞭である。胎土は砂粒を含み，焼成は普通である。

第30図18は，沈線文土器の胴部片で，2条の沈線が横位に施されている。胎土は長石・石英粒を含み，焼成は普通である。19は，縦位羽状の縄文が施された胴部片で，花輪台式土器である。胎土は長石・石英粒が目立ち，粗い。焼成は良好である。

第59号土坑（第21図）

位置 調査区北部のF2i₆区を中心に位置する。

長径方向 N-76° - E。

規模と平面形 100×83cmの楕円形を呈し，深さ29cmを測る。

壁面 ロームで各壁とも外傾するが，南壁は直立に近い。

底面 ロームで平坦であるが，締まりはない。

覆土 上位が褐色土，下位が明褐色土の水平堆積を示し，ローム粒子中量，炭化粒子極微量を含み，粘性は弱い締まりがある。

遺物 縄文早期の土器片1点，チャートの剥片1点が出土したのみである。

所見 出土土器から縄文早期に比定されるものと思われるが，性格は不明である。

第59号土坑出土遺物（第30図20）

20は，縦位の細沈線が数条施されている胴部の小片で，薄手である。胎土は長石・石英粒を微量に含み，焼成は普通である。沈線文系土器と思われるが確実ではない。

第61号土坑出土遺物（第30図21）

21は，口縁部に2条の押引文を巡らす口縁部片で，口唇部は，角頭状を呈し，内端に斜位の刻みを施している。胎土は長石・石英粒を多量に含み，焼成は普通である。田戸上層式土器に対比されるものと思われる。

第65号土坑（第22図）

位置 調査区北部のF2g₃区を中心に位置する。

長径方向 N-55°-E。

規模と平面形 328×275cmの不整楕円形を呈し、中央部にむかって擂鉢状に落ち込み、最深部で81cmを測る。

壁面 ロームで凹凸が激しいが、硬くはない。

底面 ロームで擂鉢状に落ち込み、南西側と北西側に30～50cmほどのピットを有する。

覆土 二次堆積のロームの下に褐色土、暗褐色土が入り込んでいる。褐色土、暗褐色土にはローム粒子を少量から中量、ローム小ブロックを微量から少量、炭化粒子微量を含み、締まり・粘性ともにある。

遺物 縄文草創期・早期の土器片3点、チャートの剥片4点が褐色土、暗褐色土中から出土している。

所見 出土土器からみて縄文早期に比定されるものと推定され、性格は特徴的な覆土と形状からみて風倒木痕と判断される。

第65号土坑出土遺物（第30図22～24）

22・23は、無文土器の胴部片で共に斜位のナデが施されている。胎土は長石・石英粒を22は少量、23は多量に含む。焼成は共に普通である。24は捺糸文が施されている胴部片で、稲荷台式土器と思われる。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

第69号土坑出土遺物（第30図25・26）

25・26は、共に沈線文土器の胴部片で、横位の沈線が施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

第72号土坑出土遺物（第30図27～29、第29図9）

27は、無文の口縁部片で、内外面とも横位のナデが施されている。胎土は長石・石英粒を多量に含む、焼成は普通である。28は、沈線文土器の胴部片で、横位の沈線と斜格子目文が組み合わされている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。29は、アナガラ属の貝殻による波状貝殻文が施されている胴部片で、前期後半の浮島式土器である。内外面とも磨耗が著しい。胎土は砂粒が多く、焼成は普通である。

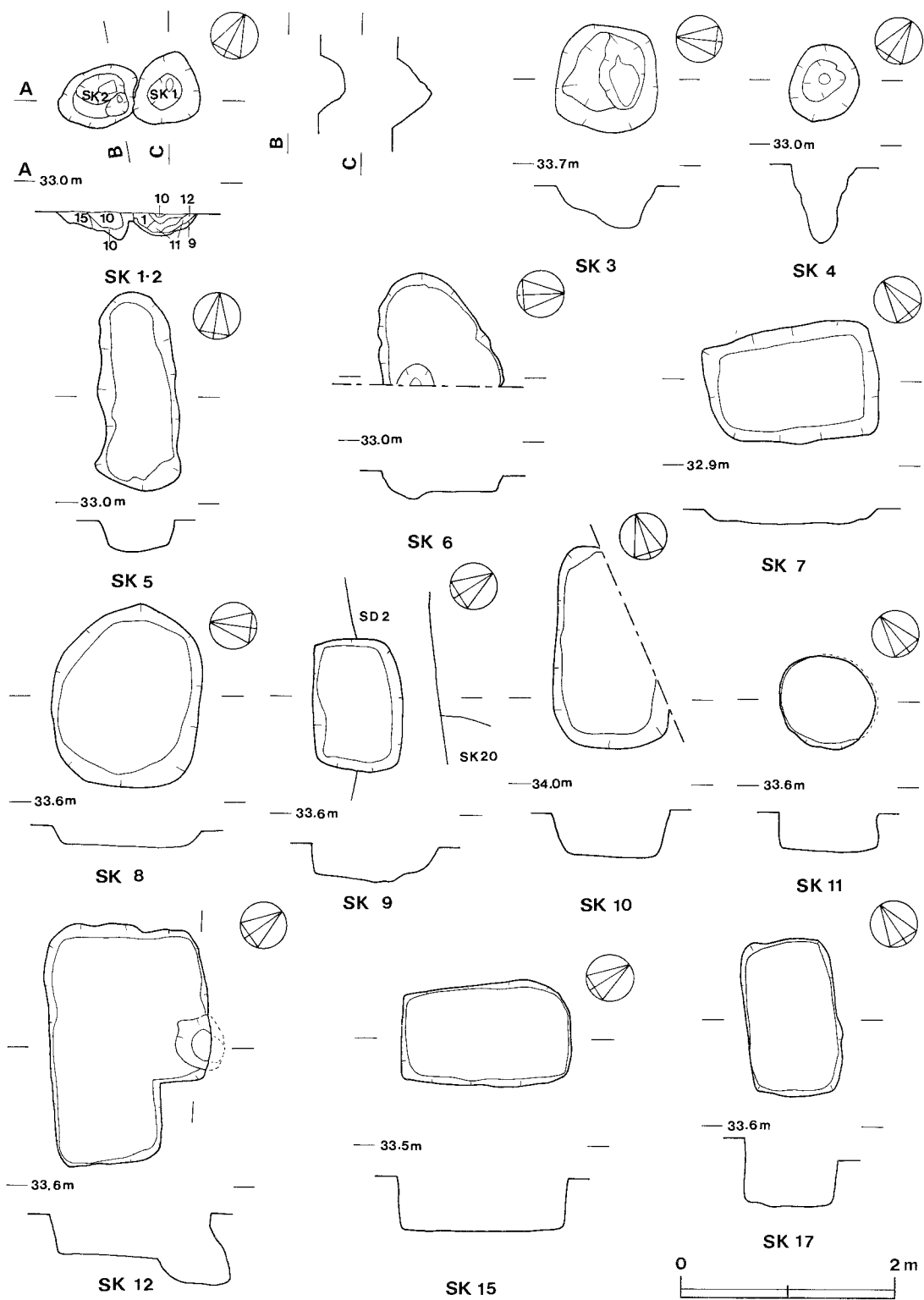
第29図9は、須恵器の盤である。高台径9.5cm、現存高3.1cmを測る。内外面ともヨコナデ痕を良く残し、底部はヘラ切りである。高台は貼り付けられている。胎土は長石・石英粒を多く含み、粗雑である。焼成は良好である。平安時代前期9世紀代のものと思われる。

表2 五平遺跡土坑一覽表

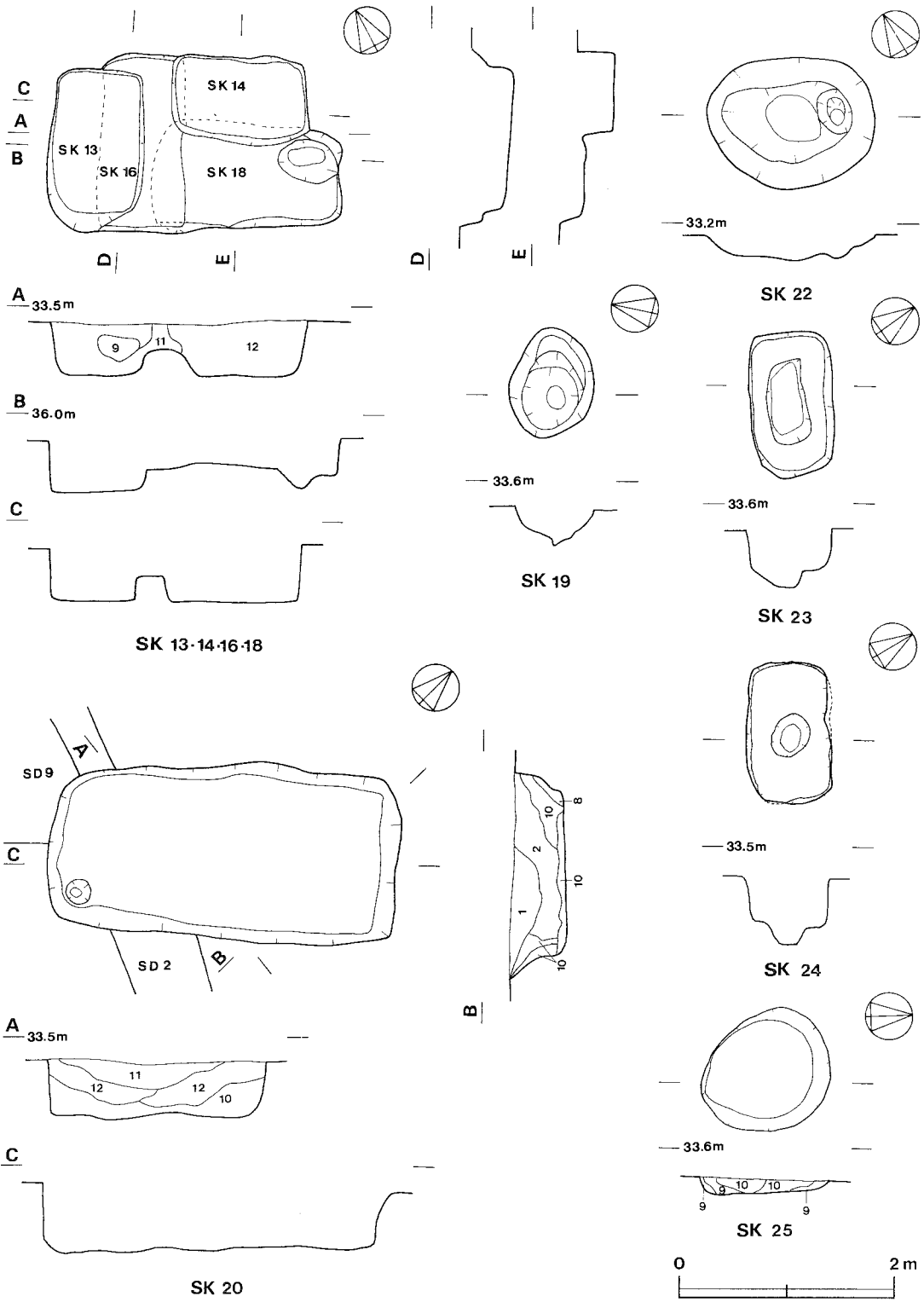
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (重複関係・性格)	図版 番号
				長 径 (軸)cm	短 径 (軸)cm	深 さ cm						
1	A1g _v	N-0°	不整円形	72	61	35	外傾	V字状	攪乱	0		第16図
2	A1g _o	N-57° -E	楕円形	70	56	25	外傾	傾斜	人為	0		第16図
3	A1h ₉	N-42° -W	隅丸方形	110	105	41	外傾	傾斜	人為	0		第16図
4	A1h _o	N-0°	不整円形	74	64	72	外傾	V字状	人為	0		第16図
5	A1i ₉	N-14.5° -W	長方形	188	78	30	外傾	平坦	人為	縄草 1		第16図
6	A1g _o	N-89° -W	(楕円形)	(114)	105	25	外傾	平坦	自然	0	東側エリア外 ビットあり。	第16図
7	F2d ₅	N-58° -W	長方形	162	110	20	外傾	平坦	人為	縄草・土師、須恵片 12、滑石片 1	SD6を切る。 芋穴	第16図
8	C1d ₉	N-87° -W	楕円形	173	135	20	外傾	皿状	自然	縄草 1、安山岩・チ ャート片10		第16図
9	C1g _o	N-60° -W	長方形	125	85	34	直立	平坦	人為	0	SD2、SK20を 切る。芋穴	第16図
10	B2i ₁	N-26° -W	(長方形)	(190)	(108)	45	外傾	平坦	人為	土師、須恵片 2	東側エリア外 芋穴	第16図
11	B1h _o		円形	96	88	37	直立	平坦	人為	須恵片 1	一部壁内傾 芋穴	第16図
12	B1h ₉	N-60° -W	不整長方形	230	137	41	直立	平坦	人為	土師・須恵・陶器片 7 砥石片 1 鉄片 1	北東壁下に挟り込 みあり。生姜穴	第16図
13	C1j ₉	N-33.5° -E	長方形	150	96	50	直立	平坦	人為	土師・陶器片 7	SK16を切る。 芋穴	第17図
14	D1a _o	N-56° -W	長方形	128	85	50	直立	平坦	人為	0	SK16・18を切る。 芋穴	第17図
15	D1g ₉	N-34° -E	長方形	159	100	52	直立	平坦	人為	須恵・陶器片 2	SD4を切る。 芋穴	第16図
16	C1i ₉	N-32° -E	(長方形)	165	(77)	25	直立	平坦	人為	0	SK13・14に切ら れる。芋穴	第17図
17	D1g ₉	N-29° -E	長方形	147	90	67	直立	平坦	人為	土師片 1	TM1周溝を切る。 芋穴	第16図
18	D1a _o	N-59° -W	(長方形)	(178)	(98)	25	直立	平坦	人為	0	SK14・16に切られ る。芋穴南東部に凹み	第17図
19	B1j _o	N-79.5° -E	楕円形	102	76	36	外傾	凹凸	自然	0		
20	C1h _o	N-59° -E	長方形	320	161	65	外傾	平坦	人為	土師器 甕・埴	SD2・SK9に 切られる。	第17図
21	B1g ₉	N-21° -W	不整形	447	310	68	外傾	凹凸	自然	縄草 1 チャー ト片 1	風倒木痕	第18図
22	B1a ₈	N-53.5° -W	楕円形	159	126	25	外傾	皿状	自然	0	0	第17図
23	C1j _o	N-58° -W	長方形	137	78	55	直立	段状	人為	土師・須恵片 3	2段掘り込み 芋穴	第17図
24	D1a _o	N-59.5° -W	長方形	131	80	46	直立	平坦	人為	縄草、須恵片 2	ビットあり。	第17図
25	C1i _o	N-44.5° -W	楕円形	125	107	16	外傾	皿状	自然	縄草 2 チャー ト片 1		第17図
26	C1i ₉	N-9° -W	楕円形	140	115	31	外傾	皿状	自然	0		第18図
27	C1g ₈	N-24.5° -E	楕円形	140	114	24	外傾	皿状	自然	0		第18図

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (重複関係・性格)	図 版 番 号
				長 径 (軸)cm	短 径 (軸)cm	深 さcm						
28	B1i8	N-62° -W	(不整楕円形)	(215)	159	40	外傾	凹凸	自然	縄草 1	西側エリア外 風 倒木痕	第18図
29	B1g9	N-15.5° -E	(楕円形)	170	(142)	52	外傾	凹凸	自然	0	S K 30に切られる。	第18図
30	B1g8	N-6° -E	不整楕円形	220	166	97	外傾	凹凸	自然	縄草 1 砂岩・花崗岩 2	S K 29を切る。 風倒木痕	第18図
31	B1g6	N-14.5° -E	長 方 形	110	65	40	外傾	平坦	人為	0		第18図
32	B1d9	N-82° -W	楕 円 形	192	130	38	外傾	平坦	人為	0	西側に落ち込みあり。	第19図
33	B1e8	N-20.5° -W	(不整楕円形)	(147)	105	27	外傾	平坦	人為	0		第19図
34	B1d8	N-2° -W	楕 円 形	108	71	40	外傾	凹凸	人為	0	南北に落ち込みあり。	第18図
35	C1j8	N-72° -E	楕 円 形	115	85	25	外傾	皿状	自然	0		第18図
36	C1d0	N-39° -W	楕 円 形	135	84	14	外傾	平坦	人為	縄草 2	底面に小ピットあり。	第19図
37	C1g8	N-15° -W	楕 円 形	110	92	17	外傾	皿状	人為	0		第19図
38	D1d9	N-38° -E	楕 円 形	101	78	22	外傾	皿状	自然	0		第19図
39	D1b9	N-37° -W	楕 円 形	111	95	23	外傾	平坦	自然	0	南西側に落ち込みあり。	第19図
40	C1e0	N-5° -W	楕 円 形	207	107	20	外傾	皿状	自然	0	S K 41に切られる。	第19図
41	C1e0	N-21° -E	楕 円 形	177	100	21	外傾	皿状	自然	0	S K 40を切る。	第19図
42	C1j0	N-55° -W	楕 円 形	78	68	29	外傾	平坦	人為	0	西側に落ち込みあり。	第19図
43	F1j0	N-28° -E	楕 円 形	143	115	26	外傾	平坦	自然	0		第19図
44	F2a3	N-12° -E	不 整 円 形	115	101	48	外傾	平坦	自然	土師・陶器・ 灰釉陶器片 19		第19図
45	F2a1		円 形	109	108	34	外傾	傾斜	人為	土師 3	南東側に落ち込む。	第19図
46	F2a2	N-58° -E	楕 円 形	151	105	35	外傾	傾斜	人為	0	北西側に落ち込む。	第19図
47	F2b2	N-64° -E	不 整 円 形	138	137	62	外傾	平坦	人為	縄草・土師・須恵他 33 チャート片 1		第20図
48	F2a1		円 形	97	95	14	外傾	皿状	人為	土師 1		第19図
49	E1h0	N-49° -W	(楕円形)	(267)	120	62	外傾	V字状	自然	七輪片 1	風倒木痕か?	第20図
50	E1g9	N-49° -W	(楕円形)	(267)	120	24	外傾	平坦	自然	土師・須恵 2		第20図
51	F2b1	N-78° -W	不 整 円 形	126	116	38	外傾	平坦	人為	土師・須恵・灰釉 陶器片 14	南東側に傾く。	第20図
52	F2d3		円 形	92	88	10	外傾	皿状	人為	0		第20図
53	F2j3	N-41° -W	(長方形)	198	(38)	76	外傾	平坦	人為	縄草・土師・須恵 他 14	S K 54に切られる。 芋穴	第20図
54	G2a3	N-45° -W	(長方形)	213	(110)	82	直立	平坦	人為	砂岩・粘板岩・安 山岩・緑泥片岩 5	S K 53を切る。 芋穴	第20図
55	F2j4	N-79° -W	楕 円 形	332	284	42	外傾	平坦	自然	縄草・早 7 チ ャート片他 8	底面に小ピットあり。	第20図

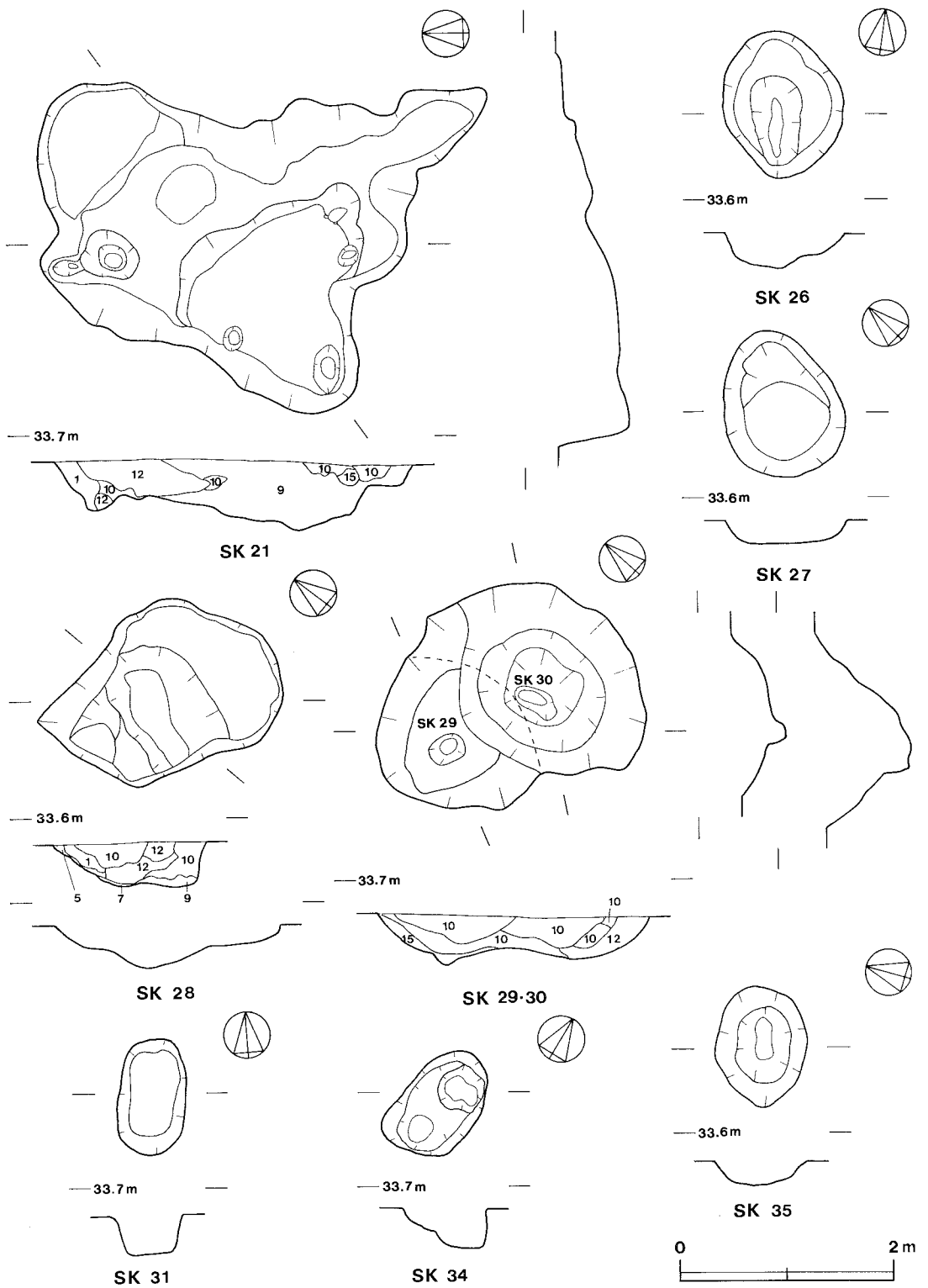
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (重複関係・性格)	図版 番号
				長 径 (軸)cm	短 径 (軸)cm	深 さ cm						
56	F2i5	N-48° -E	不整楕円形	262	179	57	外傾	凹凸	人為	縄草・早・須恵・陶器片 9 メノウ・チャート・砂岩 4	S K 70に切られる。	第21図
57	F2j5	N-21° -W	楕 円 形	170	162	50	外傾	傾斜	自然	縄草・早、土師 9 チャート片 4	南東側へ傾く。	第20図
58	G2a4	N-54° -W	(長方形)	(227)	140	89	直立	平坦	人為	縄草・早・土師・須恵 22 チャート片 4	S K 63を切る。 2基の重複。芋穴	第21図
59	F2i6	N-76° -E	楕 円 形	100	83	29	外傾	平坦	自然	縄早 1 チャート片 1		第21図
60	F2h5	N-49° -W	長 方 形	125	90	56	外傾	平坦	人為	土師・須恵 3	S K 71を切る。北東壁 下を抉り込む。生姜穴	第21図
61	G2a5	N-54° -W	長 方 形	170	110	75	直立	平坦	人為	縄早・土師 3 雲母片 1	北側に凹みあり。 2基の重複か芋穴	第21図
62	F2i5	N-36° -E	長 方 形	118	102	48	外傾	平坦	人為	縄早・中・土師・須恵 他 9	北壁下を抉り込む。生 姜穴 S K 70を切る。	第21図
63	F2j4	N-37.5° -E	(楕円形)	114	(108)	47	外傾	平坦	人為		S K 58に切られる。 芋穴	第21図
64	F2h5	N-53° -E	長 方 形	114	77	35	外傾	平坦	人為		南東壁下を抉り込 む。生姜穴	第21図
65	F2g3	N-55° -E	不整楕円形	328	275	81	外傾	凹凸	自然	縄草・早 3 チャート片 4	風倒木痕	第22図
66	F2g3	N-44° -E	長 方 形	122	66	78	外傾	平坦	人為	土師・須恵・灰釉 陶片 6		第21図
67	F2f4	N-60° -W	長 方 形	168	114	59	直立	平坦	人為	土師・須恵・陶器片他 20 滑石・チャート 3	2基重複 南西壁下 を抉り込む。生姜穴	第22図
68	F2f4	N-63° -W	長 方 形	196	149	60	直立	平坦	人為	土師器・須恵器・陶 器片他 14	2基重複 南西・北西壁 下抉り込み 生姜穴	第22図
69	F2h3	N-40° -E	不整楕円形	480	276	24	直立	平坦	自然	縄早 13 チャー ト・砂岩 2		第22図
70	F2i5	N-48° -E	不整方形	168	118	26	外傾	傾斜	人為		S K 56を切る。 南西側に傾く。	第21図
71	F2h5	N-43° -E	(長方形)	(128)	84	25	外傾	平坦	人為	縄早・須恵 5 鉄片 1	S K 60に切られる。 芋穴	第21図
72	14d1	N-34° -W	不 整 形	267	251	105	外傾	凹凸	自然	縄早・土師・須恵他 114 石英・頁岩他 5	風倒木痕か	第23図
73	F2c2		(円形)	(115)	108	50	外傾	皿状	人為	土師・須恵 14	S I 1に切られる。 西壁際にピットあり。	第23図
74	F2b3		(円形)	96	(96)	40	外傾	皿状	人為	土師・須恵 10	S I 1に切られる。	第23図



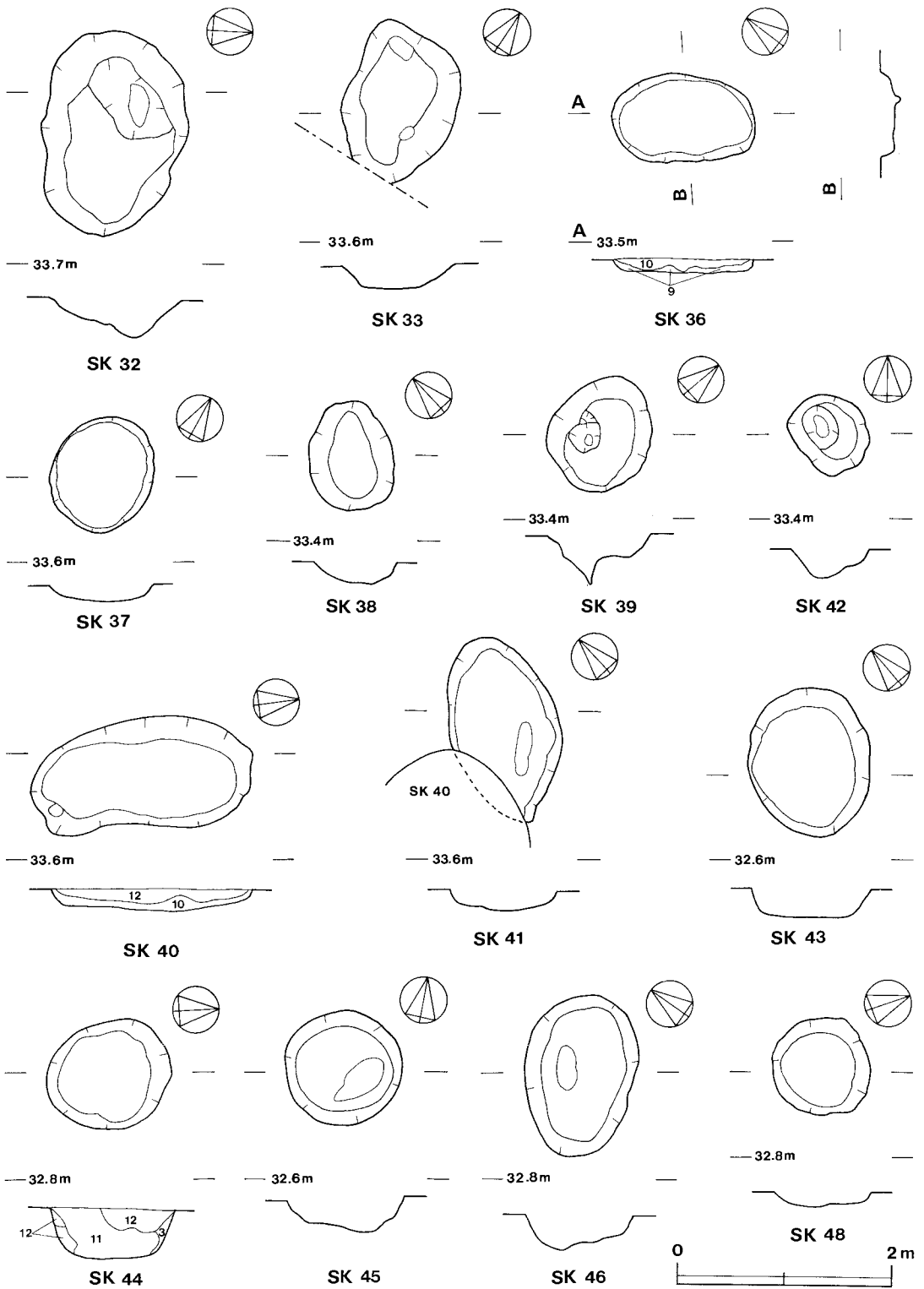
第16图 土坑实测图(1)



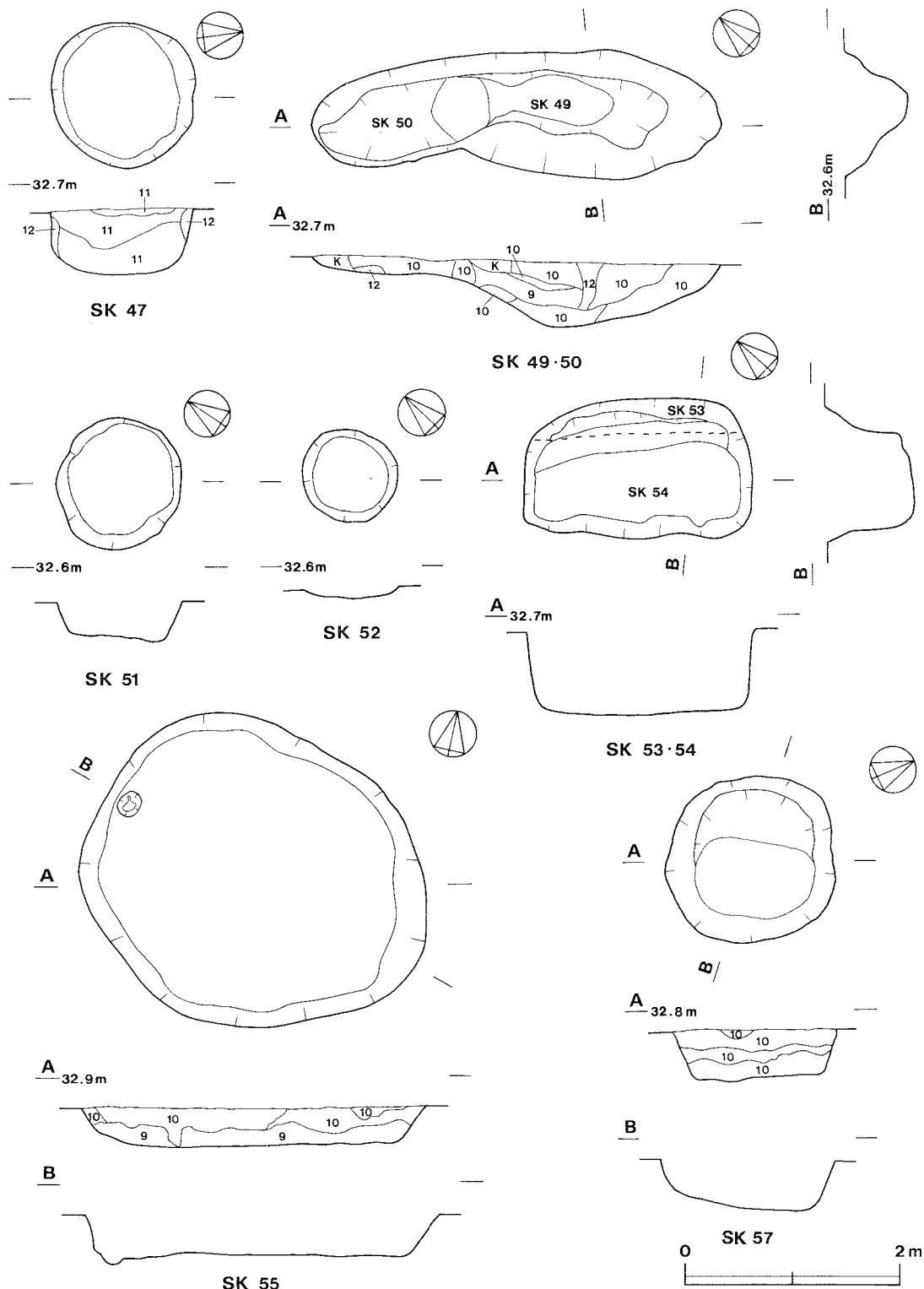
第17図 土坑実測図(2)



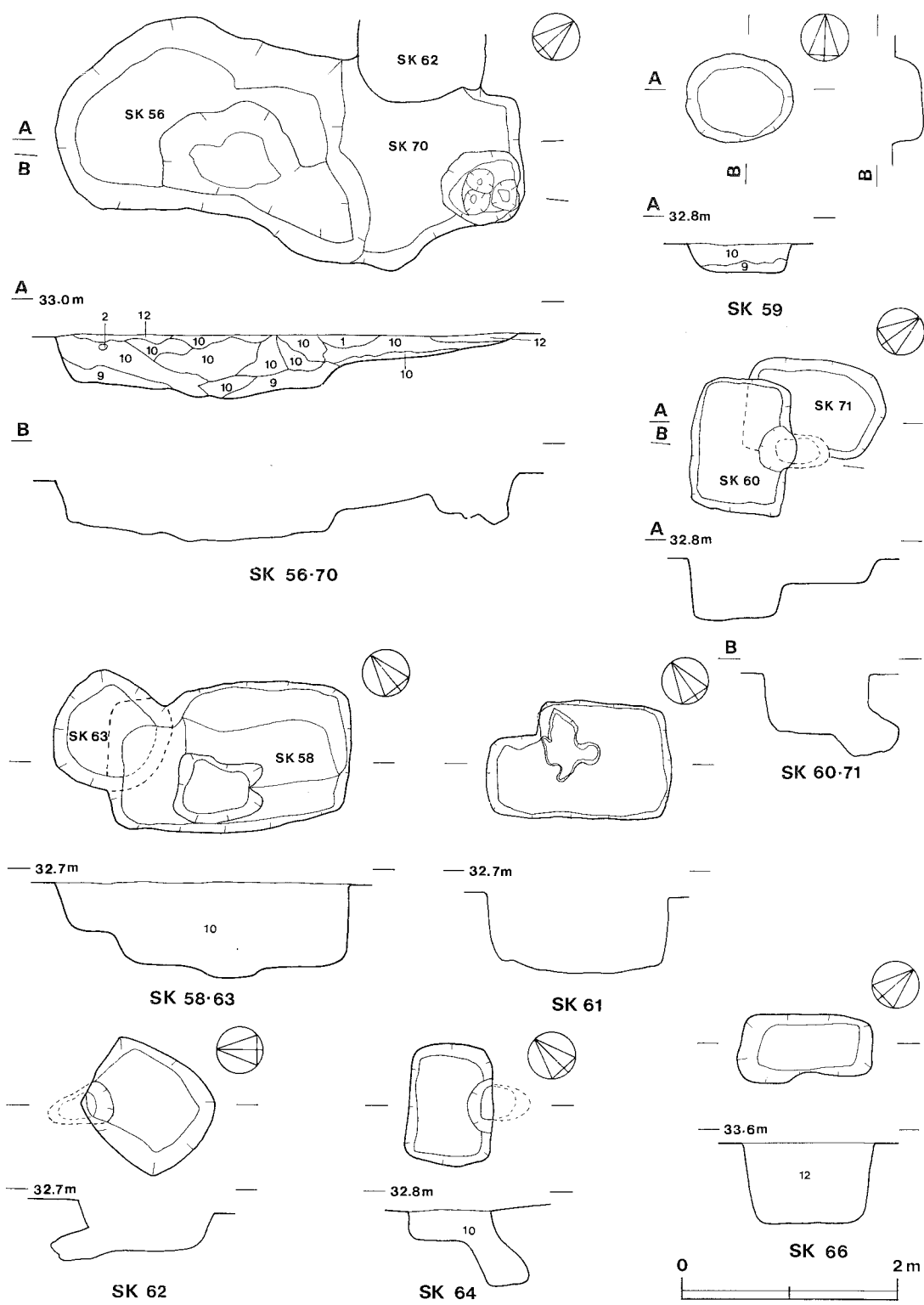
第18図 土坑実測図(3)



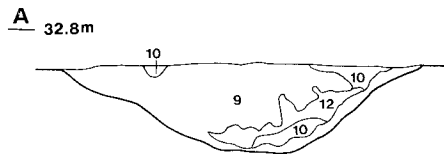
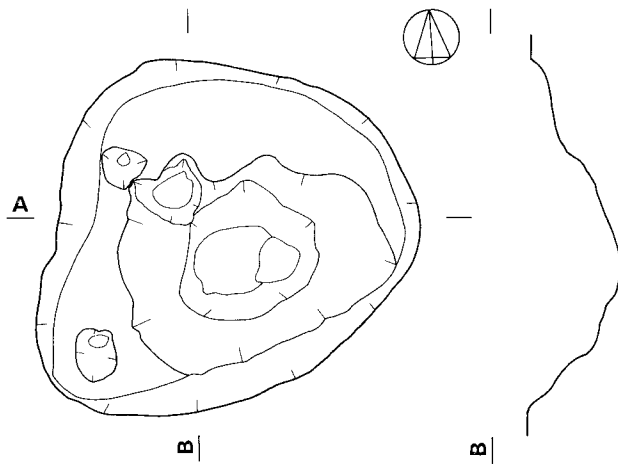
第19図 土坑実測図(4)



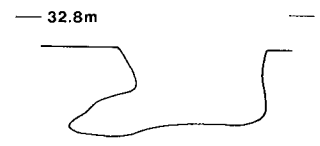
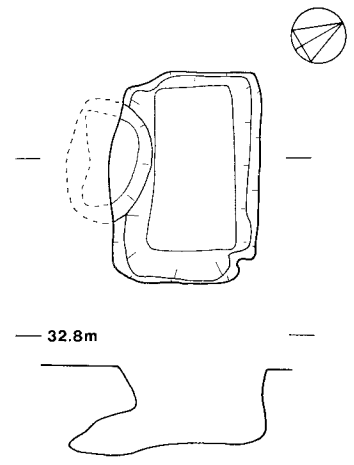
第20図 土坑実測図(5)



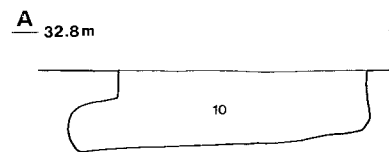
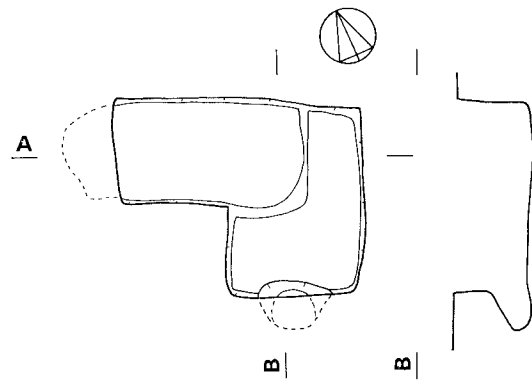
第21图 土坑实测图(6)



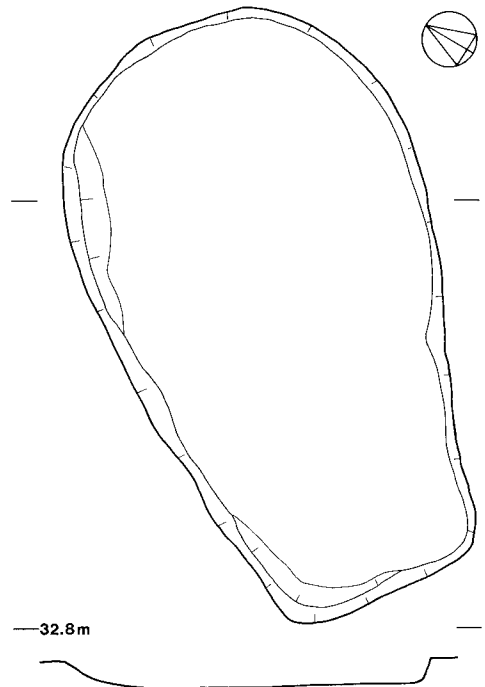
SK 65



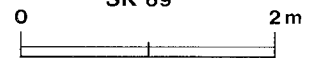
SK 67



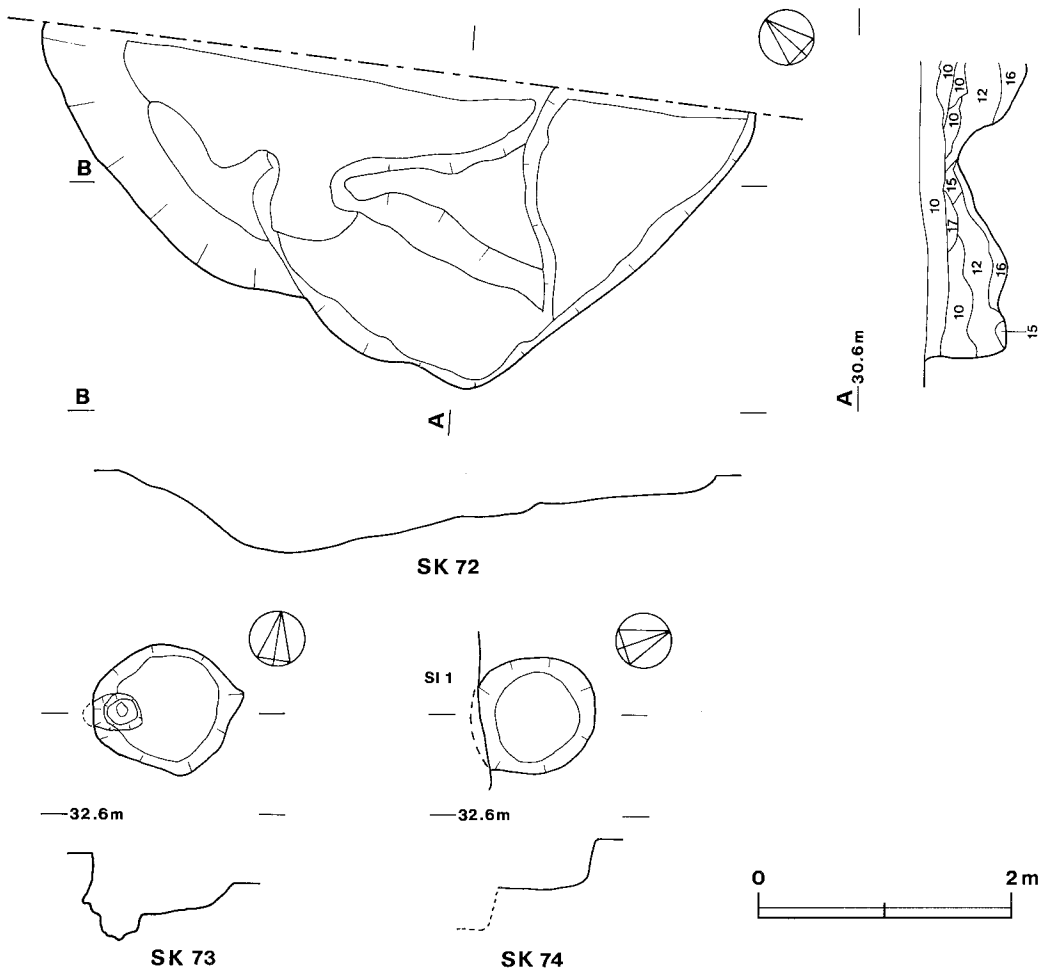
SK 68



SK 69



第22図 土坑実測図(7)



第23図 土坑実測図(8)

4 溝

当遺跡からは9条の溝が検出されたが、第8・9号溝を除いて、一端ないし両端が調査エリア外へ延びているために、全容を把握できていない。第1号溝以外は時期が明らかではなく、性格も不明である。

第1号溝 (第24図)

位置 調査区北部のA1i8・A1j8区にかけて位置する。

規模と形状 上幅110~120cm、下幅70~80cm、深さ50~64cmを測る。南西側は調査エリア外へ延びているが、現存長6.0mである。断面形は逆台形状を呈するが、中央部には径110×75cmほどの凹みがある。底面は硬く踏み締められている。

覆土 上位から黒褐色，暗褐色，褐色の順に凹レンズ状に自然堆積し，ローム粒子を多量から少量，ローム小ブロックを少量から微量，炭化粒子を微量に含み，粘性・締まりともにある。

遺物 古墳時代後期の土師器の小形甕が，南西端の覆土下位から口縁を北東方向にむけた横位の状態で出土している。

所見 出土土器から古墳時代後期に比定されるものと推定されるが，性格は不明である。

第1号溝出土遺物（第29図10）

10は，底部から内彎しながら立ち上がり胴中位で最大径を有し，内彎して頸部に至り，口縁部は直立してから端部が外反する。所謂コの字状の口縁部形態を呈する。整形は口縁部はヨコナデ，体部は横位・斜位のヘラナデ，口縁部内面は横位のヘラナデが施されている。胴部内面は器面の剝落が著しく不明である。外面にも二次加熱による剝落が多数観察される。胎土は長石・石英粒・雲母片を少量含み，焼成は普通である。底部に木葉痕がわずかに残っている。推定口径13.0cm，推定底径6.0cm，器高17.5cmを測る。

第2号溝（第24図）

位置 調査区北部のC1f₈区からC2g₁区にかけて位置する。

重複関係 第9・20号土坑と重複し，前者に切られ，後者を切っている。

規模と形状 上幅60～80cm，下幅30～45cm，深さ18～28cmを測る。北西・南東側ともに調査エリア外へ延びているが，現存長11.7mである。断面形は浅い逆台形状を呈し，中央部と南東端部寄りに径20～30cm，深さ15～20cm程度のピットを有するが，本跡に伴うものか否かは不明である。底面はやや凹凸があり，あまり硬くない。

覆土 上位から黒褐色，暗褐色を呈する凹レンズ状の自然堆積を呈している。

遺物 中央やや西寄りの覆土中位から正位で出土した須恵器の高台付坏の他に土師器の甕片など12点の土器片と石片3点が出土している。

所見 第20号土坑との重複関係および出土土器からみて平安時代前期以降に比定されるものと推定されるが，性格は不明である。

第2号溝出土遺物（第29図11，第30図30～32）

第29図11は，須恵器の高台付坏である。高台径6.7cm，現存高3.6cmを測る。器形は体部下端に稜を有し，直線的に立ち上がる。高台は貼り付けられ，ハの字状に開く。内外面ともヨコナデが施され，底部はヘラ切りである。底部外面にヘラ記号を有する。胎土は長石・石英粒を少量含み，焼成は良好である。平安時代前期9世紀代のものと思われる。

第30図30・31は、捺糸文系土器の口縁部片である。30は口唇部が丸頭状を呈し、無文帯下に捺糸文の原体を押捺している。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。31は、口唇部が丸頭状を呈して肥厚する。口縁部無文帯下に1条の凹帯を巡らし、以下に粒の粗い捺糸文が疎に施文される典型的な稻荷原式土器である。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。32は、第20号土坑出土土器と同一個体の捺糸文系土器の胴部片である。

第3号溝（第25図）

位置 調査区北部のC1i8区からD1a0区にかけて位置する。

重複関係 第13・14・16・18号土坑と重複しているが、いずれにも切られている。

規模と形状 上幅40～100cm、下幅20～50cm、深さ11～21cmを測る。溝の両端部とも調査エリア外へ延びているが、現存長12.0mである。断面形は浅い皿状を呈するが、南東側ではやや深くなり緩いV字状となる。底面は凹凸があり、あまり硬くない。

覆土 上位が黒褐色土、下位が暗褐色ないし褐色土の凹レンズ状の自然堆積を示している。

遺物 須恵器の坏片2点、蓋片1点が覆土中から出土している。

所見 出土土器が少なく、時期・性格ともに不明である。

第4号溝（第26図）

位置 調査区北部のD1f8・f9・g9区にかけて位置する。

重複関係 第15号土坑に南東端部を切られている。

規模と形状 上幅90～140cm、下幅10～80cm、深さ6～27cmを測る。北西側は調査エリア外へ延びているが、現存長は6.8mである。断面形は浅いV字状ないし皿状を呈する。溝の中央部から南東側は2股に分かれており、北側が浅くなる。底面は凹凸があり、硬くはない。

覆土 上位から黒褐色土、暗褐色土、褐色土の順に堆積しており、自然堆積と思われる。

遺物 土師器の甕片3点が覆土中から出土している。

所見 出土土器が少なく、時期・性格ともに不明である。

第5号溝（第26図）

位置 調査区北部のC1i8・i9・j9区にかけて位置する。

規模と形状 上幅35～70cm、下幅25～50cm、深さ11～19cmを測る。北西側は調査エリア外へ延び、南東側にはわずかに中断部が認められる。中断部を含める現存長は6.8mである。南東端部に径20～50cm、深さ17～24cmの3か所のピットを有する。断面形は浅い皿状ないしV字状を呈する。底面は凹凸があり、あまり硬くない。

覆土 黒褐色土の自然堆積と思われる。

遺物 土師器の細片のみ6点が出土している。

所見 出土土器が少なく、時期・性格とも不明である。

第6号溝（第27図）

位置 調査区北部のF2h4・h5・i4・j3区にかけて位置する。

重複関係 第7号土坑に切られている。

規模と形状 上幅100～140cm，下幅60～110cm，深さ12～17cmを測る。両端部とも調査エリア外へ延びているが，現存長は13.9mである。断面形は浅い皿状を呈する。中央部に径50×60cm，深さ10cmほどの凹みを有する。底面はロームだが，軟らかい。

覆土 褐色土の単一層で，ローム粒子を中量から多量に含み，粘性・縮まりともにある。

遺物 土師器・須恵器・縄文式土器片など75点，チャート等の石片5点，鉄片1点が出土しているが，いずれも細片で流れ込みと思われる。


所見 出土土器は流れ込みと判断され，時期・性格ともに不明である。

第6号溝出土遺物（第30図33～37）

33～37は，いずれも無文土器の破片で，36が口縁部片，35が底部片で，他は胴部片である。36は強い横位のナデが施されており，内面は丁寧にナデられて平滑となっている。35は推定底径4.2cmを測る小形土器で平底を有する。33・34・37は横位のナデが施されている胴部片で，34は小形で薄手である。33・37は内面が黒色を呈し，縦位に丁寧にナデが施されている。いずれも胎土は長石・石英粒を含むが，33・37は含有量が多く，外面には整形による石粒の移動痕が目立つ。焼成は33・37は良好で，他は普通である。

第7号溝（第28図）

位置 調査区南部のH3a2・a3・b2・b3・c4区にかけて位置する。

規模と形状 上幅110～130cm，下幅5～35cm，深さ9～52cmを測る。北西側は調査エリア外へ延びている。現存長は11.7mである。断面形は「」状を呈する。溝の北西側（径80×65cm，深さ24cm）と南東端部（径45×35cm，深さ31cm）にピットを有する。底面は凹凸があり，硬くない。

覆土 暗褐色土を主とし，褐色土，ローム粒子をまだらに含み，縮まり・粘性ともにある。下底近くに黒褐色土を帯状に含む。

遺物 土師器・須恵器・縄文式土器片22点と雲母片岩片等11点の他に古銭「寛永通宝」1点が出土している。

所見 古銭の出土から考えて近世以降の所産と推定され、斜面に掘削され、覆土に流水の痕跡をうかがうことができることから排水路的性格が考えられる。

第8号溝（第28図）

位置 調査区南部のI3c8・c9・d8・d9・e9区にかけて位置する。

重複関係 第9号溝を切っている。

規模と形状 上幅60～110cm，下幅20～60cm，深さ28～41cmを測る。北側は黒色土層中に掘削されていたために検出できなかった。現存長は9.6mである。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦であるが、硬くない。

覆土 褐色土，暗褐色土から成り，ローム粒子を中量から少量に含み，両者が混じり合う状態を示している。人為堆積の可能性が高い。

遺物 土師器の甕・坏片を主体とし，須恵器の坏片，縄文式土器片など61点と砂岩片2点が出土している。

所見 出土土器はいずれも流れ込みと判断され，時期は不明であるが，性格は排水路的なものと考えられる。

第8号溝出土遺物（第30図38～43）

38は，細い竹管状工具による爪形文と貝殻腹縁文が組み合わされた口縁部片で，胎土に繊維を含む。黒浜式土器と思われる。39・40は，前期後葉から末葉の土器で，39はRLの縄文，40は貝殻腹縁文を施しているが，胎土に砂粒を多く含み，繊維は含まない。共に器面の磨耗が著しい。41～43は，早期中葉から後葉の土器で，41は斜位の細い沈線が，42は2条の沈線下に貝殻腹縁文が，43は横位の貝殻条痕文が施されている。41・42は田戸上層式土器と考えられ，43は広義の茅山式土器に属する。前者は胎土に繊維を含まず，後者は含んでいる。

第9号溝（第28図）

位置 調査区南部のI3c8・d8・d9・e8・e9区にかけて位置する。

重複関係 第8号溝に切られている。

規模と形状 上幅30～50cm，下幅5～25cm，深さ15～29cmを測る。北側は黒色土層中に掘削されていたために検出できなかった。現存長は6.4mである。断面形は緩いV字状を呈する。底面は丸味をもち，硬くない。

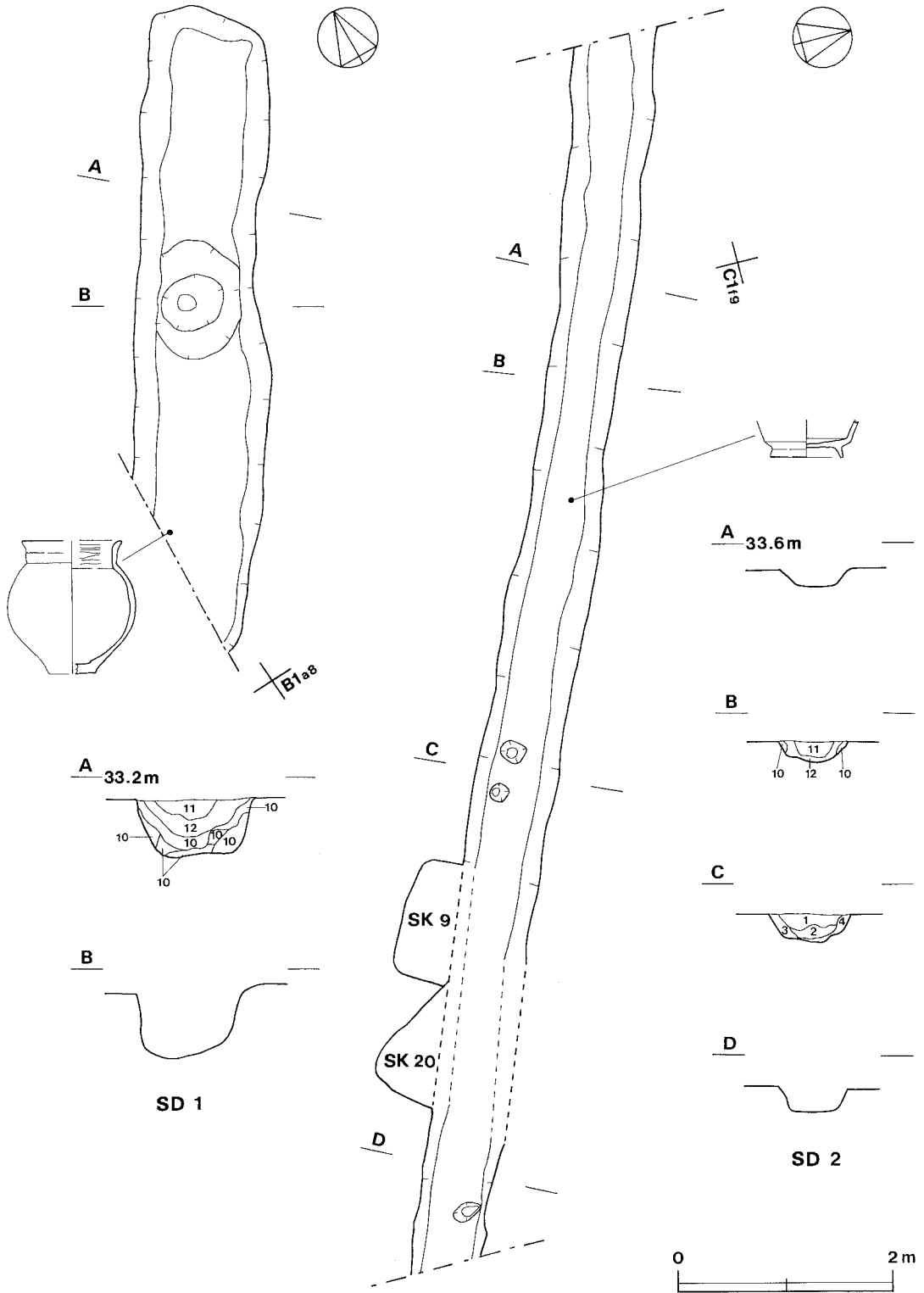
覆土 褐色土，暗褐色土から成り，ローム粒子を少量から微量に含み，両者が混じり合う状態を示している。人為堆積の可能性が高い。

遺物 縄文早期の土器片を主に土師器の甕片を含め10点が出土している。

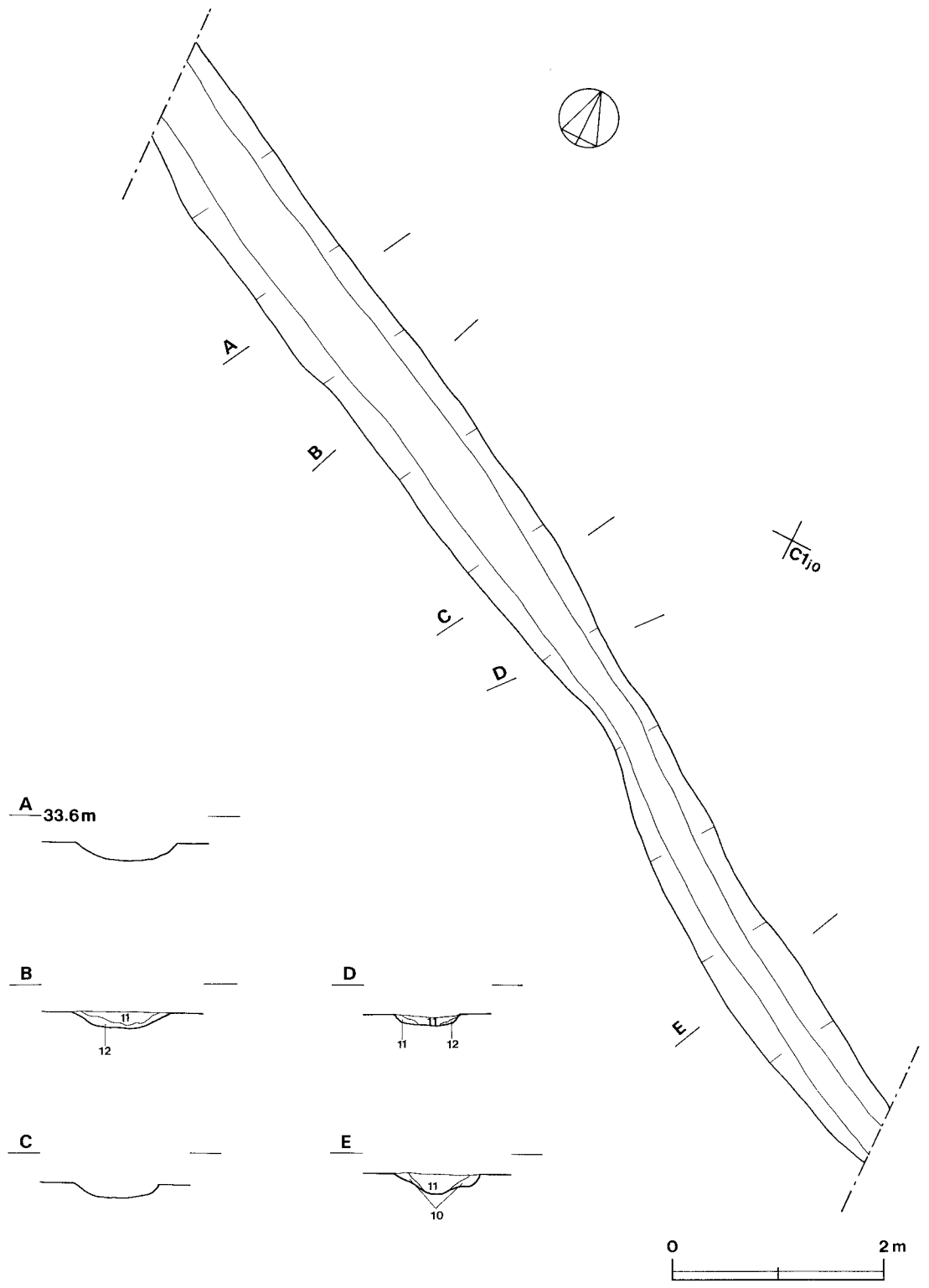
所見 出土土器はいずれも流れ込みと判断され、時期は不明であるが、性格は排水路的なものと考えられる。

第9号溝出土遺物（第30図44・45）

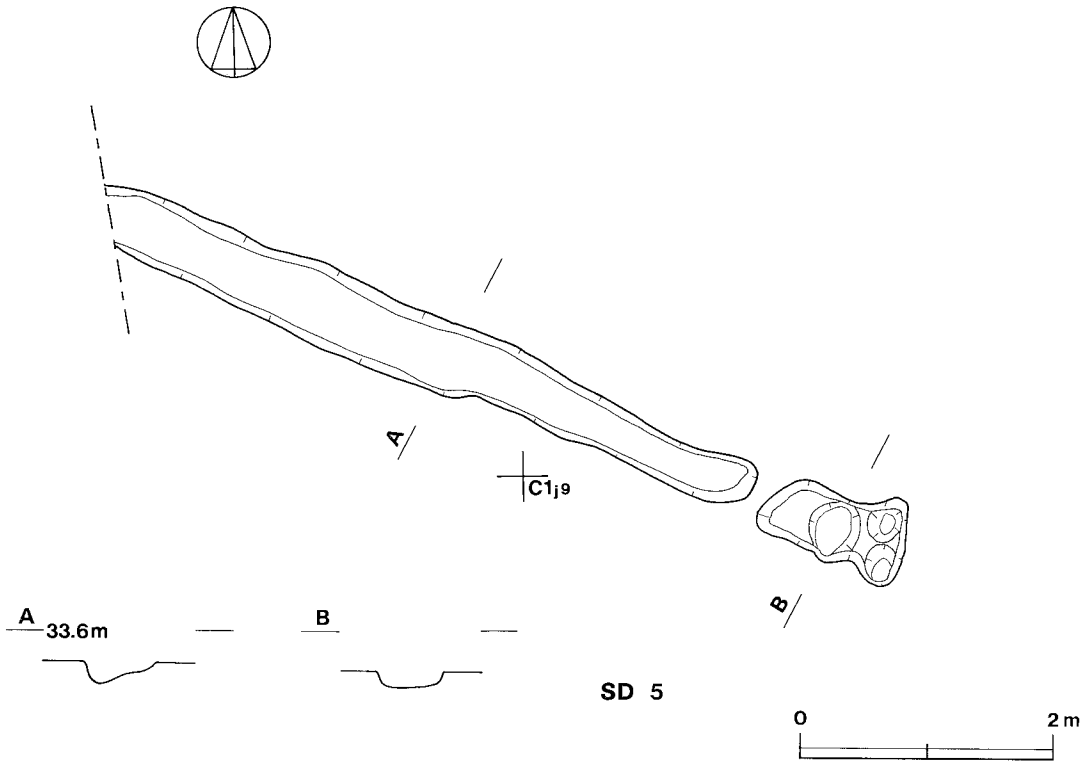
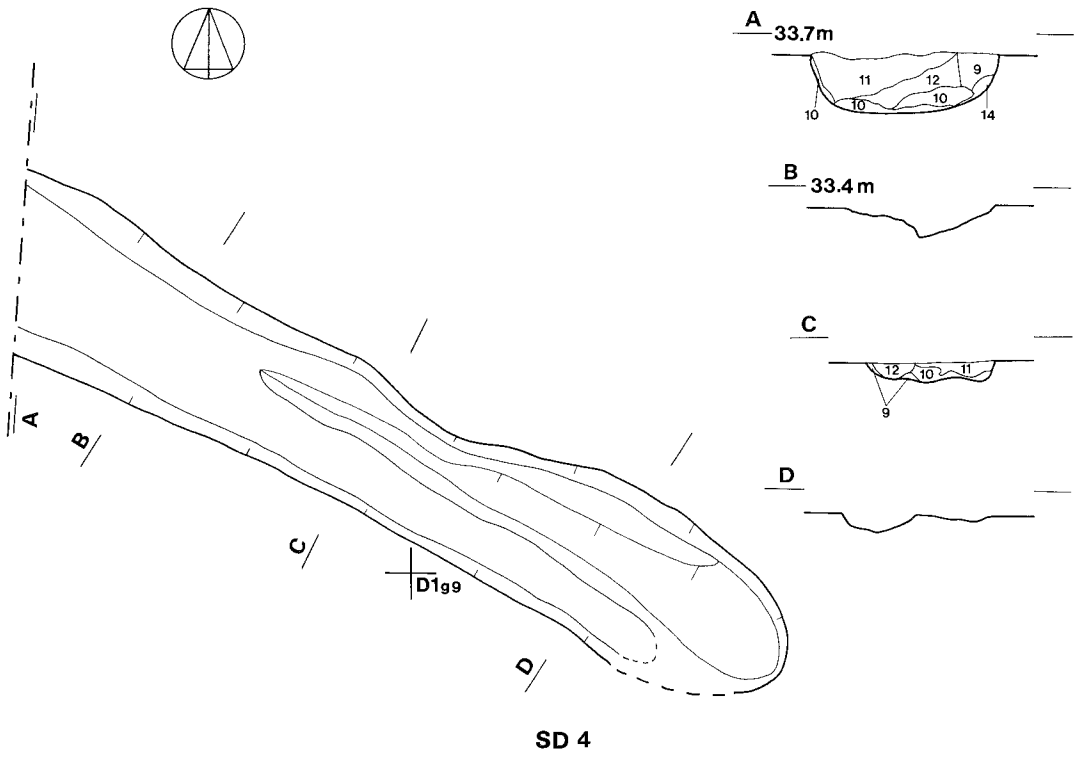
44は、縦位の貝殻条痕文が施された胴部片で、胎土に微量の繊維を含む。45は、第8号溝出土の42と同一個体と考えられ、2条の沈線間に貝殻腹縁文が充填されている。44は広義の茅山式土器、45は田戸上層式土器と考えられる。



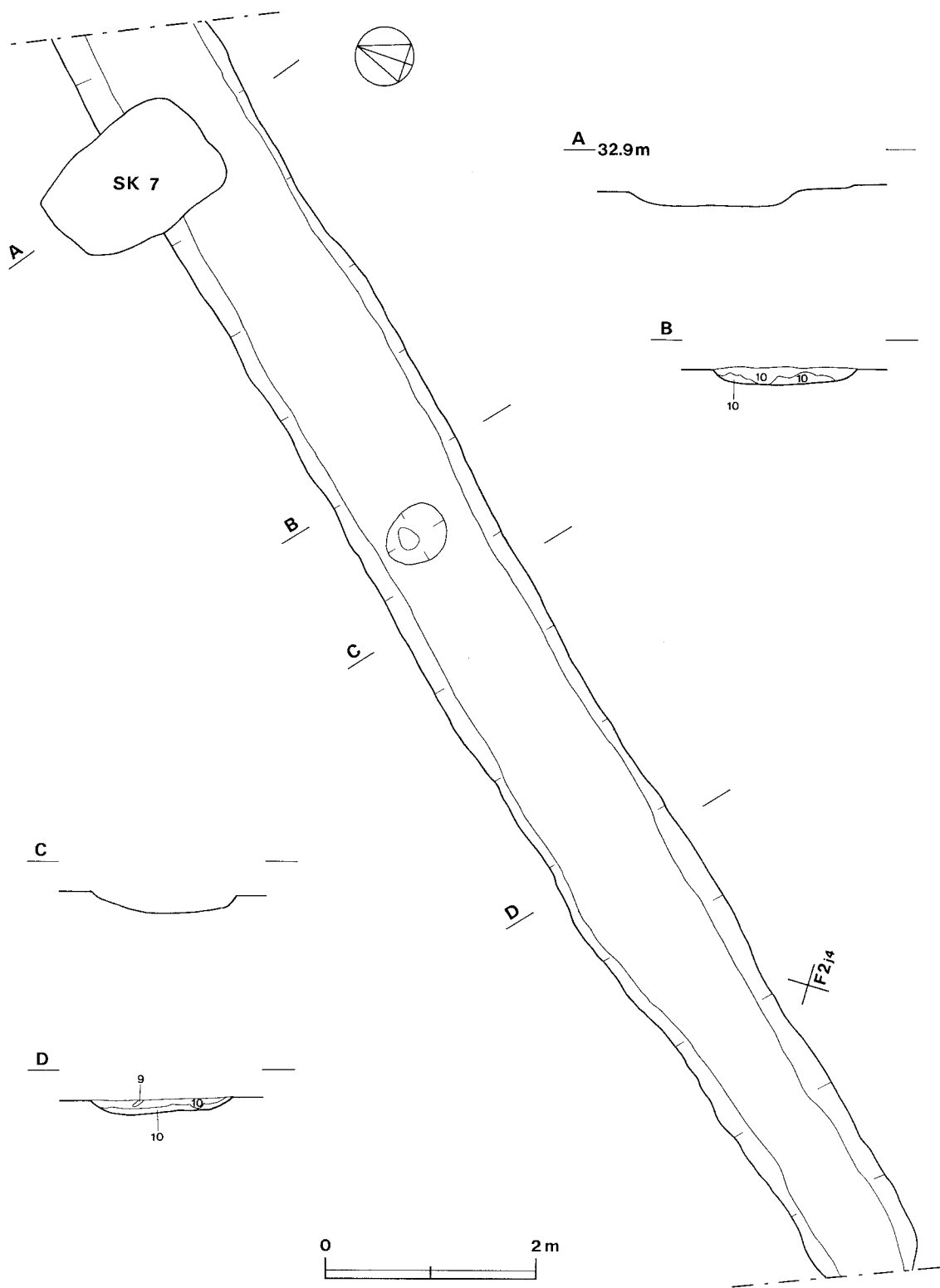
第24图 第1・2号沟实测图



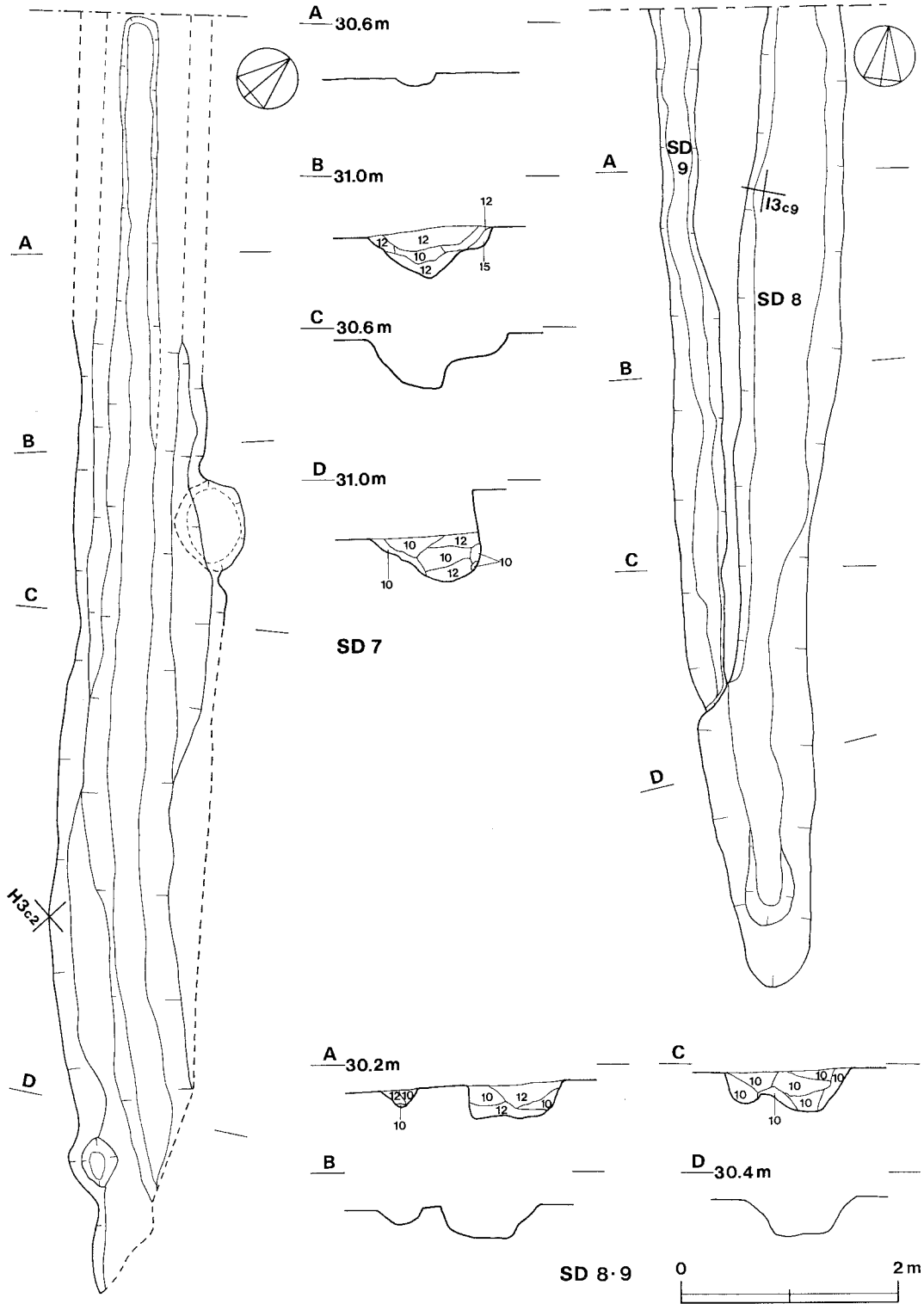
第25図 第3号溝実測図



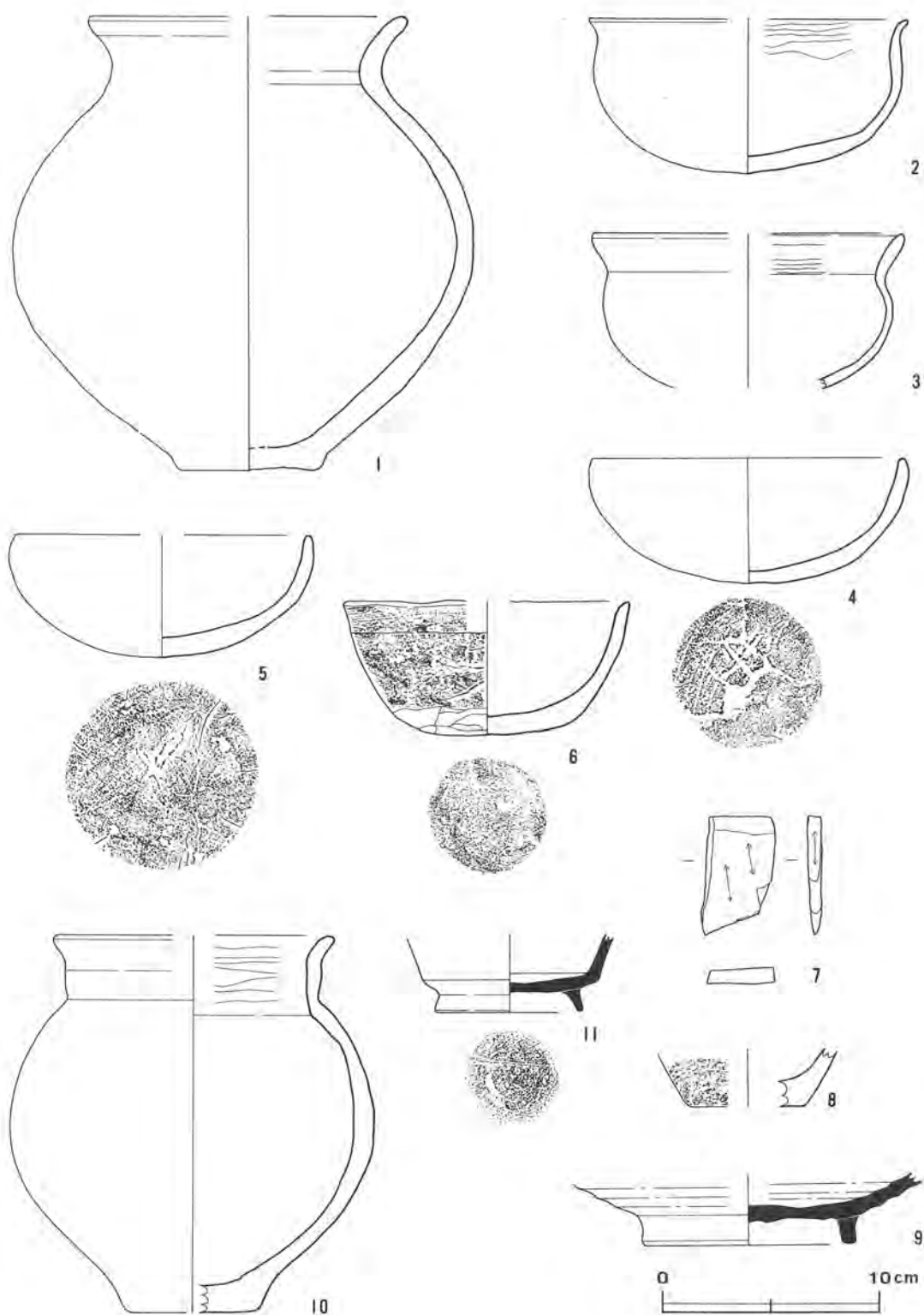
第26图 第4・5号沟实测图



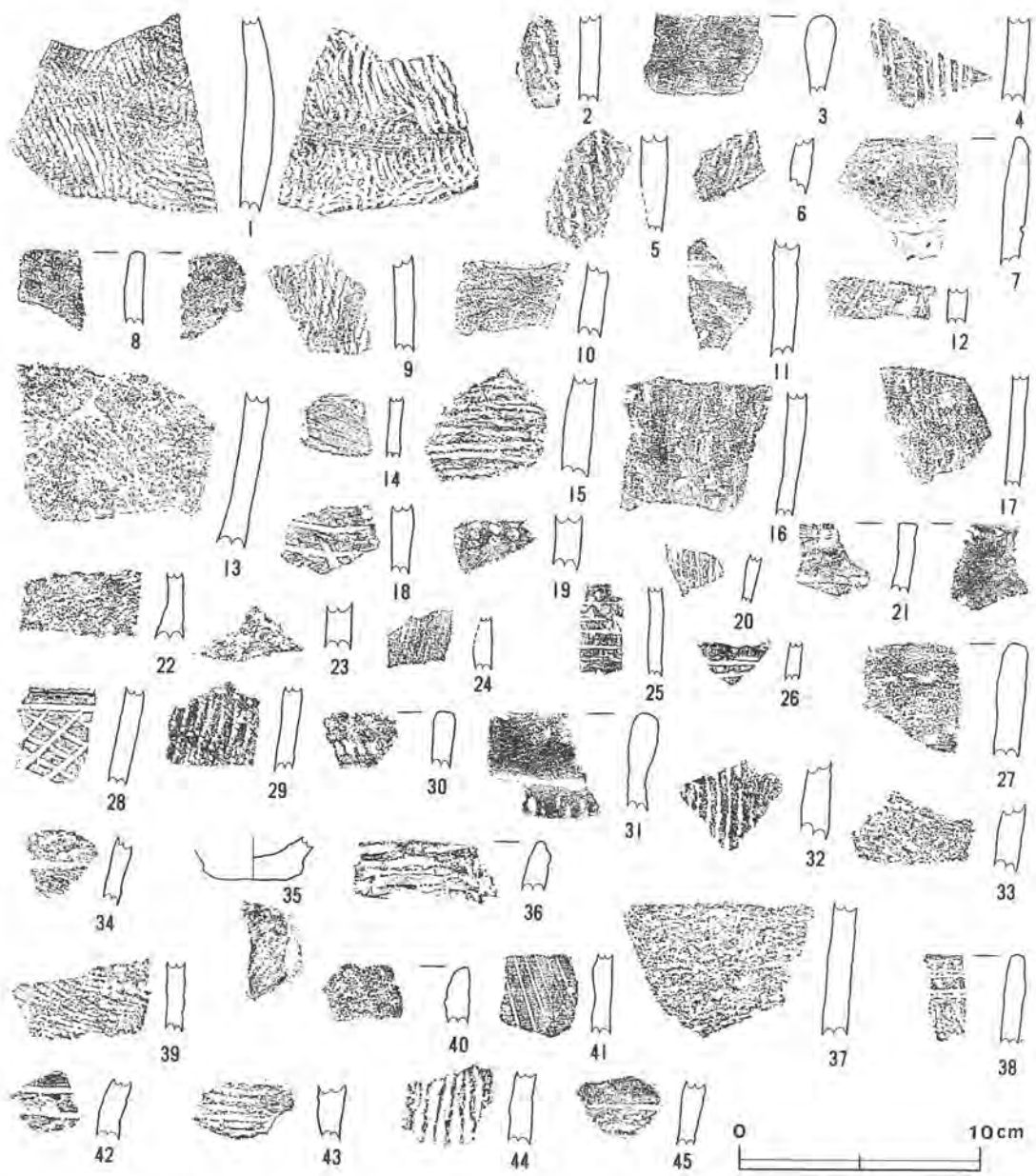
第27图 第6号沟实测图



第28图 第7·8·9号沟实测图



第29図 土坑・溝出土遺物実測図



第30图 古墳・土坑・溝出土遺物実測・拓影图

第3節 その他

1 包含層の調査とその出土遺物

包含層の存在は、試掘調査時のトレンチにより確認された。G2区を中心とした包含層は調査区の南側の傾斜面部に設定したKトレンチとLトレンチから多量の縄文式土器等が出土したことから確認され、その両者の間をつなぐKLトレンチを設け、範囲を推定した。また、調査区の南端部のH3・I3区を主とする包含層はOトレンチから少量の縄文式土器と土師器・須恵器が出土したことから確認された。G2区とH3・I3区の包含層の調査は、遺構の調査が終了した後の1週間程実施した。G2区からは縄文時代では草創期の燃糸文系土器、無文土器、早期の貝殻沈線文系土器、貝殻条痕文系土器、前期前葉の羽状縄文系土器、後葉の貝殻沈線文系土器、末葉の縄文を主な文様とする土器等が出土しており、草創期・早期の土器が主体を占めている。弥生時代の土器はごく少ないが、中期中葉に位置づけられるものできわめて貴重である。その他平安時代に属すると思われる土師器・須恵器も出土している。これらの遺物の出土状況については、最上位から土師器・須恵器が出土し、以下縄文時代前期の土器片、そして早期の沈線文・条痕文土器が出土し、下位に草創期の無文・燃糸文系土器が出土することはKLトレンチの一部を層位的に調査することによって確認できたが、草創期・早期の土器を層位的に区分し得たというような状態ではない。相対的には燃糸文系土器が下層に多いことは確実である。包含層の主体を占める縄文時代草創期・早期・前期の土器群に伴うかたちで、石鏃、搔器、スタンプ形石器、石皿、磨石、石斧、礫器等の石器も出土している。H3・I3区からは縄文時代早期の沈線文系土器・条痕文系土器を主に、平安時代の土師器・須恵器等が出土している。

以下、出土遺物について記載するが、G2区については試掘時のK・L・KLトレンチの3本から出土した破片と接合するものが多いので、一括して記載する。H3・I3区についてはOトレンチの土器と同一個体があるので、これも一括して記載する。

その他のトレンチからの出土遺物は、表土出土のものと一括して別項で記載する。

土器の分類については次のとおりとした。

第I群 縄文時代草創期の燃糸文系土器

- 1類 口唇部の肥厚・外反が著しく、縄文が密に施されているもの。
- 2類 口唇部は肥厚するが外反が著しくなく、縄文が比較的密に施されているもの。
- 3類 口唇部は肥厚するが外反が著しくなく、燃糸文が比較的疎に施されているもの。
- 4類 口唇部の肥厚・外反が著しくなく、太めの燃糸文が粗く施されているもの。
- 5類 口唇部の肥厚・外反が著しくなく、太めの縄文が粗く縦位羽状を主に施されているもの。

第Ⅱ群土器 縄文時代草創期の無文土器

- 1類 内面は平滑に整形されているが、外面にはヘラによる横位の強いナデが施されているもの。
- 2類 内外面とも平滑に整形され、胎土が良好なもの。
- 3類 内面は平滑に整形されているが、胎土に長石・石英粒を多く含み、外面に粒子の移動痕が顕著にみられるもの。

第Ⅲ群土器 縄文時代早期の貝殻沈線文系土器

- 1類 細沈線で横位を主とする文様が描かれているもの。
- 2類 細沈線で平行沈線文・斜格子目文、梯子状文、複合山形文等が描かれているもの。
- 3類 細沈線文や太沈線文との組みあわせで文様が構成されているもの。
- 4類 沈線文と刺突文が組みあわされているもの。
- 5類 沈線文と貝殻文が組みあわされているもの。
- 6類 貝殻文のみで文様が構成されているもの。
- 7類 貝殻文・沈線文・隆帯文が組みあわされているもの。
- 8類 その他のもの。

第Ⅳ群土器 縄文時代早期の貝殻条痕文系土器

- 1類 貝殻条痕文を地文として他の文様が加えられているもの。
- 2類 貝殻条痕文のみが施されているもの。
- 3類 貝殻以外の条痕文が施されているもの。
- 4類 擦痕文が施されているもの。
- 5類 その他のもの。

第Ⅴ群土器 縄文時代前期の羽状縄文系土器

- 1類 沈線文が施されているもの。
- 2類 縄文が施されているもの。
- 3類 撚糸文が施されているもの。
- 4類 その他のもの。

第Ⅵ群土器 縄文時代前期の貝殻沈線文系土器

- 1類 沈線文と爪形文が組みあわされているもの。
- 2類 沈線文と貝殻文が組みあわされているもの。
- 3類 貝殻文のみが施されているもの。
- 4類 その他のもの。

第Ⅶ群土器 縄文時代前期末葉の土器

- 1 類 条線文が施されているもの。
- 2 類 無文で輪積痕を残すもの。
- 3 類 縄文原体圧痕文が施されているもの。
- 4 類 結節回転文が施されているもの。
- 5 類 縄文のみが施されているもの。
- 6 類 その他のもの。

第Ⅷ群土器 弥生時代中期の磨消縄文系土器

- 1 類 擬似縄文が施されているもの。
- 2 類 無節縄文が施されているもの。

第Ⅸ群土器 古墳時代から平安時代およびそれ以降の土器

- 1 類 土師器
- 2 類 須恵器
- 3 類 その他

(1) G2区包含層出土土器（第31図1～第45図7）

第Ⅰ群土器（第1図1～第4図35）

本群土器は2,330点出土しているが、器形を復元し得たものは4個体である。その他は破片で、数片の接合によりやや大形の破片になる例はあるものの器形の復元は困難である。本群土器については口縁部の形態や施文手法から1～5類に分類したが、胴部破片については区分が不明瞭なものもある。

1 類土器（第31図1～25）

本類土器の1は唯一の器形復元ができたもので、推定口径18.8cm、現存高16.2cmを測る。2は接合はできないが、施文や胎土の類似から同一個体と考えられる丸底の底部片である。3～25も同一個体と思われる破片である。3～6が口縁部片、7が頸部から胴部にかけての破片、8～24が胴部片、25は底部片である。器形は口唇部の肥厚・外反が著しく、頸部から胴部にかけて直線的に降り、以下丸底の底部にむけてすぼまる。施文は口唇部端部に単節RLの縄文が1段横位回転で施され、以下幅5～8mm程度の無文帯を有して同じ縄文を頸部に斜位回転で横走させ、胴部から底部にかけては斜位回転で縦走させている。胎土は石英・長石粒を多く含み、焼成は普通である。内・外面とも器面は磨耗・剝落がみられ、器壁には凹凸がある。

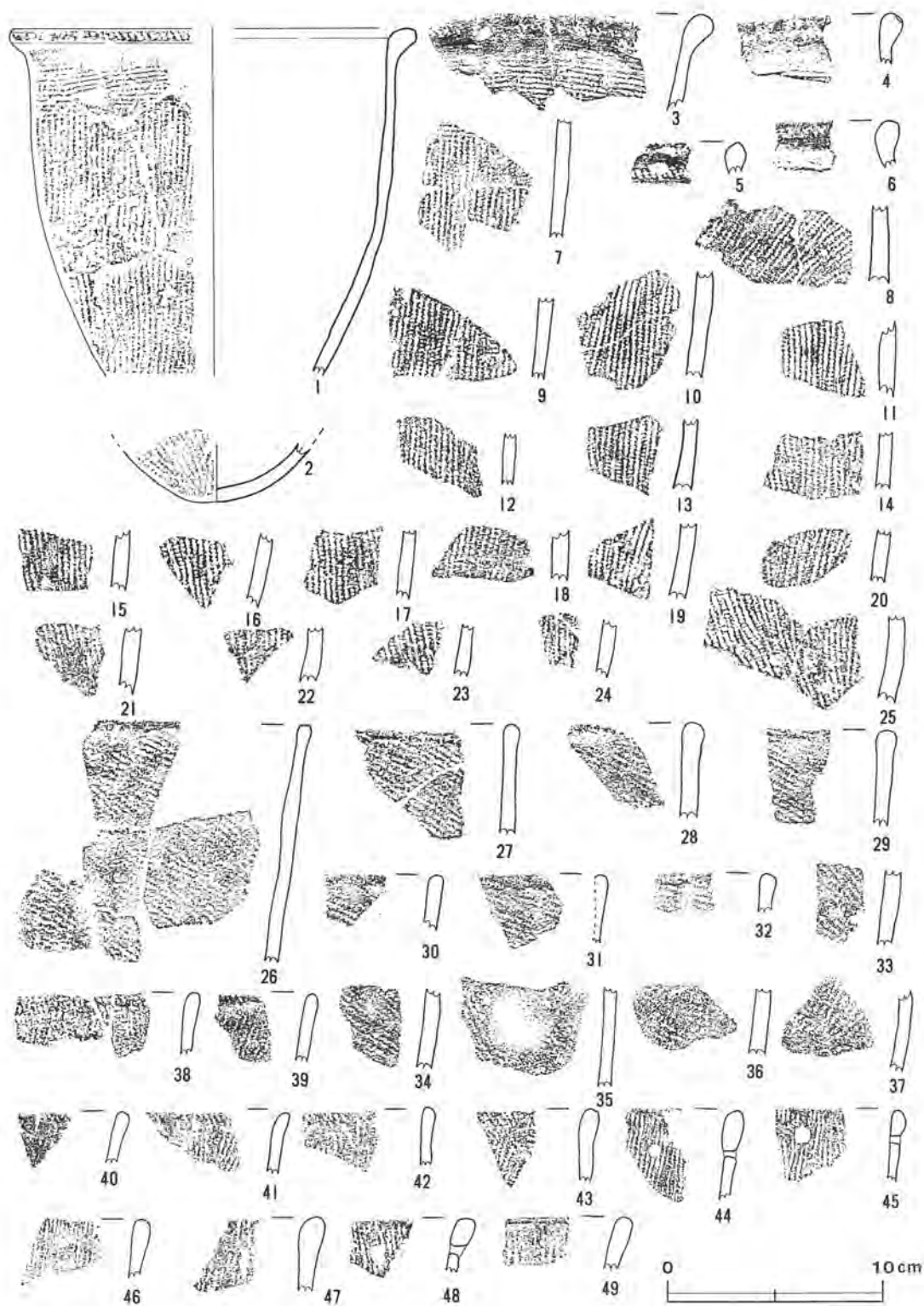
2 類土器（第31図26～49、第32図1～36、第44図8・9）

第31図26～37と第44図9は施文の共通性から同一個体と考えられる。器形は口唇部が若干肥厚し、以下直線的に降る。施文は口縁直下から単節縄文LRが縦位回転されている。外面には磨

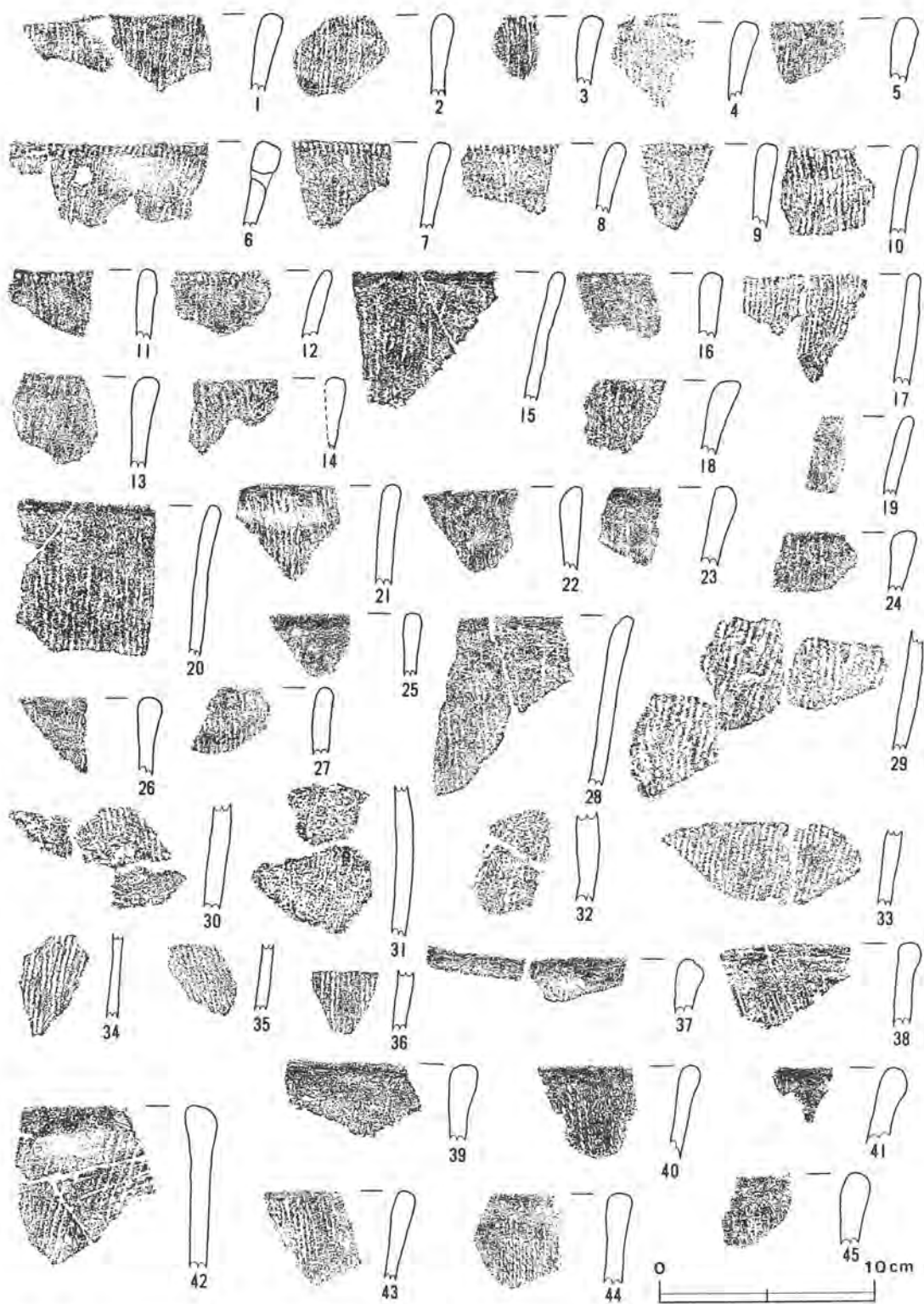
耗や削落がみられ、31の内面は剝離している。胎土は砂粒・長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。推定口径20.8cm、現存高11.9cmを測る。38～43の6点の口縁部片は、器厚が薄く小形土器と思われる。施文の共通性から同一個体とみられる。口唇部外端から単節縄文LRが斜位回転され、条が縦走気味に施文されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。第31図44～49、第32図1～28は、口縁直下から単節縄文RL、LRが斜位回転され、条が縦走するように施文されている口縁部片である。口唇部は肥厚するものが多く、第31図49・第32図10・12・15・17・19・20・27・28などは肥厚しないタイプである。肥厚しない第32図12・15・20・28などはやや外反する器形を呈し、その他は直立気味となる。第31図44・45・48・第32図6・14には焼成後の穿孔がみられ、補修孔と俗称されている。穿孔はいずれも主に外面から成され、内面からも最終的な調整が加えられて、丁寧に穿たれている。施文や胎土の共通性から第31図44～46、第32図1～5、6～8と第44図8、15・20・28はそれぞれ同一個体と判断される。第44図8は推定口径18.5cm、現存高6.1cmを測る。胎土は、いずれも長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。色調は橙色、褐色、暗褐色を呈している。第32図29～36は、2類の胴部片で、いずれも縄文の条が縦走するように施文されている。第32図30～33は器面の磨耗が著しく、施文が不明瞭となっている。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。

3類土器（第32図37～45、第33図1～43、第44図10）

本類は第32図37～45、第33図1～30が口縁部片で、31～43が胴部から底部にかけての破片である。口唇部の肥厚するものが大半を占め、肥厚しない27のような例は稀である。施文は口縁直下から施文されるもの（第32図43・第33図2・14・15）は少なく、口縁部直下に幅3～5mm程度の無文帯を残すものが多い。中には第33図12のように25mmの広い無文帯を有する例もある。口唇部断面は丸頭状を呈するものが主となるが、外削ぎ状となる第33図12や平坦な角頭状を呈する第33図27のようなものもある。第33図23は口縁部の外反が著しいが、他は直立気味である。第32図42は器厚が15mmを測る大形のものであるが、他は厚くても10～12mm程度である。施文されている燃糸文は一般的に細いものが多く、第32図40・42・44・第33図1～6・27・28・37などは比較的太い部類に入る。縦走するものが主となるが、第32図42・第33図5・28のように若干斜走するものもある。施文間隔は疎なものが目立つが、第33図39～43のように密なものもある。第33図4・5・7、17・26・31と第44図10、第33図32・33、34～36、39～43はそれぞれ施文や胎土が共通することから同一個体と思われる。第44図10は推定口径15.2cm、現存高3.5cmを測る。第33図1には焼成後の穿孔がみられる。第33図32・33や34～36、37からみると本類の底部近くは無文のままに残される傾向があるものと思われる。本類は胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。色調は橙色、褐色、にぶい褐色、暗褐色を呈する。



第31图 G2区包含層出土遺物実測・拓影図(1)



第32图 G2区包含層出土遺物拓影图(2)

4 類土器（第33図44～52，第34図1～4）

本類は太目の撚糸文が間隔を疎に施文されるもので，第33図44・45の2点のみが口縁部片で，他は胴部片である。44・45とも幅15mm程の無文帯を設け，1条の沈線で区画し，以下に縦位の撚糸文が施されている。口唇部は肥厚するが外反はしない。第33図46～52，第34図1～4は縦走する撚糸文が施されている。第34図1の器面は荒れており，2は磨耗が著しい。第33図51の内面にはわずかに炭化物が付着している。口唇部の断面形は丸頭状を呈している。胎土は長石・石英粒を多く含み，焼成は普通である。第33図46には雲母もわずかに含まれている。

5 類土器（第34図5～35）

本類は太目の縄文が縦位羽状に施文されるもので，5～16が口縁部ないし口辺部の破片で，他は胴部片である。5～9，15の6点は口縁部無文帯下に1条の縄文原体圧痕文が巡るもので，無文帯の幅は5～9は20mm前後で，15は30mm以上と広くなる。10～12は絡条体圧痕文が巡るものである。無文帯の幅は口縁部が良好に残存する10で約30mmと広い。13は口縁直下から縄文が施されるもので，他の口縁部片とは異なる。口唇部の断面形は丸頭状を呈するが，5～7，10は先端が薄くなり尖頭状に近い。14～16は口縁部外面の剝落が著しい。胴部は縦位羽状の縄文が施文されているが，14・17～24のように明瞭に施されているものと25～34のようにやや不明瞭なものにわかれる。35は底部近くと考えられ，縦走気味の縄文となっており，他と若干趣を異にする。本類は内外面とも平滑に整形されており，きれいな土器といえる。5・17・20・26などは内面に，5は外面にも炭化物が付着している。胎土は長石・石英粒を多く含み，焼成は良好である。色調は外面は褐色を呈するものが多く，内面は褐色から黒褐色を呈するものが目立つ。

第Ⅰ群土器の底部（第44図11・12）

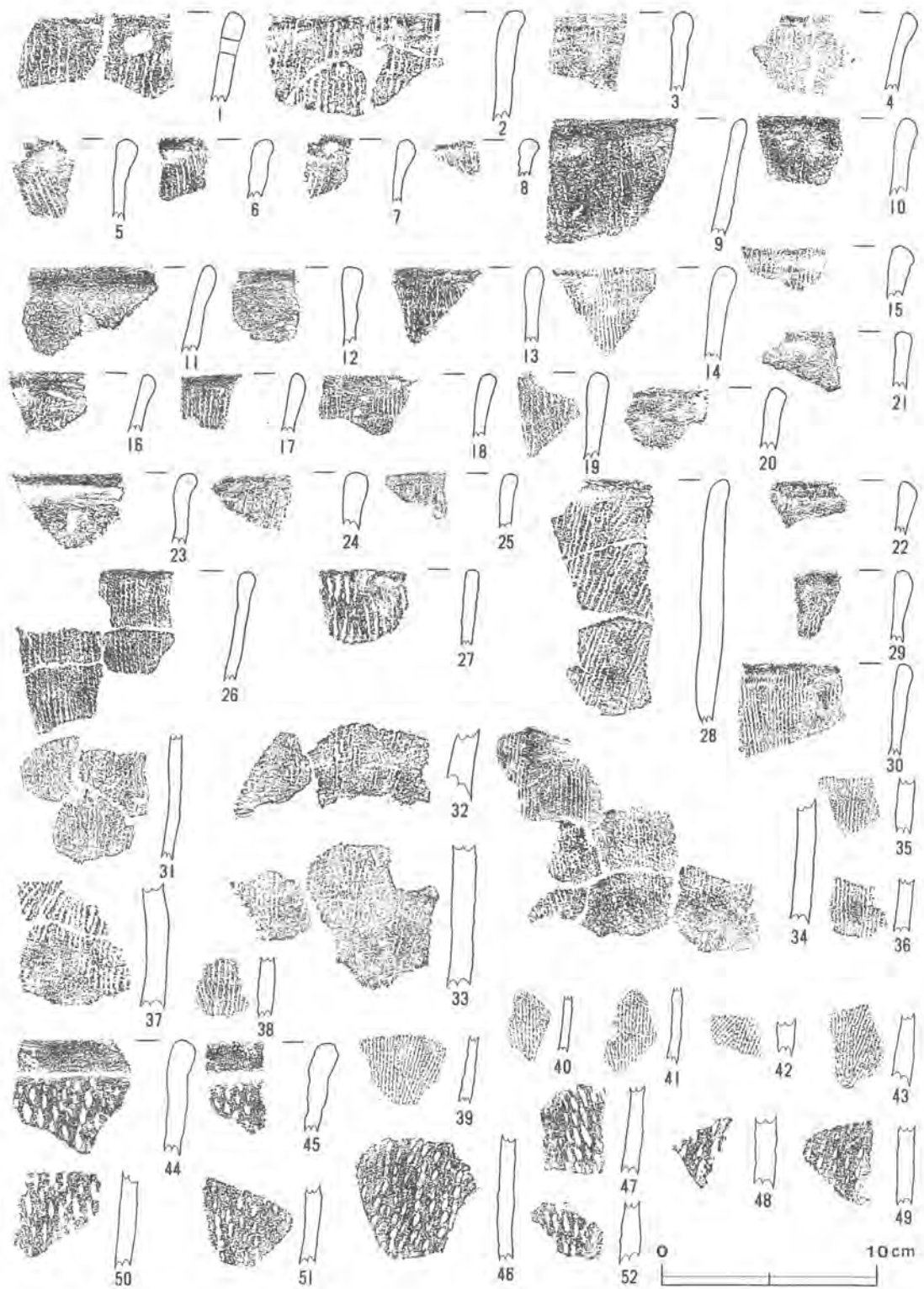
第44図11・12はやや開きの大きい尖底部片で，11は撚糸文が深く全面に施されていることから3類に，12は縄文が浅く全面に施されていることから2類に属するものと考えられる。

第Ⅱ群土器（第34図36～第39図18）

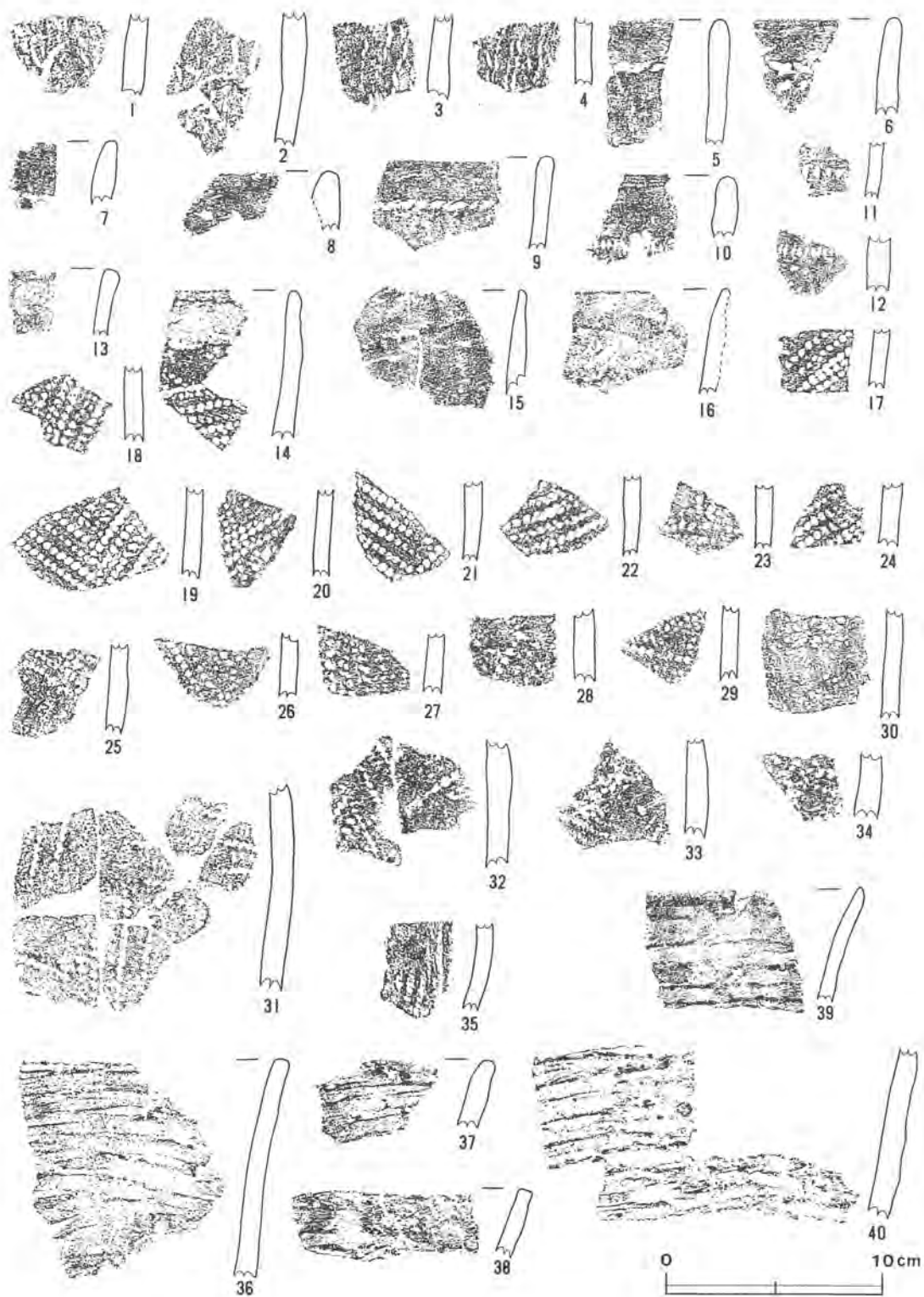
本群土器は2,285点出土している。器形を復元し得たものは1点だけで，他はすべて破片であるが丸底気味の底部はいくつかみられる。本群土器については胎土や整形手法により3類に区分したが，区分に迷うものもある。

1 類土器（第34図36～40，第35図1～19）

本類土器は，外面の横位のナデが著しい一群（第34図36～40，第35図1～10）と横位・斜位



第33图 G2区包含層出土遺物拓影图(3)



第34图 G2区包含層出土遺物拓影图(4)

のナデが比較的軽い一群（第35図11～19）に大別できる。前者をa種、後者をb種とする。

a種の第34図36～39は口縁部片，40，第35図1～10は胴部片である。口唇部の断面形は36・37が丸頭状，38が角頭状，39が外削ぎ状を呈する。横位のナデは幅10mm前後で深く施され，器面が稜状に突出する。内面は丁寧にナデが施されている。a種の胎土は長石・石英粒を多く含むことは共通するが，第34図40・第35図8のように小石粒を混じえるものもあり，粗雑である。第35図10には焼成後の穿孔がある。

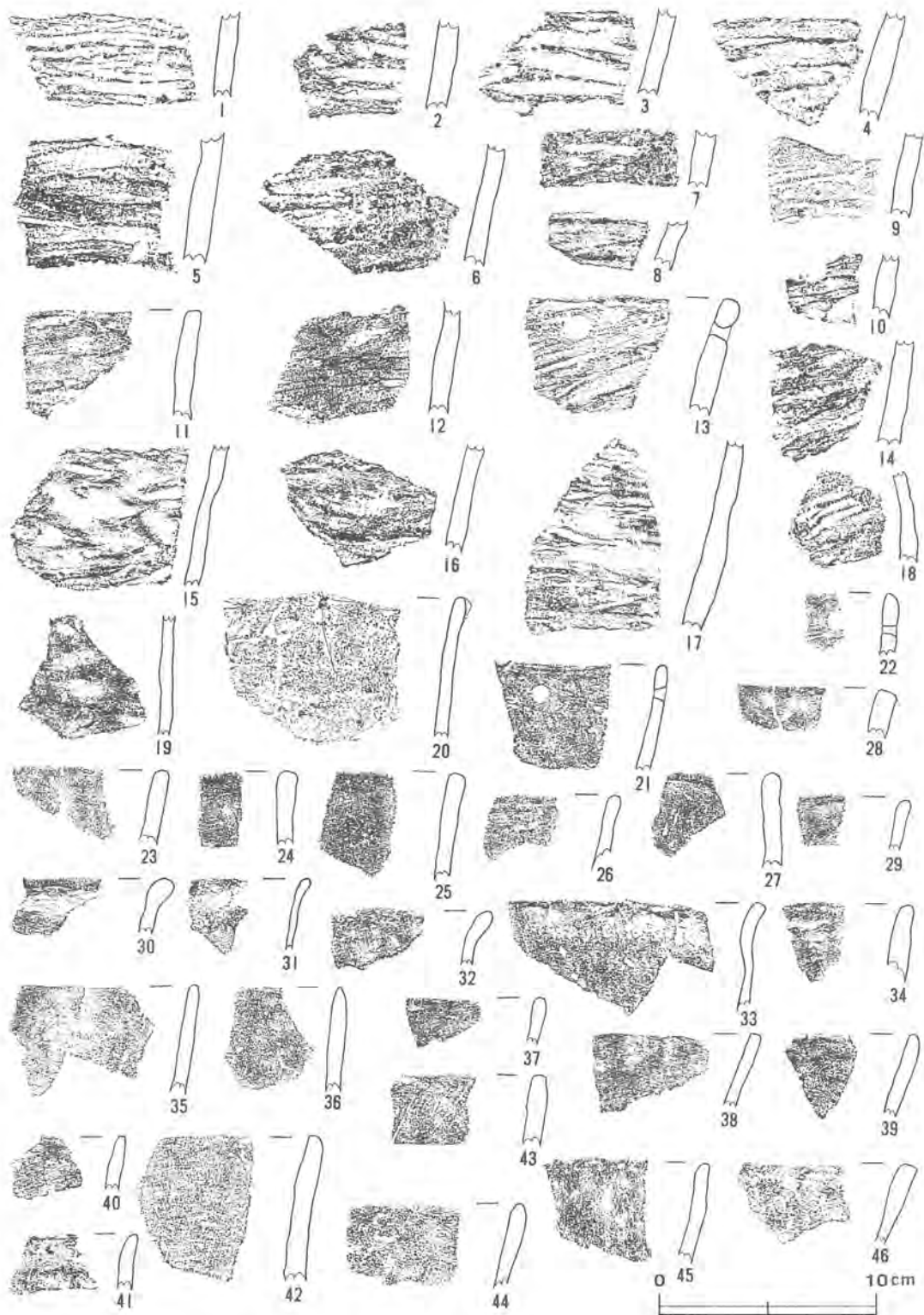
b種は第35図11・13が口縁部片で，他は胴部片である。外面のナデはa種に比べて軽く施され，13が斜位の他は横位である。15～17・19は一部のナデが強く施され，外面に凹凸を有している。13には焼成後の穿孔がある。11・12は胎土・整形手法からみて同一個体と判断される。b種の胎土は長石・石英粒を多く含み，焼成は普通である。

2類土器（第35図20～46，第36図1～50）

本類土器は，内外面とも丁寧にナデが施されているもので，横位のナデが主となるものと縦位のナデが主となるものに大別できる。第35図20は小形土器の口縁部片で，口唇部は角頭状を呈する。内外面ともに輪積痕を残し，軽く横位のナデが施されている。口縁直下に貼付文をもつ。内外面とも炭化物が付着している。第35図21～46，第36図1～31は口縁部片で，32～50は胴部片である。口唇部の断面形は丸頭状のものが多く，角頭状のもの（第35図20・23・35・38・40・42・第36図2・8・9・11・12・15・18・27・30・31）がこれに次ぎ，尖頭状のもの（第35図36・第36図17・26）はごく少ない。口縁部の形状としては肥厚・外反するものは少なく，第35図30～33，第36図1～3などがあげられるにすぎない。外削ぎ状の断面形を呈するものが多く，明確な内削ぎ状を呈する例はない。

整形は横位のナデによりなされるものが多数を占め，口縁部に縦位にナデが施されるもの（第35図32・33・36・42・45・第36図4）は少なく，第36図22は，口縁部上位のみ横位で，以下は縦位にナデが施されている。第35図43は斜位にナデられている。ナデの方向が胎土に含まれている石粒の移動痕によって明瞭に判明するものは少ないが，第36図7～13，19・23・30などはよく判る。31は薄手の小形土器で，外面に条痕状のナデが加えられている。32～50の胴部片のうち48～50の3点は底部の近くの破片である。33の内外面には炭化物の付着が著しい。36には横位の棒状工具によるナデが加えられており，特異である。第36図37～42以外は縦位のナデが観察される。本類の胎土は長石・石英粒を多く含む点では共通するが，第35図42～45，第36図21のように砂粒の多いものもある。また第35図23・27・第36図3のように大粒の石英粒が混じる例もある。焼成は第35図35～40のように硬く焼き締まり良好なものもあるが，他は普通である。第35図21・22は焼成後の穿孔を有する。

第44図13は，本類唯一の器形を復元できた土器で，口縁部は直立し，胴部にかけて直線的に



第35图 G2区包含層出土遺物拓影图(5)



第36图 G2区包含层出土遗物拓影图(6)

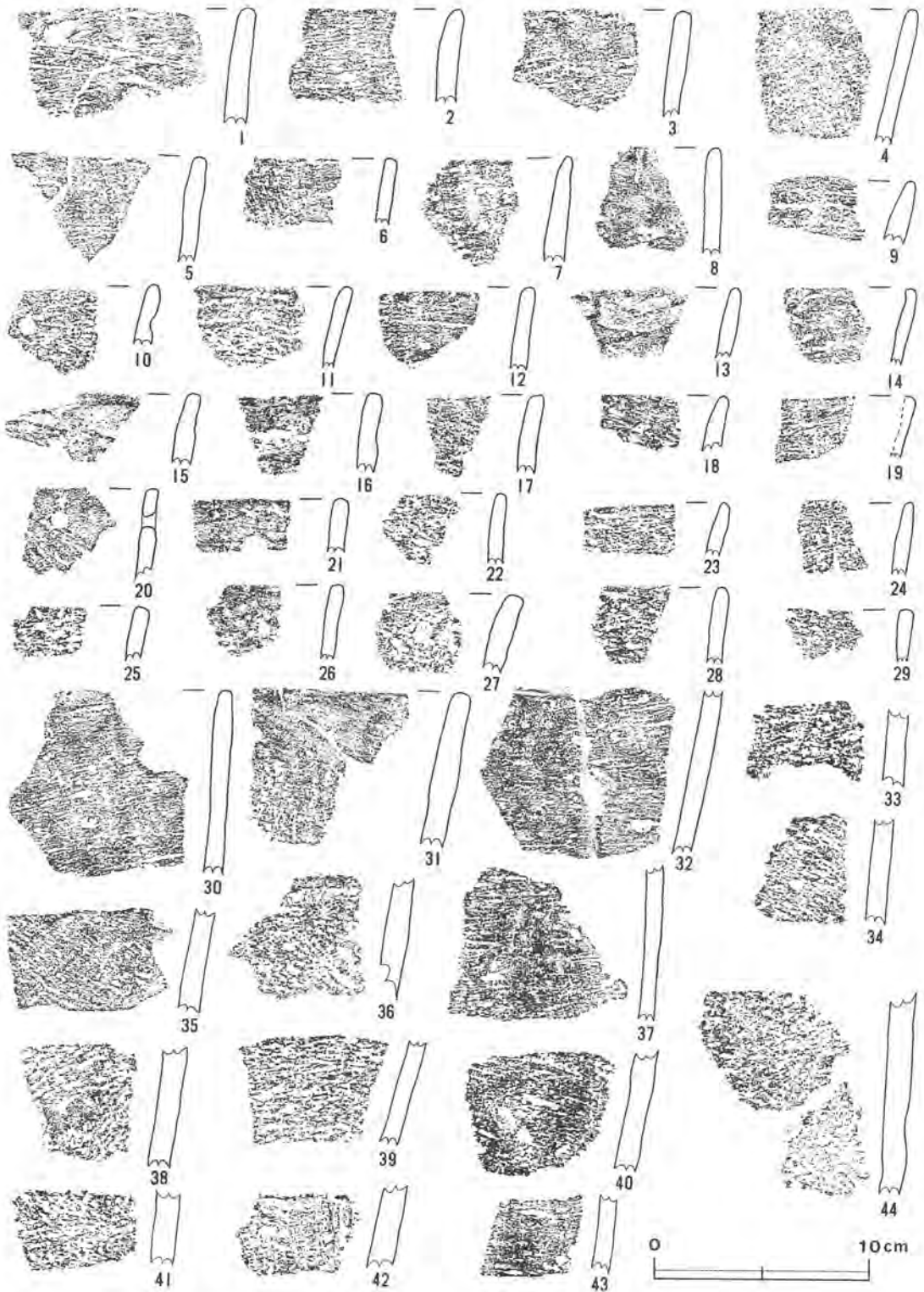
すばまる。内外面とも縦位を主としたナデが施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。推定口径12.8cm、現存高9.0cmを測る。

3類土器（第36図51・52，第37図1～44，第38図1～37，第39図1～18）

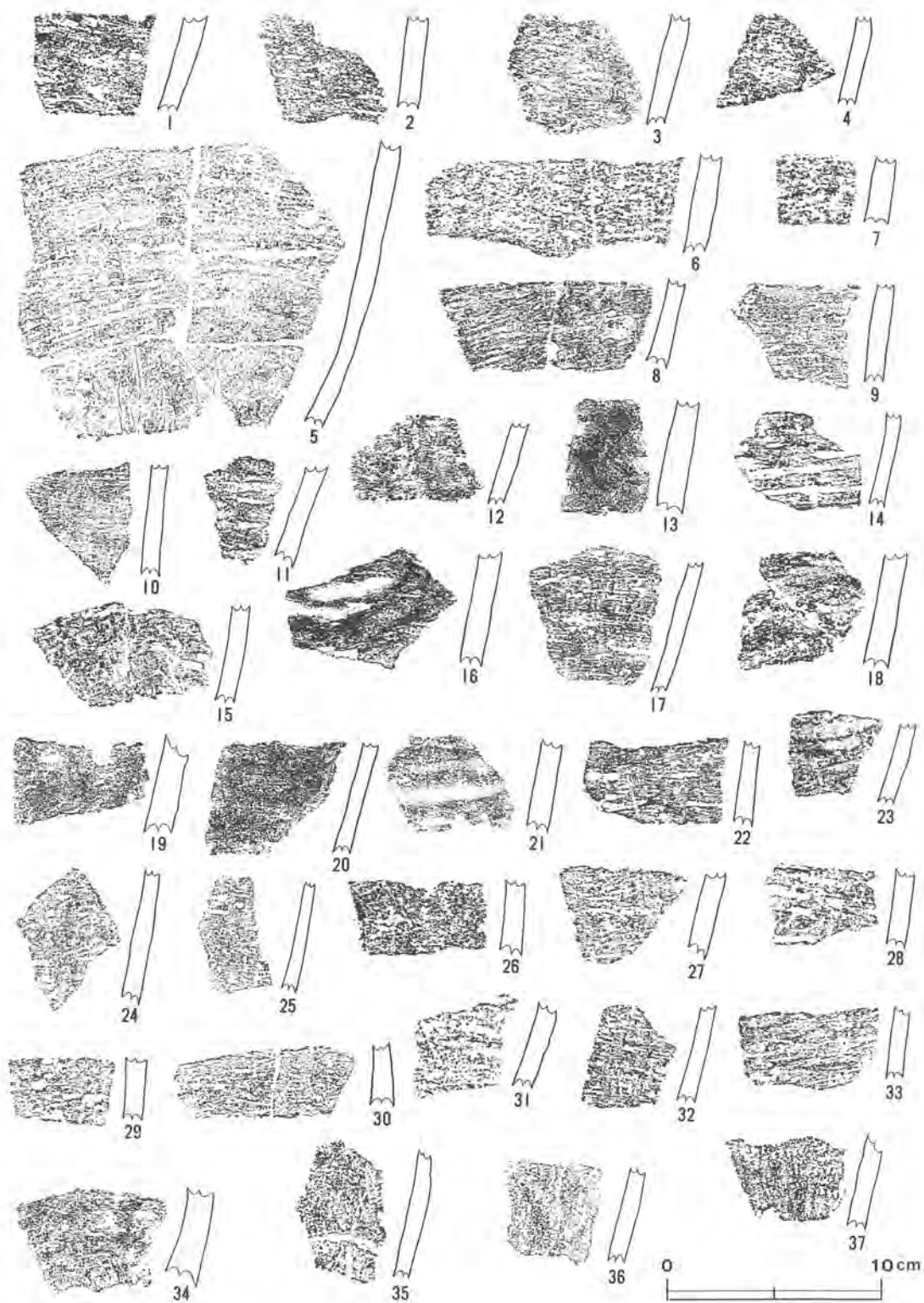
本類土器が第Ⅱ群土器の中で最も多くを占める。第36図51～第37図31までの33点が口縁部片で、他は胴部片である。口縁は平縁の例が大多数であるが、第37図9のように緩い波状を呈するものもある。口唇部の断面形は2類に比較して角頭状を呈するものが多くなり、丸頭状のものが減る。尖頭状の例はない。全体的にみて外削ぎ状の口縁部形態を有するものが多く、肥厚・外反するものは無く、胴部から口縁部にかけて同一の器厚の例がほとんどで、口縁部が薄くなるものが少量含まれる。口縁部の整形は内外面とも横位のナデに限られ、外面は胎土中に含まれる長石・石英粒の移動痕が顕著であるが、内面は丁寧にナデが施され、石粒が胎土中に沈められているものが多い。しかし、胎土中の含有物の多いものは内面もザラザラしている。第37図10・20・21・30には焼成後の穿孔がみられるが、10は途中で中止されている。胴部片も口縁部片と同様の特徴を有することは当然であるが、第37図35・36，第38図5・13・34～37，第39図1～14のように縦位のナデやケズリの痕跡を明瞭に残すものがあるのは、胴部下半から底部近くの破片が多いためと考えられる。第38図5は6点が接合した大形の破片であるが、上位は横位のナデが施され、下位は縦位ないし斜位のケズリが施されており、本類の土器の整形方法を想像させる例である。第39図4・7・13・14は縦位のケズリが顕著である。第39図15・16・18は器厚15～18mmのきわめて厚手の破片で、胴部下半と推測される。第38図22は、後記する第Ⅲ群土器1類の可能性もあるが、ここに含めた。これらの土器は胎土にきわめて多量の長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

第Ⅱ群土器の底部（第44図14～29）

第44図14は底部近くの破片で、斜位方向の石粒の移動痕がみられる。15は本群唯一の平底の底部片で、推定底径9.8cmを測る。胎土・整形から3類に属するものと考えられる。16～26は傾斜が30～40°を測る尖底土器である。外面は斜位方向のナデが施されるもの（16～18・23・25）が多く、磨滅により方向の不明なナデのもの（19・20），凹凸があるオサエのみのもの（21・22・24）もある。小形土器の26は薄手で丁寧にナデが内外面に施されている。その他の内面は20を除いて雑である。胎土は長石・石英粒を多く含むが、16～18・23はきわめて多く、器面がザラザラする。一方、26は緻密で混入量のごく少ない。27・28は丸味の強い底部で、傾斜が緩く15～20°内外である。28は輪積み部できれいに剥離している。外面は磨耗が著しいが、内面は丁寧にナデが施され、黒色を呈する。胎土は長石・石英粒を多く含む。29は傾斜が50°以上の鋭角的な尖底で、22の先端部も同様である。外面は縦位のナデが施されている。胎土は



第37图 G2区包含層出土遺物拓影图(7)



第38图 G2区包含層出土遺物拓影图(8)

27と同様である。

第Ⅲ群土器（第39図19～第42図21）

本群土器は148点検出されているが、すべて破片である。本群土器を文様を主に1～8類に区分したが、破片からの分類のため同一個体が他類とされる危惧がある。本群土器の底部は第Ⅰ・Ⅱ群に比較して鋭角的な尖底状を呈する。

1類土器（第39図19～36）

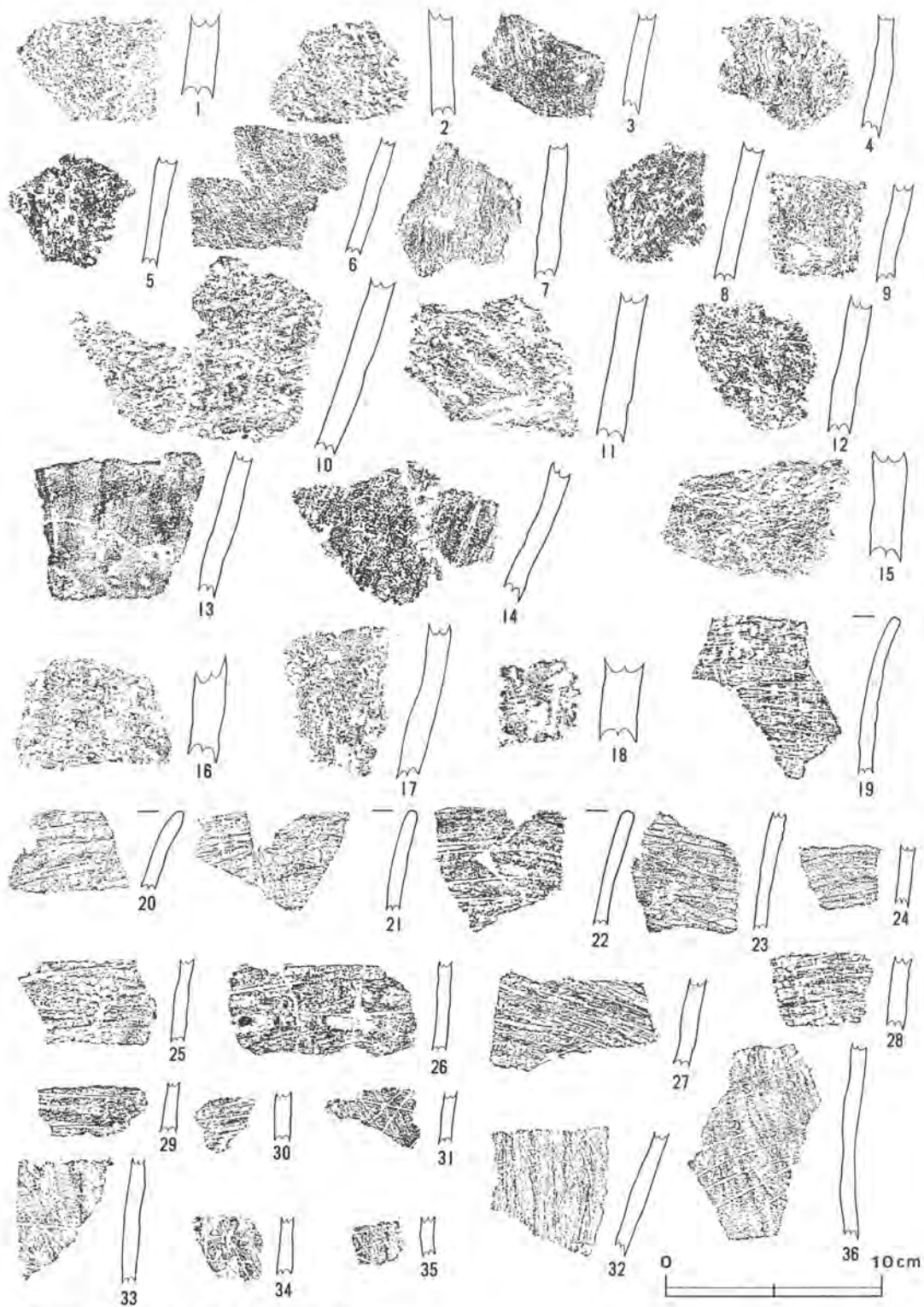
本類土器は19～22の口縁部片、23～30の胴上半部片、31～36の胴下半部片に分けられる。それぞれに接合するものが無いため、これらが同一個体との保証はない。しかし、口縁部と胴上半部は、同様の施文を有することから、胴上半部と下半部は横位の沈線に斜位の沈線を重ねたような雑な斜格子目文を有することから同一類として一括した。整形は口縁部から胴上半部にかけては横位のナデを施し、胴下半部には縦位のナデを施している。その上に細く鋭い沈線で横位の沈線を10条以上巡らし、胴下半部には更に斜位の沈線を重ねることによって全体の文様を構成しているものと思われる。内面は、上位は横位、下位は縦位にナデが施されている。口縁部は大きく外反し、口唇部の断面形は外削ぎ状を呈する。胎土は長石・石英粒を含むが、量は少なく比較的きれいである。焼成は普通で、色調は橙色から褐色を呈する。

2類土器（第40図1～51）

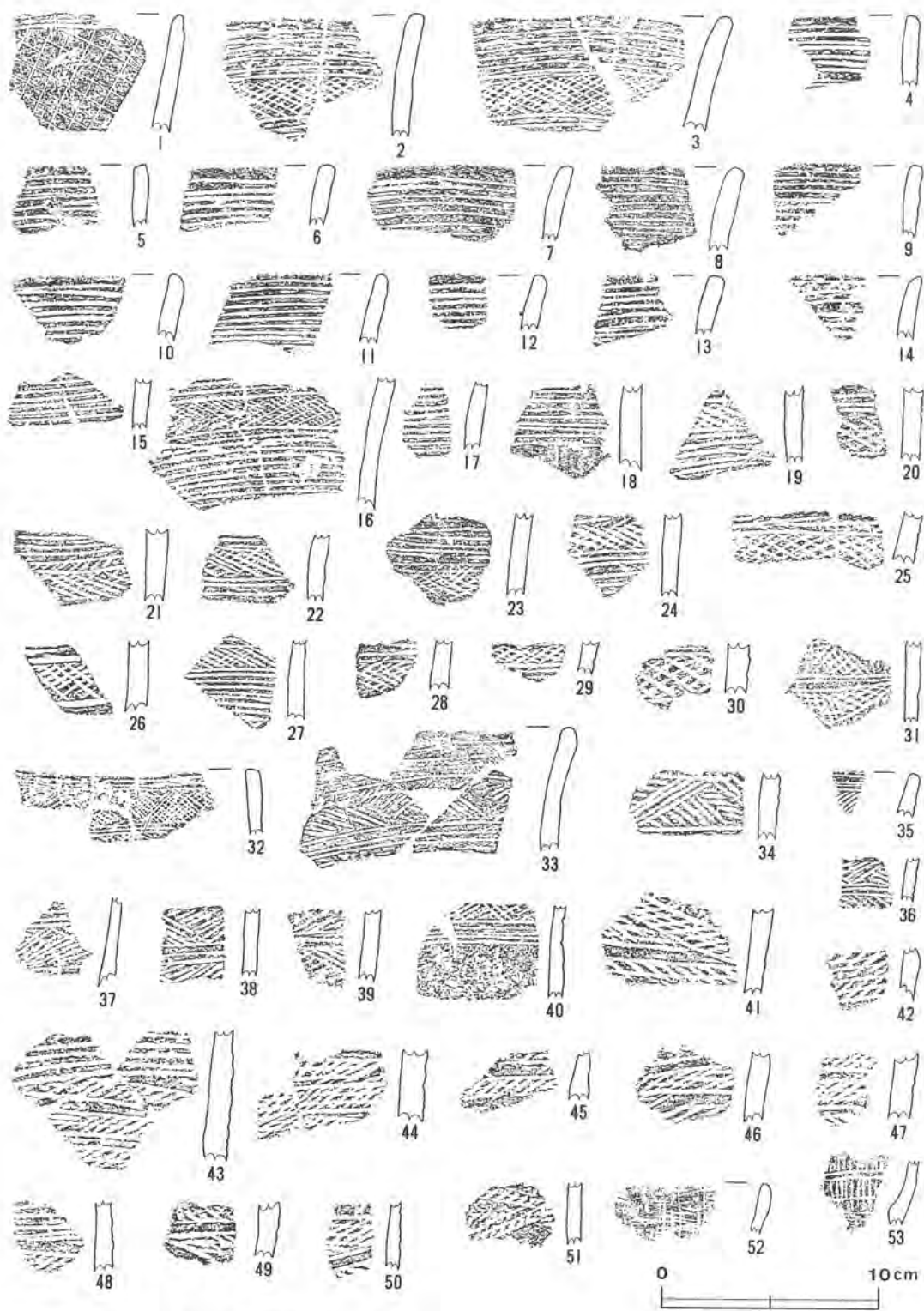
本類土器は斜格子目状文を主文様とするもの、複合山形文を主文様とするもの、所謂梯子状文を主文様とするもの大きく3種に区分できる。それぞれをa種、b種、c種とする。

a種の1は口縁直下に1条の沈線を巡らし、以下に粗目の斜格子目文が描かれる口縁部片で、他のa種に比べると様相が異なる。2～32もa種に属し、口縁部に6～10条程度の平行沈線文帯を施し、以下に斜格子目文帯、平行沈線文帯を多段に繰り返す構成を採るものと推定される。器形は、小形土器の32を除いて口縁部が外反し、口唇部の断面形が外削ぎ状を呈するものが多い。32は直立ないしやや内傾する器形を有するが、基本的な文様構成は同様である。平行沈線文帯が3条により構成されるのは小形土器の故であろうか。31は三角形の沈線区画内に斜格子目文が充填されているように観察され、他の土器とは若干趣を異にする。胎土は1を含めて長石・石英粒を含む点では共通するが、2～4・9・14・16・18・27などは多量に含み、5～8・10・12・13・20～24などは少量で、砂粒が多く含まれるという差異もある。砂粒の多い土器ほど器面の磨耗が激しい。焼成は普通で、色調は褐色を呈するものがほとんどであるが、32は黒味が強い。

33～40はb種で、33・35が口縁部片で、他は胴部片である。33からみると文様構成はa種と同様と判断される。口唇部の断面形は外削ぎ状を呈し、外反する口縁部形態を有する。40は胴



第39图 G2区包含层出土遗物拓影图(9)



第40图 G2区包含层出土文物拓影图(10)

下半部と考えられ、下位は無文のまま残され、内面に炭化物の付着が認められる。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。色調は褐色を呈し、40の上半部のみ黒褐色を呈する。

41～51はc種で、いずれも胴部片である。横位・斜位の平行沈線間に斜線を加え、梯子状文を描くものである。いずれも比較的厚手で、胎土に多量の長石・石英粒を含み、焼成は普通である。色調は褐色を呈する。

3類土器（第40図52・53，第41図1～46）

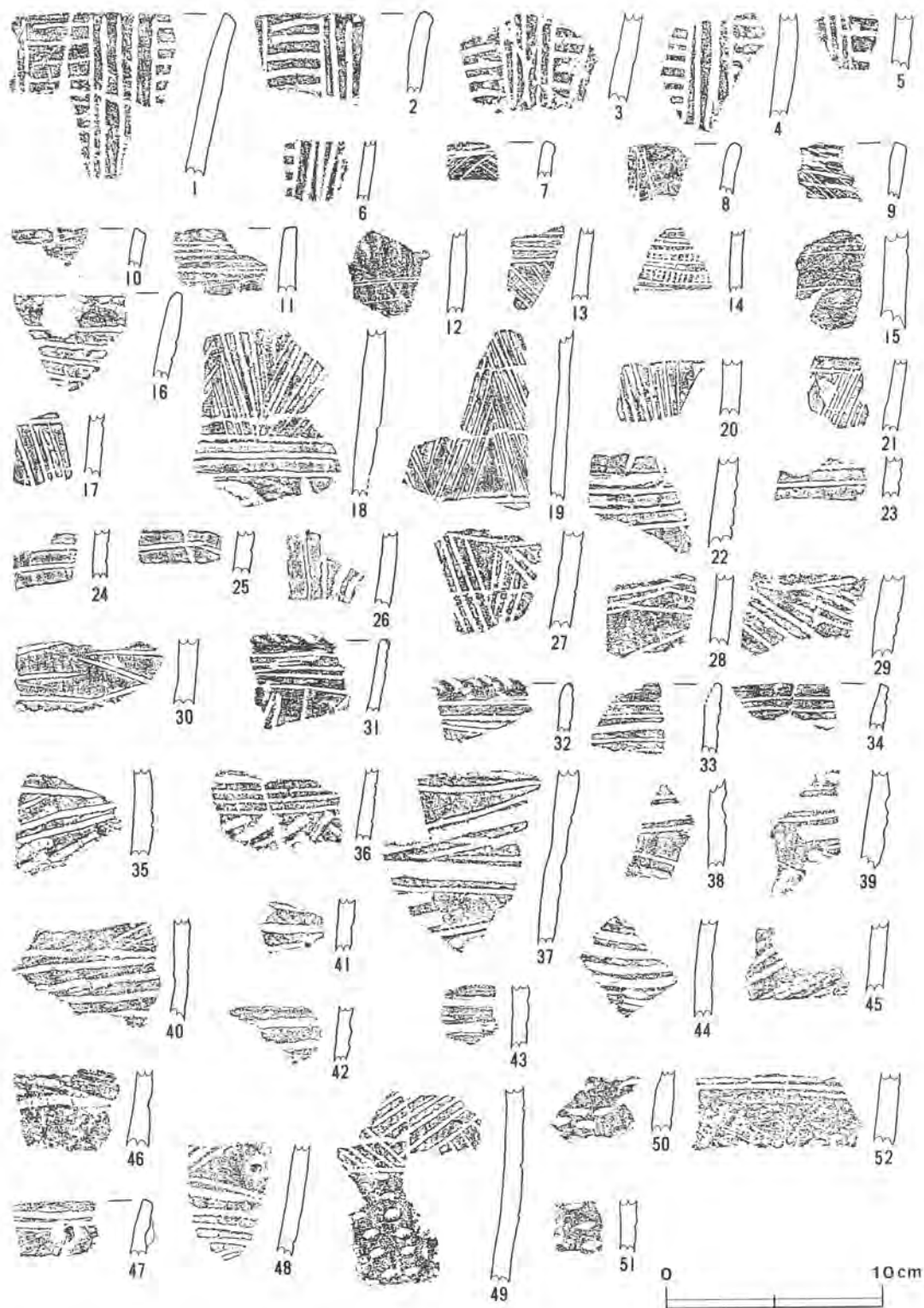
本類土器は細沈線の組みあわせによるもの、細沈線と太い沈線の組みあわせによるものに大別される。前者をa種、後者をb種とする。

a種は第40図52・53，第41図1～15が該当する。52・53はきわめて小形の土器で、52が口縁部片，53は底部近くの破片で、平面形が角形を呈するように観察され、特異なものである。施文は横位の沈線を縦位の沈線が切る構成をもつ。胎土は長石・石英粒を多く含み、粗雑である。焼成は普通で、色調は褐色を呈する。第41図1～6は施文の特徴からみて同一個体と考えられる。口唇部の断面形は外削ぎ状を呈し、尖底部にむけて直線的にすぼまる器形を有すると思われる。文様は縦位3条の沈線で区画し、区画間に横位の沈線を充填する構成である。内面は口縁部のみ横位，以下は縦位のナデが施されている。2の内面には若干炭化物が付着している。胎土は長石・石英粒が少量含まれるが、砂粒が多く比較的きれいである。7～15は横位，斜位の沈線が組みあわされているもので、7～11が口縁部片，12～15は胴部片である。口唇部の断面形は外削ぎ状を呈するものが多く，丸頭状の7，角頭状の11がある。14は平行沈線間に縦位の短沈線を加えている。

b種の16～26は胎土や施文の共通性から同一個体と判断される。口縁部片は16のみで，口唇部の断面形は内削ぎ状を呈する。口縁部から胴上半部にかけては横位と斜位の沈線が組みあわせられ，胴下半部には太沈線で曲線的モチーフが描かれる（18・26）ものと思われる。胎土は少量の石英粒を含むが，砂粒が多く緻密である。焼成は普通で，色調はにぶい褐色を主とする。27～30は横位と斜位の沈線が組みあわされる胴部片で，胎土には長石・石英粒の他に少量の小礫を含む。焼成は普通で，色調は橙色から褐色を呈する。31～45は細沈線文と浅く器面を抉り取るような凹線状の太沈線が組みあわされるもので，31～34が口縁部片，他は胴部片である。31・32の口唇部には斜位のキザミ目が施されている。施文が共通する31・32，37～39，40・42は同一個体と思われる。46は太い凹線のみであるが本種に含めた。これらの胎土は長石・石英粒を含み，焼成は普通で，色調は褐色，暗褐色，黒褐色を呈する。

4類土器（第41図47～51）

本類はごく少ない。47は外削ぎ状を呈する口縁部の小片で，2条の沈線下に左側から棒状工具を突き刺して粘土を右側にめくり上げたものである。48は3類b種の胴部破片で，凹線を施



第41图 G2区包含层出土遗物拓影图(11)

すことによって削り取られた粘土の小粒が貼付されたもので、正確には刺突文とは言えないがここに含めた。49は、横位・斜位の細い沈線文下に縦位の刺突列が続くもので、胴下半部片と思われる。刺突は下から突くように施され、米粒状を呈する。50・51は49の下半部と同様の刺突文のため、接合はできないが、同一個体としてここにおいた。

5 類土器（第42図1～12）

本類土器も少量である。1～3は細沈線、太沈線と貝殻腹縁文が組みあわさる胴部片である。1・2は施文・胎土の共通性から同一個体である。4は抉り取るような凹線と腹縁を浅い角度で施文した貝殻文の組みあわせである。5～9は細い沈線と深く施文された貝殻腹縁文の組みあわせで、5・6の口縁部は、先端にむかって器厚を減ずる特徴的な形態を有する。これらは胎土に非常に多量の長石・石英粒を含み、粗雑であることから同一個体と判断される。10～12も細沈線と浅目の貝殻腹縁文が組みあわされるもので、胎土も類似することから同一個体と考えられる。

6 類土器（第42図13～17）

本類土器はきわめて少なく、図示したものがすべてである。13～16は貝殻背圧痕文が弧状を呈するように施文されており、同一個体と思われる。17は貝殻背圧痕文が放射状に施文されている胴部片である。本類の胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。色調は褐色を呈する。15の下端には細い沈線が認められ、あるいは5類に属するものかもしれない。

8 類土器（第41図52，第42図18・19）

第41図52は上端部に幅2mm，条間1mmの規則的な平行線文が3条以上施され，下半部は斜位のナデが残されたままとなっている胴部片である。上端の文様は平行線状押型文の可能性はあるが，確実ではないので，指摘にとどめておく。胎土は長石・石英粒を多量に含み，粗雑である。第42図18・19は横位・縦位の条痕文が施されている胴部片で，胎土に繊維を含まない。18は厚手で，19は薄手である。胎土は18に長石・石英粒を多く含み，19は雲母片を微量に含む。

第Ⅲ群土器の底部（第44図30・31）

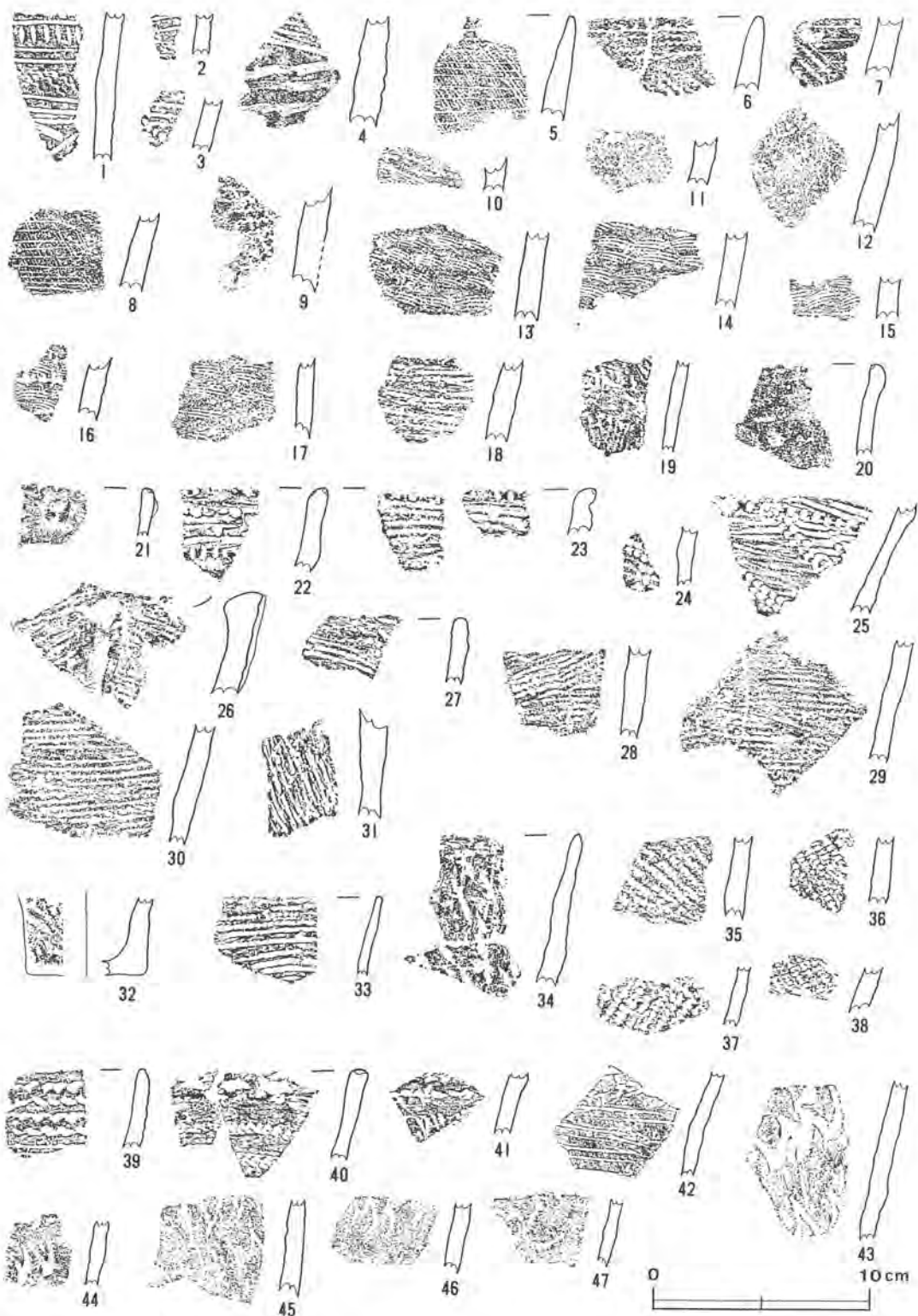
30・31は鋭角な尖底部片で，所謂天狗の鼻状を呈する。外面は縦位の丁寧なヘラナデが加えられている。胎土は長石・石英粒を多く含み，焼成は普通である。

第Ⅳ群土器（第42図22～32）

本群土器は少量である。胎土に少量の繊維を含んでいる。総点数は35点である。

1 類土器（第42図22～25）

22・23は口縁部片，24・25は胴上半部の破片である。口唇部は平坦で内削ぎ状を呈し，内外



第42图 G2区包含層出土遺物実測・拓影图(12)

端に軽いキザミを付している。口縁部下に1段の稜を有し、キザミ目が施されている。稜より上位には微隆線間に刺突を加え、稜より下位には2列の刺突で斜行するモチーフを描き、要所に円形竹管文を施している。内面には横位の条痕文が施されている。胎土は長石・石英粒・雲母片を含み、焼成は普通である。

2 類土器 (第42図26～30・32)

26・27が口縁部片、32が底部片で、他は胴部片である。26は扇状を呈する波頂部片で、頂部から1条の隆帯が垂下している。頂部の平坦面は凹んでいる。27は緩い波状を呈し、口唇部に軽いキザミを付している。28～30は外面に横位の条痕文が走り、内面は28が横位、29・30が縦位の条痕文が施されている。32は推定底径5.7cmを測り、外面に斜位の条痕文が施されている。胎土は長石・石英粒の他に27～30には少量の雲母片を含んでいる。

3 類土器 (第42図31)

31は外面に縦位に条痕文が施されている胴下半部片である。胎土に長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

第V群土器 (第42図33～38)

本群土器も少なく、28点出土しただけである。胎土に多量の繊維を含む。

1 類土器 (第42図33)

33は薄手の口縁部片で、7条の押引状の沈線文が巡らされている。内面は丁寧に横位のナデが施されている。内面に若干の炭化物が付着している。

2 類土器 (第42図35～38)

35～38はいずれも単節縄文RL・LRが施されている胴部の小片で、器質は脆い。

4 類土器 (第42図34)

34は雑な貝殻腹縁文が施されている薄手の口縁部片で、焼成は不良。器質は脆い。

第VI群土器 (第42図39～47)

本群土器は、36点検出されている。本群は胎土に多量の砂粒を含み、繊維は含まない。

1 類土器 (第42図39・40・42)

39・40は半截竹管状工具による変形爪形文が施されている口縁部片で、40の口唇部上面には同様の工具による刺突が加えられている。42は爪形文下に平行沈線文が雑に施されている。

2 類土器 (第42図41)

41は胴部の小片で、変形爪形文下に波状貝殻文が施されている。

3 類土器 (第42図43～47)

43～47はいずれも波状貝殻文が施されている胴部片であるが、43のみ深く明瞭に施文され、他は浅い。

第Ⅵ群土器の底部（第44図32）

32は無文の平底で、推定底径9.8cmを測る。外面は斜位のナデが施され、底端部が若干突出する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通である。

第Ⅶ群土器（第43図1～43）

本群土器は、221点出土している。本群は前群と同様に胎土に砂粒を多く含むが、長石・石英粒が目立つ土器も多い。

1類土器（第43図1～5）

1～5は斜位を主に一部縦位の条線文が施されている口縁部片である。1の左下にやや太目の沈線文が加えられ、3は雑な斜格子目状に施文されている。いずれも輪積み痕を残している。

2類土器（第43図6～10）

6～10は明瞭に輪積み痕を残している口縁部片である。6・7・9・10の口唇部には棒状工具による押圧やキザミ目が付され、8の口唇部には縄文原体の圧痕文が施されている。外面は無文を原則とするが、6の左端には波状貝殻文らしきものが認められる。いずれの内面も平滑に整形されている。

3類土器（第43図12・36）

12は口縁部の小片で、縄文原体圧痕文がV字状に施されている。36は縄文と縦位の縄文原体圧痕文が施されている胴部片である。

4類土器（第43図19～22・24～35・37・41）

19～22が口縁部片で、他は胴部片である。19は口唇部に棒状工具による押圧が加えられ、20・21は口縁部外端に縄文が回転施文され、以下に幅7～8mmの無文帯を有している。22は無節縄文が施されている。結節回転文はいずれも横位を主に施され、やや斜行する例（41）はあるものの縦位の例はない。結節回転文の太い19・29～33・35などは胎土に比較的多くの長石・石英粒を含む傾向がある。他は砂粒が多く緻密である。

5類土器（第43図13～18・23・38～40・42・43）

13～18は口縁部片で、他は胴部片である。13～15は粗い無節縄文が施されており、口唇部にも縄文が回転施文されている。14には鋸歯状の沈線文が重ねて施文されている。16～18は単節縄文が施され、17には19と同様の押圧が口唇部に加えられている。23は丸味のある口縁部の小片で、若干の無文帯下に無節縄文が施されている。38～40は無節縄文、42・43は単節縄文が施



第43图 G2区包含層出土遺物拓影图(13)

されている。42・43は下半部が41と同様に縦位のナデのまま残されており、底部近くと推測される。胎土は16を除いて砂粒が多く含まれている。

4・5類土器の口唇部の断面形は内削ぎ状を呈する特色を有する。この特色は縄文時代前期末葉の土器群の理解のために役立つ視点かと思われる。

6類土器（第42図20・21，第43図11）

20・21は無文の口縁部片で、口唇部内端に斜位のキザミ目を有する。21には刺突を有する貼付文が付されている。胎土は砂粒を含み、焼成は普通で、色調は褐色を呈する。

11は無文の胴部片で、細かい刺突が付された円形文が貼付されている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

第Ⅶ群土器の底部（第44図33）

33は無文の平底で、推定底径9.6cmを測る。外面は横位のヘラナデが施され、底端部が大きく突出する。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通である。

第Ⅷ群土器（第44図1～7）

本群土器は7点検出され、小破片まですべてを図示した。いずれも擬似縄文が施されている胴部片で、1類土器に相当する。器形は胴部の湾曲からみて鉢形を呈するものと思われる。器面に横位（4・5）ないし曲線的モチーフ（1～3・6・7）が描かれ、擬似縄文が充填されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通で、色調は褐色から暗褐色を呈する。胎土や施文の共通性からこれらは同一個体と考えられる。

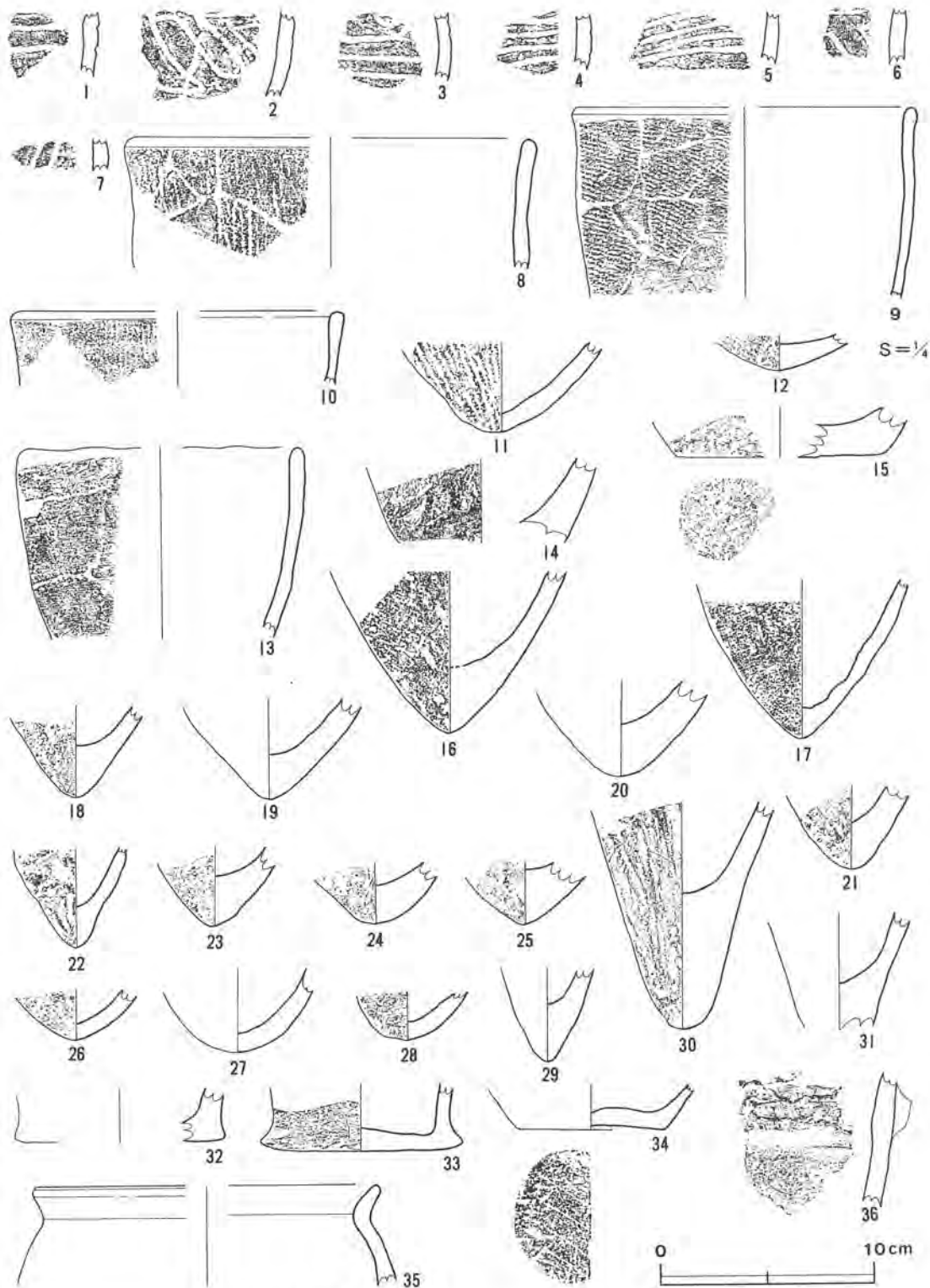
第Ⅸ群土器（第44図34～第45図7）

本群土器は772点出土した。1類の土師器が468点，2類の須恵器が303点，3類の円筒埴輪片が1点である。

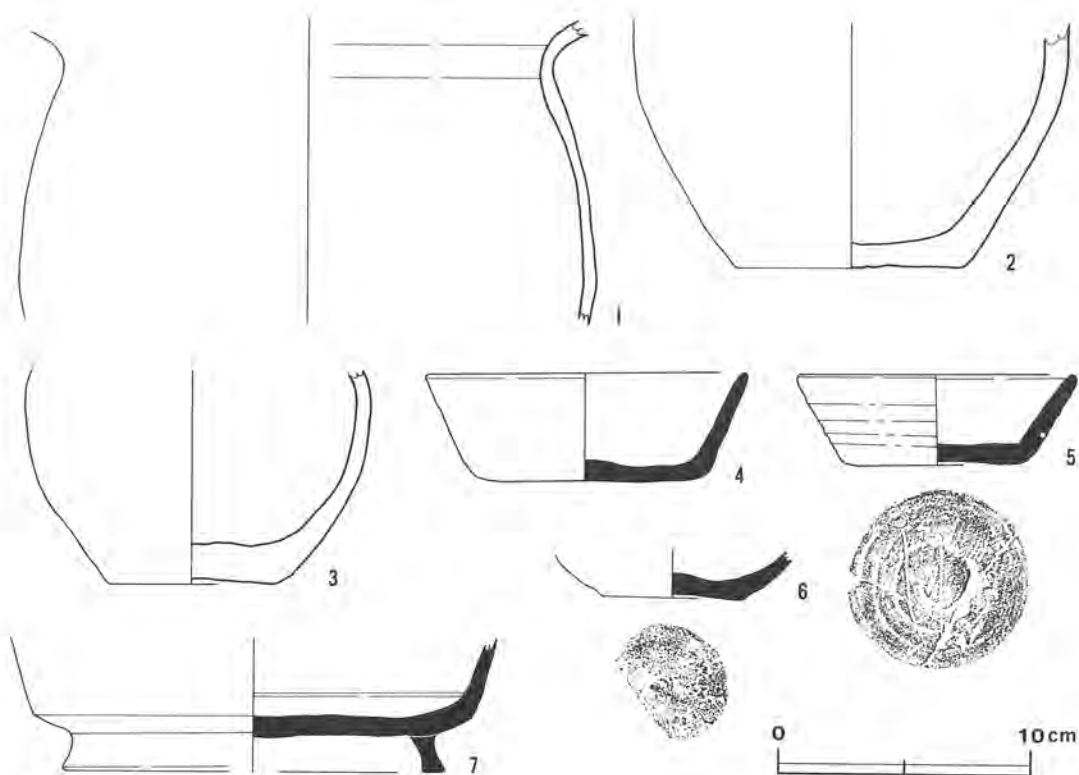
1類土器（第44図34・35，第45図1～3）

第44図34は小形甕の底部片で、底面に木葉痕を有する。胎土に長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。推定底径6.9cm，現存高2.2cmを測る。35は小形甕の口縁部片で、内外面ともヨコナデにより整形されている。胎土は長石・石英粒・雲母片を少量含み、焼成は普通である。推定口径16.1cm，現存高4.8cmを測る。

第45図1は甕の口辺部から胴部にかけての破片で、口辺部はヨコナデ，胴部はナデにより整形されている。内面は剥落が著しい。胎土は長石・石英粒の他に雲母片を多く含み、色調は明赤褐色を呈する。推定の胴部最大径は23.0cm，現存高12.1cmを測る。2は厚手の甕の胴下半部



第44图 G2区包含層出土遺物美測・拓影图(14)



第45図 G2区包含層出土遺物実測図(15)

から底部にかけての破片である。外面は縦位のナデ、内面はナデが施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。底径9.0cm、現存高9.8cmを測る。3は2よりは薄手の甕の胴下半部から底部にかけての破片である。外面はナデ、内面はヨコナデが施されている。底面は若干上げ底を呈し、胴部に比して底部が部厚い。胎土は長石・石英粒を微量、砂粒を多量に含み、焼成は普通である。底径6.6cm、現存高8.5cmを測る。

2類土器(第45図4～7)

4～6は坏である。4は底部から直線的に立ち上がり、口端部は丸味をもつ。内外面ともヨコナデにより整形されているが、その後の丁寧なナデにより稜は消されている。底面内側の中央部は盛り上がっている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は良好である。口径12.8cm、底径9.2cm、器高4.3cmを測る。5は底部から直線的に立ち上がり、口端部は丸味をもつ。内外面ともヨコナデにより整形されている。底部はヘラ切りで、ヘラ記号が残されている。胎土に長石・石英粒の他に少量の小礫を含んでおり、焼成は普通である。口径10.9cm、底径6.6cm、器高3.7cmを測る。6は底部から内彎して立ち上がる底部片である。底部外面はヘラ切りで、「大」の刻書がみられる。推定底径5.6cm、現存高2.0cmを測る。

7は大形の盤で、体部下端に明確な稜を有して直線的に立ち上がる。高台は貼り付けで、ハ

の字状に開く。内外面ともヨコナデにより整形され、底部内面の中央部はきわめて滑らかに撫でられている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。高台径15.2cm、現存高5.3cmを測る。

3 類土器（第44図36）

36は円筒埴輪の破片で、断面へ状の籬を巡らしている。整形はナデにより、刷毛は使用されていない。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

(2) H3・I3区包含層出土土器（第46図～48図）

第Ⅰ群土器（第46図1～4）

本群土器は13点出土しているが、いずれも口縁部の小破片である。1は口唇部があまり肥厚していないが、2～4は肥厚が認められる。1の右端に細い撚糸文が施されている。2～4は無文であるが、口唇部の断面形から本群に含めた。2～4は内外面に剝落があり、3には焼成後の穿孔がある。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。3類土器に属する。

第Ⅱ群土器（第46図5～14）

本群土器は47点出土しているが、いずれも小破片で5～9が口縁部片、10～14が胴部片である。5～8は2類に属し、内外面とも平滑に整形されている。口唇部の断面形は5・6が角頭状、7は外削ぎ状、8は丸頭状を呈している。6の内外面には炭化物の付着が著しい。9～14は3類に属し、斜位の石粒の移動痕が顕著である。9～14は胎土に多量の長石・石英粒を含み、焼成は普通である。5～8は混入量が少ない。

第Ⅲ群土器（第46図15～40）

本群土器は34点出土しているが、いずれも破片である。15・16・18～20は3類、17は4類、21～39は7類、40は6類に該当する。15・16は細沈線で、平行沈線と斜行沈線が施され、15の下位は弧状文が施されている。15は器面の剝落が著しい。18は丸頭状を呈する口縁部片で、細沈線と太沈線の組みあわせである。19・20は横位の沈線と縦位の太沈線が施されている胴部片である。17は横位の沈線間に半月状の刺突文が付されている。21～26は薄手の破片で施文・胎土の共通性から同一個体と判断される。口縁部が少し内彎し、頸部で緩くくびれる器形を呈する。施文は横位、波状、曲線的な沈線文を主に、刺突文を加えて構成されている。口唇部の内端にも刺突が付されている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。27～37も胎土・施文の共通性から同一個体と考えられる。器形は山形の波状を呈し、頸部で緩くくびれる器形を呈するものと思われる。施文は波頂部から短隆線が垂下し、これに連結して波状縁に沿って

1条の隆線が巡り、頸部にも同様の隆線が窓枠状を構成している。隆帯に沿って平行沈線も巡り、平行沈線間には貝殻腹縁文が充填されている。隆線上にも貝殻による刺突が加えられている。また、口唇部外端には刺突を有する隆線が巡り、窓枠状を呈している。口唇部内面には深く貝殻腹縁文が施されている。本土器は全体に磨耗が著しく、文様が不鮮明である。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。38は緩い波状を呈する口縁部片で、波頂部に刺突を有する突起が付されている。口縁直下に刺突列が巡り、以下に2条の沈線下に弧状の沈線が施されている。口唇部は外削ぎ状を呈し、内端に斜位の太い押圧が施されている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。39は高い隆帯が貼付されている口辺部片で、内面は横位の条痕文が施されている。隆帯上およびその両側には半截竹管状工具による刺突が加えられている。40は波状貝殻文が施されている胴部片で、器面の磨耗が著しい。あるいは第Ⅳ群土器の可能性もある。

第Ⅲ群土器の底部（第47図33・34）

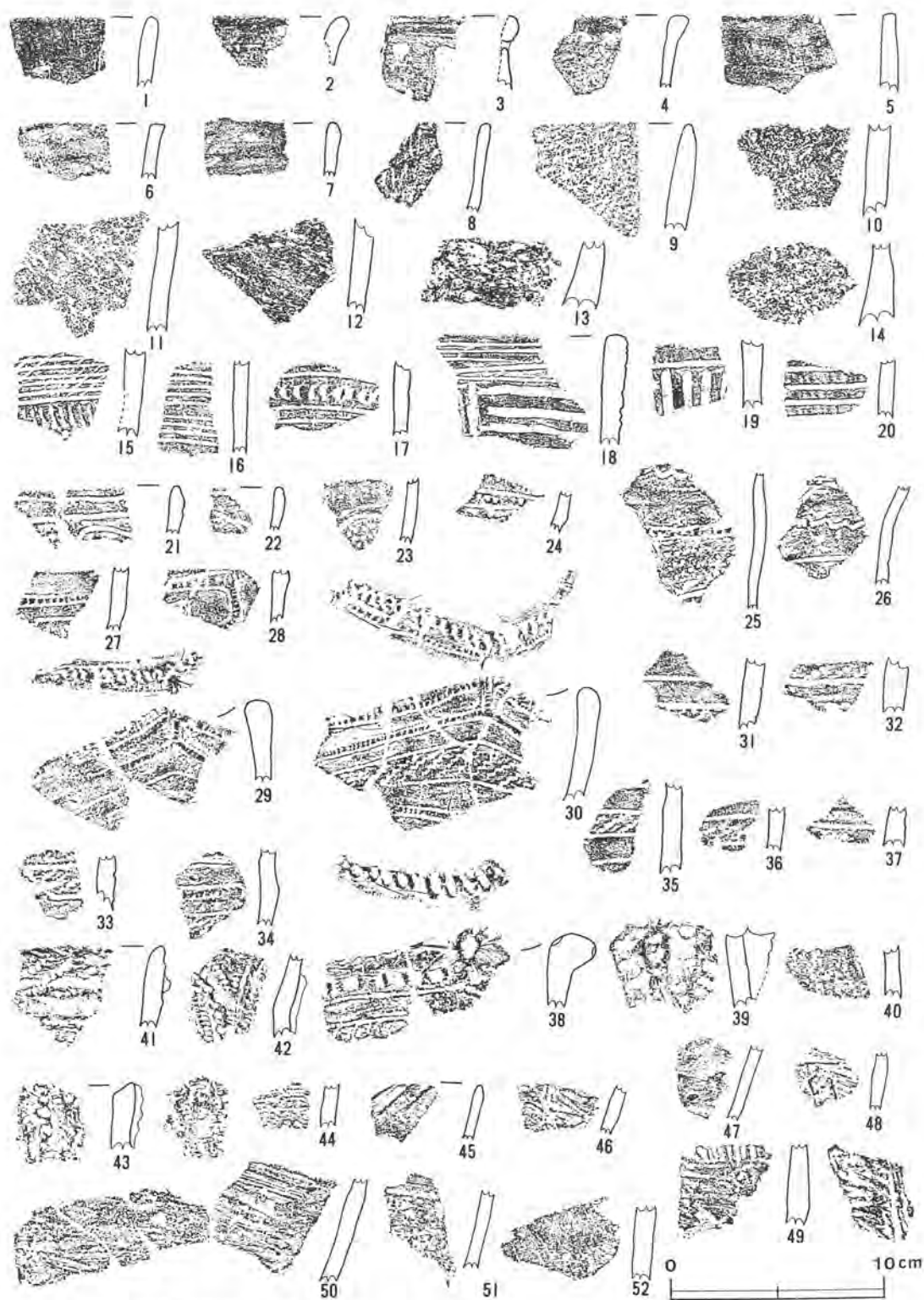
33は丸底状の底部片で、外面は整形が悪く凹凸が残る。内面は磨耗が激しい。34は鋭角的な尖底部片で、外面は縦位のヘラナデが顕著である。胎土は共に砂粒が多く、長石・石英粒は少なく、焼成は普通である。34は3類の、33は7類の底部と思われるが、確実ではない。

第Ⅳ群土器（第46図41～52、第47図1～25）

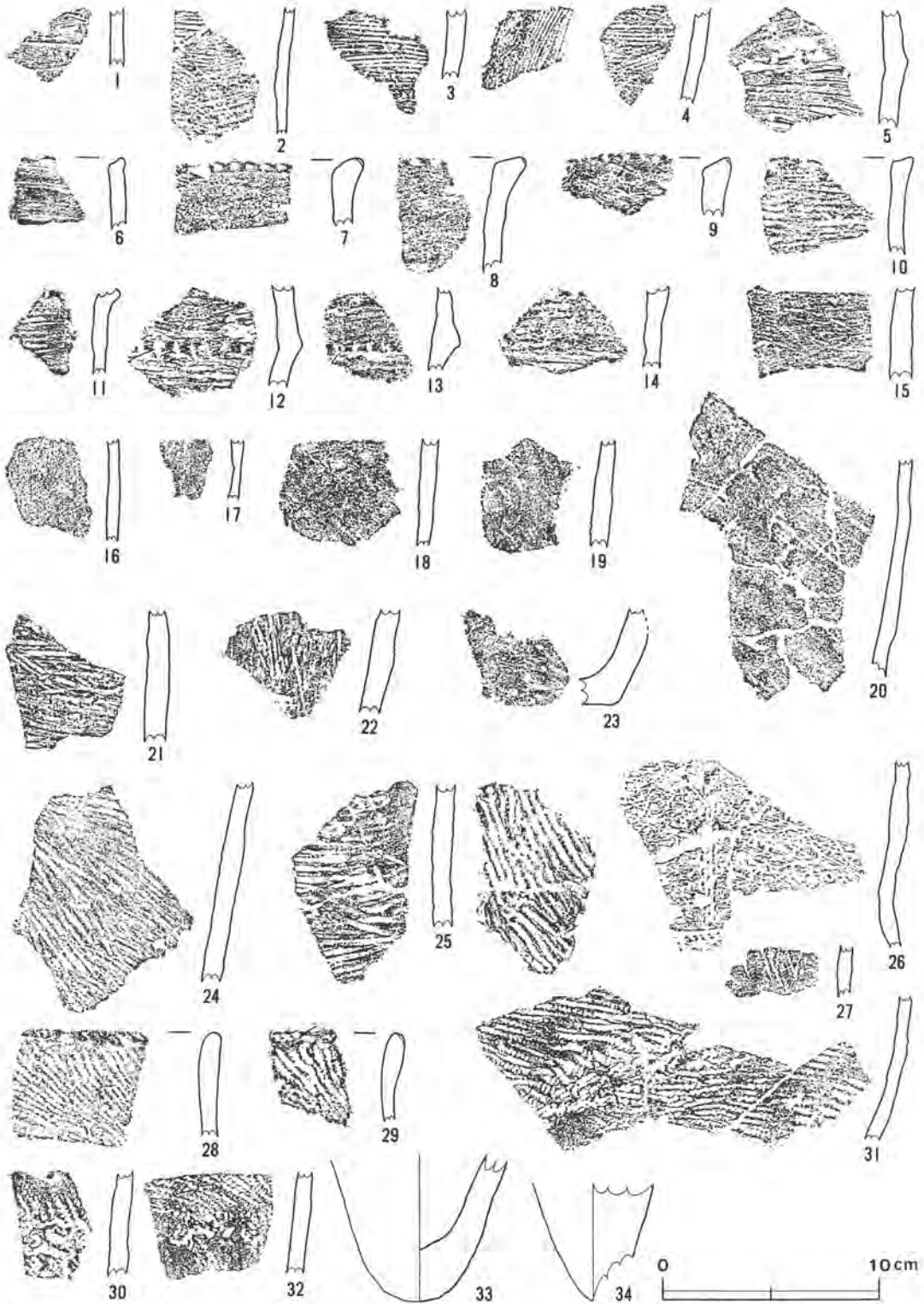
本群土器は当地区の包含層の主体を占め、420点出土している。有文のものは少なくほとんどは条痕文ないし捺痕文のみのものである。

第46図41～44は絡条体圧痕文、45～49は微隆起線文が施されており、5類に属する。41～43は口縁部片、44は胴部の小片である。41は平縁で、口縁部下に1条の貼付隆帯を巡らし、隆帯上を含めて絡条体圧痕文が斜位に施されており、口唇部に斜位のキザミ目が付されている。42・43は波状を呈し、隆帯が波頂部から曲線的に垂下し、両側に絡条体圧痕文が施されている。隆帯上と口縁端部には絡条体の施文具による押圧が加えられている。43の内面にも絡条体圧痕文が認められる。44は斜位に絡条体圧痕文が施されている。いずれも胎土に多量の繊維と長石・石英粒を含み、器質が脆い。45～48は器厚4～6mmの薄手の破片で、45が口縁部片で、他は胴部片である。横位と斜位に微隆起線が施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。49は器厚9～10mmを測る胴部片で、上端に縦位の微隆起線が施され、以下は内面とともに貝殻条痕文が施されている。

第46図50～52、第47図1～5は細い植物の茎様の施文具で条痕文が施されている胴部片で、5は稜を有し、キザミ目が付されている。第46図50～52と第47図1、3と4はそれぞれ施文が



第46图 H3区包含層出土遺物拓影图(1)



第47圖 H3区包含層出土遺物実測・拓影図(2)

共通しており同一個体と考えられる。第47図2は破片の上端にわずかに微隆起線文の剥落痕が認められ、上記の第46図45～48と同一個体かもしれない。第47図2を除いてこれらの胎土には繊維を含んでいる。第47図6～9、15～20・23は擦痕文が施されており、4類に該当する。6は他に比較して薄手で、口唇部が内削ぎ状を呈する。7～9は口唇部が平坦で内削ぎ状を呈し、口唇部外端に軽い押圧が加えられている。16・17は薄手で胎土は第46図45～48に類似している。23は厚手の平底である。10～14、21・22・24・25は貝殻条痕文のみが施されており、2類に該当する。10は口縁部片で、若干内削ぎ状を呈し、11～14は胴上半部片で、稜を有し、稜上にキザミ目が付されている。21以下は胴下半部に相当し、縦位・横位・斜位の条痕文が明瞭に施されている。胎土には量の多少はあるが、繊維を含んでいる。

第V群土器（第47図26・27）

本群土器は、4点のみでごく少ない。26は網目状撚糸文が施されており3類に属する。破片上端には爪形文が巡り、これから垂下するように押引文が施され、下端部には貼付文の剥落痕が認められる。内面はきわめて平滑に整形されている。胎土は繊維を多量に含み、長石・石英粒は少量である。27は胴部の小片で、波状貝殻文を施している。胎土に多量の繊維を含む。

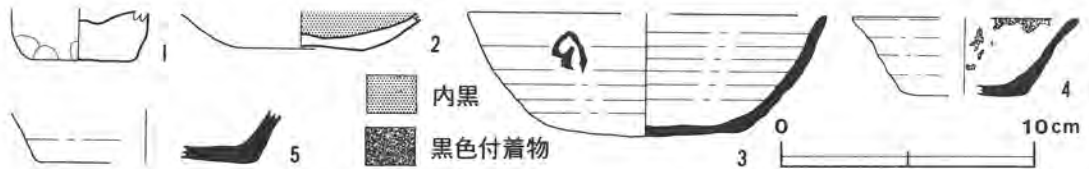
第VII群（第47図28～32）

本群土器は9点と少ない。28・29は5類の口縁部片で、単節RLが施されている。30～32は4類の胴部片で、いずれも単節RLが施されている。32は底部近くと思われ、下半は縦位のナデが施されている。

第IX群土器（第48図1～5）

本群土器は86点出土し、土師器50点、須恵器36点である。1は土師器の手捏ね土器の底部片で、内外面にユビナデの痕跡が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は普通である。推定底径4.0cm、現存高2.1cmを測る。2は内黒の土師器の坏の破片で、底部から内彎して立ち上がる。内面は磨耗が著しくミガキの痕跡は観察できない。胎土は長石・石英粒を含み、焼成はやや不良である。推定底径5.0cm、現存高1.5cmを測る。3は須恵器の坏で、底部から内彎して立ち上がり、口縁端部は丸味をもつ。内外面ともヨコナデにより整形され、底部はヘラ切りと思われるが、その後の指頭によるオサエが著しく、凹凸が激しい。外面の体部上半に墨書の跡が残るが、文字か記号か判読し得ない。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は不良である。推定口径12.4cm、底径8.0cm、器高4.9cmを測る。4は小形の須恵器の坏で、底部から直線的に立ち上がり、口縁部は外反し、端部を丸く納める。内外面ともヨコナデにより整形され、底部はヘラ切りである。内

面には漆と思われる黒色の付着物がみられる。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。推定口径9.0cm，推定底径5.0cm，器高3.1cmを測る。5は須恵器の坏の破片で，底部から直線的に立ち上がる。内外面ともヨコナデにより整形され，底部はヘラ切りである。底部外面はきわめて平滑にナデられている。胎土はやや大きめの長石粒を稀に含む以外は緻密で，焼成は普通である。推定底径8.5cm，現存高2.1cmを測る。



第48図 H3区包含層出土遺物実測図(3)

(3) 石器

包含層出土の石器をはじめ，各遺構出土の石器，石製品については一覧表とした。

表3 五平遺跡石器・石製品観察表

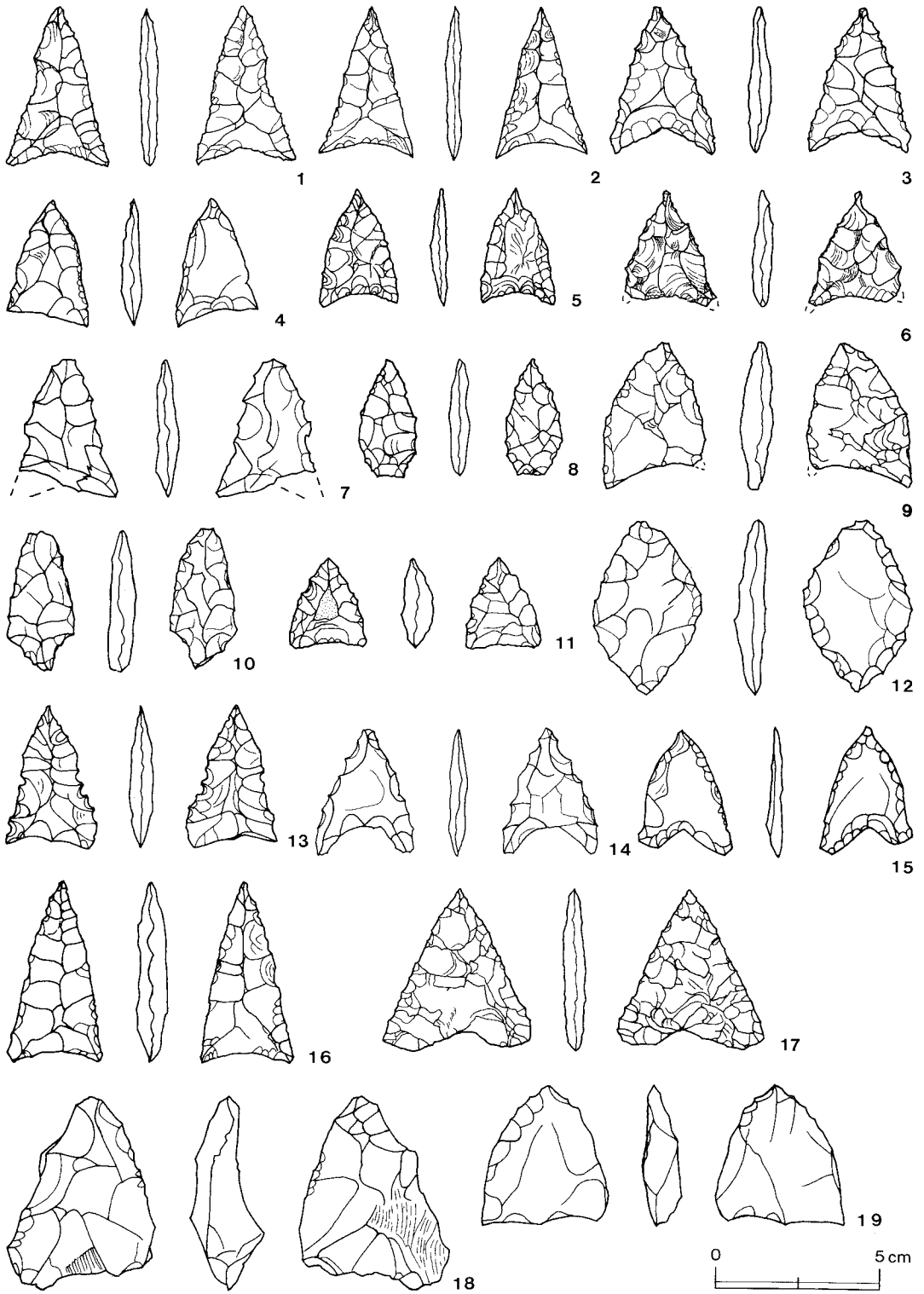
台帳 番号	器種	法 量				出土位置	石 質	備 考	図版 番号	写真 番号
		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
1	砥 石	(8.8)	6.3	4.6	229.1	S 1 1	凝 灰 岩	厚手	12-2	PL13
2	砥 石	(4.9)	4.8	1.9	46.6	S 1 1	凝 灰 岩	薄手	12-3	PL13
3	砥 石	14.8	11.2	6.0	777.9	S 1 1	砂 岩	厚手 自然面および破断面も使用	12-1	PL13
8	砥 石	(6.9)	5.1	3.5	118.7	S 1 2	凝 灰 岩	厚手	15-5	PL13
9	砥 石	(7.3)	3.8	3.9	118.9	S 1 2	層 灰 岩	厚手	15-6	PL13
10	砥 石	(5.8)	4.5	3.4	81.1	S 1 2	凝 灰 岩	厚手	15-6	PL13
11	砥 石	(5.6)	(4.5)	(0.7)	19.9	S K 2 0	粘 板 岩	薄手	29-7	PL13
40	砥 石	(5.0)	3.0	1.7	35.3	B 2トレンチ	凝 灰 岩	断片 表裏面のみ使用	56-9	PL13
114	砥 石	(5.2)	2.2	1.0	16.5	D 2区	粘 板 岩	断片 薄手		
115	砥 石	(1.2)	(4.8)	2.4	17.6	Pトレンチ	凝 灰 岩	断片		
120	細石刃核	3.2	3.7	2.3	24.0	E 1区	頁 岩	円錐形石核 甲板面若干加工 自然面残る。	51-1	PL14
6	石 鏝	2.5	1.7	0.3	0.7	S 1 2	チャート	剥離丁寧 薄手	49-1	PL14

台帳 番号	器種	法 量				出土位置	石 質	備 考	図版 番号	写真 番号
		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
7	石 鏃	1.8	(1.4)	0.3	0.5	S 1 2	黒 曜 石	脚部一部欠損	49-6	PL14
15	石 鏃	2.1	(1.5)	0.3	0.6	G 2 c 7	チャート	脚部一部欠損 鋸歯状縁に剥離する。	49-7	PL14
16	石 鏃	2.3	1.4	0.2	0.6	G 2 f 6	チャート	完形 剥離は丁寧	49-2	PL14
17	石 鏃	2.0	1.2	0.3	0.5	G 2 f 6	チャート	完形 剥離はやや粗い。	49-4	PL14
18	石 鏃	(1.1)	1.2	0.3	0.5	G 2 f 7	チャート	上半部欠損	50-3	PL14
20	石 鏃	1.8	0.9	0.3	0.4	G 2 f 9	チャート	小形 剥離はやや粗い。	49-8	PL14
23	石 鏃	(2.1)	1.0	0.4	0.7	G 2 g 9	頁 岩	先端 基部欠損 有茎石鏃	49-10	PL14
24	石 鏃	1.8	1.2	0.3	0.5	G 2 g 9	チャート	先端尖る。剥離は丁寧	49-5	PL14
25	石 鏃	1.4	1.1	0.5	0.7	G 2 g 9	メ ノ ウ	小形 厚手 剥離は粗い。	49-11	PL14
32	石 鏃	2.2	1.9	0.6	2.5	G 2 区	チャート	剥離は粗い。未製品	49-19	PL14
34	石 鏃	(1.2)	1.7	0.5	0.8	G 2 区	チャート	上半部欠損 剥離は粗い。	50-2	PL14
39	石 鏃	2.5	2.1	0.3	1.3	B 2 トレンチ	頁 岩	完形 剥離は丁寧	49-17	PL14
43	石 鏃	2.3	1.6	0.4	0.9	G トレンチ	チャート	完形 側縁は鋸歯状に丁寧な剥離	49-3	PL14
45	石 鏃	3.0	2.2	1.1	5.0	KL トレンチ	チャート	側縁は粗い剥離 未製品	49-18	PL14
49	石 鏃	2.3	1.6	0.5	1.4	KL トレンチ	チャート	脚部欠損	49-9	PL14
58	石 鏃	2.9	2.3	0.8	5.1	F 2 トレンチ	メ ノ ウ	側縁加工は粗い。未製品	50-6	PL14
59	石 鏃	2.2	1.4	0.3	0.9	F 3 区	チャート	側縁は鋸歯状に加工 脚部わずかに欠損	49-13	PL14
61	石 鏃	2.0	1.5	0.2	0.5	B 1 a 9	チャート	剝片利用の薄手の鏃 周縁のみ丁寧に加工	49-15	PL14
62	石 鏃	2.6	1.6	0.4	1.6	F 2 j 4	チャート	裏面に剥離面が残る。周縁は丁寧に加工	49-12	PL14
63	石 鏃	2.8	1.4	0.5	1.4	I 3 a 8	チャート	完形 整美な二等辺三角形を呈する。	49-16	PL14
64	石 鏃	3.1	1.8	0.5	1.5	S K 5 8	チャート	脚部欠損。側縁加工は粗い。	50-1	PL14
65	石 鏃	2.0	1.5	0.3	0.7	T M 1	安 山 岩	抉り深い。側縁加工は粗い。	49-14	PL14
119	石 鏃	(1.6)	1.8	0.2	0.9	F 2 j 4	チャート	先端と基部欠損		
4	搔 器	2.0	1.3	0.5	1.5	S I 1	メ ノ ウ	周縁加工	50-5	PL14
5	搔 器	(2.2)	2.8	1.0	5.0	S I 1	チャート	上端部欠損	50-4	PL14
30	搔 器	2.3	2.2	0.7	3.4	G 2 i 9	チャート	下端に刃部あり。	50-9	PL14
42	搔 器	4.4	2.4	1.3	11.1	C トレンチ	頁 岩	断片 刃部は粗い剥離		
44	搔 器	2.2	1.9	0.9	3.7	KL トレンチ	チャート	周縁は丁寧に剥離	50-7	PL14

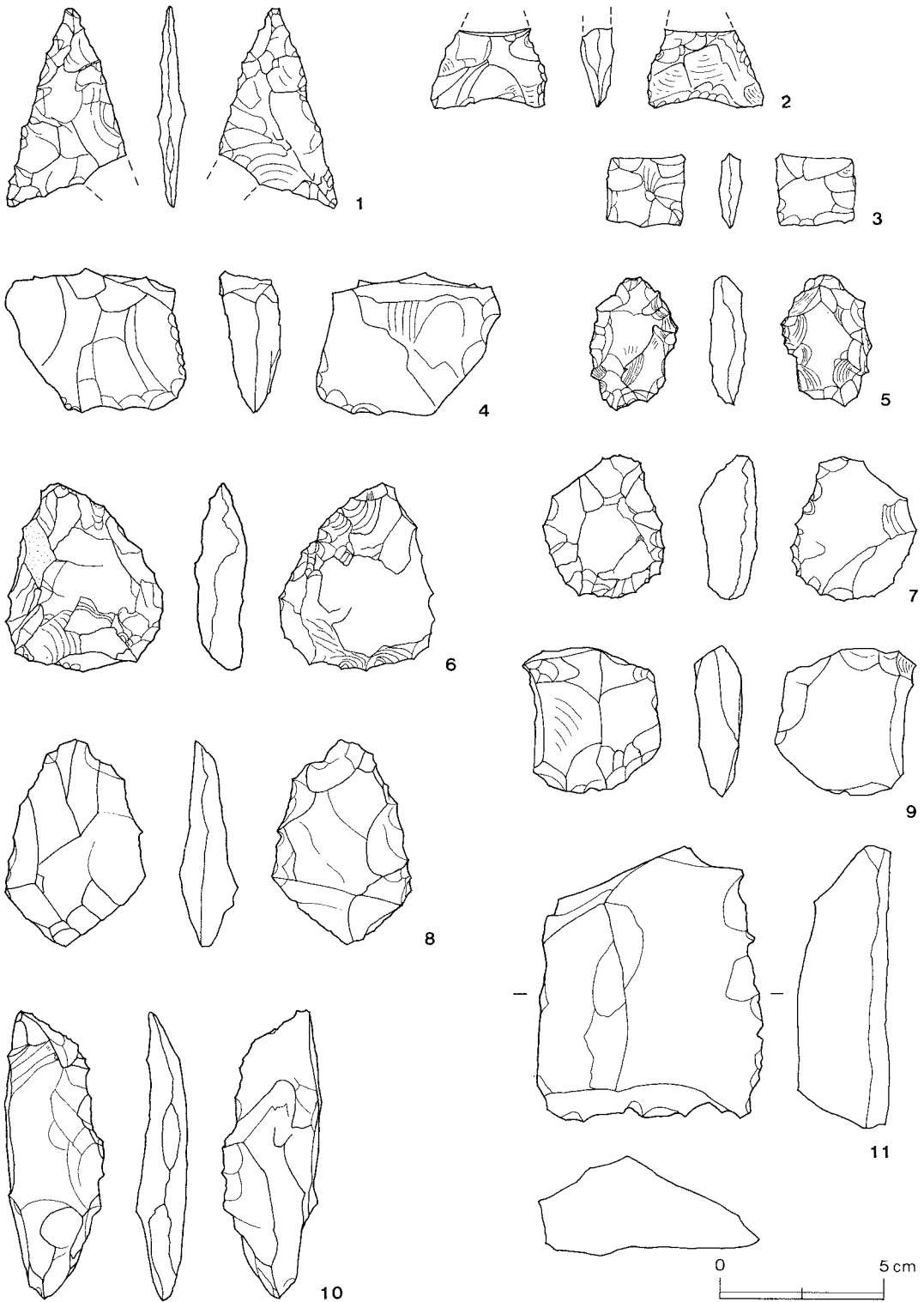
台帳 番号	器種	法 量				出土位置	石 質	備 考	図版 番号	写真 番号
		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
48	搔 器	3.2	2.1	0.8	4.3	KLトレンチ	チャート	周縁は粗い剥離	50-8	PL14
57	搔 器	4.4	(1.5)	0.7	5.2	F 2 区	チャート	左側縁欠損 側縁加工は粗い。	50-10	PL14
116	搔 器	3.5	3.2	1.0	10.1	C 1 区	チャート	両側縁に粗い剥離		
117	搔 器	4.4	3.5	1.5	18.9	I 3 ds	頁 岩	右側縁に粗い剥離	50-11	PL14
80	打製石斧	(6.2)	3.8	2.7	58.5	G 2 es	砂 岩	両側縁も粗く加工。刃部は薄くなる。	52-5	PL14
83	打製石斧	11.8	4.0	2.7	115.8	G 2 gr	粘板岩	完形 側縁 刃部とも粗い剥離	52-4	PL14
35	磨製石斧	(7.3)	3.7	1.5	72.9	G 2 区	粘板岩	刃部欠損 剥落著しい。	52-2	PL14
81	磨製石斧	(4.6)	4.0	1.4	38.7	G 2 fs	緑泥片岩	頭部欠損 片刃	52-3	PL14
12	局部磨製石斧	7.7	4.2	1.4	61.0	S K 6 8	粘板岩	片刃 体部粗い剥離	52-7	PL14
54	局部磨製石斧	7.6	4.1	1.4	69.8	Nトレンチ	砂 岩	右側縁粗く剥離。刃部両刃	52-6	PL14
82	局部磨製石斧	6.7	3.9	1.5	60.4	I 3 bs	砂 岩	両刃状を呈するが、裏面は剥離のみ。	52-1	PL14
33	磔 器	6.9	3.7	1.9	73.1	G 2 区	片麻岩	磨耗が著しい。剥離は不明瞭	52-9	PL15
36	磔 器	9.7	(8.5)	3.5	355.0	G 2 区	砂 岩	一部欠損 刃部は粗い剥離	53-1	PL15
41	磔 器	7.6	4.0	1.4	59.0	B2トレンチ	粘板岩	両側縁、刃部とも粗い剥離	52-13	PL14
55	磔 器	6.6	4.9	2.0	54.2	Nトレンチ	アブライト	刃部表裏面より粗く剥離	52-12	PL15
68	磔 器	7.4	6.0	3.3	197.9	G 2 go	砂 岩	断片 表面側面に磨痕あり。		
84	磔 器	10.5	8.4	4.3	468.2	G 2 es	流紋岩	完形 右側縁、下縁に粗い加工	52-8	PL15
85	磔 器	(6.8)	7.2	3.6	244.0	I 3 as	砂 岩	上端欠損 下縁に粗い加工により片刃状に刃部作出	52-11	PL15
86	磔 器	8.2	8.0	5.5	402.9	I 3 bs	砂 岩	自然面が残る。刃部は階段状の剥離部厚い。	52-10	PL15
14	スタンプ形石器	(7.3)	6.4	(3.7)	172.0	G 2 cs	砂 岩	頭部の破片	53-6	PL15
28	スタンプ形石器	(6.3)	6.2	4.7	255.7	G 2 he	流紋岩	頭部 使用面欠損		
29	スタンプ形石器	(4.1)	7.7	4.9	213.7	G 2 ho	粘板岩	使用面のみ破片 良く使い込まれ稜が磨耗する。		
46	スタンプ形石器	(5.8)	4.6	3.7	92.0	KLトレンチ	砂 岩	頭部の破片		
51	スタンプ形石器	9.0	5.3	4.9	268.1	Lトレンチ	砂 岩	完形 使用面はほとんど磨減なし。	53-4	PL16
56	スタンプ形石器	(6.9)	3.4	3.1	108.0	C 1 区	砂 岩	頭部の破片		
66	スタンプ形石器	13.2	7.0	5.2	463.2	G 2 fs	砂 岩	完形 握り部に剥離あり。使用面は稜が明瞭に残る。	53-2	PL15
67	スタンプ形石器	11.1	6.6	5.6	565.6	G 2 fs	流紋岩	完形 握り部に軽い磨痕あり。使用面は稜が磨耗している。	54-1	PL15
69	スタンプ形石器	(6.5)	4.7	3.7	102.6	G 2 go	斑 礫 岩	頭部の破片		

台帳 番号	器 種	法 量				出土位置	石 質	備 考	図版 番号	写真 番号
		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
70	スタンプ形石器	(4.0)	4.5	4.0	114.8	G 2 g ₈	砂 岩	握り部の破片		
71	スタンプ形石器	(10.8)	8.3	8.8	791.7	G 2 g ₆	砂 岩	頭部のみ欠損	53-5	PL15
72	スタンプ形石器	(7.5)	5.9	4.5	222.9	G 2 h ₀	斑 礫 岩	握り部の破片		
73	スタンプ形石器	(10.6)	8.0	7.1	644.6	G 2 h ₇	硬 砂 岩	頭部のみ欠損	53-3	PL15
74	スタンプ形石器	(9.6)	5.2	4.6	259.6	G 2 h ₉	砂 岩	小形 完形 使用面は平坦	53-7	PL15
75	スタンプ形石器	(7.3)	4.5	4.1	181.6	G 2 h ₀	斑 礫 岩	頭部の破片		
76	スタンプ形石器	11.5	7.3	5.3	456.0	G 2 i ₀	砂 岩	完形握り部に剝離あり。使用面は稜が残る。	54-2	PL15
77	スタンプ形石器	(6.1)	4.3	3.2	126.5	G 3 i ₁	斑 礫 岩	頭部の破片		
78	スタンプ形石器	(5.0)	6.5	4.2	207.9	G 3 i ₁	玢 岩	使用部の破片 使用面は磨耗し若干凹む。		
79	スタンプ形石器	(7.5)	5.4	4.5	246.7	Jトレンチ	砂 岩	使用部の破片 使用面は磨耗する。		
19	磨 石	11.5	8.9	4.5	538.1	G 2 f ₈	砂 岩	断片 表裏面とも平滑		
37	磨 石	9.4	7.6	4.0	428.5	G 2 区	安 山 岩	表裏面に凹み 両側縁の磨痕が著しい。	56-1	PL16
47	磨 石	7.2	6.7	4.7	164.8	KLトレンチ	安 山 岩	断片		
53	磨 石	12.0	7.4	5.4	507.5	Lトレンチ	砂 岩	1側縁と底面に磨痕が顕著	55-7	PL16
87	磨 石	(7.9)	(6.2)	5.3	294.6	G 2 区	石 英	表・裏面は平滑な磨痕 側面に顕著な敲打痕	55-3	PL16
88	磨 石	12.0	9.6	3.7	619.6	G 2 c ₆	安 山 岩	扁平な磨石一部欠損 表裏面、側縁に磨痕	55-4	PL16
89	磨 石	9.2	9.7	5.3	573.4	G 2 c ₇	砂 岩	側縁に顕著な磨痕あり。	54-3	PL16
90	磨 石	10.2	7.1	5.7	690.0	G 2 e ₅	安 山 岩	表・裏側縁に磨痕あり。一部欠損		
91	磨 石	12.5	8.0	6.2	857.2	G 2 f ₉	安 山 岩	側縁に顕著な磨痕あり。	55-6	PL16
92	磨 石	(9.7)	10.8	5.1	845.3	G 2 g ₆	安 山 岩	2片接合半欠表裏面は平滑な磨痕 側縁にも磨痕あり。	55-1	PL16
93	磨 石	9.9	7.8	5.1	528.6	G 2 g ₇	砂 岩	完形表裏面は平滑な磨痕側縁にも磨痕あり。	54-4	PL16
94	磨 石	9.0	6.5	4.0	227.9	G 2 g ₇	砂 岩	断片 表面に磨痕あり。		
95	磨 石	7.9	6.0	5.1	310.3	G 2 h ₈	砂 岩	断片 表裏面に磨痕あり。		
96	磨 石	(5.5)	5.3	4.3	130.4	G 2 i ₉	砂 岩	断片 側縁に顕著な磨痕あり。	55-2	PL16
98	磨 石	(6.7)	(3.1)	(2.7)	46.4	G 3 j ₁	安 山 岩	断片 表裏側面に磨痕あり。		
99	磨 石	10.3	7.2	6.6	665.9	I 3 区	安 山 岩	完形 俵形の磨石全面磨耗 下端に稜状の磨痕	55-5	PL17
100	磨 石	(5.2)	(5.3)	5.5	180.1	I 3 区	安 山 岩	断片 表裏面とも磨痕あり。		
101	磨 石	(4.5)	(2.8)	3.0	45.5	I 3 a ₉	花 崗 岩	断片 表裏面は磨痕 側縁は敲打痕が顕著		

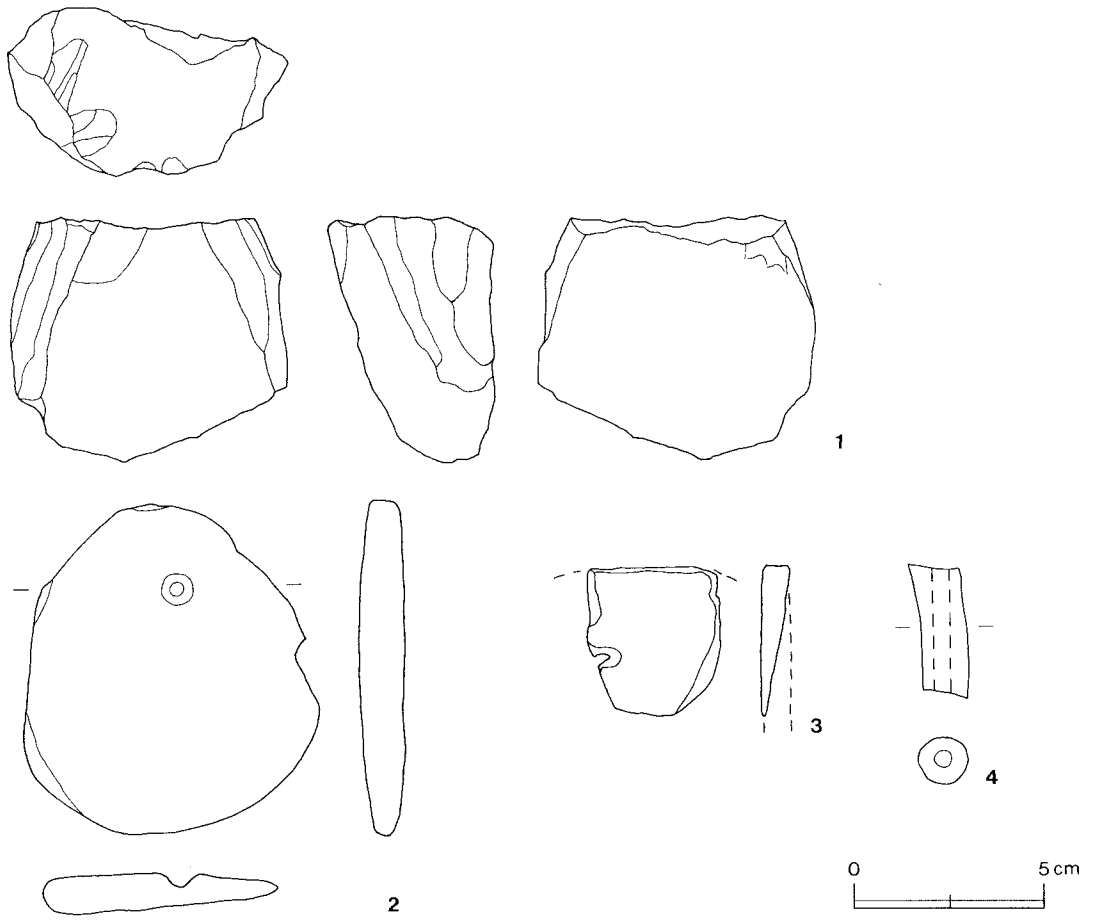
台帳 番号	器種	法 量				出土位置	石 質	備 考	図版 番号	写真 番号
		縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重量(g)					
102	磨 石	(8.9)	(5.8)	2.6	115.4	Kトレンチ	砂 岩	断片 表裏面とも磨痕あり。		
103	磨 石	(8.2)	(6.3)	4.7	276.2	Lトレンチ	安 山 岩	断片 表裏側縁とも磨痕あり。		
104	磨 石	(6.3)	9.9	4.1	351.4	Mトレンチ	砂 岩	断片 表裏面に2ヶずつの凹みあり。右側縁に平滑な磨痕あり。	54-7	PL17
105	磨 石	(8.6)	7.8	4.4	375.5	E 1 区	砂 岩	表面に平滑な磨面と凹みあり。側縁にも磨痕と敲打痕あり。	54-6	PL17
118	磨 石	(5.1)	(5.0)	4.7	187.6	S K 8	安 山 岩	断片 表裏面に磨面あり。		
109	磨石(敲石)	(6.1)	10.0	4.8	391.4	G 2 f ₆	アプライト	半欠 側縁に磨痕 下縁に敲打痕をもつ。	54-5	PL16
110	敲 石	6.8	3.5	2.9	88.1	G 2 g ₆	砂 岩	完形 下端に軽い敲打痕あり。	56-3	PL16
111	敲 石	3.3	2.9	1.8	21.3	G 2 h ₉	砂 岩	完形 右側縁を除く全縁に顕著な敲打痕あり。	56-4	PL16
112	敲 石	9.0	4.3	2.1	99.6	G 2 h ₇	砂 岩	完形 右下縁に敲打痕あり。	56-2	PL16
21	石 皿	31.0	24.5	6.3	6800.0	G 2 g ₆	砂 岩	完形 平板石皿	56-6	PL17
52	石 皿	(7.4)	(9.9)	5.4	515.6	Lトレンチ	安 山 岩	断片	56-8	PL17
60	石 皿	(12.6)	(9.2)	4.3	417.5	H 3 区	安 山 岩	流し口部の破片 裏面に凹みあり。	56-7	PL17
97	石 皿	(6.7)	(6.5)	5.4	351.9	G 2 区	結晶片岩	断片 表裏面に磨痕あり。		
106	石 皿	(8.0)	(5.4)	5.0	250.6	G 2 h ₆	砂 岩	断片 表面僅かに凹む。		
107	石 皿	(14.0)	(11.9)	4.4	860.3	G 3 i ₁	雲母片岩	断片 平板石皿 表面は平滑な磨面をもつ。	56-5	PL17
108	石 皿	(8.1)	(5.4)	5.0	435.3	Pトレンチ	砂 岩	断片 平板石皿 表裏面とも平滑な面をもつ。		
13	装 飾 品	4.4	3.9	0.6	12.1	G 2 b ₄	凝 灰 岩	薄手 周縁加工 穿孔途中	51-2	PL17
26	装 飾 品	(1.8)	0.8		0.7	G 2 g ₉	蛇紋岩?	管玉状を呈する。孔径0.3cm	51-4	PL17
38	模 造 品	(2.0)	(1.7)	0.4	1.7	A2トレンチ	滑 石	断片	51-3	



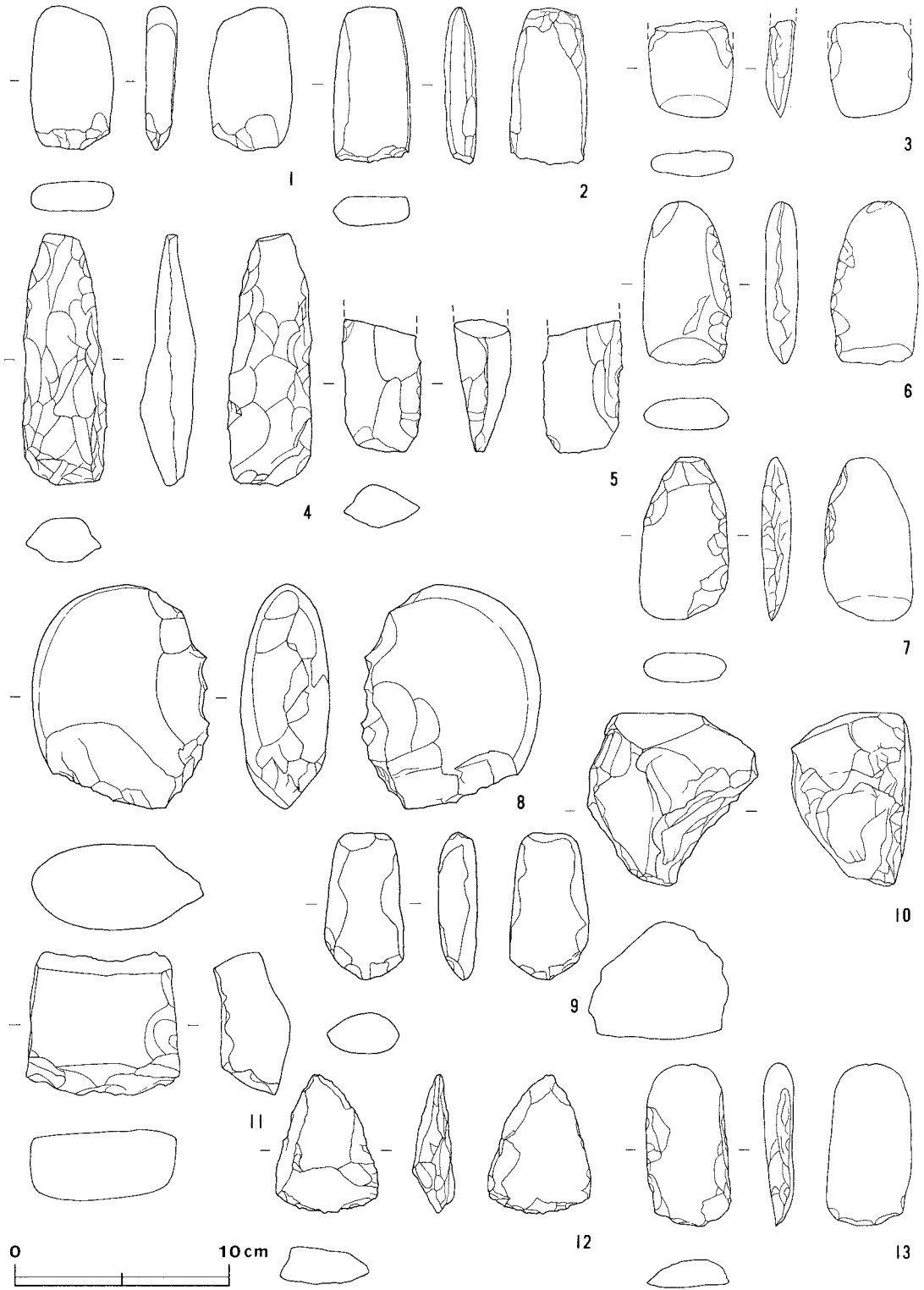
第49图 石器实测图(1)



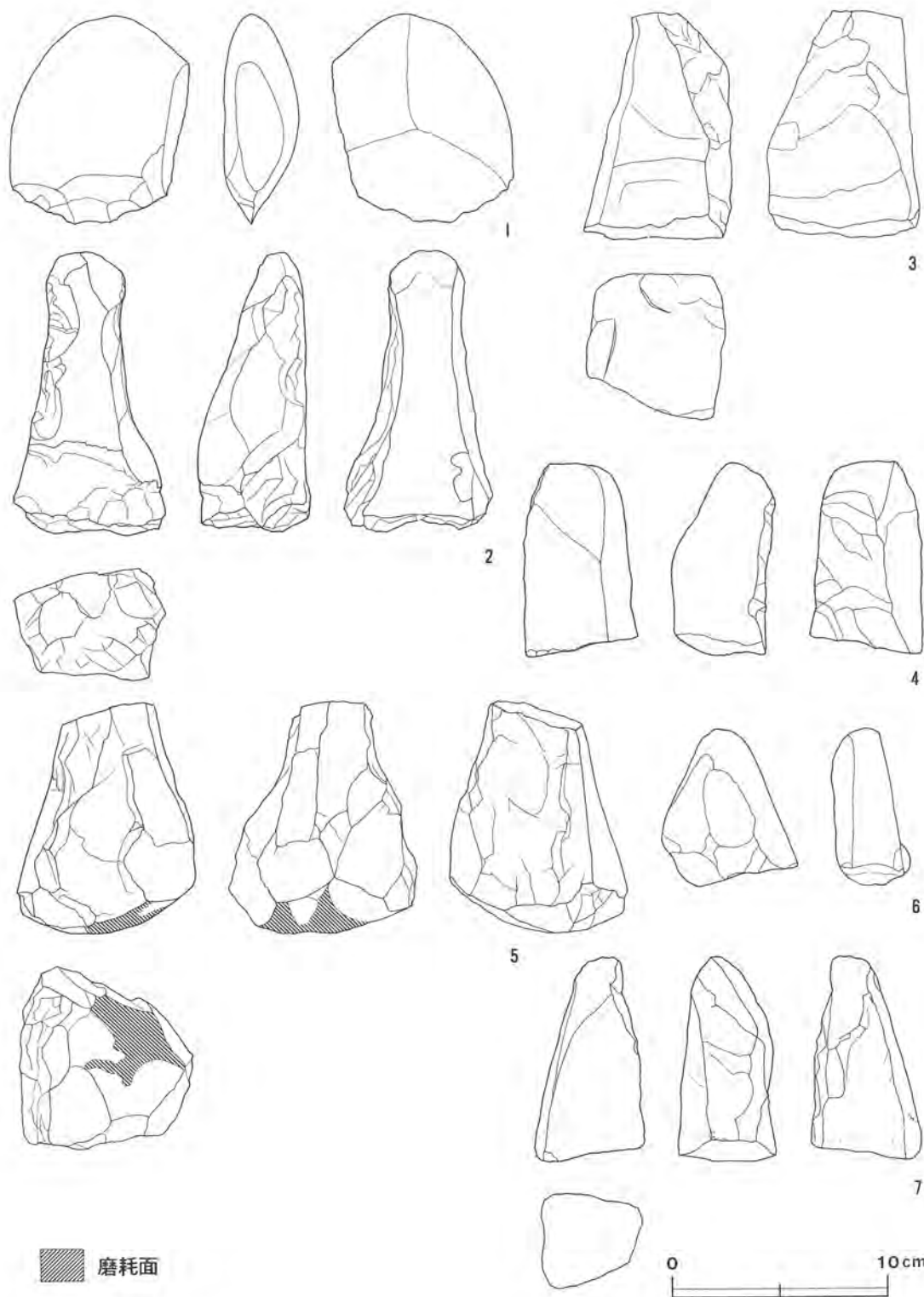
第50图 石器实测图(2)



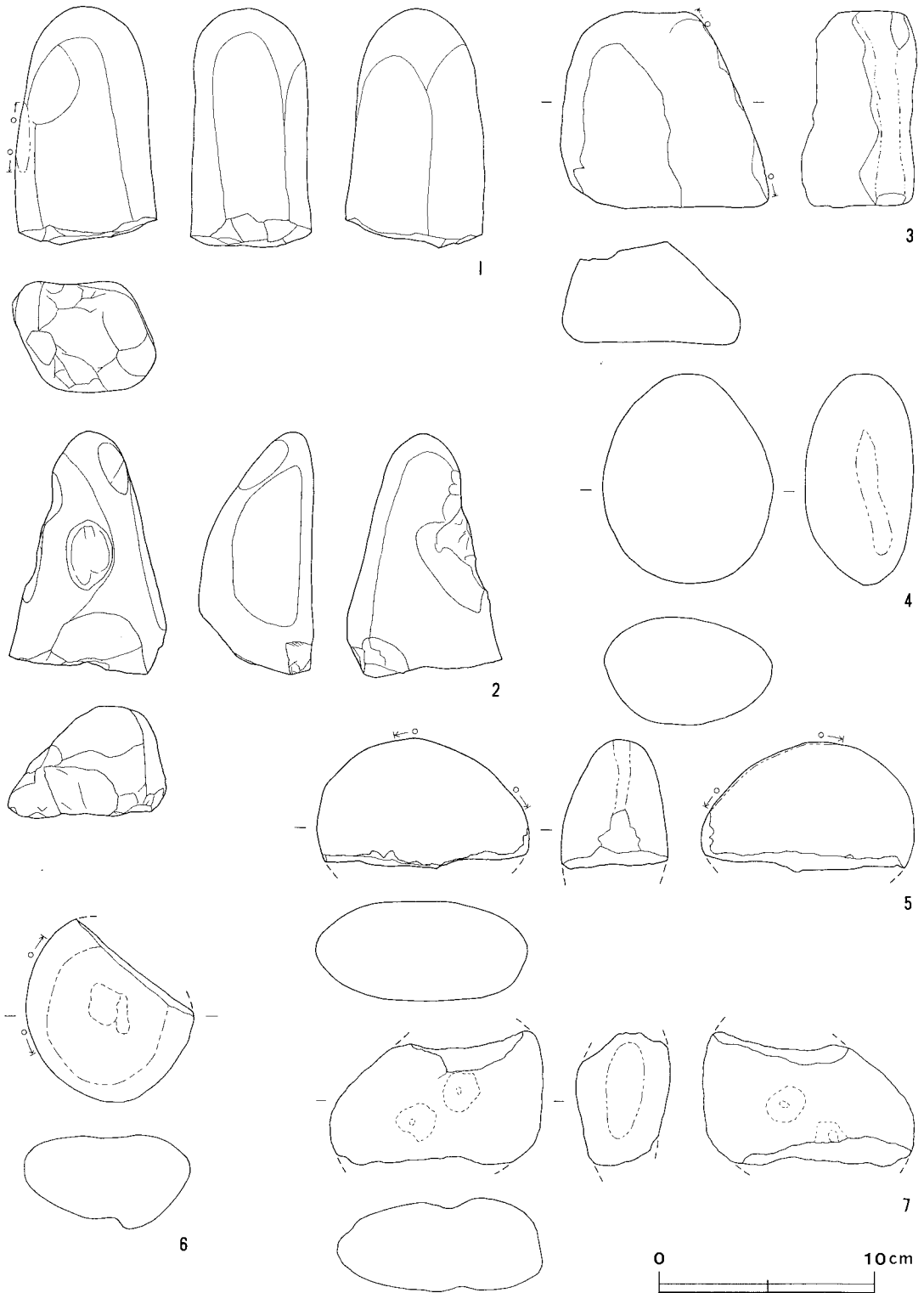
第51图 石器实测图(3)



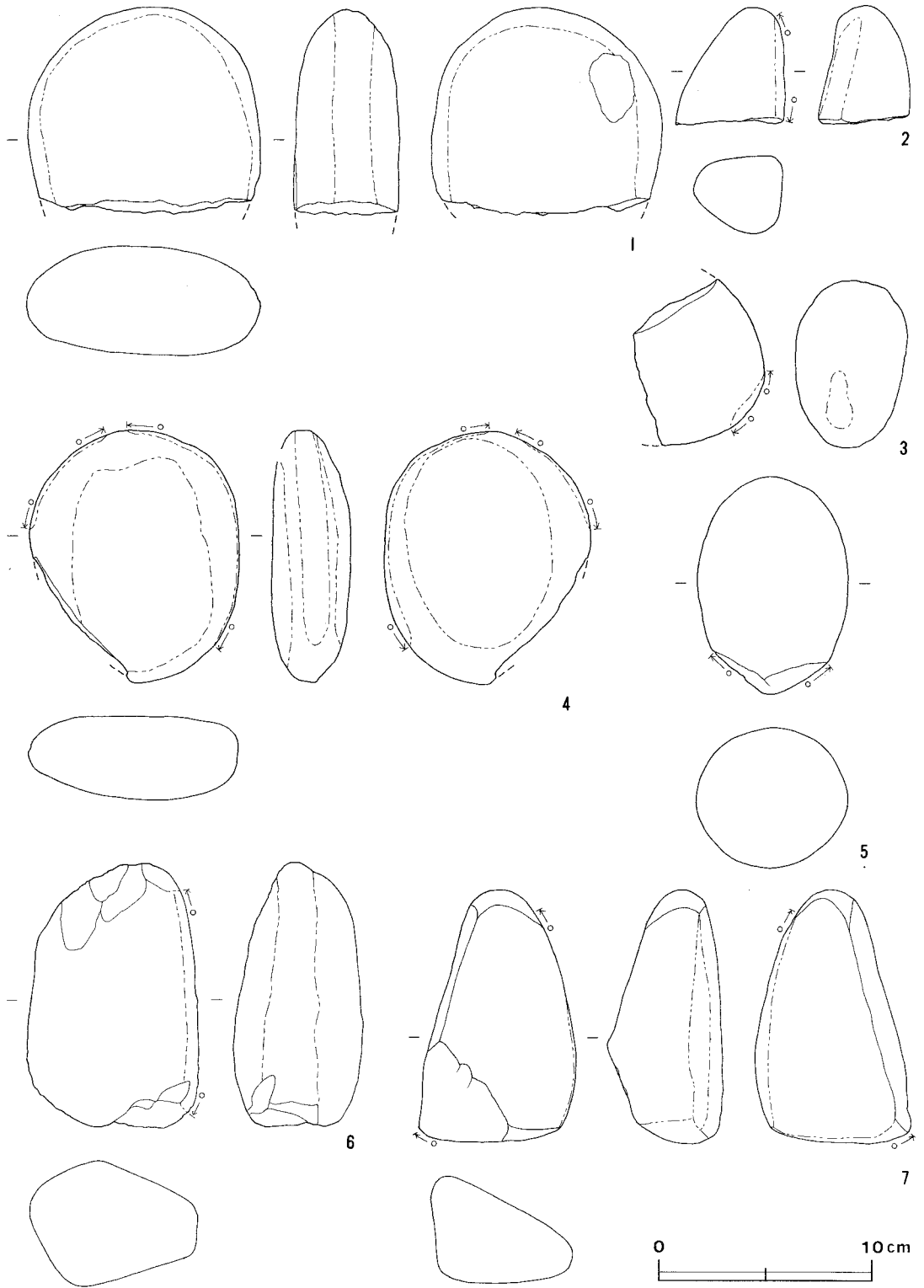
第52图 石器实测图(4)



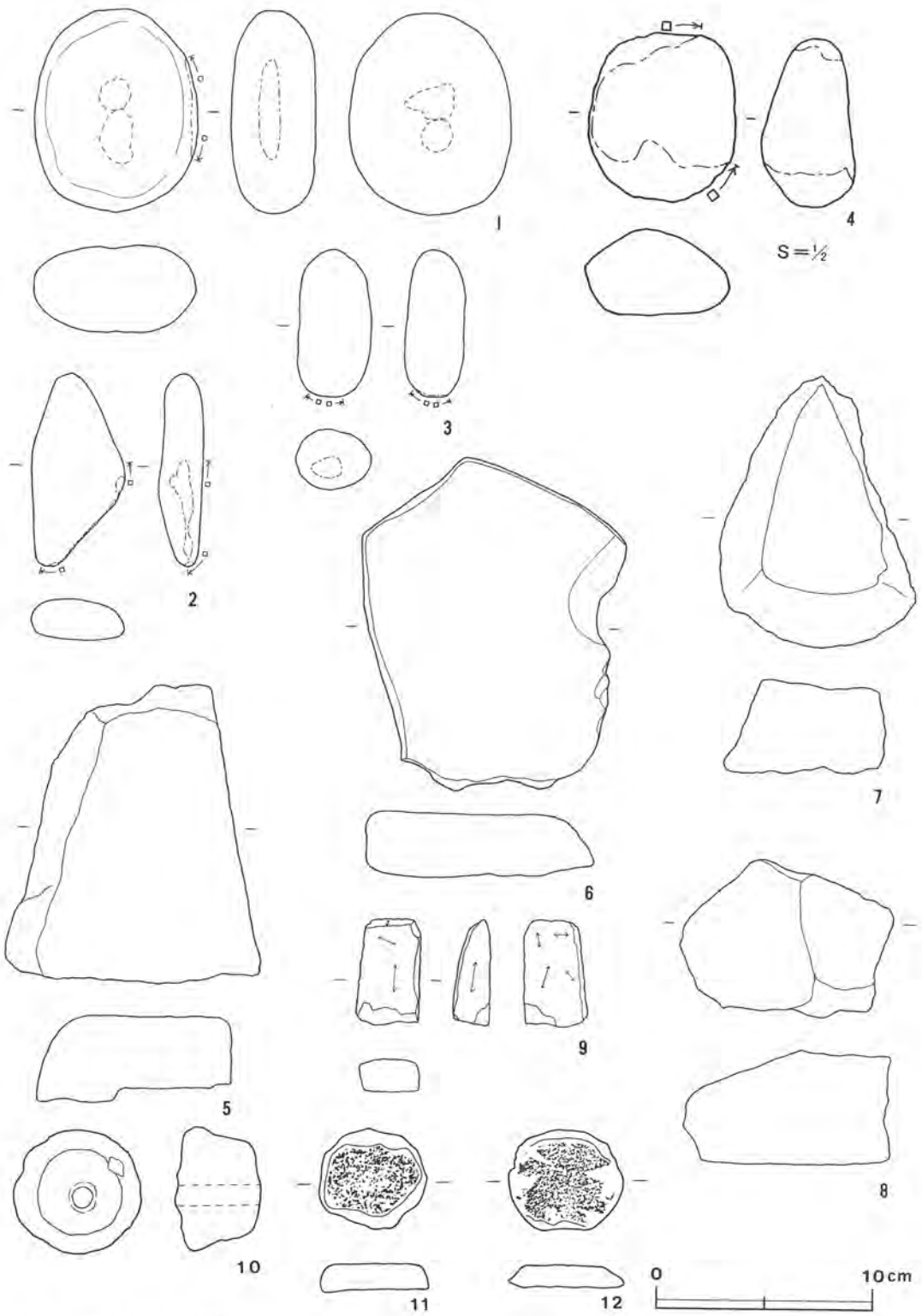
第53图 石器实测图(5)



第54图 石器实测图(6)



第55图 石器实测图(7)



第56図 石器他実測図(8)

10~12 S=1/2

2 遺構外出土遺物

当遺跡からは墳丘を失った古墳時代後期の円墳1基，平安時代前期の住居跡2軒，縄文・古墳・平安時代の土坑74基，溝9条が検出され，それに伴うかたちで土師器・須恵器片や縄文式土器片が出土している。一方，試掘時のトレンチ調査の際や表土除去，遺構確認作業中に出土した遺物がある。本項では，その中から特色あるものを抽出して解説する。なお，土器については包含層出土土器の分類に準じた。

第Ⅰ群土器（第57図1～19）

1～4は3類に属し，いずれも胴部片で，細い撚糸文が縦位に施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み，焼成は普通である。5～15は4類に属する胴部片で，太い撚糸文が間隔を疎く縦位に施文されている。胎土は砂粒が多く比較的緻密なもの（5・8・12～14）と長石・石英粒が多く，粗雑なもの（6・7・9～11・15）に分かれる。14は下半部が無文となり，底部近くの破片である。16～19は5類に属し，16・17が口縁部片で，他は胴部片である。16・17とも口縁部無文帯下に1条の縄文原体圧痕文を施しているが，17は磨耗が著しく，文様は不鮮明である。18・19は縦位羽状の縄文が施されている。

第Ⅱ群土器（第57図20）

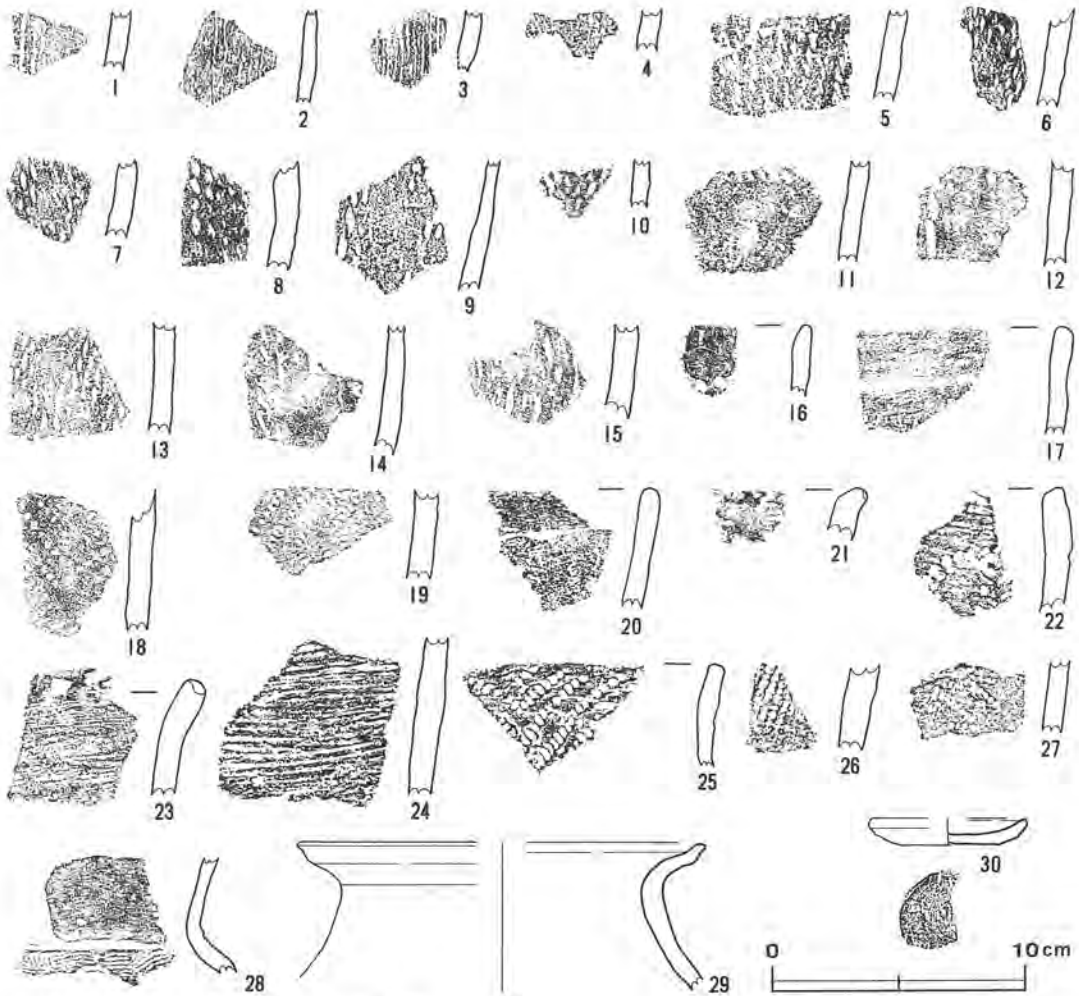
20は3類に属する口縁部片で，口唇部の断面形は丸頭状を呈する。内外面とも横位のナデにより整形されている。胎土は石英粒を多く含み，焼成は普通である。

第Ⅳ群土器（第57図21～24）

21～23は口縁部片で，24は胴部片である。22は口唇部が内削ぎ状を呈し，貝殻条痕文の地文上に刺突文が曲線的に施されており，1類に属する。21・23は3類に属する口縁部片で，口唇部上面は平坦に作出され，21には外端に軽いキザミ目，23は上面に刺突が施されている。24は外面に横位に貝殻条痕文が施され，内面はナデのままである。胎土はいずれも長石・石英粒を多く含み，焼成は普通である。

第Ⅴ群土器（第57図25）

25は外反する口縁部片で，単節LRの縄文が横位回転で施文されている。胎土に多量の繊維を含み，器質が脆い。



第57図 遺構外出土遺物実測・拓影図

第Ⅶ群土器（第57図26・27）

26・27ともに胴部の小片で、単節縄文が施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通である。26は厚手で、27は薄手である。

第Ⅷ群土器（第57図28）

28は壺の頸部片と考えられ、やや外反する無文の頸部の下端に1条の沈線が巡り、以下の肩部に無節縄文が曲線的な区画内に充填されている。内面には炭化物が付着している。胎土は砂粒を含み緻密で、焼成も良く、頸部は光沢を有する程である。

第Ⅸ群土器（第57図29・30）

29は1類に属する土師器の甕で、口縁部から胴部上半にかけて残存している。器形は胴部上半から頸部にかけて内傾して強くくびれ、口縁部は外反し、端部はつまみ上げられている。整形は口縁部内外面はヨコナデが施されている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。推定口径16.0cm、現存高5.9cmを測る。30は3類に該当する土師質土器の皿である。底部から内彎して立ち上がり、端部は丸味をもつ。内外面ともヨコナデにより整形され、底部は糸切りである。胎土は砂粒を微量に含むが緻密で、焼成は普通である。推定口径6.1cm、推定底径4.0cm、器高1.1cmを測る。

土製品（第56図10～12）

10は、G2j₀区から出土した紡錘車で、36.2gの重量がある。11・12は、土器片の周縁が加工された円板である。11は、G2f₇区から出土し、12は遺跡北端部からの表採品である。11は9.8g、12は10.1gを測る。

第4節 小結

当遺跡からは古墳1基、竪穴住居跡2軒、土坑74基、溝9条の遺構が検出され、土器・石器および古墳の石材等の遺物が遺物収納箱（60×40×20cm）に40箱分出土している。

古墳は、調査区の北側に検出された径約20mの円墳で、全長9m弱の羽子板状の平面形を呈する横穴式石室を有するが、攪乱が著しく本墳に伴うと考えられる遺物は出土していない。このため時期比定は困難であるが、埋葬施設の形態や設置場所等からみると6世紀後半から7世紀前半の後期古墳と考えられる。

竪穴住居跡2軒は、調査区の中央部から近接して検出されている。いずれも1辺が3.5～4.0mの不整形を呈し、北壁に竈が付設されている。出土遺物は土師器の甕、内黒の坏、須恵器の坏・甕・甌や砥石・鎌などがあり、9世紀後半の年代が考えられる。

土坑74基は、調査区内に散在しているが、住居跡の周辺からやや南側に比較的集中している。構築時期が推定できるものは少なく、第8・25・28・36・55・57・59・65号土坑の縄文時代草創期ないし早期と思われるもの、第20号土坑の古墳時代中期和泉期のもの、第44・47・51号土坑の平安時代前期と思われるものがある。性格は不明のものが多いが、第28・65号土坑のように風倒木痕と思われるものもある。

溝9条は、調査区内をいずれも横断ないし斜走するように検出され、全容を把握できない。溝に伴う遺物は少なく、第1号溝が古墳時代後期と考えられる以外は、時期は不明である。性格も不明なものが多い。調査区南側の傾斜地にて検出された第7～9号溝は排水路的な性格が考えられる。

遺物は上記の各遺構に伴うものの他に、調査区南側のG2区やH3・I3区の遺物包含層から多量に出土している。土器が主体で、縄文時代草創期・早期の土器が多数を占めている。第Ⅰ群土器は燃糸文系土器で、井草式、夏島式、稲荷台式、稲荷原式、花輪台式土器に対比されるものが出土している。第Ⅱ群土器は無文土器で、3類に大別できる。第Ⅰ・Ⅱ群で4,500点余あり、器形復元できた例も数個体ある。第Ⅲ群土器は沈線文系土器で、三戸式、田戸下層式、田戸上層式土器が主となるが、1類とした横位沈線文の土器群や初期沈線文として評価されている2類土器は類例も少なく今後の検討に値するものと思われる。第Ⅳ群は貝殻条痕文系土器で、野島式、鶴ヶ島台式、茅山式土器に対比されるものやそれ以降の土器群（絡条体圧痕文土器）もある。第Ⅴ群は黒浜式、第Ⅵ群は浮島式、第Ⅶ群は粟島台式土器に比定されるものである。第Ⅷ群は県内でも類例の少ない弥生時代中期中葉の土器で注目される。第Ⅸ群は古墳時代以降の土器である。主に第Ⅰ～Ⅲ群土器に伴って石鏃、搔器、石斧、礫器、スタンプ形石器、磨石等の石器類が出土している。

第6章 蔵田千軒遺跡

第1節 遺跡の概要

蔵田千軒遺跡は、昭和62年3月刊行の『茨城県遺跡地図』（茨城県教育委員会）に後章の権現古墳群とともに登載されている周知の遺跡である。蔵田千軒遺跡は、従来は中台遺跡、くずれ橋遺跡とは別の遺跡とされていたが、最近の蔵田千軒遺跡の発掘調査の実施にあたり、上記の2遺跡を含めた広大な集落跡として認識されることとなった。東西約1,500m、南北500～850mを測り、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてのものと推定されている。昭和63年に内原町によって調査された部分は、遺跡中央部のやや北側に相当し、今回の調査区は遺跡の西端部にあたる。

調査の結果、住居跡1軒、土坑32基、井戸1基、溝1条が検出された。

住居跡は、調査区の中央部の西側に検出され、竈内から土師器の甕が倒立して出土した以外には遺物はきわめて少ないが、9世紀代のものと思われる。

土坑は32基あり、住居跡の北側の方に集中する傾向をみせる他は、調査区内に散在している。遺物を伴う土坑は少なく、13基にすぎない。そのほとんどが須恵器・土師器の小片である。時期比定はむずかしいが、9世紀代のものが多いと推測される。

井戸は、調査区内の中央部の東側に検出された円形の素掘りの井戸である。土師器の甕・内黒の高台付坏などが出土しており、9世紀代のものと思われる。

溝は、調査区の中央部の西側で、住居跡の北側に検出された。出土土器が少なく、時期・性格ともに不明である。

出土遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）に3箱分である。内容は、住居跡・土坑・溝などから出土した土師器・須恵器の土器と表土出土の縄文式土器片・石器である。

第2節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

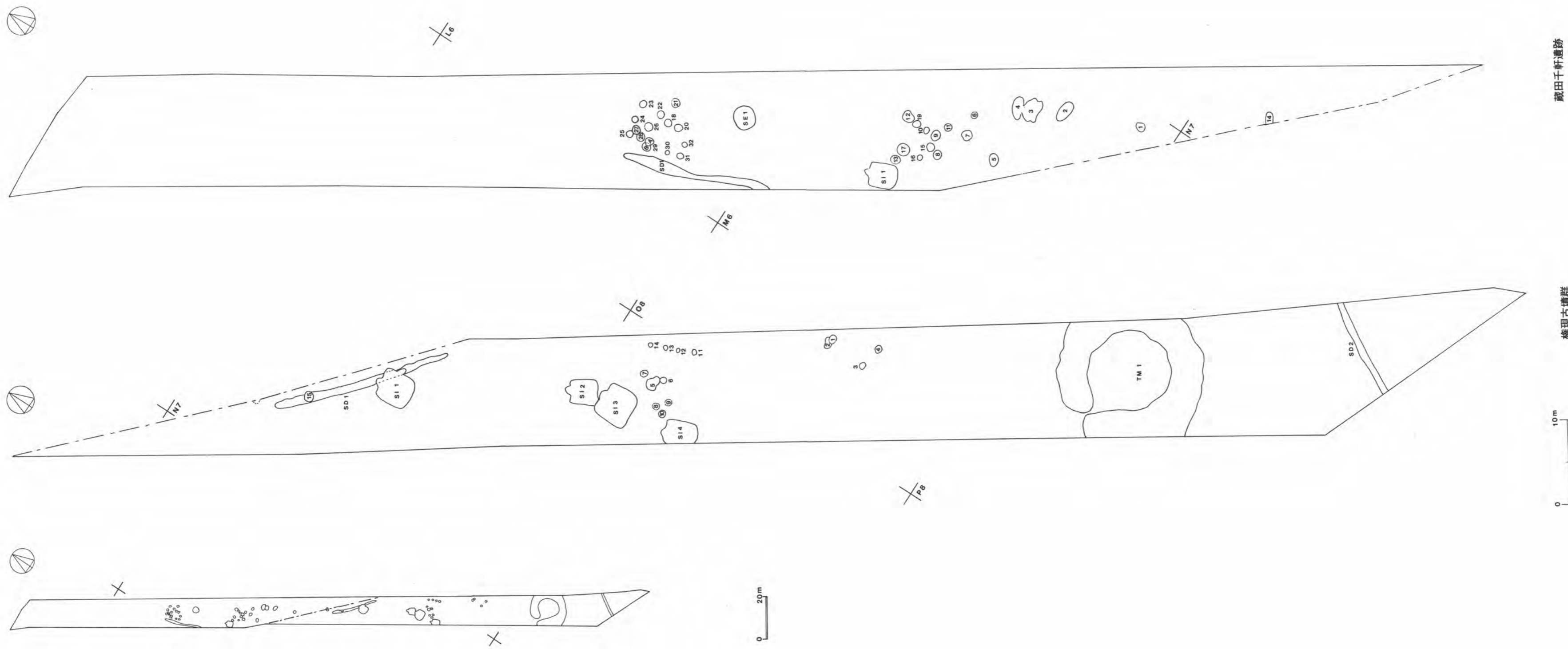
第1号住居跡（第59図）

位置 調査区のほぼ中央部のM6d4区を中心に確認された。

規模と平面形 長軸3.1m、短軸2.8mの不整形を呈する。

主軸方向 N-28.5°-W。

壁 北壁2.8m、東壁3.1m、南壁2.9m、西壁3.1mを測る。ロームで直立ないしやや外傾しており、壁高40～60cmを測る。

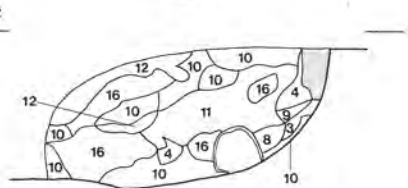
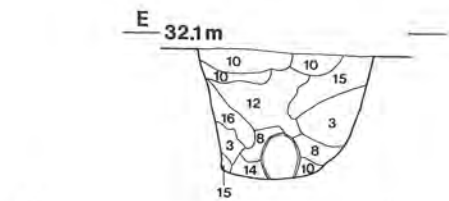
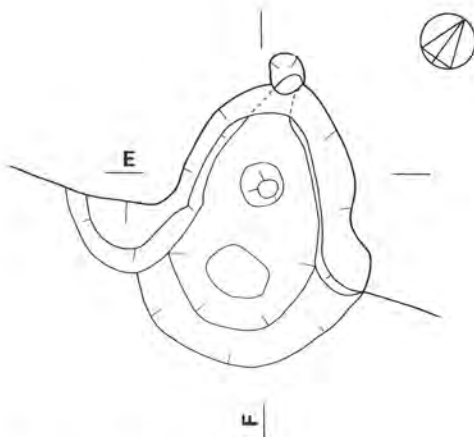
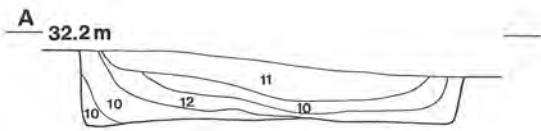
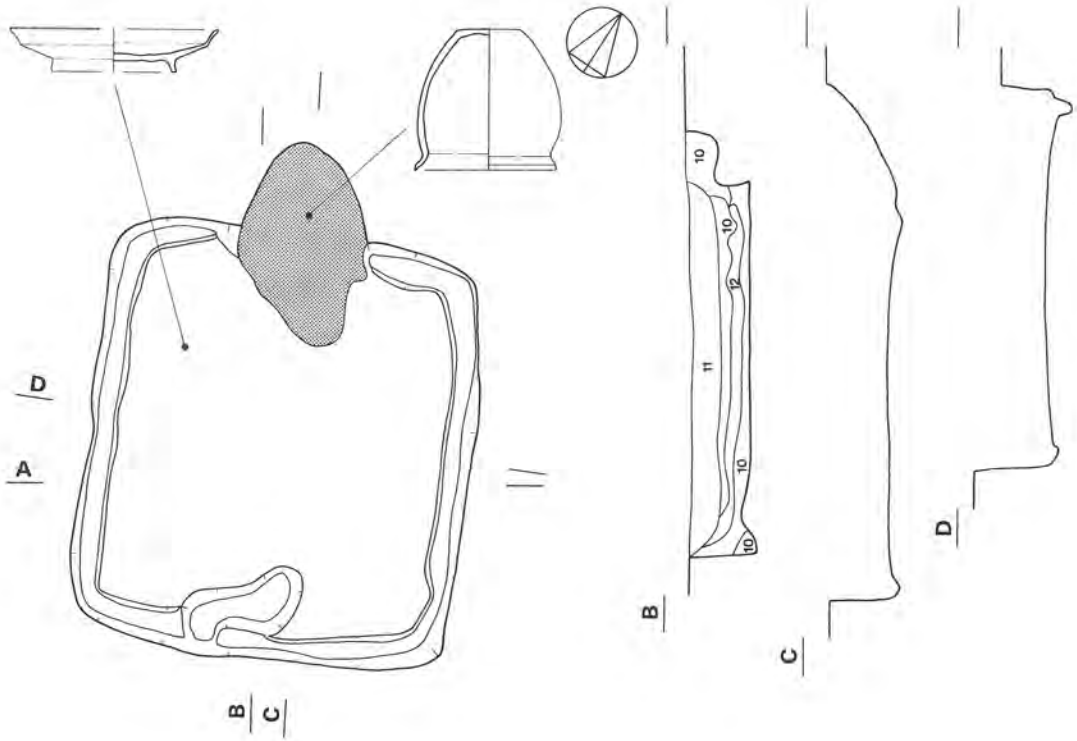


蔵田千軒遺跡

権現古墳群

0 10m

第58図 蔵田千軒遺跡・権現古墳群遺構配置図



第59图 第1号住居跡実測图

壁溝 竈の部分を除いて全周する。幅10～20cm、深さ6～10cmである。

床 中央部はロームの直床と思われ硬いが、その他は軟らかである。全体的には平坦で良く踏み締められているが、東側はやや壁にむかって傾いており、南壁中央部の床上には粘土塊が不定形状に広がっていた。

ピット 床面上、壁外ともに精査したが検出できなかった。

竈 北壁中央部に付設され、規模は最大長、最大幅とも126cmを測り、形状的には円形を呈し、壁外へ70cm掘り込まれている。砂質粘土とロームブロックを混ぜて構築され、両袖部は良く残るが、天井部は奥部を除いて崩壊している。奥部には煙出しの穴が17×14cmで斜上方へむけてあけられている。火床は床面を最深部で5cmと浅く皿状に掘り窪めており、長径25cm、短径19cmの不整形円形を呈している。火床部から煙出しにかけての底面は良く焼けており、ロームが硬化してガリガリしている。また、両袖部の下部、特に東側から奥壁部にかけては焼けが著しく焼土化している。竈内の中央部には土師器の甕が完形のまま伏せられた状態で出土し、支脚に転用されたものと思われる。

覆土 上位が黒褐色土、中・下位が褐色土・暗褐色土の凹レンズ状の堆積を示すが、各土層にはローム粒子を多量から中量、ローム小ブロックを中層から少量に含み、ロームの中ブロックや大ブロックを微量に含むことからみて人為堆積の可能性がきわめて高い。

遺物 前記の竈の遺物の他には、北西側の覆土上位から須恵器の盤が正位で出土したのが目立つくらいで、他は土師器の甕片などが少量出土しただけである。

所見 本跡は、遺構の形態や遺物から判断して平安時代前期（9世紀前半）に比定される。

第1号住居跡出土遺物（第65図1～4）

1・2は、土師器の甕で、2は竈内に伏せられていた完形の甕で、支脚に転用されていたものである。1は北西側の覆土下位から正位で出土した口縁部片である。推定口径24.4cmを測る大形の甕で、胴部の張りが大きく、口縁端部が外上方につまみあげられる特徴を有する。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデが施されている。胎土は長石・石英粒を多量、雲母片を少量含み、焼成は普通である。2は底部から内彎しながら立ち上がり、頸部は緩く括れ、口縁部は外反して端部がつまみあげられている。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内面はナデ、外面は縦位のヘラケズリが施されていて、含有物の移動痕が明瞭に認められる。底部内面には著しい剥落痕がある。胎土はやや大粒の長石・石英粒の他にチャートの微小礫を含み、粗雑である。焼成は普通である。口径15.7cm、底径7.1cm、器高15.9cmを測る。

3・4は、須恵器の盤である。3・4ともに北西側の覆土中から出土しており、3は上位から正位の状態で出土している。3は推定口径16.5cm、高台径9.8cm、器高3.4cmを測る。4は推定口

径21.2cm, 高台径13.6cm, 器高4.2cmを測る。共に体部中位に稜を有し、内外面ともヨコナデが施されている。高台は貼り付けで、底部はヘラ切りである。3は外面に、4は内面に灰釉がみられる。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は良好である。

2 土坑（第60～62図）

当遺跡からは32基の土坑が検出された。形状や規模には各々差異が認められるものの遺物を伴うものは13基と少なく、しかも土師器・須恵器等の破片が1～5点だけである。このような状態のため、当遺跡の土坑については、一覧表化して報告する。なお、僅かな出土遺物と北東側に群在する傾向から判断すると、土坑の時期は住居跡の時期に近い9世紀代に比定されるものと推定されるが、性格は不明である。

第19号土坑出土遺物（第65図5）

5は、須恵器の甑と思われる。推定口径32.2cm, 現存高6.8cmを測る。体部から直線的に外傾し、端部は更に外傾する。口唇部は平坦面をなす。口縁部内外面ともヨコナデが施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

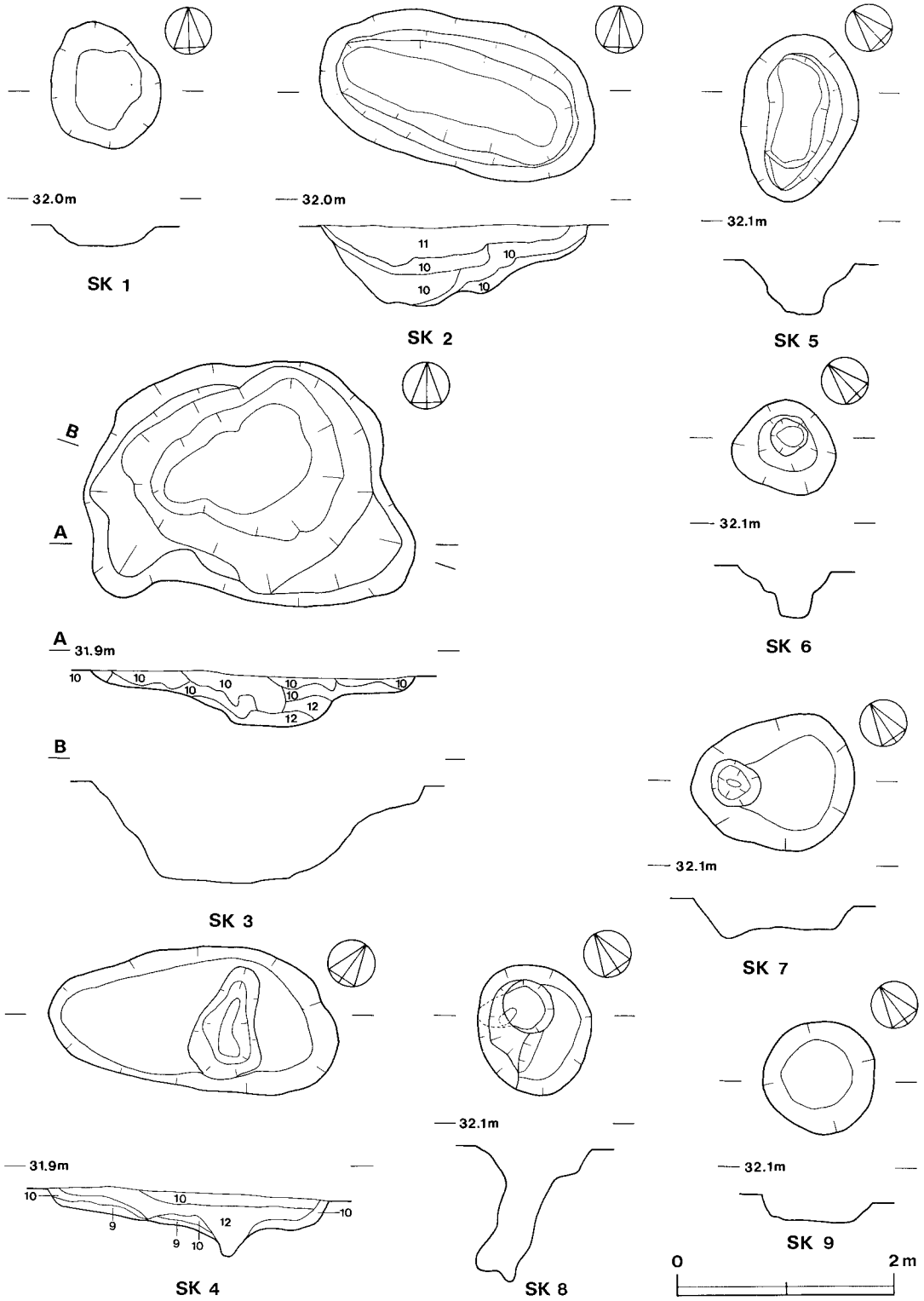
第20号土坑出土遺物（第65図6）

6は、土師器の小形甕である。小破片からの推定であるが口径11.0cm, 現存高4.9cmを測る。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデが施されている。口縁端部がつまみあげられ、胴部が張る器形を有する。口縁部の一部が内面より斜めに押圧されている。胎土は長石・石英粒、雲母片を含み、焼成は普通である。

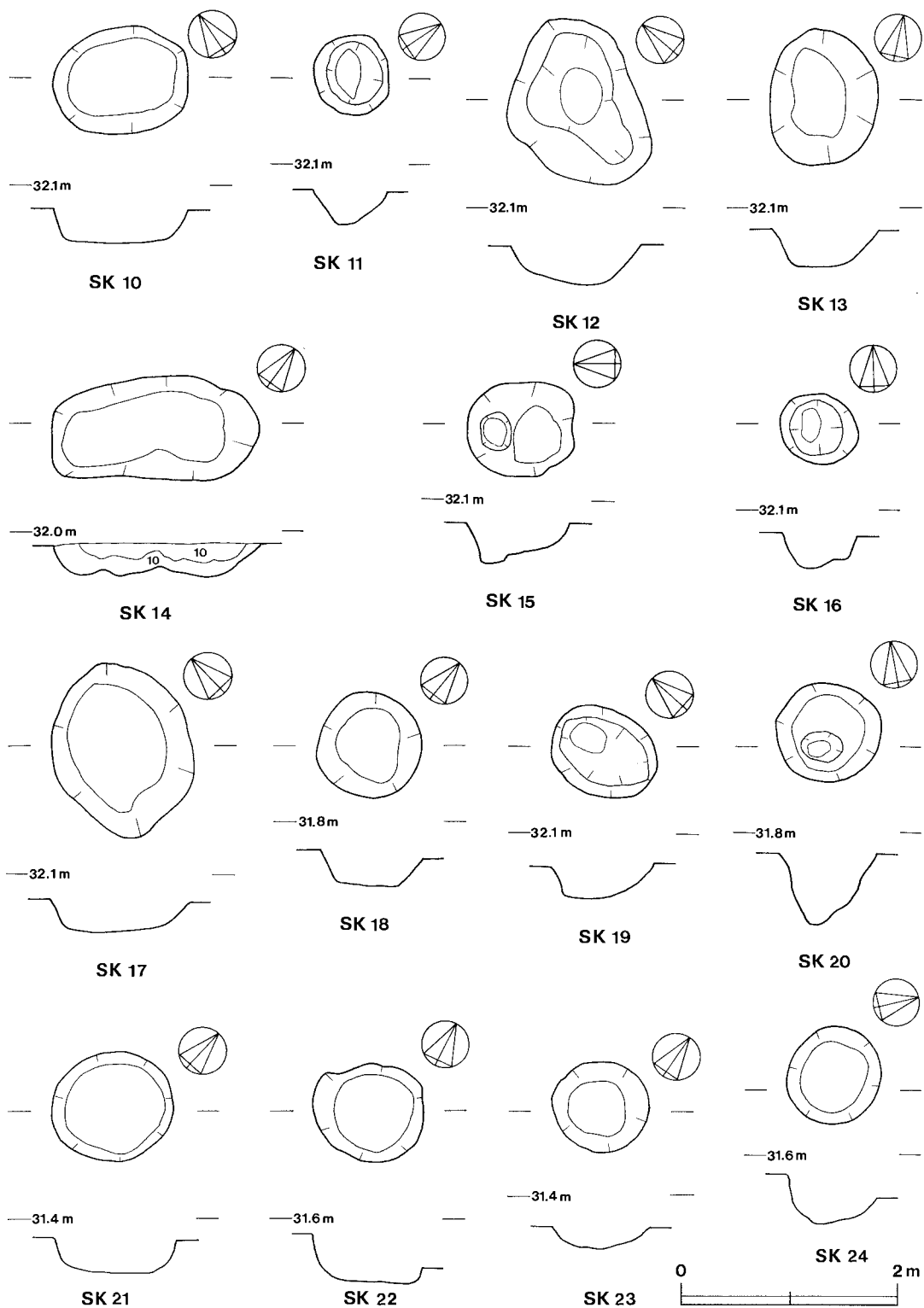
表4 蔵田千軒遺跡土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 (重複関係・性格)	図 版 番 号
				長 径 (軸)cm	短 径 (軸)cm	深 さcm						
1	M6i0	N-16° -W	楕 円 形	121	99	19	外傾	平坦	自然	土師片 1		第60図
2	M6g0	N-73.5° -W	楕 円 形	265	142	79	外傾	平坦	人為	0		第60図
3	M6h0	N-47.5° -E	不整楕円形	290	236	90	外傾	凹凸	自然	0	風倒木痕	第60図
4	M6h0	N-49° -E	楕 円 形	245	140	89	外傾	皿状	自然	0	北東側に落ち込む。	第60図
5	M6f0	N-50° -E	楕 円 形	158	107	51	外傾	平坦	人為	土師片 1		第60図
6	M6e0	N-44.5° -W	不整楕円形	96	87	46	外傾	平坦	人為	0		第60図

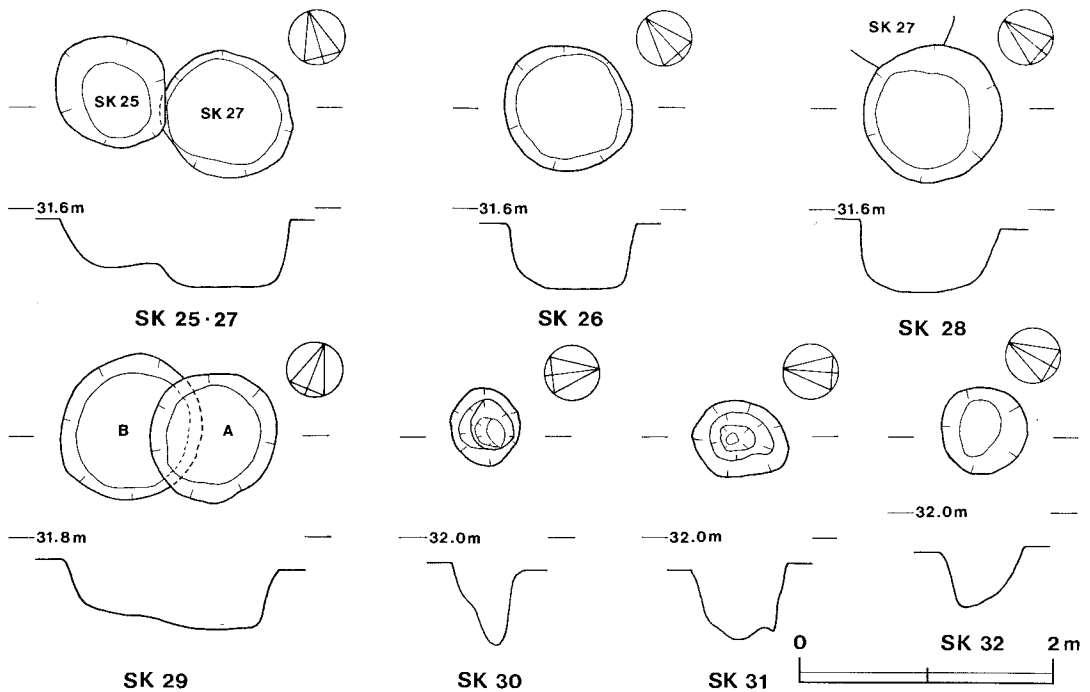
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (重複関係・性格)	図 版 番 号
				長 径 (軸)cm	短 径 (軸)cm	深 さcm						
7	M6e7	N-49° -W	楕 円 形	148	128	37	外傾	平坦	自然	0	北西側に落ち込みあり。	第60図
8	M6e5	N-36° -E	楕 円 形	123	99	30	外傾	平坦	自然	0	北側に深いピットあり。	第60図
9	M6e7		円 形	106	104	23	外傾	平坦	人為	0		第60図
10	M6d5	N-60.5° -W	楕 円 形	124	99	30	外傾	平坦	自然	土師片 2		第61図
11	M6d5		円 形	75	67	32	外傾	平坦	自然	須恵片 1		第61図
12	M6c5	N-16° -E	不整楕円形	162	125	36	外傾	皿状	自然	0		第61図
13	M6d5	N-28° -W	楕 円 形	123	105	42	外傾	平坦	人為	土師片 5		第61図
14	N7b1	N-51° -E	隅丸長方形	191	97	35	外傾	平坦	自然	0		第61図
15	M6e5	N-34° -W	楕 円 形	105	92	39	外傾	傾斜	人為	0	北側へ傾く。	第61図
16	M6d5		円 形	74	64	32	外傾	平坦	人為	0	西側に落ち込みあり。	第61図
17	M6d5	N-32° -E	楕 円 形	163	128	30	外傾	平坦	自然	土師・須恵片 2		第61図
18	L6h2		円 形	100	100	35	外傾	平坦	人為	土師片 1		第61図
19	M6d7	N-20° -E	楕 円 形	101	80	33	外傾	平坦	人為	須恵片 1	北側へ傾く。	第61図
20	L6h2		円 形	96	94	56	外傾	傾斜	人為	土師片 1	南西側へ傾く。	第61図
21	L6h2		円 形	113	103	30	外傾	平坦	人為	0		第61図
22	L6g2		円 形	108	95	49	外傾	平坦	人為	0		第61図
23	L6g2		円 形	88	86	22	外傾	皿状	人為	0		第61図
24	L6g2		円 形	95	86	47	外傾	凹凸	人為	0		第61図
25	L6g1	N-36° -W	楕 円 形	100	85	42	外傾	平坦	人為	縄前・土師片 5	S K27を切る。	第62図
26	L6g2		円 形	106	100	53	外傾	平坦	人為	0		第62図
27	L6g1		円 形	104	102	56	外傾	平坦	人為	縄前 1	S K25に切られる。	第62図
28	L6g1		円 形	110	108	56	外傾	平坦	人為	0		第62図
29A	L6h1		円 形	A 106	100	55	外傾	平坦	人為	0	2基の重複 AがBを切る。	第62図
29B	L6h1		円 形	B 115	111	43	外傾	平坦	人為	0		第62図
30	L6h1		円 形	60	57	65	外傾	V字状	人為	土師片 1		第62図
31	L6h2	N-12.5° -E	楕 円 形	75	62	57	外傾	皿状	人為	0		第62図
32	L6h2		円 形	70	68	51	外傾	V字状	人為	土師片 1		第62図



第60図 土坑実測図(1)



第61图 土坑实测图(2)



第62図 土坑実測図(3)

3 井戸

第1号井戸 (第63図)

位置 調査区中央部東側のL6i4区を中心に位置する。

規模と平面形 285×281cmの円形を呈し、水が湧き出す底面までで172cmを測る。

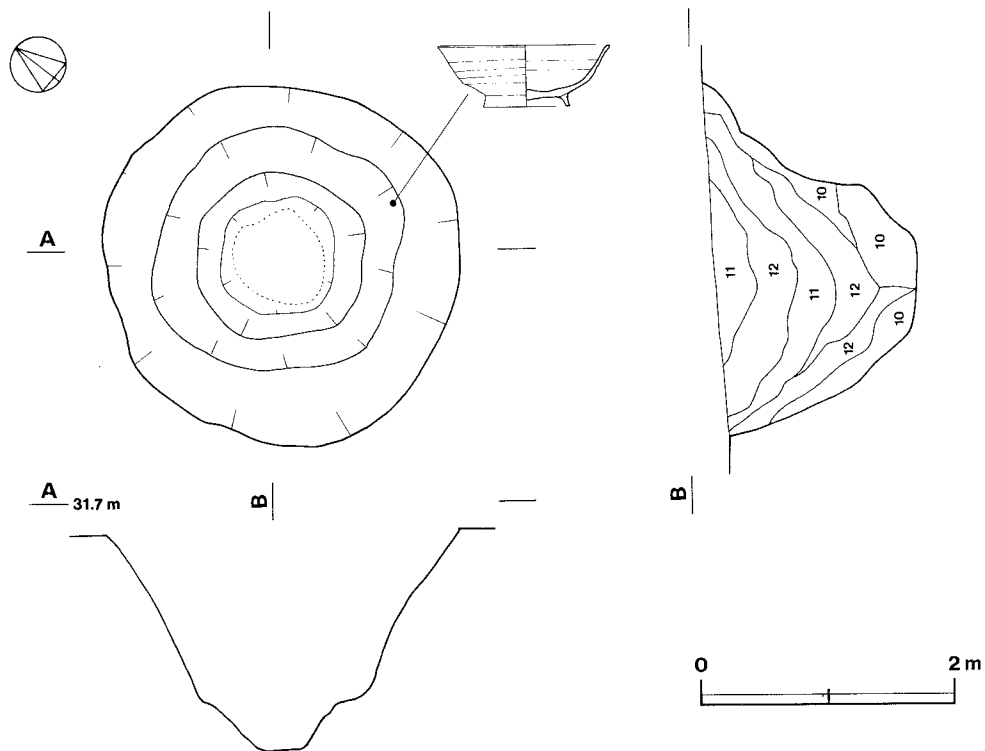
壁面 上位がローム、下位は鹿沼土で緩やかに外傾して立ち上がっているが、南西側には段を有する。

底面 隅丸形状を呈し、中央部が少し窪み、水が良く湧き出している。

覆土 全体としては凹レンズ状の堆積を示し、上位から中位は黒褐色土と暗褐色土が互層となり、下位と壁際は褐色土となる。各層にはローム粒子が多量から中量、ローム小ブロックが多量から少量に含まれ、上位には褐色土がまばらに、下位には黄褐色の粘土・鹿沼土の粒子や小ブロックを多量から少量に含有している。上位は締まりがあるが、下位は締まりが弱い。

遺物 覆土の上位を主に土師器の甕片が多量に出土した。大破片が少なく小破片が多いため復元に苦労したが3固体が復元できた。また、確認面と第1層中から出土した内黒の高台付坏は接合され完形となった。須恵器は少なく、坏や甕・蓋の破片くらいであった。遺物はほとんどが上位に集中しており、下位にはごく少ない。

所見 出土土器から平安時代前期(9世紀後半)の所産と推定される。



第63図 第1号井戸実測図

第1号井戸出土遺物（第65図7～10，第66図1～2）

第65図7～10は，土師器の甕で，覆土の上位からまとも出土した破片を接合したものである。7～9は口縁部から胴部にかけての破片，10は胴部から底部にかけての破片である。7～9は推定口径22.2～25.2cmを測る中形から大形の甕である。8の中形甕は胴部の張りが弱い，7・9は張りが強い。底部から内彎しながら立ち上がり，胴部中位に最大径を有し，頸部で緩く括れ，口縁部は外反する。口縁端部は外上方につまみあげられるもの(7・8)と直立気味となるもの(9)にわかれる。整形は口縁部内外面はヨコナデ，胴部内外面はナデの後，外面の中位以下に縦位のヘラケズリが加えられている。胎土はいずれも長石・石英粒を多く含み，粗雑である。焼成は普通である。10は底径9.2cmを測り，7に近い大きさを有すると思われる。整形は外面は縦位のヘラケズリ，内面はナデが施されている。胎土・焼成は7～9と同様である。

第66図1は，土師器の高台付坏で，内面黒色処理が施されている。体部下端に稜を有し，直線的に外傾して口縁部に至る。端部は若干端反り気味になる。高台は貼り付けで，底部はヘラ切りである。口縁の一部に指圧による歪みがある。整形は底・体部内外面ともヨコナデが施され，内面はきわめて丁寧なヘラミガキが施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み，焼成は普通である。口径13.7cm，高台径6.9cm，器高4.8cmを測る。

第66図2は、須恵器の坏である。底部から直線的に外傾し、口縁端部は丸く整えられている。整形は内外面ともヨコナデが施され、体部下端にはヘラケズリが施されている。底部はヘラ切りである。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。この他に須恵器の蓋の破片や須恵質の平瓦の断片なども出土している。

4 溝

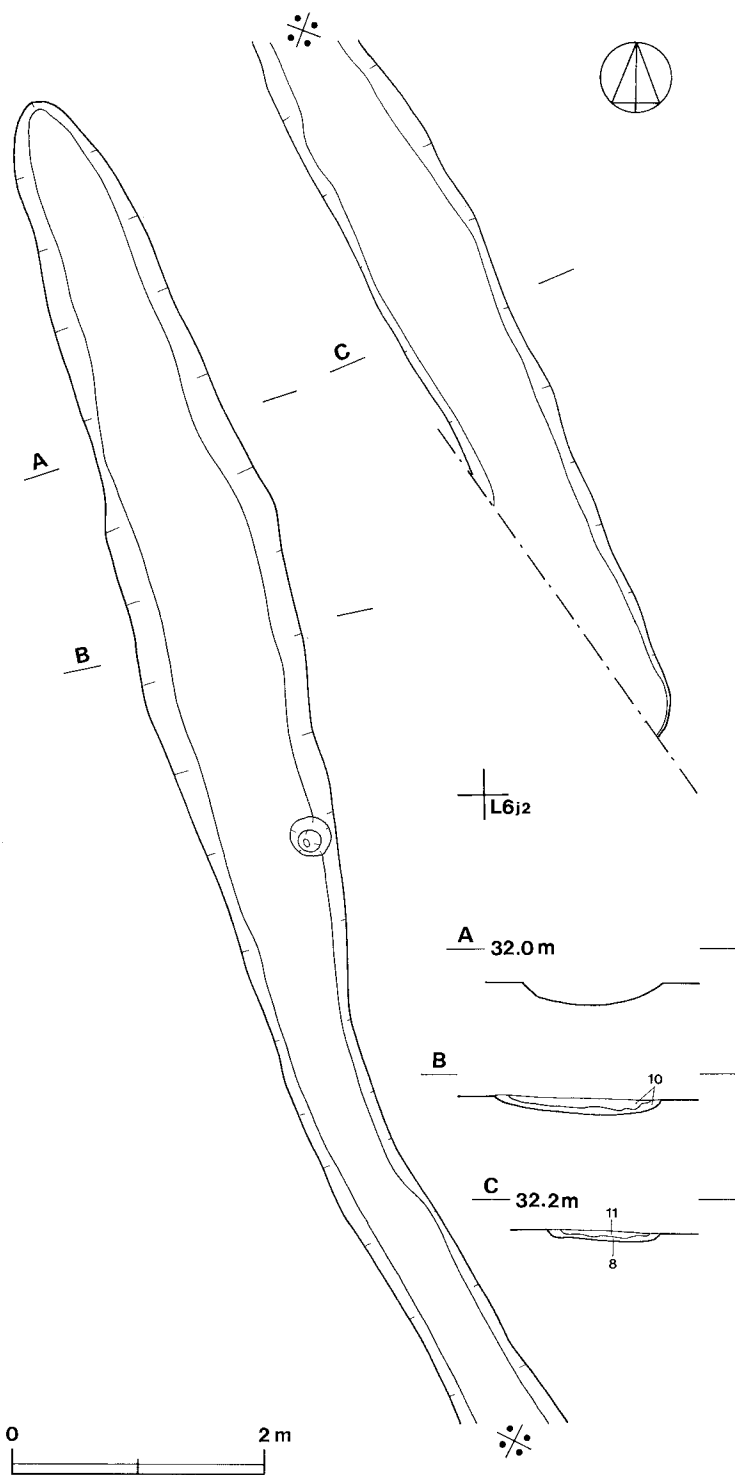
第1号溝（第64図）

位置 調査区中央部のL6h1・i1・j1, M6a2・b2区にかけて位置する。

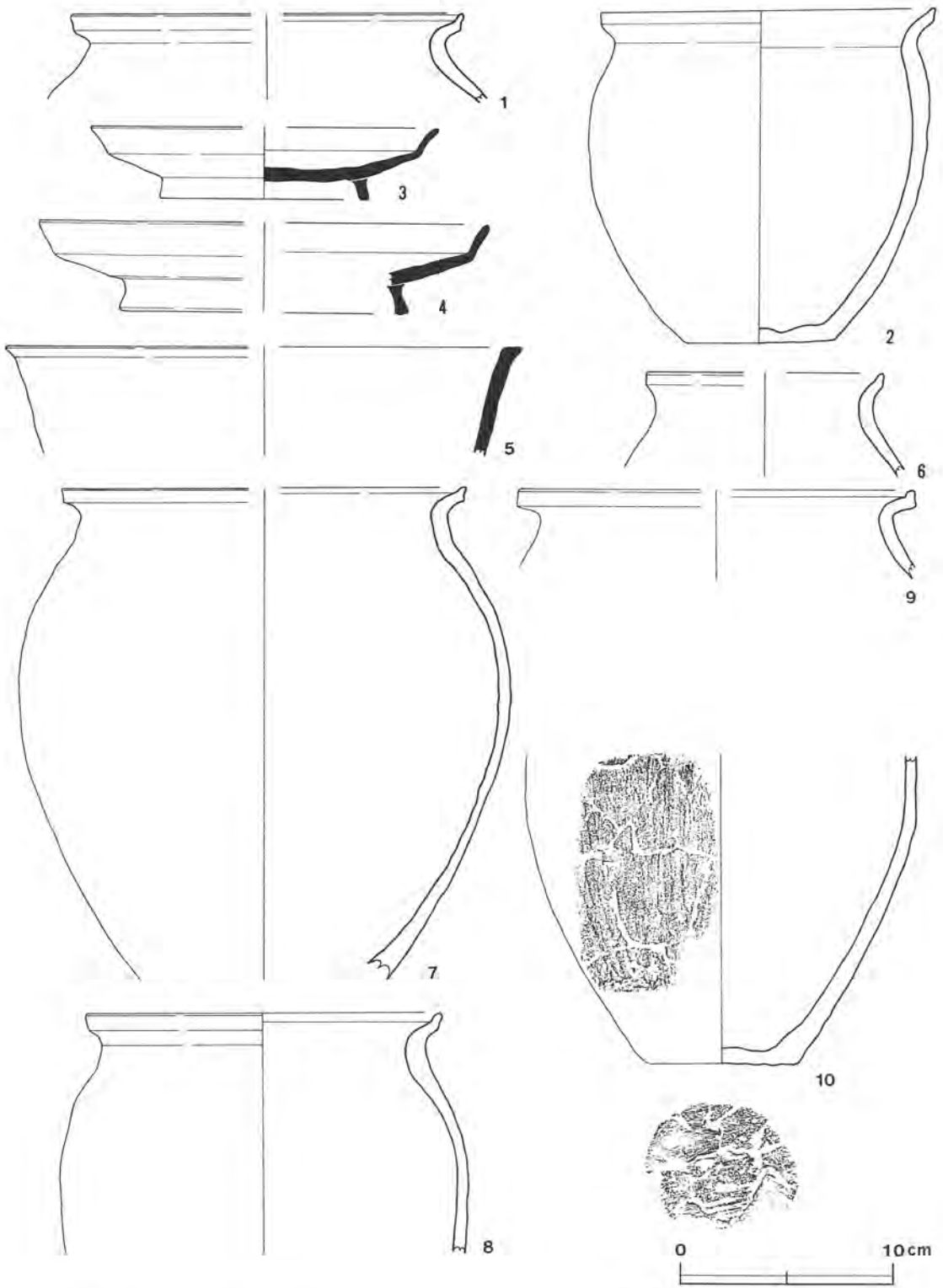
規模と形状 上幅60~130cm, 下幅30~80cm, 深さ14~22cmを測る。南西端部は調査エリア外へ延びているが、現存長16.1mである。断面形は浅い皿状を呈し、中央部やや北の東壁際に径30cm, 深さ24cmのピットを有する。

北側より南側の方が浅くなる。

覆土 上位が暗褐色土, 下位が褐色土となり, ローム



第64図 第1号溝実測図



第65図 遺構出土遺物実測図(1)

1・5・7~10 S=1/4



第66図 遺構・遺構外出土遺物実測・拓影図(2)

粒子を多量から少量，炭化粒子を少量から微量，焼土粒子微量を含み，締まりがある。

遺物 覆土中から土師器・須恵器・縄文中期の土器片が7点出土しただけである。

所見 出土土器はいずれも細片で，流れ込みと判断され，時期・性格ともに不明である。

第3節 その他

1 遺構外出土遺物

当遺跡からは平安時代の竪穴住居跡1軒，井戸1基および時期不明の土坑32基，溝1条が検出され，それに伴うかたちで土師器や須恵器片が出土している。一方，試掘時のトレンチ調査の際や表土除去，遺構確認作業中に検出されたり，他時期の遺構に混入するかたちで出土した若干の遺物がある。本項では，その中から特色あるものを抽出して解説する。

縄文式土器（第66図9～31）

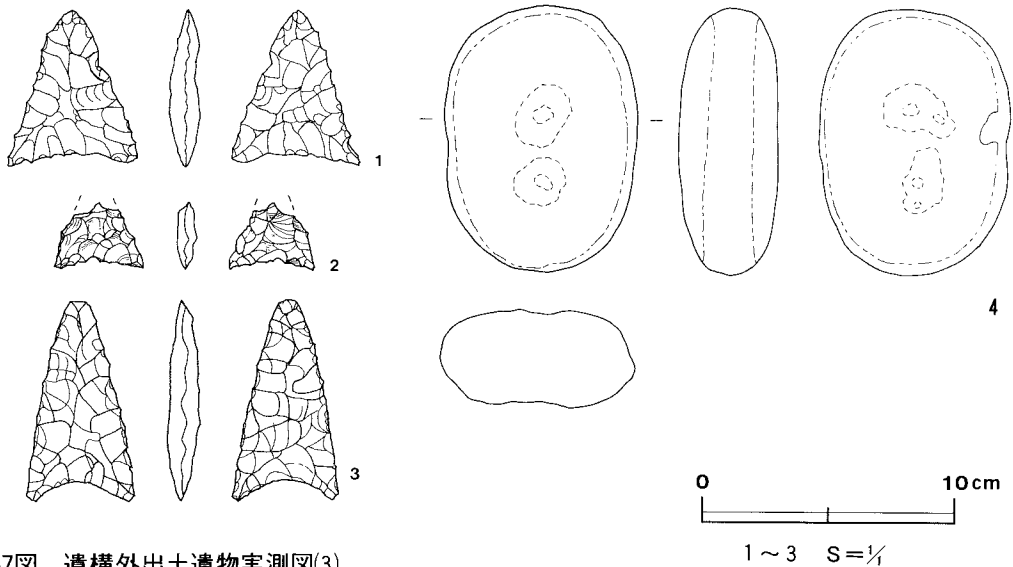
前期前半の黒浜式土器は9・10の2点で，ともに胎土に多量の繊維を含み，9には附加条縄文，10には木目状撚糸文が施されている。

前期後半の浮島式土器は11～15の5点で，胎土に石英粒・砂粒を多く含み，11には多截竹管による沈線文，12には並行沈線文と爪形文，13には波状貝殻文が施文されている。14・15には幅広の変形爪形文と並行ないし斜行の沈線文が施されている。14・15は他時期の第25・27号土坑から出土している。

中期前半の阿玉台式土器は多く，16～24の9点が出土し，胎土には長石・石英粒の他に雲母片が目立っている。16・23は無文の口縁部片で，共に口唇上に軽い刻み目が施されている。その他は隆帯による加飾が中心となっている。17は偏平な隆帯による楕円区画文に沿って結節沈線文が施された口縁部片である。18・20は断面三角形の隆帯による区画に沿って結節沈線文が充填されている。19・21・24は胴部片で，19は押圧が加えられた隆帯が垂下しており，21は断面三角形の隆帯下に波状沈線文が巡っている。24は刻み目を有する横位の隆帯下にV字状の貼付文が付されている。22は波頂部片で，突起頂部から左側縁にかけて刻み目が施されている。いずれも阿玉台式土器前半の段階に属する資料である。

中期後半の加曾利E式土器は25～31の8点である。26・27・30は加曾利EⅠ式土器に比定され，縄文地文上に太目の隆帯で長方形等の区画を描き，渦巻文を充填している。30は把手の内外面に沈線を加えている。31は胴部片で縄文のみである。25・28・29は加曾利EⅡ式土器と考えられ，25は渦巻文と楕円区画が施された口縁部片で，28・29は幅の狭い直線的磨消帯を有する胴部片である。地文の縄文はRLの縦位回転である。

土師器（第66図3）



第67図 遺構外出土遺物実測図(3)

3は、土師器の坏で、凹みのある小さな平底を有する。底部から内彎して立ち上がり、内面に明瞭な稜を有する。整形は口縁部はヨコナデの後にヘラミガキを、体部はナデの後にヘラミガキを施している。底部はヘラケズリである。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は良好である。口径14.7cm、底径5.0cm、器高5.5cmである。

須恵器（第66図4～8・32）

4は、須恵器の坏の底・体部片である。底部から直線的に立ち上がる。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りである。胎土は長石粒を多く含み、焼成は普通である。推定底径7.1cm、現存高2.3cmである。

5は、須恵器の高台付坏の底・体部片である。体部下端に稜を有して立ち上がる。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りである。高台は貼り付けである。推定の高台径7.0cm、現存高2.8cmである。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。

6は、須恵器の高台付坏の底・体部片である。体部下端に稜を有し、直線的に立ち上がる。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りである。高台は貼り付けで、ハの字状に開き、端部内面に稜を有する。薄手の作りである。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は良好である。推定の高台径7.8cm、現存高4.4cmである。

7は、須恵器の壺の底部片である。底部に高さ0.8cmの高台を貼り付け、内彎気味に立ち上がる。整形は内外面とも丁寧なヨコナデによりおこなわれており、内面は渦巻状を呈している。底部はヘラ切りである。底部内面に灰釉がかかっている。胎土は微砂を含み、緻密である。比較的厚手の作り、胎土からみると搬入品と思われる。底径9.0cm、現存高3.6cmである。

8は、須恵器の盤の底・体部片で、底部外面に「厨」の墨書がなされている。体部下端に稜を有して立ち上がる。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りである。高台は貼り付けである。体部内面は滑らかに整えられている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。高台径9.5cm、現存高2.5cmである。

32は坏の底部片で、糸切り手法を残す。平安時代のものと思われる。

石器（第67図1～4）

1～3はいずれも無茎石鏃で、抉り込みは浅い。1は先端部が再加工されている。3は先端部を僅かに欠損している。2は上半部が欠失している。1・3はチャート製・2は黒曜石製である。いずれも剝離は丁寧である。4は石けん状を呈する安山岩の磨石で、表裏面ともに2か所ずつの凹穴を有する。側面は良く使い込まれている。磨石兼凹石と言える。

第4節 小結

当遺跡からは竪穴住居跡1軒，土坑32基，井戸1基，溝1条の遺構が検出され，土器・石器等の遺物が遺物収納箱（60×40×20cm）に3箱分出土している。

竪穴住居跡は，調査区の中央部の西側に検出され，1辺が2.8～3.1mの不整形を呈し，北壁に竈が付設されている。出土遺物は，竈内から支脚に転用された土師器の甕の他には少なく，須恵器の盤などが出土したにすぎない。時期は9世紀の前半と考えられる。

土坑32基は，住居跡の北側に集中する傾向が認められる。遺物を伴う土坑は全体の4割程で，しかもほとんどが土師器・須恵器の小破片である。このため時期比定はむずかしいが，9世紀代のものが多いと考えられる。性格は不明である。

井戸は，調査区の中央部の東側に検出され，径2.8mの円形を呈し，深さ1.7mの素掘りである。出土土器は土師器の甕3点，内黒の高台付坏1点などで，時期は9世紀後半と考えられる。

溝は，調査区の中央部の西側に検出され，南西端部は調査エリア外へ延び，現存長16m余を測る。出土遺物も少なく，時期・性格ともに不明である。

遺物は上記の各遺構に伴うものの他にはごく少なく，試掘時のトレンチ調査や表土除去の際に出土したものが少量あるだけである。縄文式土器は前・中期の資料があり，黒浜式，浮島式，阿玉台式，加曾利E式土器に対比される。石器も少なく，石鏃3点と磨石1点である。この中で注目すべき遺物は，「厨」と墨書された須恵器の盤の破片である。「厨」の墨書例は県内でも少なく，当遺跡の性格を考える上でも有効な資料になるものと思われる。

第7章 権現古墳群

第1節 遺跡の概要

権現古墳群は、蔵田千軒遺跡の西側に重複するように位置している。昭和62年3月刊行の『茨城県遺跡地図』に10基から成る古墳群として登載されている。今回の調査においては、調査区の南部から低墳丘を有する円墳が確認され、これを第1号墳とした。この古墳はこれまでは未登録のものであり、内原町教育委員会では本墳を権現古墳群の第11号墳として登録した。

調査の結果、古墳1基、住居跡4軒、土坑15基、溝2条が検出された。

古墳は、直径20mほどの円墳で、西側に幅1m弱の陸橋部を有している。主体部は確認できなかった。周溝は幅3～4m、深さ1m余で巡る。本跡に伴うと思われる遺物の出土は少なく時期は明確ではないが、古墳時代後期のものと思われる。

住居跡は4軒で、調査区の北部から検出され、第2号住居跡と第3号住居跡は重複している。各住居跡とも北壁に竈を有するが、第1号住居跡だけは東壁にも竈が存在する。出土遺物は土師器・須恵器類を主とし、他に紡錘車・砥石などがある。4軒とも平安時代前期のものと思われる。

土坑は15基で、第3号住居跡の東・南側あたりにやや集中する。遺物を伴うものは約半数の8基で、平安時代の土師器・須恵器片だけである。住居跡に隣接し、住居跡と同様な土器を出土するものが多いことからこの土坑の時期は平安時代と推定されるが、性格は不明である。

溝は2条あり、第1号溝は蔵田千軒遺跡と権現古墳群を分けした旧道に並走するように検出されており、時期は不明だが地境い溝と考えられる。第2号溝は、調査区の南端を縦断するように延びているが、出土遺物が無く時期・性格ともに不明である。

出土遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に7箱分である。内容は、古墳・住居跡・土坑・溝から出土した土師器・須恵器類が主体で、他に表土やグリッド出土の縄文式土器片や石器類である。

第2節 遺構と遺物

1 古墳

第1号墳(第68図)

本墳は、調査区の南部のP8b₆₋₈、c₅₋₈、d₅₋₉、e₅₋₉、f₆₋₉区にかけて位置し、北東・南西側の一部は調査エリア外へ延びている。このため全容を把握し得ないが、墳丘は内径が約10m、外径約18mの円墳と考えられる。西側に幅58～125cm、長さ3.5mほどの陸橋部を有している。周溝は、

上幅3.4～5.5mで、外径約20～24mを有するものと推測される。

本墳は、高さ0.7～0.8mの低い墳丘を残しているが、墳丘の北・東・南の3か所に近代以降の所産と推定される炭焼窯が構築され、また他にも攪乱が多くみられており、遺存状況は不良である。

本墳の調査は、墳丘上に南西・北東、南東・北西の十文字状に土層ベルトを設け、他の部分を平面的に掘り下げる方法を採用した。墳丘に上記の炭焼窯等の攪乱が各所にみられたが、その部分を除いて考えると、現表土下20～40cmには古墳の盛土構築後に人為的ないし自然的に形成された締まりの無い土層が堆積しており、それ以下に古墳本来の盛土が認められる。現表土下65～70cmにはほぼ水平に旧表土と思われる褐色土が堆積している。旧表土層上の盛土は厚さ10～20cmの締まりのある黒褐色土、褐色土が水平に近い状況で重なっており、褐色土層中には黒褐色土・暗褐色土やローム土がブロック状、帯状に挟まれ、人為的な盛土であることを示している。古墳本来の盛土は厚いところで40～45cm、薄いところでは20cm程度しか残っていない。旧表土面での焼土や炭化物の存在は確認できなかった。

周溝は、西側の陸橋部を除いて全周するが、北東・南西側は周溝の外側の立ちあがり調査エリア外に位置するために全容は把握できていない。上幅3.4～5.5m、下幅0.4～1.5mを測り、断面形は逆台形状を基本とするが、墳丘側の傾斜がやや緩やかで、外側への傾斜が急となる。底面は平坦な部分が多いが、若干凹んだり、皿状を呈する個所もみられる。北側に1か所、南側に2か所ほど凹みがあり、その部分では深さ90cm以上を測る。他の平坦な部分では79～88cmである。底面・壁ともロームで明瞭に検出されており、硬い。底面の凹部は墳丘の盛り上げ用の土取り跡と考えられる。西側の周溝の内側上部にみられる溝状の落ち込みの性格は不明である。

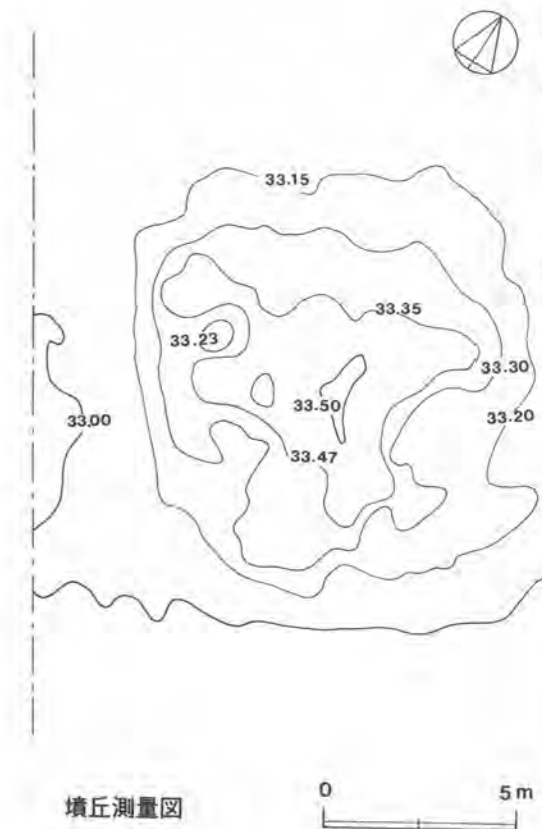
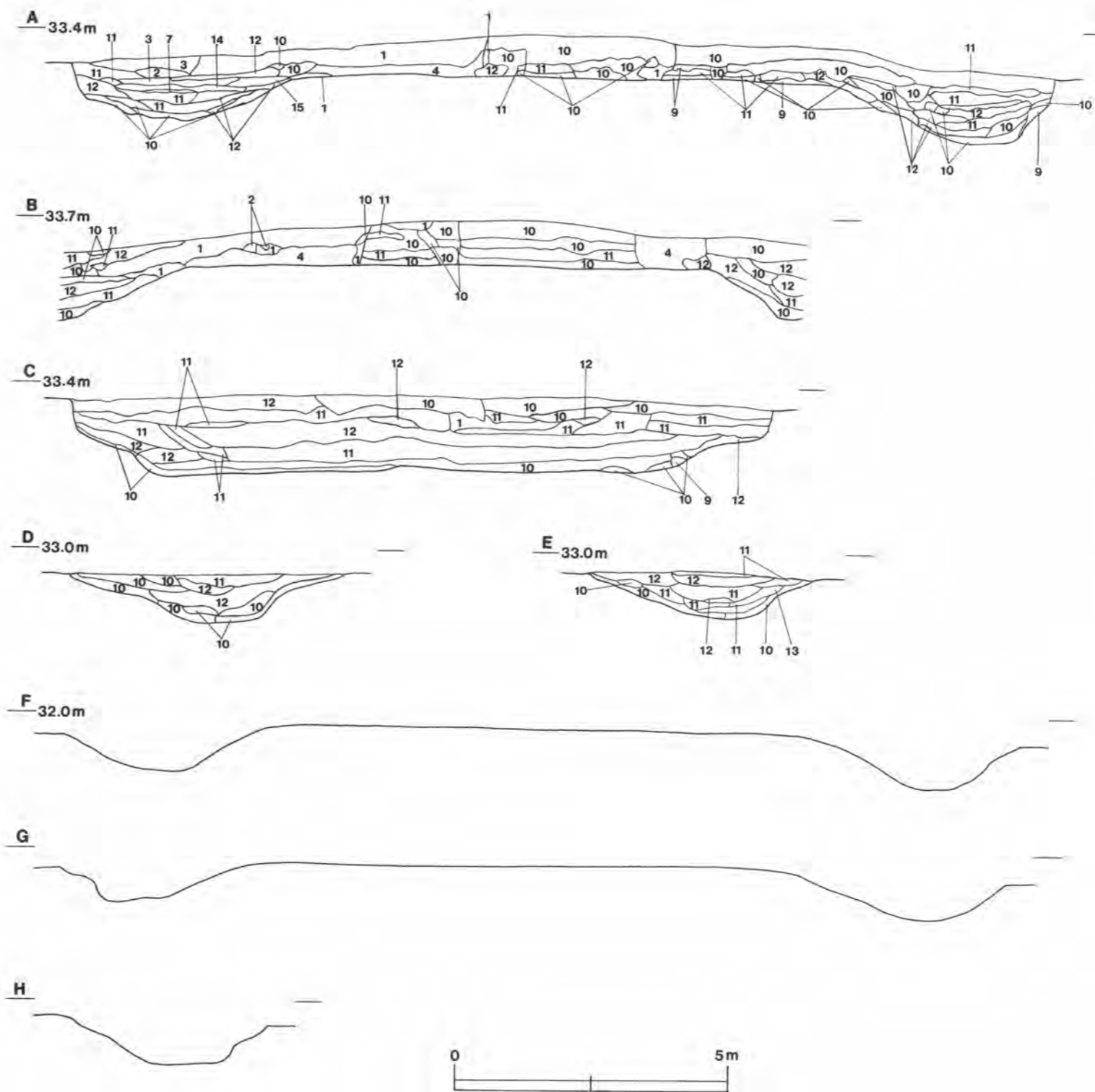
周溝の土層は、墳丘断ち割り土層ベルトの延長部分の他に周溝内の4か所で観察した。炭焼窯等の攪乱を受けている個所以外では良好な凹レンズ状の自然堆積を確認した。基本的には上位が黒褐色土、中位が暗褐色土、下位と壁際には褐色土が堆積しており、いずれも粘性は弱い締まりはある。北西側の周溝内土層では上位から中位にかけて黒褐色土と暗褐色土が互層的に堆積している。各土層には中量から微量のローム粒子を含んでいる。炭化粒子や焼土粒子は各土層とも微量以下である。

本墳の埋葬施設については、盛土除去中にも留意し地山面も精査したが検出できなかった。あるいは盛土中に存在し、後世の攪乱により失われたものであろうか。

本墳からの出土土器としては、東・北側の周溝の覆土上位の黒褐色土を中心に多量の平安時代前期（9世紀代）と思われる須恵器片（坏・高台付坏・盤・甕・高坏）と土師器の甕片が出土しているが、本墳の周溝部に後世に流れ込んだものと思われる。東側の周溝の内側寄りの覆土中位からは古墳時代後期の土師器の坏の破片が若干出土しており、本墳に伴う可能性が高い。また、



第68図 第1号墳実測図



南から西側にかけての墳丘の表土下および周溝の覆土上位からは埴輪片（人物・器材・円筒）がごく少量出土しているが、磨耗が著しく、本墳に伴うものとは断定できない。その他、墳丘の表土および周溝の覆土上位からは炭焼窯構築に伴う近代の陶器片・古銭「文久永寶」、雲母片岩等の石片が出土している。

上記のように出土遺物からは本墳の構築時期を特定することは困難であるが、墳丘や周溝の規模と形態、僅かな出土土器等から判断すれば、古墳時代後期の6世紀後半から7世紀前半のものと推定される。

第1号墳出土遺物（第69図1～9）

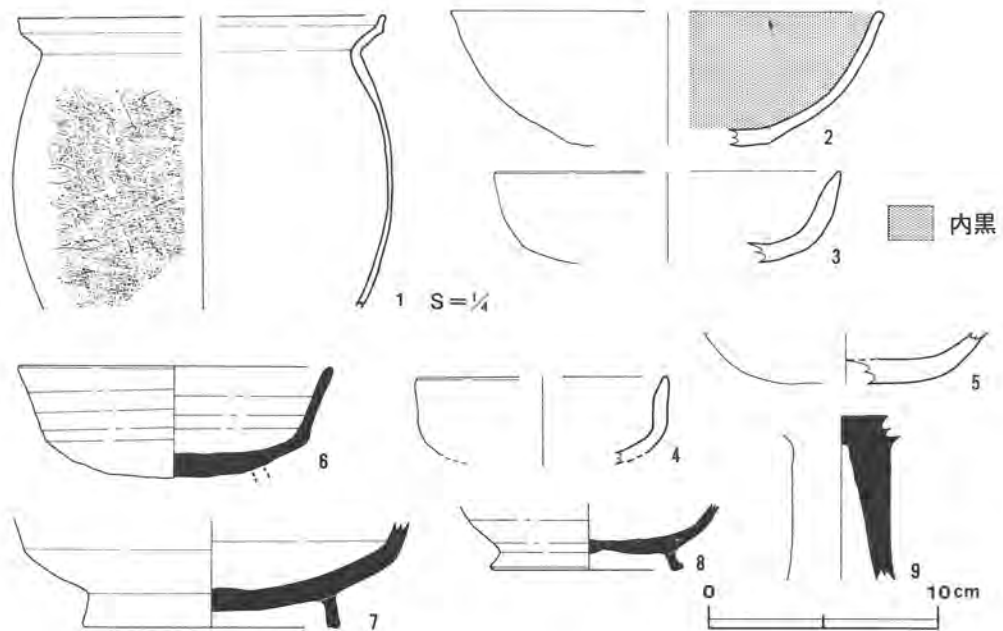
本墳に伴うものと思われる遺物は3～5の3点の土師器の坏の破片のみで、他は本墳の北・東側の周溝部に後世に流れ込んだものと判断される。3・4は体部から口縁部にかけての破片、5は底・体部のみの破片で、残存率は45%以下と低い。3は底部から内彎気味に立ち上がり、口縁端部は薄く、尖り気味になる。整形は内外面ともナデの後、内面にヘラミガキを施している。4は底部から内彎しながら立ち上がり、体部から口縁部にかけては直上気味となり、口縁端部は丸味をもつ。整形は内外面ともナデの後、内面にヘラミガキを施している。5は底部から内彎気味に立ち上がる。整形は外面はナデ、内面は放射状のヘラナデを施している。3点とも胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

1は、土師器の甕で、推定口径21.2cm、現存高16.9cmを測る。胴部中位に最大径を有し、頸部が括れ、口縁部は外反する。口縁端部は外上方へつまみあげられている。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデの後、外面の下半に縦位のヘラケズリが施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。薄手に作られており軽い。

2は、土師器の坏で、内面黒色処理が施されている。推定口径19.0cm、底径9.0cm、器高5.9cmを測る。底部から内彎して立ち上がり、口縁端部は角張って整形されている。整形は内外面ともヨコナデが施され、体部下端にはヘラケズリが施されている。底部はヘラ切りである。内面は丁寧なヘラミガキが施されている。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

6・8は、須恵器の高台付坏で、6は高台を欠き、8は体部から口縁部を欠いている。6は体部下端に稜を有し、口縁部にむけて外傾する。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りされている。全体的に磨耗が著しく、内面は特に滑らかになっている。8も体部下端に稜を有し、口縁部にむけて立ち上がる。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りされており、ヘラ記号が付されている。6・8とも胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。6は口径13.8cm、現存高4.9cmである。8は高台径8.0cm、現存高2.9cmである。

7は、須恵器の盤で、推定の高台径11.3cm、現存高4.7cmを測る。体部下端に稜を有し、口縁部



第69図 第1号墳出土遺物実測図

にむけて直線的に立ち上がる。高台は貼り付けである。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りである。内面は滑らかになっている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

9は、須恵器の高坏の脚部片で、現存高7.2cmを測る。坏底部から直線的に下降する。内外面ともヨコナデが施されている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。

2 竪穴住居跡

第1号住居跡（第70図）

位置 調査区北部のN7f5区を中心に確認された。

重複関係 第1号溝が本跡の北東コーナー部分の上面を切っている。

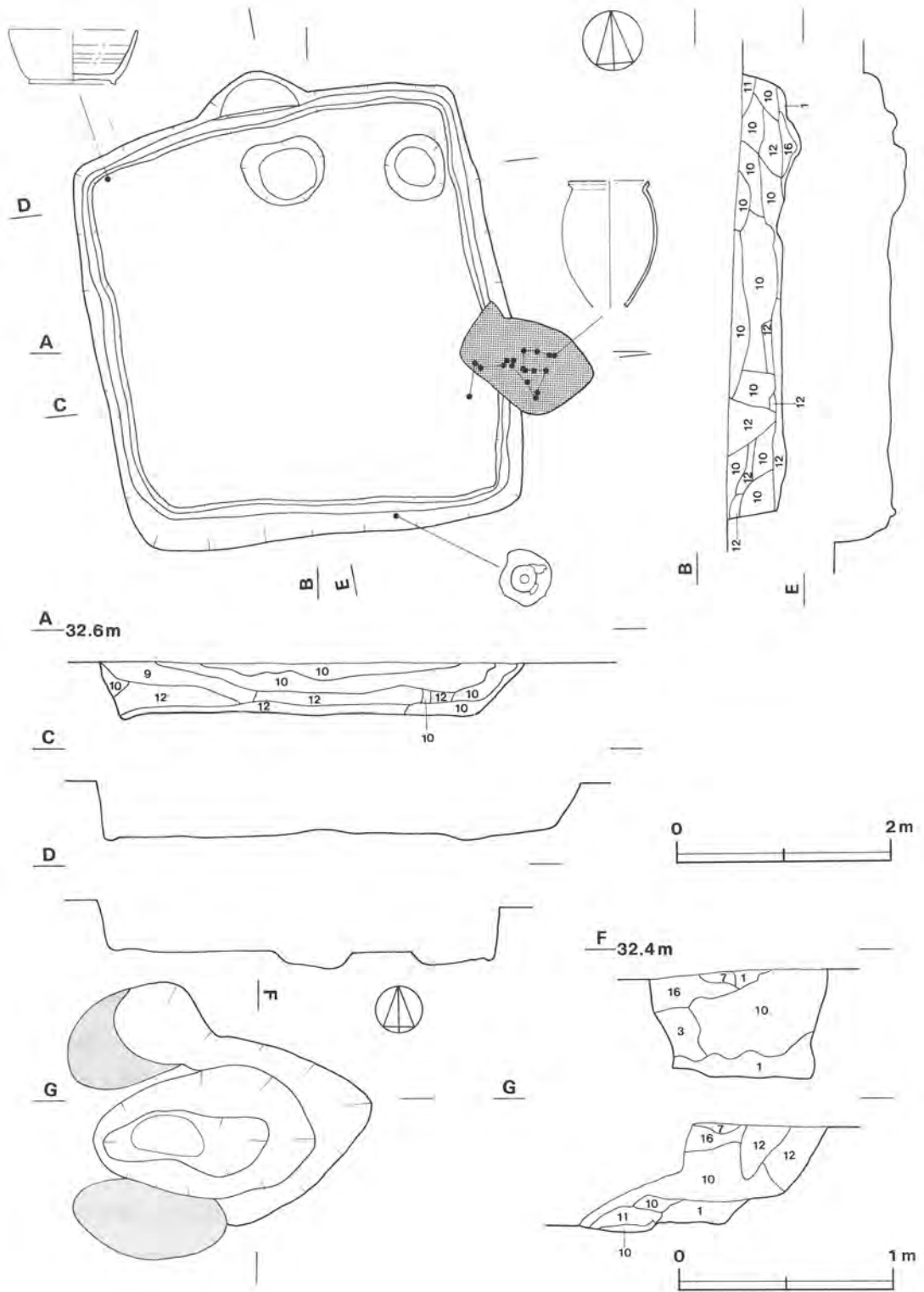
規模と平面形 長軸4.0m、短軸3.6mの不整形を呈する。

主軸方向 N-7°-W。

壁 北壁3.6m、東壁4.0m、南壁3.6m、西壁3.6mを測る。ロームで外傾しており、壁高40~50cmを測る。

壁溝 竈の部分を除いて全周する。幅10~15cm、深さ2~6cmである。

床 中央部と北壁を除く各壁の中央部の床は硬く締まっており、ロームの直床と思われる。各コーナー部は軟らかく貼床である。全体的には平坦で良く踏み締められている。



第70图 第1号住居跡実測図

ピット 北東コーナー部に径63×56cm、深さ13cmほどの浅い凹みがあるが、性格は不明である。

竈 本跡からは2基の竈が検出され、新旧関係が明らかである。古い方は北壁中央部にあり、痕跡を残すだけである。壁外へ32cm掘り込まれている。旧竈の前面には火床部を示す径78×59cm、深さ15cmの不整楕円形の凹みがあり、粘土を多量に含むにぶい黄褐色土により埋め戻されている。新しい竈は、東壁の中央やや南寄りに付設され、規模は最大長132cm、最大幅118cmを測る。楕円形を呈し、壁外へ68cm掘り込まれている。砂質粘土を主体に構築され、両袖部は残るが、天井部は崩落している。火床は床面を5cmときわめて浅く掘り窪めただけで、長径72cm、短径27cmの不整長楕円形を呈し、底面は良く焼けてロームが硬化しガリガリして赤い。両袖部の中央の下部は焼けが著しく焼土化している。

覆土 褐色土・暗褐色土が水平に近い凹レンズ状の堆積を示しているが、各層ともにローム粒子が多量から中量、ローム小ブロックが多量から微量、炭化粒子が少量から微量に含まれていることからみると人為堆積と考えられる。

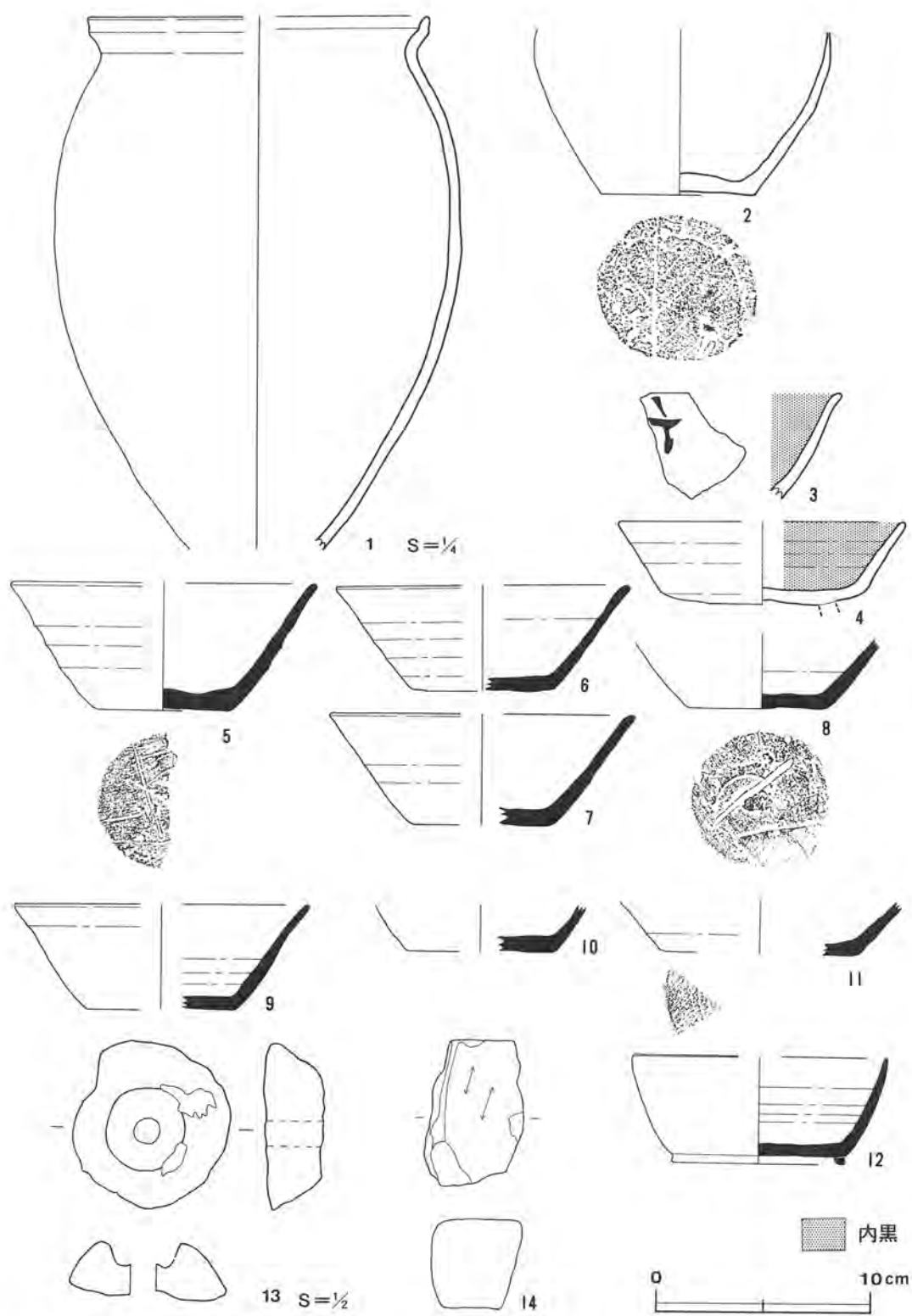
遺物 新竈内とその前面および西壁寄りの覆土下位を中心に土師器・須恵器片が出土している他南壁中央よりやや東側の壁近くの床面直上から正位で、紡錘車が1点出土している。

所見 本跡は、遺構の形状や出土遺物から判断して平安時代前期（9世紀前半）に比定される。

第1号住居跡出土遺物（第71図1～14）

1・2は、土師器の甕で、1は口縁部から胴部にかけて遺存し、2は胴部下半から底部にかけての破片である。1は竈内出土の破片を中心に南東コーナーよりの覆土下位から出土した破片が接合して器形復元できたもので、2は南西側の覆土中位から出土した破片が接合したものである。1は推定口径21.0cm、現存高33.1cmを測る中形の甕である。底部から内彎しながら立ち上がり、胴部中位に最大径を有し、頸部で緩く括れて口縁部は外反する。口縁端部は外上方につまみあげられている。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデの後に、外面下半に縦位のヘラケズリが施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。2は底径7.1cm、現存高7.7cmを測る。底部から内彎しながら立ち上がる。底部には明瞭な木葉痕を残す。整形は内外面ナデの後、外面には縦位のヘラケズリが施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。

3は、土師器の内黒の坏の破片で、外面に墨書されているが、判読不能である。4は、土師器の高台付坏の破片で、内面黒色処理が施されている。南西側の覆土中から出土し、高台は剥落している。体部下端に稜を有し、直線的に立ち上がる。整形は外面の口縁部から体部はヨコナデ、体部下端はヘラケズリが施され、底部はヘラ切りである。内面は丁寧なヘラミガキが施されている。外面は剥落痕が著しい。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。推定口径13.3



第71図 第1号住居跡出土遺物実測図

cm, 現存高3.9cmである。

5～12は、須恵器の坏で、12には高さ0.4cmの低い高台がついている。いずれも残存率が40%以下の破片で、覆土の西側から出土している。12は北西コーナー部の覆土中位から正位で出土している。5～7・9は推定口径が13.7～14.2cm, 底径6.2～6.9cm, 器高5.0～6.0cmを測る。9～11は推定口径が6.2～9.0cmを測る。いずれも底部から直線的に外傾し、口縁部にむけて少しずつ器厚を減じていく。9は体部に若干張りを有し、口縁直下が段状に凹む。整形は内外面ともヨコナデが施されて、底部はヘラ切りである。11の底部外面には5重の同心円文が認められる。5・7・8の底部外面にはヘラ記号がある。胎土はいずれも長石・石英粒を多く含み、焼成は普通である。12は底部から内彎しながら立ち上がり、口縁端部は尖り気味に薄くなる。整形は内外面とも丁寧なヨコナデが施され、外面は特に滑らかである。高台は貼り付け、底部はヘラ切りである。胎土は微砂を少量含み、きわめて良好で水漉された粘土を用いていると思われ、明らかな搬入品である⁽¹⁾。推定口径11.8cm, 底径8.0cm, 器高5.1cmである。

13は、土製の紡錘車で図示のように特異な形状を呈している。重量は39.2gである。14は、北西側の覆土中から出土した砂岩の砥石の破片である。

第2号住居跡（第72図）

位置 調査区北部の07a8区を中心に確認された。

重複関係 第3号住居跡の北壁の一部と本跡の南西コーナー部が重複するが、本跡の方が古いと思われる。

規模と平面形 長軸3.2m, 短軸3.0mの方形を呈する。

主軸方向 N-33°-W。

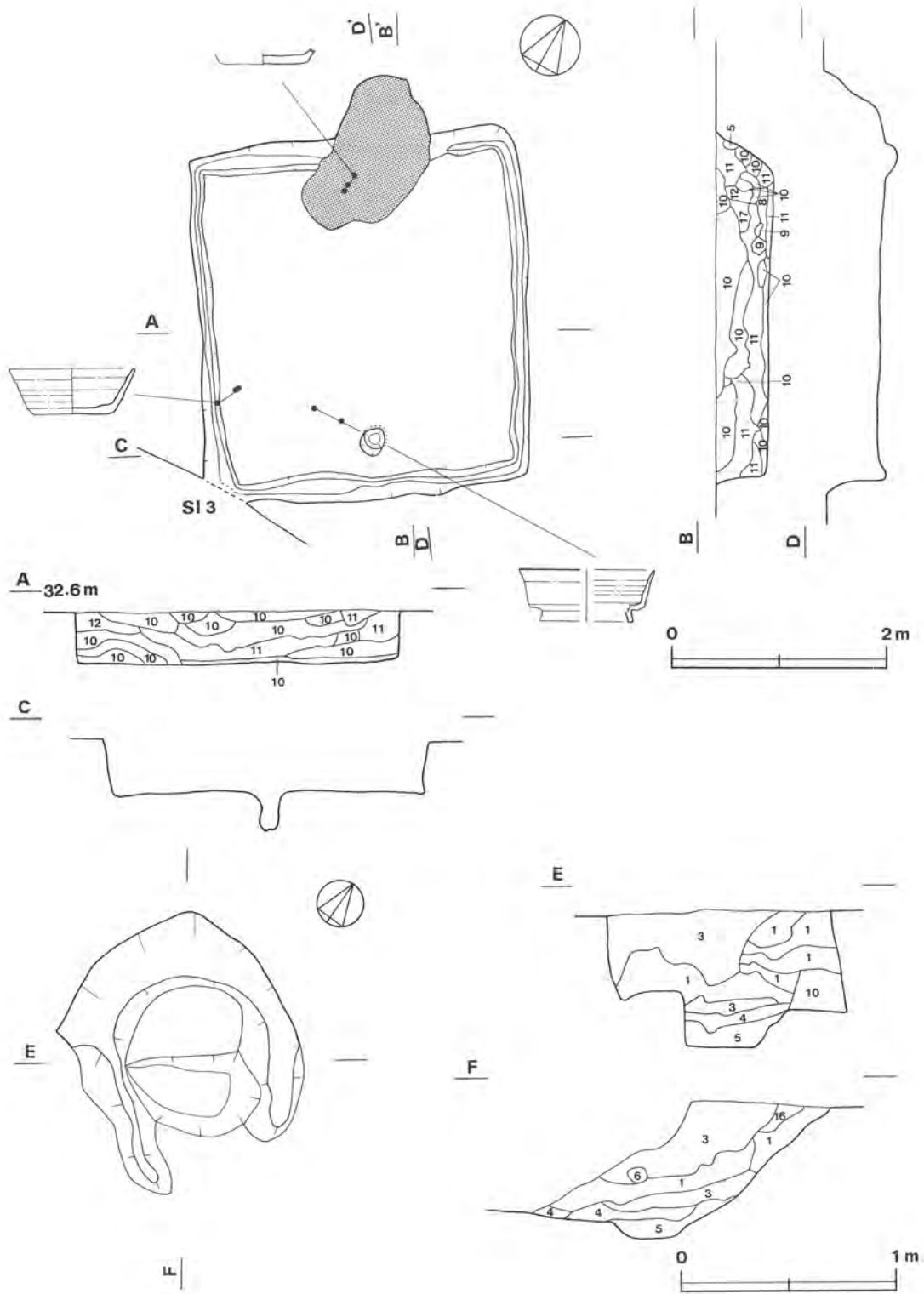
壁 北壁・南壁3.0m, 東壁・西壁3.2mのロームで直立ないしやや外傾しており、壁高45～52cmを測る。

壁溝 竈の部分を除いて全周する。幅10～15cm, 深さ3～8cmである。

床 中央部は硬く踏み締まっているが、コーナー部分を含めた周囲は軟らかで貼床と思われる。

ピット 南壁中央部に径25×22cm, 深さ36cmで若干内側へ傾くピットがあり、位置・形状からみて出入口施設に伴うものと思われる。北コーナー部には径45×41cm, 深さ19cmの浅い凹みがあるが貯蔵穴とは考えにくく性格は不明である。

竈 北壁中央部に付設され、規模は最大長128cm, 最大幅108cmを測る。楕円形を呈し、壁外へ59cm掘り込まれている。砂質粘土を主体に構築され、両袖部が残るが、西側の方が良く残っている。天井部は崩落し、火床は床面を最深部で9cm掘り窪めており、長径71cm, 短径61cmの不整楕円形を呈し、中央部に段を有し、奥部へむかって急傾斜で立ち上がっている。火床は良く焼けてローム



第72图 第2号住居跡実測図

が赤変硬化しており、ガリガリ、ゴツゴツという状況を呈している。

覆土 褐色土，暗褐色土，黒褐色土がモザイク状に堆積し，ローム粒子，ローム小ブロック，中ブロックがまだらに含まれており，明らかな人為堆積を示している。

遺物 本跡からの出土遺物はきわめて少なく，竈内から須恵器片，南側の覆土下位に若干の須恵器・土師器片が出土しただけである。

所見 本跡は，遺構の形態や出土遺物から判断して平安時代前期（9世紀前半）に比定される。

第2号住居跡出土遺物（第74図1～4）

1～3は，須恵器の坏で，3は高台付坏である。1は南コーナー部よりの覆土下位から逆位で出土した破片が接合したもので，70%程度の残存率である。2は竈内から出土した底部片である。

1は口径11.6cm，底径6.8cm，器高4.3cmを測る。底部から直線的に外傾している。整形は内外面ともヨコナデが施され，体部下端はヘラケズリされている。底部はヘラ切りである。胎土は長石・石英粒を含み，焼成は普通である。2は底径7.2cmを測る。整形・胎土・焼成は1と同様である。3は推定口径17.6cm，高台径12.3cm，器高6.9cmを測る大形の坏である。体部下端に稜を有し，体部は直線的に外傾し，中位で若干角度を変えて更に外傾する。高台は貼り付けで，ハの字状に開く。整形は内外面ともヨコナデが施されている。3は南側の覆土中位から出土した破片が接合したものである。胎土は長石・石英粒を含み，焼成は普通である。

4は須恵器の高坏の脚部片である。本跡の中央部やや東側の覆土下位から出土した破片と第4号住居跡の南側の覆土下位から出土した破片が接合したものである。脚部は坏部下端から内彎しながら下降し，裾部は大きく広がる。脚端部は直立気味となり，内面に稜を有する。脚部には4か所の縦長の透孔が切り込まれている。整形は内外面ともヨコナデが施されている。胎土は長石・石英粒を含み，焼成は普通である。推定脚径は13.4cm，現存高11.0cmである。

第3号住居跡（第73図）

位置 調査区北部の07b₈区を中心に確認された。

重複関係 第2号住居跡の南西コーナー部を本跡が切っている。

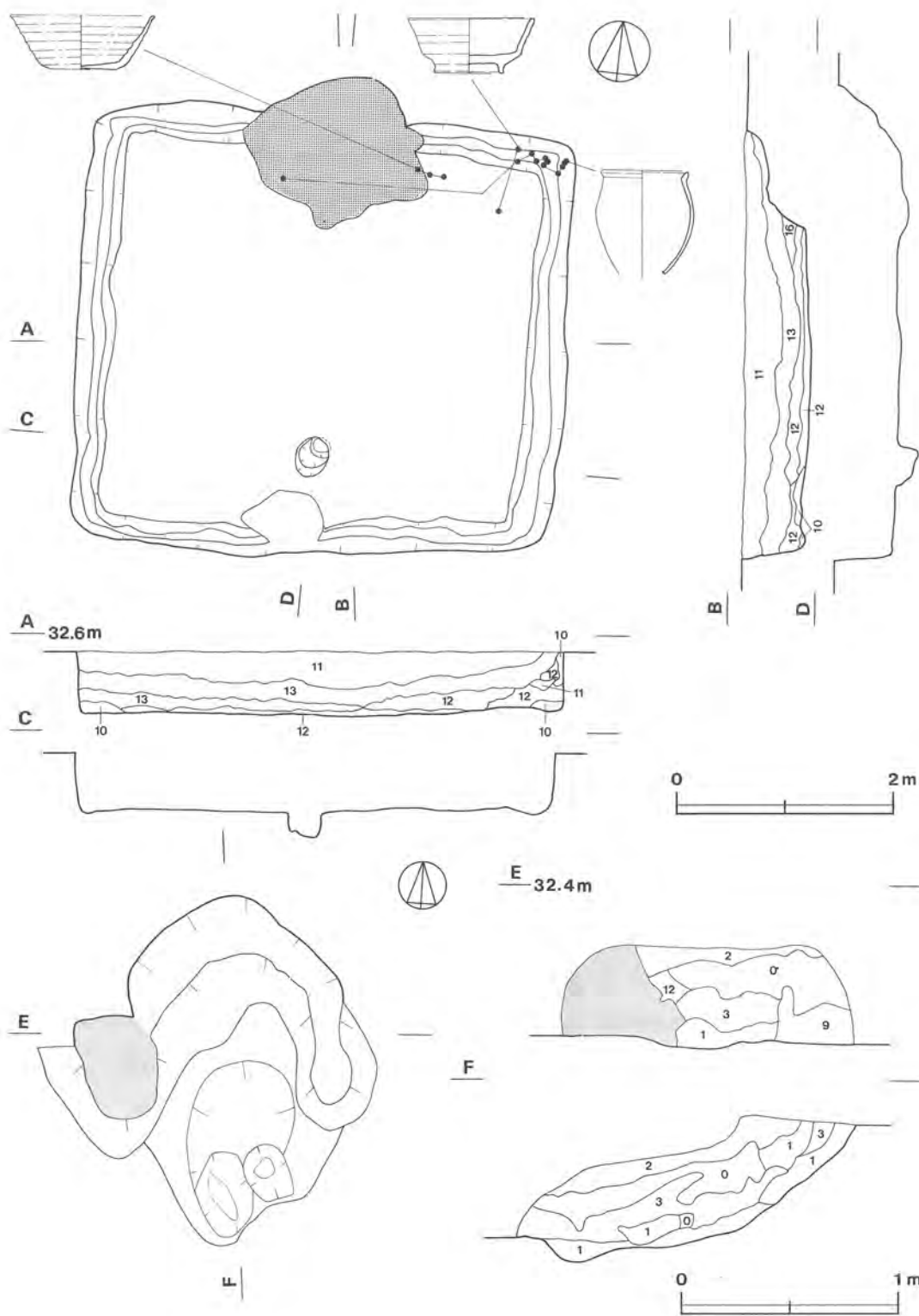
規模と平面形 長軸4.4m，短軸3.7mの不整形を呈する。

主軸方向 N-1°-W。

壁 壁の長さは北壁4.4m，東壁3.7m，南壁4.3m，西壁3.9mのロームで直立ないしやや外傾しており，壁高50～60cmを測る。

壁溝 竈の部分を除いて全周する。幅15～40cm，深さ3～6cmである。

床 中央部と各壁の中央部の床は硬く締まっており，ロームの直床と思われる。各コーナー部は



第73图 第3号住居跡实测图

軟らかく貼床である。全体的に平坦である。

ピット 南壁寄りの中央部に北東方向に傾いて掘り込まれた径38×31cm、深さ26cmのピットがあり、位置と形態からみて出入口施設に伴うものと思われる。

竈 北壁中央部に付設され、規模は最大長161cm、最大幅156cmを測るが、形状的には楕円形を呈し、壁外へ39cm掘り込まれている。砂質粘土を主体に構築され、両袖部が若干残るが、天井部は崩落しており、遺存状態は良くない。火床は床面を最深部で11cm掘り窪めており、長径83cm、短径55cmの不整楕円形を呈し、前方部に浅い凹みを2か所有する。火床は良く焼けており赤変硬化が著しい。

覆土 上位が黒褐色、中・下位が極暗褐色を呈し、壁際に褐色土がレンズ状に堆積しているが、各土層にローム粒子を多量から少量、ローム小ブロックが中量から微量に含まれており、人為堆積と思われる。

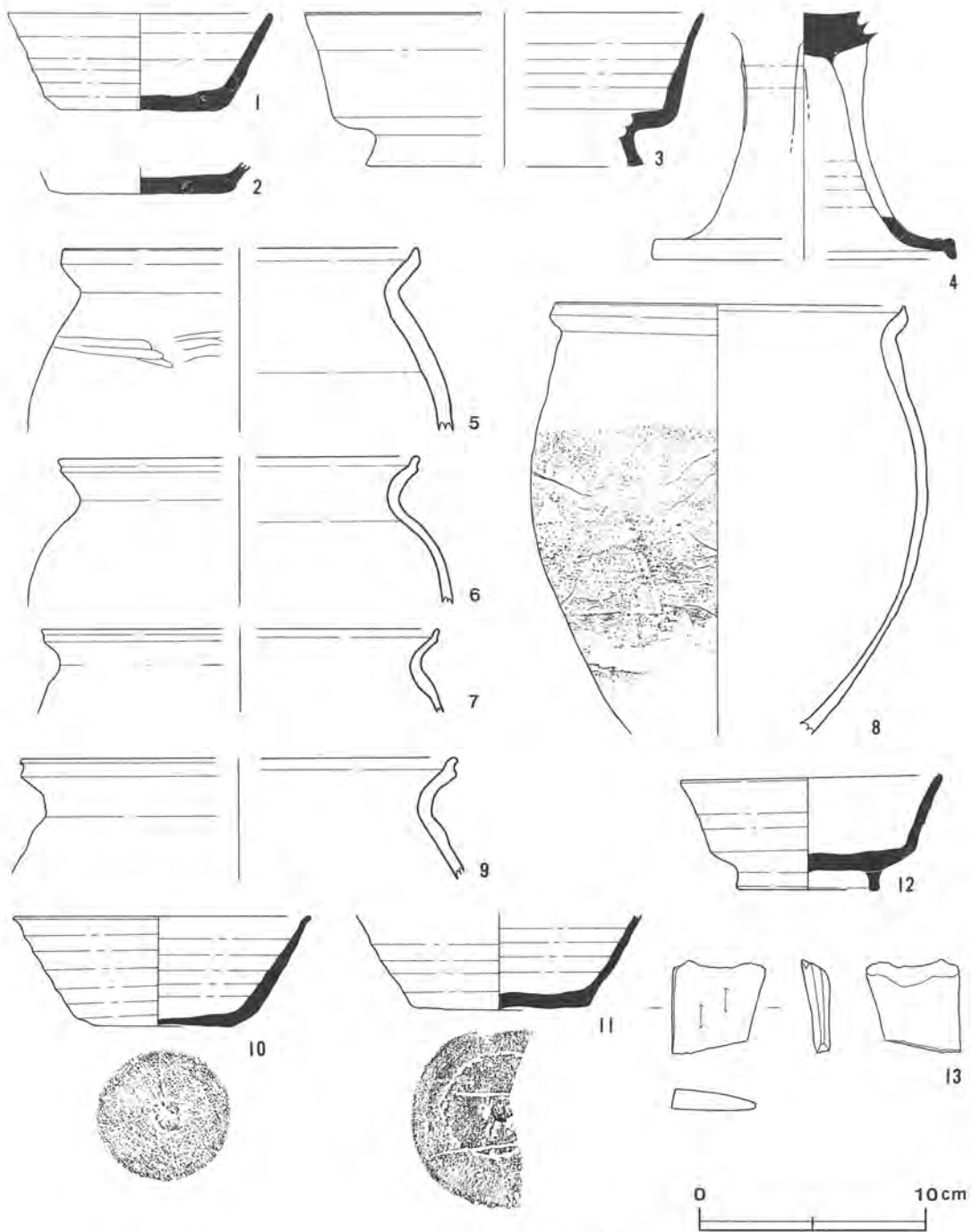
遺物 本跡からの出土土器は、竈の周囲に集中する傾向を示している。土師器の甕、須恵器の坏、高台付坏などが主となっている。他に南壁中央やや西寄りの覆土下位から砥石片が出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や出土遺物から判断して平安時代前期（9世紀前半）に比定される。

第3号住居跡出土遺物（第74図5～13）

5～9は、土師器の甕である。8は底部を除いてほぼ完存しており、他は口縁部から胴部上半部にかけての破片である。8は北東コーナー部の覆土下位からまとまって出土した破片が接合したもので、他は中央部から北側にかけての覆土中から散在して出土している。8は口径15.4cm、現存高19.3cmを測る小形甕で、他は推定口径19.2～23.2cmを測る中形の甕である。8は底部から内彎しながら立ち上がり、胴部中位に最大径を有し、頸部で緩く括れ、口縁部は外反する。口縁端部は尖り気味につまみあげられている。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデの後、外面下半部は縦位のヘラケズリが施されている。胎土は長石・石英粒や雲母片を含み、焼成は普通である。5～7・9は胴部の張りが8よりも強くなり、口縁端部がつまみあげられる特徴を有している。5の外面の胴部上半部には沈線状の強いナデが認められている以外は8と整形・胎土・焼成は共通している。5は器厚が厚く作られている。

10～12は、須恵器の坏で、12は高台付坏である。10と12は北東コーナー寄りの覆土下位から出土した破片が接合したもので、11は南側の覆土下位から正位で出土したものである。10は口径13.5cm、底径6.0cm、現存高4.8cmを測り、11は推定底径8.0cm、現存高4.3cmを測る。10は底部から直線的に外傾して、口縁端部は薄くなり、端反りとなる。整形は内外面ともヨコナデが施され、10の体部下端はヘラケズリされている。底部は共にヘラ切りで、ヘラ記号を有する。10は薄手の作りで軽い。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。12は口径11.5cm、高台径6.0cm、器高



5~7 S=¼

第74図 第2・3号住居跡出土遺物実測図

5.2cmを測る。体部下端に稜を有し、直線的に立ち上がる。高台は貼り付けである。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りである。胎土は長石・石英粒を多く含み、粗雑である。

焼成は良好である。

13は、薄手の砥石の破片である。

第4号住居跡（第75図）

位置 調査区中央やや北側の07d8区を中心に確認された。

規模と平面形 西側が調査エリア外となるが、不整形を呈するものと思われる。

主軸方向 N-28.5°-W。

壁 北壁2.5m、東壁3.6m、南壁2.1mを測る。ロームで直立ないしやや外傾しており、壁高60～75cmを測る。

壁溝 竈部分を除いて全周するものと思われる。幅6～40cm、深さ6～11cmである。東・南側の壁溝内には径5～8cm程度の小穴が10か所認められている。

床 中央部は硬く踏み締まっており、ロームの直床と思われる。壁寄りの周囲は軟らかく貼床である。中央やや西寄りに凹みがあるほか若干の起伏がみられるが、全体的には平坦である。

ピット 中央やや南寄りに径12×9cm、深さ13cmの小ピットがあるが、性格は不明である。

竈 北壁に付設され、規模は最大長137cm、最大幅118cmを測る楕円形を呈し、壁外へ44cm掘り込まれている。砂質粘土を主体に構築されているが、粘土の前方への流出が著しく、両袖部が若干残存するだけで、天井部は崩落している。火床は床面を最深部で11cm掘り窪めており、長径48cm、短径22cmの楕円形を呈し、ロームが焼けてガリガリ、ゴツゴツしているがあまり焼土化はしていない。

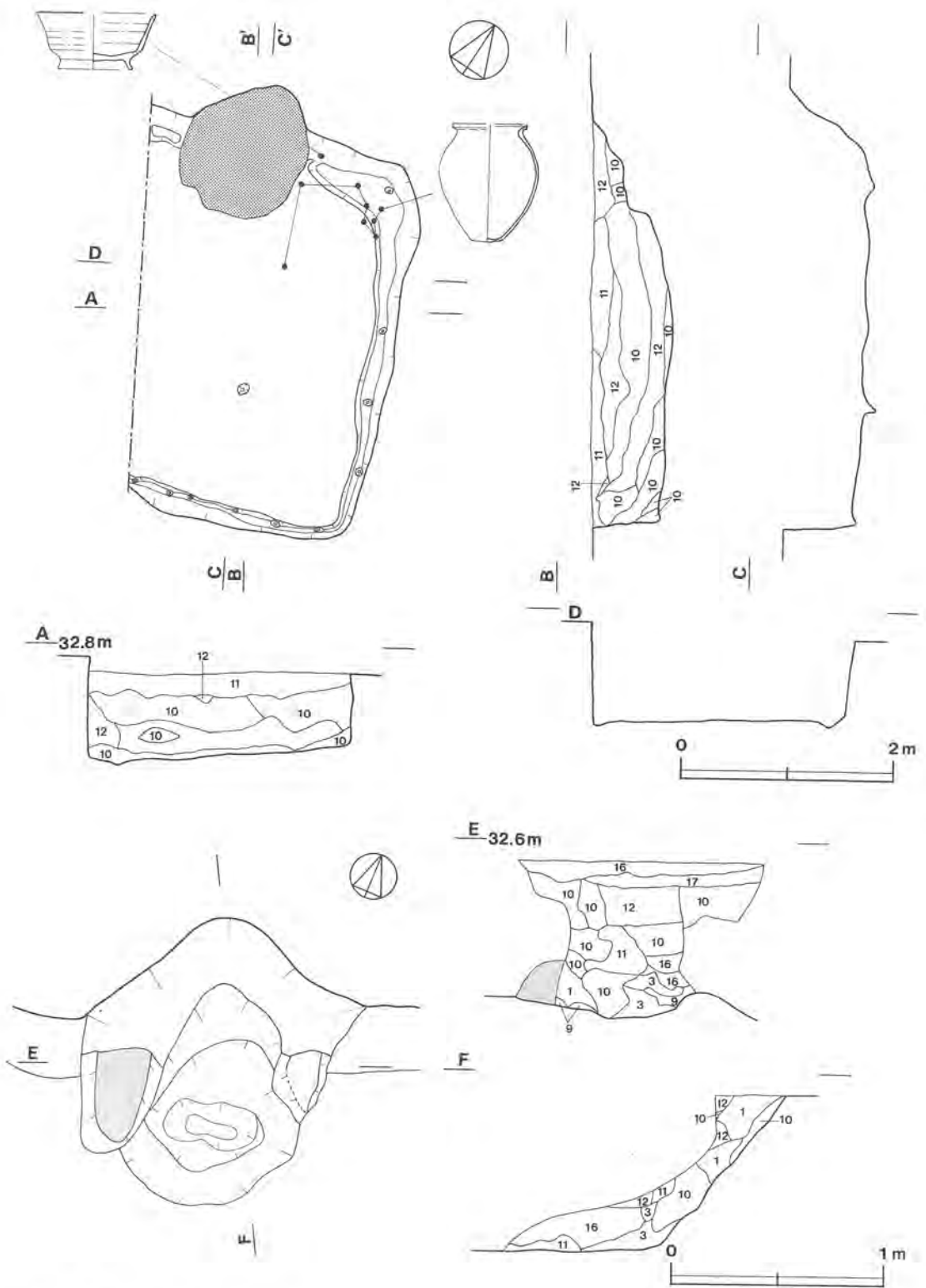
覆土 上位から順に黒褐色土、暗褐色土、褐色土が凹レンズ状に堆積し、壁寄り褐色土の土層断面は三角堆積土的に堆積している。各土層にローム粒子を多量から中量、ローム小ブロックを中量から微量に含み、褐色土、黒褐色土をまだらに含むことからみると人為的な埋め戻しの可能性もある。

遺物 本跡からの出土土器は比較的少ないが、竈内およびその前面と北東コーナー部の覆土下位から土師器の甕片や須恵器の坏片等がまとまって出土している。

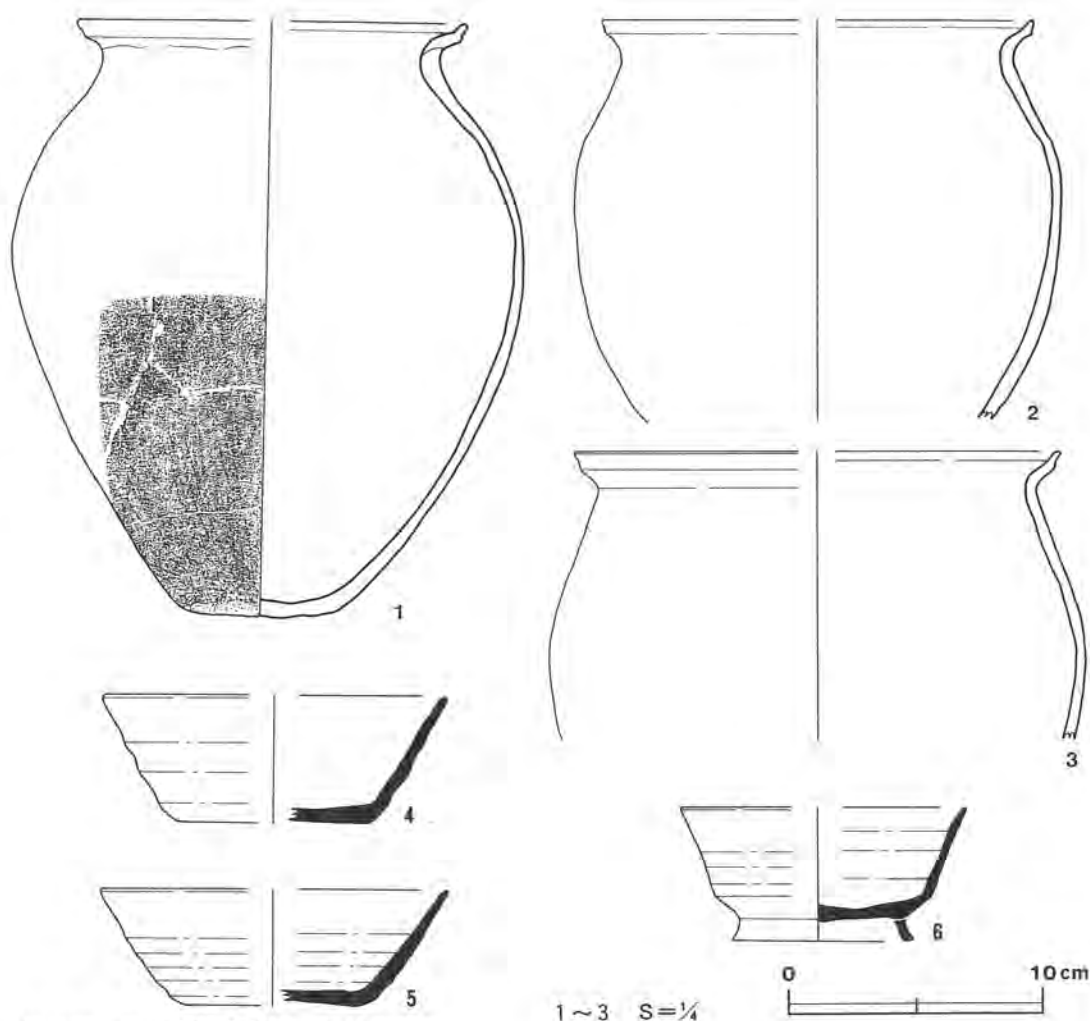
所見 本跡は、遺構の形状と出土遺物から判断して平安時代前期（9世紀前半）に比定される。

第4号住居跡出土遺物（第76図1～6）

1～3は、土師器の甕である。いずれも中央部から北東コーナー部にかけての覆土の中・下位から出土した破片を中心に一部竈内出土の破片が接合したものである。推定口径22.4～25.4cmを測り、大形の甕と思われる。1は底部を残すが、周縁がヘラケズリされていて不安定である。2・3は口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも底部から内彎して立ち上がり、胴部中位



第75图 第4号住居跡实测图



第76図 第4号住居跡出土遺物実測図

に最大径を有し、頸部で緩く括れ、口縁部は外反する。口縁端部は外上方につまみあげられている。整形は口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデの後に、外面に縦位のヘラケズリが施されている。胎土は長石・石英粒を多く含み、粗雑である。焼成は普通である。

4～6は、須恵器の坏で、6は高台付坏である。4・5は中央部から東側にかけての覆土中から出土し、6は北側の壁近くの覆土上位から出土している。4・5は推定口径13.4cm、13.6cm、底径7.8cm、7.0cm、器高5.1cm、4.6cmを測る。共に底部から直線的に外傾している。整形は内外面ともヨコナデが施され、底部はヘラ切りである。内面は滑らかにされている。胎土は長石・石英粒を含み、焼成は普通である。6は推定口径11.2cm、高台径7.1cm、器高5.3cmを測る。体部下端に稜を有し、口縁部にむけて直線的に外傾する。高台は貼り付けで、ハの字状に開く。薄手に作られ軽い。胎土は長石・石英粒を少量含み、焼成は普通である。

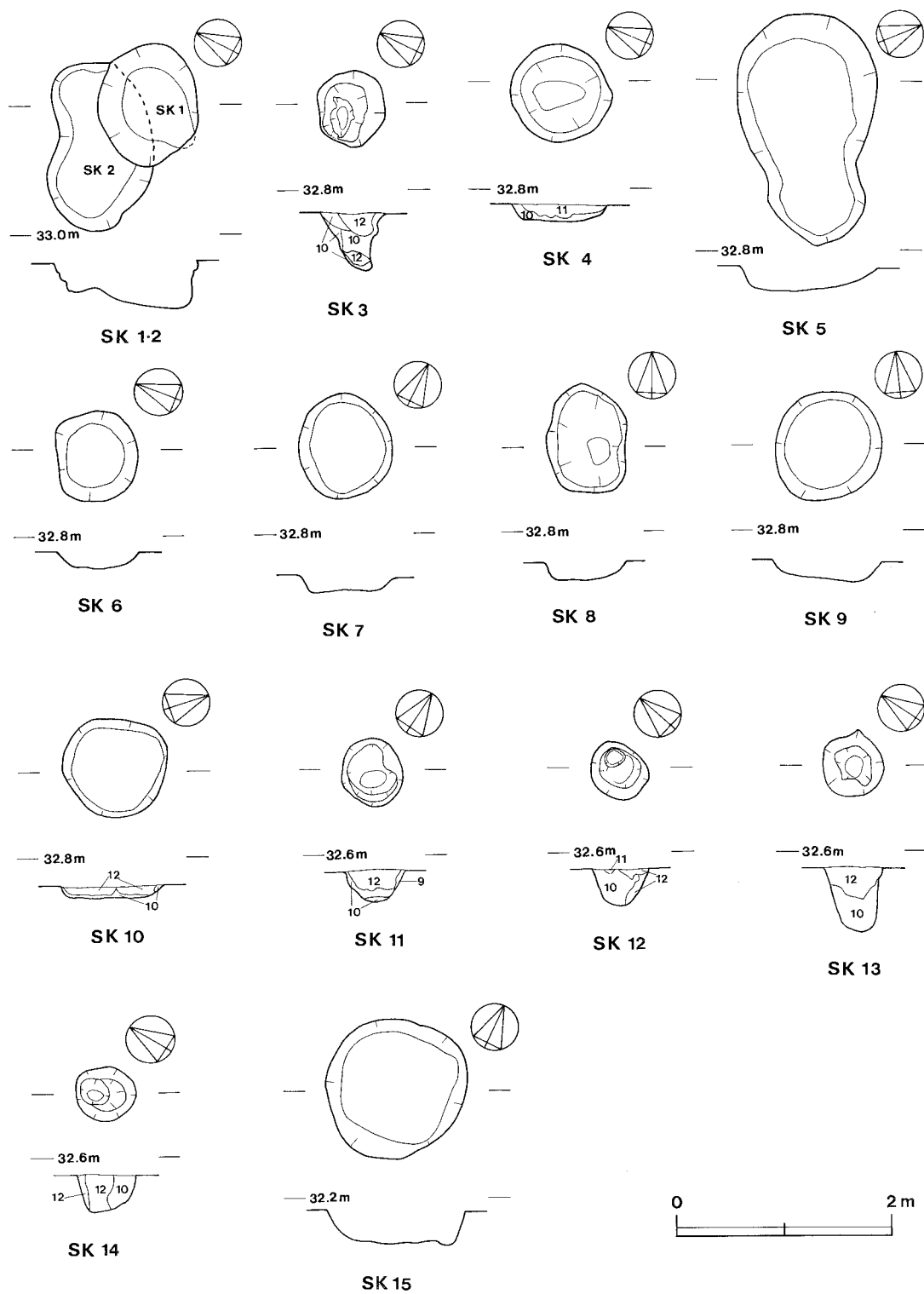
註(1) 茨城県史編纂室の川井正一氏のご教示によれば、9世紀前半代の湖西市方面からの搬入品であろうとのことである。明記して感謝申し上げる。

3 土坑

当遺跡からは15基の土坑が検出された。形状や規模には各々差異があるものの遺物を伴うものは約半数の8基で、しかも土師器・須恵器等の体部片が主となっている。このような状態のため、当遺跡の土坑については、一覧表化して報告する。なお、出土土器のほとんどが平安時代前半に比定されることからみると、住居跡と関連する性格が考えられるが、確実ではない。

表5 権現古墳群土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模			壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 (重複関係・性格)	図版 番号
				長 径 (軸)cm	短 径 (軸)cm	深 さcm						
1	08f3	N-47.5° -E	楕 円 形	105	87	44	外傾	傾斜	自然	0	SK2を切る。南側へ傾く。	第77図
2	08f3	N-55.5° -E	(不整楕円形)	157	(96)	28	外傾	凹凸	自然	0	SK1に切られる。	第77図
3	08g3		円 形	69	62	63	外傾	凹凸	人為	0		第77図
4	08g4		円 形	91	89	13	外傾	皿状	人為	0		第77図
5	07b9	N-70° -W	不整楕円形	218	130	24	外傾	皿状	自然	土師・須恵片 11		第77図
6	07b9		円 形	85	73	15	外傾	皿状	自然	土師片 3		第77図
7	07b9		円 形	99	89	17	外傾	平坦	人為	0		第77図
8	07c9	N-101° -W	楕 円 形	101	80	18	外傾	皿状	自然	0		第77図
9	07c9		円 形	109	98	18	外傾	傾斜	自然	0	東側へ傾く。	第77図
10	07c8		円 形	94	92	12	外傾	皿状	人為	土師・須恵片 10		第77図
11	08c1		円 形	62	56	30	外傾	傾斜	人為	0	南東側へ傾く。	第77図
12	07b0		円 形	53	51	37	外傾	傾斜	人為	土師片 3	北東側へ傾く。	第77図
13	07b0		円 形	57	55	63	外傾	平坦	人為	土師・須恵片 11		第77図
14	07b0		円 形	55	50	45	外傾	傾斜	人為	土師・須恵片 12	北側へ傾く。	第77図
15	N7d3		円 形	130	128	33	外傾	平坦	自然	土師片 4		第77図



第77图 土坑实测图

4 溝

第1号溝 (第79図)

位置 調査区北部のN7c₂・c₃, d₃・d₄, e₄, f₄・f₅・g₅区にかけて位置する。

重複関係 北側で第15号土坑, 南側で第1号住居跡と重複しているが, 両者を切っている。

規模と形状 上幅50~100cm, 下幅30~70cm, 深さ7~20cmを測り, 全長21.3mである。断面形は浅い皿状を呈し, 中央部に径35×28cm, 深さ39cmのピットを有する。

覆土 上位から順に黒褐色土, 暗褐色土, 褐色土が凹レンズ状に堆積しており, 自然堆積と考えられる。

遺物 土師器の甕片, 内黒の坏, 須恵器の坏, 盤, 甌, 甕片があわせて27点覆土中から出土しているが, 重複する第1号住居跡や第15号土坑に関連するものと思われ, 本跡に伴うものとは考えにくい。

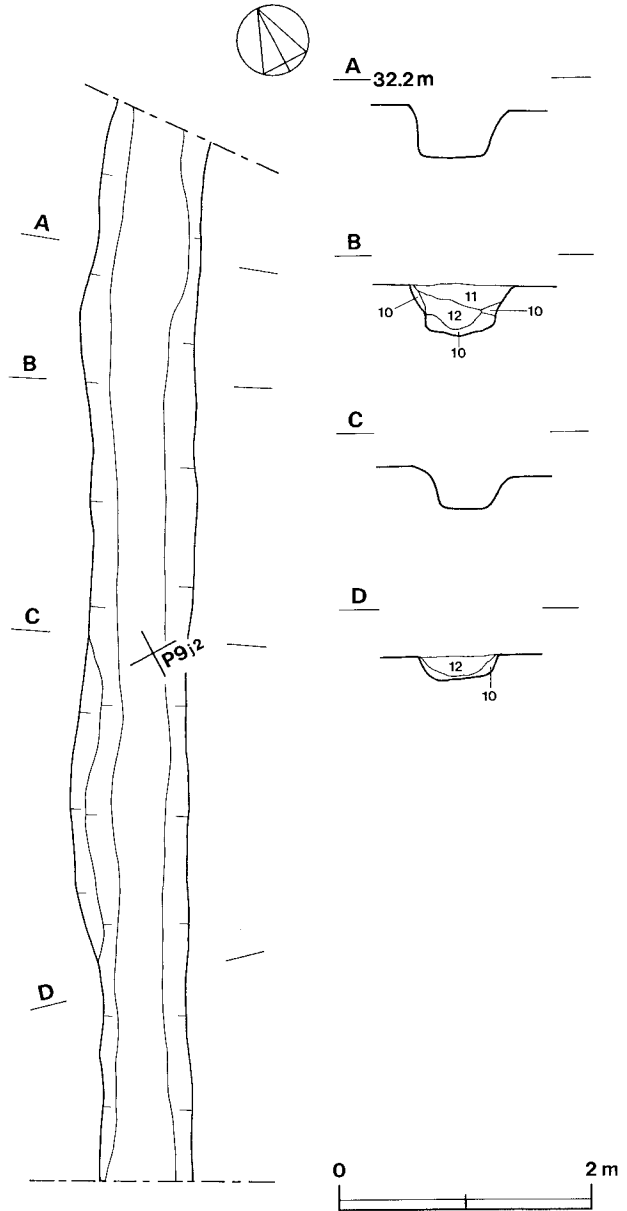
所見 本跡は, 遺構の重複関係からみて平安時代以降の所産と考えられる。また, 検出位置が蔵田千軒遺跡と権現古墳群を区分けした旧道に沿っていることから考えると地境い溝としての性格が推定される。

第2号溝 (第78図)

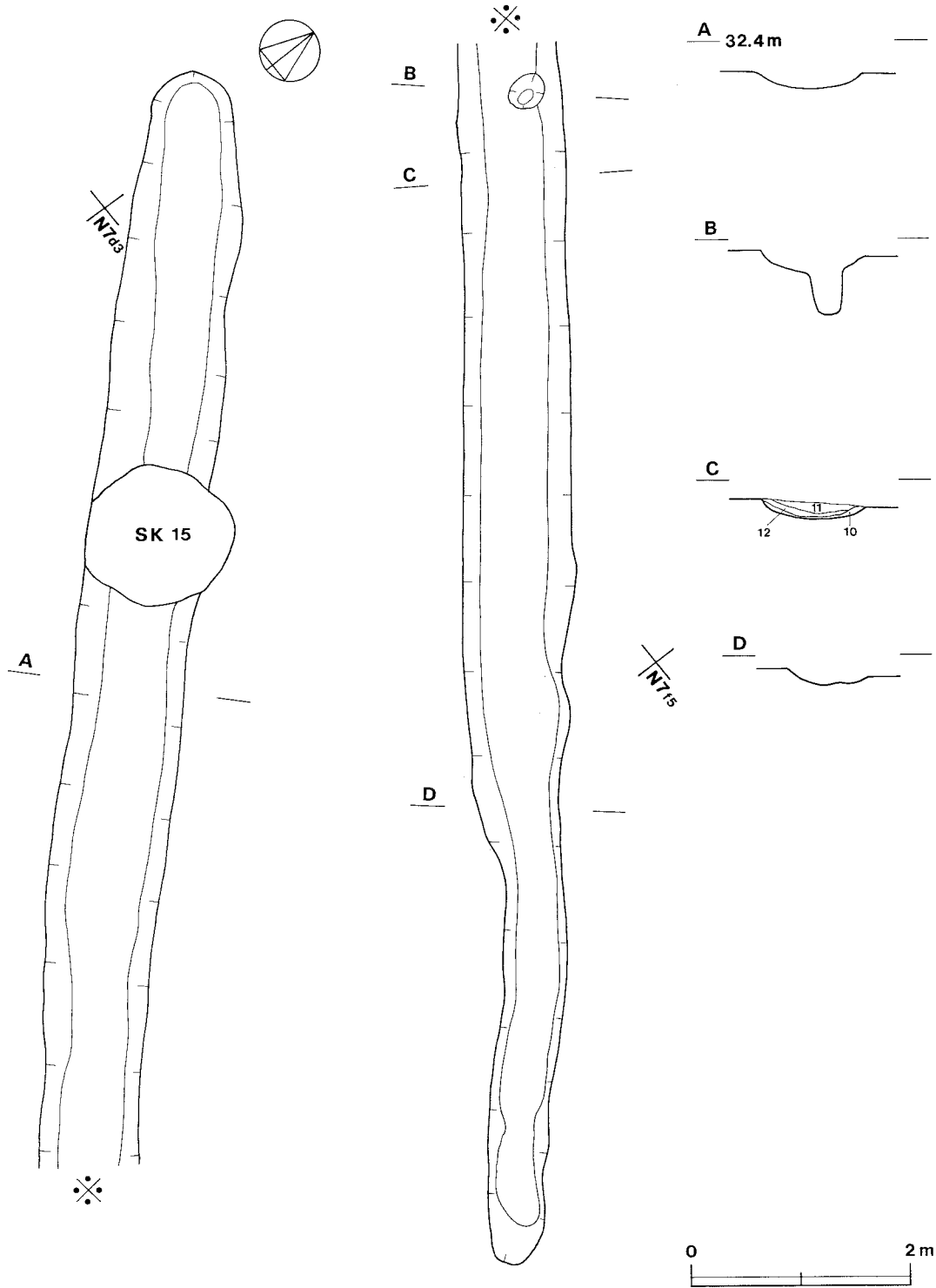
位置 調査区南部のP9i₁・i₂・j₁・j₂区にかけて位置する。

規模と形状 上幅70~90cm, 下幅35~55cm, 深さ23~39cmを測る。溝の両端部とも調査エリア外へ延びているが, 現存長は8.45mである。断面形は逆台形状を呈する。底面は平坦だが, 特に踏み締められてはいない。

覆土 上位から順に黒褐色土, 暗褐色土, 褐色土が凹レンズ状に堆積してお



第78図 第2号溝実測図



第79图 第1号沟实测图

り、自然堆積と思われる。

遺物 全く出土していない。

所見 出土遺物もなく、時期・性格ともに不明である。

第3節 その他

1 遺構外出土遺物

当遺跡からは古墳時代後期の円墳1基、平安時代の竪穴住居跡4軒、時期不明の土坑15基、溝2条が検出され、それに伴って土師器や須恵器片が出土している。一方、試掘時のトレンチ調査の際や表土除去、遺構確認作業中に検出されたり、他時期の遺構に混入するかたちで出土した若干の遺物がある。本項ではその中から特色あるものを抽出して解説する。

縄文式土器（第80図1～19）

1～4は早期中葉の沈線文土器である。1は口唇部が内削ぎ状を呈し、口唇部外端に斜位の刻み目を付し、横位の2条の沈線が巡らされている。胎土に石英・長石粒を多く含み、粗雑である。三戸式土器と思われる。2～4は横位・斜位の沈線と刺突文が組み合わされている胴部片で、田戸下層式土器と判断される。

5～7は前期中葉の黒浜式土器で、胎土に繊維を多量に含む。5・6は単節LRの縄文を横位回転し、7は同様の縄文の下位にRLの縄文を施し羽状縄文を構成している。

8・9は前期末葉の粟島台式土器と思われる胴部片で、単節LRの縄文と結節回転文を施している。胎土には石英・長石粒が多く含まれ、粗い。

10～19は中期前半の阿玉台式土器片である。10～13、15は平安時代の第3号住居跡の覆土から、他はトレンチ出土である。10～14は口縁部片で、平坦な口唇部上に結節沈線文や刻み目などの加飾が施される例が多い。断面三角形の隆帯で楕円区画等を構成し、区画内に結節沈線文を充填している。13は無文の小片である。他の胴部片には断面三角形の隆帯が垂下し、波状沈線文が巡っている。17・19にはヒダ状の圧痕文が付されている。共に阿玉台式土器の前半に属するものと判断される。

埴輪（第80図20～22）

20～22とも円筒埴輪の破片で、第1号墳の埴丘から出土している。20には箍が巡り、21には円形の透し穴がみられるが、いずれも刷毛目は使用されていない。

瓦（第80図23）

23は平瓦の断片で、外面は削落が激しいが無文と思われ、内面には明瞭な布目痕がみられる。

石器（第80図24～28）

24～26は無茎石鏃で、24は第1号土坑の覆土から出土し、他はトレンチ出土である。24は小形

で挟り込みが深く、先端部が短く尖る。25は挟りが浅く整った二等辺三角形形状を呈し、先端が鋭い。24・25ともチャート製で脚端部を僅かに欠損する。26は25に類似するが幅広く大形である。先端部を欠失する。メノウ製である。27は砂岩製の全面磨製石斧で、基部を欠失する。側面に明確な稜を有し、刃部は円刃で整っている。28は砂岩の偏平な円礫を利用し、上・下端に表裏面からの粗い剝離を加え、刃部を作り出した礫器である。左右の側面には顕著な磨痕が観察され、表裏面に磨耗痕がみられることから磨石としての機能も併せもったものと思われる。

第4節 小結

当遺跡からは古墳1基、竪穴住居跡4軒、土坑15基、溝2条の遺構が検出され、土器・石器等の遺物が遺物収納箱(60×40×20cm)に7箱分出土している。

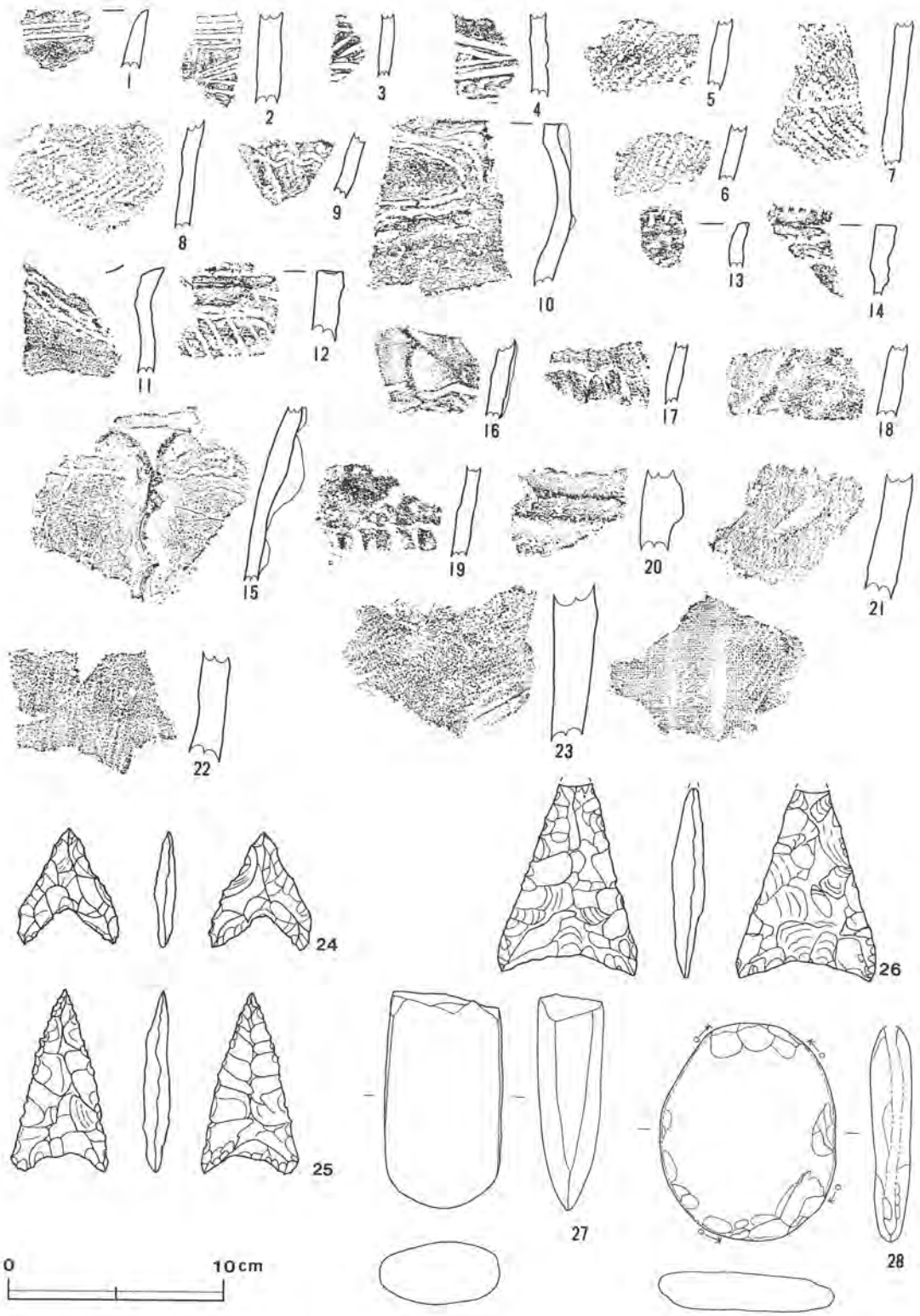
古墳は、調査区の南側に検出された径約20~24mの円墳で、西側に陸橋部を有している。埋葬施設は検出されず、本墳に伴うと思われる遺物はきわめて少ない。このため時期比定は困難であるが、墳丘や周溝の規模と形態、僅かな出土土器等からみると6世紀後半から7世紀前半の後期古墳と考えられる。北側の周溝内を中心に多量の須恵器片が出土しているが、流れ込みである。

竪穴住居跡4軒は、調査区の北側に検出され、第2・3号住居跡は一部で重複し、第4号住居跡の西側は調査エリア外へ延びている。1辺3.0~4.4mを測る不整形を呈し、竈は北壁に付設されているが、第1号住居跡のみは北壁の竈を廃して東壁に造り変えられている。出土遺物は土師器の甕、須恵器の坏、高台付坏などが主で、砥石や紡錘車もある。第1号住居跡から検出された須恵器の高台付坏は、胎土・整形からみて明らかな搬入品であることは注目される。これらの住居跡の時期は、9世紀前半と考えられる。

土坑は15基で、調査区の北側の第3号住居跡の東・南側にやや集中する。遺物を伴う土坑が全体の5割強で、いずれも平安時代の土師器・須恵器片である。このことから土坑の大半は9世紀代のものと考えられるが、性格は不明である。

溝2条は、調査区内を横断ないし斜行するように走るが、共に両端が調査エリア外へ延びており、全容は把握できない。出土遺物は少なく、時期は不明である。性格は第1号溝は旧道に並行することから地境いと考えられ、第2号溝は不明である。

遺物は上記の各遺構に伴うものの他には少なく、試掘時のトレンチ調査や表土除去の際に出土したものが少量である。縄文式土器は早・前・中期の資料があり、三戸式、田戸下層式、黒浜式、粟島台式、阿玉台式土器に対比される。石器も少なく、石鏃3点、磨製石斧1点、礫器1点である。第1号墳の周溝から出土した須恵器は坏や高台付坏、盤が多く、平安時代前期のものである。



第80図 遺構外出土遺物実測・拓影図

24~26 S=1/1

第8章 考 察

第1節 遺跡の変遷について

今回の発掘調査により五平遺跡からは古墳1基、竪穴住居跡2軒、土坑74基、溝9条、蔵田千軒遺跡から竪穴住居跡1軒、土坑32基、井戸1基、溝1条、権現古墳群からは古墳1基、竪穴住居跡4軒、土坑15基、溝2条が検出され、これらの各遺構と遺構外や遺物包含層から多量の遺物が出土している。上記の3遺跡の遺構と遺物から遺跡の変遷を考察してみたい。

先土器時代に属する遺物は五平遺跡出土の細石刃核1点のみである。これにつづく時期の遺物は、五平遺跡の遺物包含層G2区から出土した草創期の井草式土器である。五平遺跡の出土土器については第Ⅰ～Ⅸ群土器に分類したが、第Ⅰ・Ⅱ群の撚糸文系土器、無文土器が主体を占めている。第Ⅰ・Ⅱ群の時期に比定されると思われる土坑が8基ほど検出されている以外に縄文時代のもと考えられる遺構の検出例はない。遺物は五平遺跡では草創期・早期・前期の土器があり、蔵田千軒遺跡では前・中期の土器片、権現古墳群では早・前・中期の土器片がそれぞれ少量ずつ出土している。3遺跡を通じて最も新しい縄文式土器は、蔵田千軒遺跡の加曾利E式土器で、以降弥生時代中期中葉までは当遺跡群の1つの空白期となる。五平遺跡の弥生時代中期中葉の土器片はきわめて少ないが、擬似縄文や無節縄文が施されている壺・鉢形土器で、当地域では類例の乏しい貴重な資料である。その後、当遺跡群はまた空白期を迎えるが、古墳時代中期には五平遺跡で単独の長方形を呈する土坑（第20号土坑）を構築し、後期に入ると第1号溝を設けているが、いずれも性格は不明である。以上の縄文時代草創期から中期、弥生時代中期、古墳時代中・後期は、五平遺跡を中心に僅かな遺構と遺物が検出されたのみで、該期の集落の中心部は調査区域外に埋存している可能性が高く、当遺跡群は集落の縁辺部に相当していたものと推定される。

五平遺跡と権現古墳群から1基ずつ検出された円墳は、それぞれ犬塚古墳群と権現古墳群に属するものと考えられる。五平遺跡の古墳は、墳丘を失っていたが全長9m弱の横穴式石室を有している。しかし、攪乱が著しく伴出遺物がほとんどないため詳細な時期は不明である。権現古墳群の古墳も墳丘に攪乱が目立ち、埋葬施設も検出されていないため詳細な時期は不明である。以上から当遺跡群は6世紀後半から7世紀前半頃には墓域となっていたことが推測される。

当遺跡群に明瞭な集落が形成されるのは平安時代前期の9世紀代である。竪穴住居跡は五平遺跡から2軒、蔵田千軒遺跡から1軒、権現古墳群から4軒の計7軒が検出されている。蔵田千軒遺跡は、広大な面積を有する古代の集落跡で、形成時期の異なる権現古墳群を遺跡内に含んでいる。したがって、今回の調査で権現古墳群の第1～4号住居跡とされた住居跡も古代の集落跡としては蔵田千軒遺跡の一部として把握される。五平遺跡と蔵田千軒遺跡は谷津を隔てており、別

遺跡と考えられる。蔵田千軒遺跡の第1号住居跡と権現古墳群の第1～4号住居跡の計5軒の住居跡は、調査区域内のほぼ中央部に検出されている。蔵田千軒遺跡の第1号住居跡から北側には井戸1基と土坑群が検出されているのみで、住居跡の広がりは見られない。地形も谷津に向かって傾斜しており、この部分からの出土遺物もない。したがって、蔵田千軒遺跡の集落は北方へは延びないものと推察される。他方、集落の東方への広がり、調査区東側の畑地に多数の須恵器・土師器片が散布していることから判断され、西方への広がりも権現古墳群の第4号住居跡の西半部が調査区域外へ延びていることから十分に推察される。集落内の時間的変遷については、権現古墳群の第2・3号住居跡が重複していることから2段階の細別は可能であるが、出土土器に明確な時間差は感じられない。出土土器には土師器の甕、坏、高台付坏、須恵器の坏、高台付坏、盤、高坏などがあり、中でも土師器の甕と須恵器の坏が主体を占める。土師器の甕は、所謂「常陸型甕」の範疇に属するもので、口縁端部が外上方につまみ上げられ、胴部下半に縦位のヘラケズリを施している。須恵器の坏は底部から直線的に立ち上がる器形を呈し、内外面ともヨコナデにより整形され、底部はヘラ切りである。第1号住居跡出土の低い高台を有する坏は内彎する器形を呈し、胎土・整形から東海西部からの搬入品である。これらの出土土器は全体的にみて9世紀前半のものと考えられるが、初頭（第1四半期）よりは降る時期と考えられる。蔵田千軒遺跡の井戸は出土土器からみて9世紀後半と考えられ、住居跡よりは後出すると思われる。なお、権現古墳群の第3号住居跡の東側に検出された第11～14号土坑は、配列や規模からみて掘立柱建物跡の一部を構成する可能性もあるが、大半が調査区域外に延びるために不明確である。五平遺跡の2軒の住居跡は、該期の集落としては地形的にみると南西側の端部に位置するものと思われる。出土土器は、土師器の甕、坏、高台付坏、須恵器の壺、甑、甕、坏、高台付坏などが2軒に共通して出土しており、土師器の小形甕の出現、内面黒色処理が施された坏、高台付坏の盛行、須恵器の坏の規格化などの観点からみると蔵田千軒遺跡や権現古墳群の住居跡出土土器に比して後出するものと考えられる。9世紀後半の年代に置くことができる。

蔵田千軒遺跡と谷津を隔てて立地する五平遺跡の住居跡は、上記の見解に従えば蔵田千軒遺跡（権現古墳群の住居跡も含む）の集落の拡大・発展に伴って9世紀後半代に新たに形成された集落の一部とも考えられる。蔵田千軒遺跡が、古代の該期における有力な集落であったことは、遺跡の推定範囲内から常陸国分寺系の軒丸瓦や須恵器の円面硯が出土していること⁽¹⁾からもうかがえるが、今回の調査において「厨」の墨書を有する須恵器の盤が出土したことは更なる補強材料と言えよう。

古代以降、当遺跡群は長い空白期を経て、近・現代において五平遺跡の中央部からやや南部にかけては食物貯蔵用の穴（土坑）が掘られている。長方形・円形を呈する例は芋穴、長方形を呈し、壁の一部が内側に抉り込まれる例は生姜穴と聞き取り調査により判明した。

第2節 遺物について

1 土器

(1) 縄文時代—草創期・早期を中心に—

縄文式土器は、3遺跡から出土しているが、蔵田千軒遺跡や権現古墳群からは微量の出土であり、早・前・中期の破片のみであるため省略し、五平遺跡出土の土器群に的を絞って若干の考察を加えたい。

五平遺跡の縄文式土器の大半は、G2区とH3・I3区の遺物包含層から出土している。第5章第3節で記したごとく、層位的に出土土器を把握することができなかったため、先に分類した第I～Ⅶ群土器にしたがって、各群ごとに考察していきたい。

第I群土器

第I群土器は撚糸文系土器を一括した。口縁部の形態や施文の特徴にもとづいて1～5類に細分した。大まかにみれば、1類は井草式土器、2類は夏島式土器、3類は稲荷台式土器、4類は稲荷原式土器、5類は花輪台式土器に対比される。口縁部片ならば1・2類の区分は可能であるが、胴・底部片となると区分は不明瞭となる。2類と3類を縄文と撚糸文の差や施文間隔の疎・密の観点からだけで区分することの問題点も残る。第I群土器の大半を占めるのは1～3類土器の胴部片であるが、上記のような問題点を含むことや紙数の都合により掲載量を限定している。第I群土器で器形が復元できたものは4点で、1類が1点、2類が2点、3類が1点である。

1類の第31図1は口唇部の肥厚・外反が著しく、丸底状を呈する。施文は肥厚した口唇部と頸部、胴部に施文域がわかれ、単節RLにより頸部に横走、胴部に縦走する縄文が施されている。千葉県西之城貝塚⁽²⁾や東京都日影山遺跡⁽³⁾、栃木県清陵高校地内遺跡⁽⁴⁾等に類例がみられ、井草I式として分類されている土器である。県内では明野町倉持遺跡⁽⁵⁾、下館市熊野権現遺跡⁽⁶⁾等に類例がある。

2類は口唇部の肥厚・外反が著しくなくなる土器群で、第44図9は若干肥厚する口縁直下から縄文が斜走して施文され、同図8は縄文が縦走して施文されている。文様は口唇部外面に一段の横位回転の施文があり、以下に縦走する縄文が施される例と口唇部外面に一段の縄文が施されない例の両者があり、前者が古い段階と考えられる。しかし、1類の井草式土器の新しい部分と前者の差異は不明瞭である。夏島式土器の好資料は、竜ヶ崎市沖餅遺跡⁽⁷⁾や鹿島町伏見遺跡⁽⁸⁾等にある。

3類は2類と同様に口唇部の肥厚・外反が弱くなる土器群で、第44図10は撚糸文がやや間隔が粗く縦走して施文されている。3類の文様は施文間隔が粗くなり、底部近くは無文のままに残さ

れる傾向がある。稻荷台式の県内における類例としては、鉾田町安塚遺跡⁽⁹⁾があげられる。しかし、安塚遺跡例は撚糸文の施文間隔が比較的密で、当遺跡の第33図39～43を除く土器群とは差異があり、安塚例の方が古いと思われる。

4類土器は、口縁部無文帯を1条の凹線ないし段で区画し、以下に太めの撚糸文が施文間隔を疎に施文される土器群で、器形が復元できた例はない。4類および5類土器は施文に特徴があり抽出しやすいので、抽出もれは無いと思われるが、1～3類土器に比べて量的にきわめて少ない。稻荷原式土器⁽¹⁰⁾は、G2区の包含層から主に出土しているが、他のトレンチや表土中からも出土している(第57図5～15)。県内の類例としては、勝田市黒袴遺跡⁽¹¹⁾、那珂町酒出遺跡⁽¹²⁾、利根町花輪台貝塚⁽¹³⁾などがあり、花輪台貝塚では主体となる5類土器(花輪台式土器)に伴って⁽¹⁴⁾いて、出土量は少ない。当遺跡でも花輪台式土器と稻荷原式土器は共存しており、施文の共通性(口縁部無文帯を段ないし縄文原体圧痕文で区画する点、胴部に粒の粗い撚糸文ないし縄文を施文とする点)からはほぼ併行する時期の所産と考えられる。

5類土器は前記のように花輪台式土器に属するものと考えられるが、器形が復元できたものはない。花輪台式土器の器形は鹿島町伏見遺跡出土例⁽⁸⁾からみれば、丸底状の底部をもつ砲弾状の深鉢形土器と考えられる。花輪台式土器の口縁部無文帯を区画する手法は、縄文原体圧痕文によることが一般的であるが、第34図10～13は絡条体圧痕文を巡らして区画しており、仮称金堀式土器との関連⁽¹⁵⁾が考えられ、注目される資料⁽¹⁶⁾である。胴部に施文される縄文は、縦位の羽状を呈する典型的な例(第34図17～29)が多いが、31のように不規則なものもある。県内における花輪台式土器は、タイプサイトの花輪台貝塚と伏見遺跡において良好な資料が出土している以外には断片的な出土例が多い。県央部の那珂湊市ムジナⅡ遺跡、那珂町酒出遺跡⁽¹²⁾等において類例が出土している。

第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器は、第Ⅰ群の撚糸文系土器群の終末期から第Ⅲ群の沈線文系土器群への移行期に位置づけられる無文土器群を一括した。胎土や整形手法にもとづいて1～3類に大別したが、明瞭に区分できないものもある。1類と3類土器は整形手法や胎土に特徴があるので抽出しやすかったが、2類には1・3類以外の多様な土器群が一括されてしまった感があり、今後の分析・検討により細分類される必要があると考えている。

1類の特色は、きわめて顕著な外面の横位のナデと大きく外反し、外削ぎ状を呈する口縁部形態にあると考えられる。伏見遺跡の報告書⁽⁸⁾において仮称伏見式とされた土器(第132図10～12、第144図1・5～12・14～16、第145図1・2)は1類土器に近い様相を示すものかもしれないが、拓影図・写真からの判断では差異が大きく、類例とは言えない。

2類は、上記のように多様な土器群が一括されており、2類としてまとめて検討することはできない。第35図42・43のように縦位のナデが施されている土器は、水戸市松原遺跡出土の土器群⁽¹⁹⁾との関連が考えられ、沈線文系土器群に近い様相のものかと思われる。第35図20の土器は、一部剥落しているが、口縁直下に貼付文が認められる。無文土器から沈線文系土器にかけては稀に貼付文を有する土器の存在が知られており⁽²⁰⁾、当遺跡の例はこの中でも古い方に位置づけられ、貴重な例と思われる。2類土器の口縁部形態には肥厚・外反する第35図30～33、内彎気味の同図21・44、直立する同図23～25などがある。口唇部の断面形にも丸頭状、尖頭状、角頭状の別がある。原田昌幸氏は、種々の無文・捺痕文土器群を包括して「平坂式土器」として把握することを提唱し、a～c期に3細分されている⁽²¹⁾。県内の資料については、b・c期の例として花輪台貝塚⁽¹³⁾、西下宿遺跡⁽²²⁾、奥山C遺跡⁽²³⁾、伏見遺跡⁽⁸⁾の土器の一部が取り上げられているが、a期については表示されているだけである。先に筆者は、そのa期に対比されるものとして竜ヶ崎市仲根台遺跡の土器の一部を示したが、今回の五平遺跡の2類土器は、a期に対比される資料も含むと考えられ、好資料と言えよう。

3類とした土器は、筆者が以前に「天矢場タイプ」として注目していた土器群⁽¹⁸⁾に相当するもので、捺痕文が顕著で、胎土に小石を多く含み外面がザラザラする土器である。当遺跡の3類土器には、口唇部が丸頭状を呈するものと角頭状を呈するものがあり、前者から後者への変化も考えられるが、両者が共存する有り方が本来的なものとする考え方も可能であり、結論づけることはさけておきたい。

第Ⅲ群土器

第Ⅲ群土器は沈線文系土器群を一括した。従来までの型式で言えば三戸式、田戸下層式、田戸上層式土器に相当する。施文や胎土の特徴から1～8類に分類した。

1類は胎土が第Ⅱ群3類土器に類似し、横位を主とする細沈線が描かれるものである。第Ⅱ群3類との差異は、器厚が薄くなり、口縁部が大きく外反し、文様が施される点にある。口縁部が大きく外反する特徴は第Ⅱ群1類土器とは共通する。第Ⅲ群1類土器についても明瞭な類例はなく、編年の位置づけに苦慮するが、第Ⅱ群1・3類に類似する器形や胎土を有し、次に検討する第Ⅲ群2類a種の（「初期沈線文土器⁽²⁰⁾」，「稲荷原型三戸式土器⁽¹⁰⁾」，「竹之内式土器」⁽²⁰⁾などと呼称され、県内では伏見遺跡で器形復元された土器が出土している）土器群との関連を考えれば、その両者の間に位置づけておくことが妥当ではないかと思われる⁽²⁴⁾。2類a種土器は、大きく外反する器形、細沈線文で横位の文様帯が構成される点、胎土に長石・石英粒を多く含む点などで共通している。いずれにしても今後の類例を待って考察を深めたい。

2類a種土器は、細沈線による横位の文様帯が構成される土器群で、最近は上記のように三戸

式以前に位置づけられている。b種も文様帯構成からみるとc種の三戸式土器よりはa種に近い位置づけがなされよう。なお、第40図1は横位の沈線と斜格子目文を有することからa種に含めたが、時間的位置づけはa種に属するか否かは検討する必要があると思われる。

3～6類の田戸下層式土器は、県内でも類例の比較的多い土器で、大洗町祝町Ⅳ遺跡⁽²⁵⁾、勝田市武田遺跡⁽²⁶⁾群などに良好な資料があり、領塚正浩氏⁽²⁷⁾や川崎純徳氏⁽²⁸⁾らによって考察されているので、それに譲りたい。

7類土器はH3・I3区の包含層とその周囲の第8・9号溝や第72号土坑の埋土中に混入して出土した土器に好資料がある。個体数は少なく3～5個体と思われるが、県内では類例の少ない田戸上層式土器に比定されるもので、貴重な出土例と言える。曲線的な沈線文、隆帯文で文様帯を描き、貝殻腹縁文、刺突文などで加飾している。田戸上層式土器は、田戸下層式土器までは稀であった波状口縁が一般化することも特徴の1つと考えられ、当遺跡の例も波状口縁を有している。また、口縁部の内面への施文も目立っている。当遺跡の例は、千葉県成田市の空港N0.7遺跡⁽²⁹⁾の例に類例が求められ、県内の伏見遺跡⁽⁸⁾、祝町Ⅲ遺跡⁽³⁰⁾、塙遺跡⁽³¹⁾などの土器群とは様相を異にしている。塙遺跡や竜ヶ崎市廻り地B遺跡⁽³²⁾にみられる所謂「明神裏Ⅲ式系の土器」は当遺跡からは検出されていない。

第Ⅳ群土器

第Ⅳ群土器には早期後半の各種の土器が含まれているが、いずれも量的に少ないため簡潔にまとめておく。5類の微隆起線文を有する土器（第46図45～49）は野島式土器、1類の貝殻条痕文の地文上に微隆起線文や刺突文、円形竹管文で加飾するもの（第42図22～25、第57図22）は鶴ヶ島台式土器に対比される。5類とした絡条体圧痕文を施文する土器（第46図41～44）は早期末葉の土器に比定され、西下宿遺跡⁽²²⁾や柳崎貝塚⁽³³⁾等に類例がみられる。その他の条痕文、擦痕文の土器群は野島式、鶴ヶ島台式から広義の茅山式土器の時期にまでに亘るものと思われる。

第Ⅴ群土器

第Ⅴ群土器は前期前半の胎土に多量の繊維を含む土器群で、大半は黒浜式土器に比定されるが、第47図26の網目状燃糸文を施文している土器は大木2a式に相当するものと思われる。県内の黒浜式期の集落を伴う例としては石岡市新池台遺跡⁽³⁴⁾・水海道市大生郷遺跡⁽³⁵⁾等があげられる。大木2a式の網目状燃糸文は勝田市遠原貝塚⁽³⁶⁾、常澄村大串貝塚⁽⁶⁾、石岡市外山遺跡⁽³⁷⁾等で類例が出土している。

第Ⅵ群土器

第Ⅵ群土器は前期後半の浮島式土器で、胎土に多量の砂粒を含んでいる。半截竹管文や貝殻腹縁文が文様の主体となっており、県内に広範に分布している。石岡市外山遺跡⁽³⁷⁾、勝田市遠原貝塚⁽³⁶⁾などで集落が検出されている。

第Ⅶ群土器

第Ⅶ群土器は前期末葉の「栗島台式土器⁽³⁸⁾」に対比される土器で、縄文原体圧痕文による施文が特色となるが、当遺跡では第43図12や36の小片があるのみで少ない。県内の類例は、竜ヶ崎市沖餅遺跡⁽⁷⁾、鹿島町伏見遺跡⁽⁸⁾等で出土している。

(2) 弥生時代

弥生式土器の出土はきわめて少ないが、中期中葉の所謂「猪Ⅰ式土器⁽³⁹⁾」に対比されるもので、擬似縄文や縄文による磨消縄文が特色となる。タイプサイトの那珂湊市猪遺跡⁽³⁹⁾の他、那珂町森戸遺跡⁽⁴⁰⁾等、県央から北部にかけて出土例がある。

(3) 古墳時代以降

古墳時代中期和泉期の遺構は五平遺跡の第20号土坑1基のみで、同後期の遺構は五平遺跡の第1号溝1条のみである。土師器の甕や壺が数個体出土しているが、特記すべき事項はない。

五平遺跡・権現古墳群の各1基の古墳は攪乱が著しく、古墳に伴うと思われる遺物の出土はきわめて少なく、土師器の坏や壺の破片のみである。

平安時代の土師器・須恵器は比較的多量に出土しており、そのほとんどが9世紀代のものと考えられる。土師器の甕や内黒の坏・高台付坏のあり方の変化等からみれば、蔵田千軒遺跡（権現古墳群の住居跡を含む）から五平遺跡への移行が考えられ、前者が9世紀前半（第1～2四半期前後）、後者が9世紀後半（第3～4四半期）と推定される。

蔵田千軒遺跡や五平遺跡から「厨」等の墨書土器、「大」の刻書土器が出土している。「厨」の文字は、県内では茨城廃寺跡、鹿島郡衙に比定されている神野向遺跡、新治郡衙ないし同廃寺跡に関連する堀之内窯跡から土師器・須恵器に墨書ないし刻書されている⁽⁴¹⁾。いずれも郡衙や寺院跡等の官衙遺構に関連する遺跡から出土しており、当遺跡の例も官衙遺構にかかわる可能性が考えられる。神野向遺跡例は「鹿島郡厨」、「鹿厨」と記され、堀之内窯跡例は「堀厨」と刻まれており、明らかに郡衙との関連が示されている。当遺跡には、「蔵田千軒」の伝説が残されており、大集落跡であることは確実であるが、古代の郡衙の比定地にはなっていない。蔵田千軒遺跡は、今回の調査以外に3回の発掘調査が実施されており⁽⁴²⁾、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての住居跡の検出が相次いでいる。今後の調査・研究の進展に伴って、当

遺跡の性格が解明される際には今回の「厨」の文字の意味するところも同時に理解されることになると思われる。

2 石器

五平遺跡から出土した石器・石製品は、別表のように115点である。先土器時代に属するものは細石刃核1点のみであるが、きわめて貴重な検出例である。県内の細石器文化の代表的遺跡としては勝田市後野遺跡⁽⁴³⁾、那珂町額田大宮遺跡⁽⁴⁴⁾があげられるが、他にも若干の検出例がある⁽⁴⁵⁾。細石刃核は先土器時代終末を特徴づける石器の1つであるが、縄文草創期の撚糸文系土器と共伴したという報告例⁽⁴⁶⁾もある。しかし、当遺跡の例については1点という断片的出土であり、先土器時代の石器として理解しておく。古墳時代中期とした第20号土坑出土の砥石、平安時代前期の第1・2号住居跡出土の砥石はそれぞれ該当の時期に属するものと考えられる。

遺構に共伴せずG2区の遺物包含層を中心に出土した多数の石器は縄文時代草創期～前期の土器の時期に属するものと判断される。出土土器の90%以上は第Ⅰ・Ⅱ群土器の撚糸文・無文土器群が占めることから、石器の大半は草創期・早期の石器群と考えられる。石器組成は、石鏃、搔器、打製石斧、磨製石斧、局部磨製石斧、礫器、スタンプ形石器、磨石、敲石、石皿である。

石鏃は未製品も含めて24点出土しており、いずれも無茎石鏃である。石質はチャートが主体を占め18点で、頁岩、メノウが各2点、黒曜石、安山岩が各1点ずつである。搔器は9点で、周縁加工されている例や刃部の一部のみ加工されている例がある。石質はチャートが主体で6点で、頁岩2点、メノウ1点である。打製石斧は2点で、両側縁、刃部ともに粗く加工されている。石質は粘板岩、砂岩各1点である。磨製石斧も2点で、刃部ないし頭部を欠損している。G2f₈区出土例(第52図3)は小形の片刃を呈し、次の局部磨製石斧とともに草創期・早期に特徴的な形状を示している。石質は粘板岩、緑泥片岩である。局部磨製石斧は3点で、扁平な自然礫を利用して、側縁、刃部ともに粗く加工し、刃部のみ磨製している。刃部は片刃のものと両刃のものがある。石質は砂岩2点、粘板岩1点である。礫器は7点で、刃部に粗い加工を加え、片刃状に作出する例が多い。石質は砂岩が多く3点あるが、他は片麻岩、粘板岩、流紋岩、アプライトが各1点ずつである。スタンプ形石器⁽⁴⁷⁾は、礫器とともに草創期・早期の第Ⅰ・Ⅱ群土器に特徴的に伴出するとされている石器である。当遺跡からは破片も含めて19点出土しているが、頭部や体部のみの破片が多く図示したのは8点である。使用面に顕著な磨滅痕がみられるのは第53図5で、他は剝離の稜が明瞭に残っている。石質は砂岩が10点と多く、斑糲岩が4点でこれに次いでいる。以下、流紋岩2点、硬砂岩、粘板岩、玢岩が各1点ずつである。磨石は24点、敲石が3点出土しているが、磨石と凹石、磨石と敲石が兼用されているものもある。磨石は断片も多いが、特徴的な磨石は断面形が不整三角形状を呈し、側面の稜部に顕著な磨痕を有する例(第55図2・6・7)

である。これらは草創期・早期の遺跡によく出土するもので、当遺跡の例も該当する資料と考えられる。磨石の石質としては安山岩11点、砂岩10点で大半を占め、他には石英・花崗岩、アプライトが各1点ずつである。石皿は7点出土し、第56図6を除いていずれも破片であるが、平板石皿に分類される。明瞭な有縁の例はなく、草創期・早期に属するものとして良いと思われる。完形の第56図6はG2g₆区の包含層の下部から出土していて、第Ⅰ・Ⅱ群土器に伴うものと考えられる。装飾品とした第51図2・4のうち2は周縁を研磨により加工し、穿孔されかけていることから、4は人工的な製品と考えにくい点もあるが、管玉状を呈することから共に垂飾りの可能性が高い。

五平遺跡の縄文時代の石器組成をみると狩猟用具の代表である石鏃・搔器が33点に対して、植物採集・加工用具と考えられる打製石斧・スタンプ形石器・石皿・磨石・敲石は53点と多数を占め、当遺跡の生業面では植物採集・加工活動の方が、狩猟活動より比重が高かったものと推測できる。石鏃・搔器・打製石斧・局部磨製石斧・礫器・磨石・平板石皿などから成る石器組成は、鹿島町伏見遺跡⁽⁸⁾や水海道市奥山下根遺跡⁽⁴⁸⁾、友部町石山神遺跡⁽⁴⁹⁾でも確認されており、草創期から早期にかけて継承された石器組成と考えられる。

- 註1 根本康弘「東茨城郡内原町中台遺跡出土遺物について」『年報』4 茨城県教育財団 1985年
- 2 西村正衛「千葉県香取郡神崎町西之城遺跡—縄文早期文化の研究」『利根川下流域の研究』早稲田大学出版部 1984年
- 3 日暮晃一『真光寺・広袴遺跡群Ⅳ』鶴川第二地区遺跡調査会 1989年
- 4 斎藤 弘『宇都宮清陵高校地内遺跡調査報告』栃木県教育委員会 1986年
- 5 斎藤弘道他『倉持遺跡—第1年次調査—』明野町教育委員会 1983年
- 6 川崎純徳「集成図」『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』茨城県 1979年
- 7 茨城県教育財団「沖餅遺跡」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書3』1980年
- 8 小野真一他『常陸伏見』伏見遺跡調査会 1979年
- 9 茨城県教育財団「安塚遺跡」『鹿島線関係遺跡発掘調査報告書』1980年
- 10 安岡路洋他『稻荷原』大宮市教育委員会 1966年
- 11 宮内良隆他「茨城県における縄文草創期熱糸文系土器群の検討」『常総台地』8 1976年
- 12 渡辺明「那珂町酒出遺跡出土の早期縄文式土器」『常総台地』6 1972年
- 13 a 吉田格「茨城県花輪台貝塚概報」『日本考古学』第1巻第1号 1948年

- b 甲野勇他『縄文時代文化編年図集 第1輯 花輪台文化』 山岡書店 1949年
 - c 吉田格「花輪台貝塚」 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 茨城県 1979年
 - d 杉山典子「花輪台貝塚の土器－南山大学所蔵資料の再検討－」 『南山考古』 2 南山考古学会 1983年
 - e 原田昌幸「花輪台式土器論」 『考古学雑誌』 第74巻第1号 日本考古学会 1988年
 - f 吉田格「縄文早期花輪台文化－茨城県花輪台貝塚－」 『考古学叢考 下巻』 吉川弘文館 1990年
- 14 13 f の文献で、第 6 号竪穴状遺構内で共存している。
- 15 篠原正『金堀遺跡発掘調査概報』 富里村史編纂委員会 1977年
- 16 13 e の論文で、原田氏は「花輪台式」の文様として縄文・撚糸文・絡条体圧痕文・刺突文・沈線文の 5 タイプをあげており、当遺跡例も絡条体圧痕文タイプに属するものとされよう。
- 17 藤本彌城「ムジナⅡ遺跡」 『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』 1980年
- 18 斎藤弘道「茨城の縄文時代草創期・早期の土器群について(四)」 『年報』 7 茨城県教育財団 1988年
- 19 茨城県教育財団 「松原遺跡」 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 1981年
- 20 馬目順一他『竹之内遺跡』 いわき市教育委員会 1982年
- 21 原田昌幸「撚糸文土器終末期の諸問題(Ⅱ)－「平坂式土器」の再検討－」 『物質文化』 48 1987年
- 22 斎藤弘道「茨城の縄文時代草創期・早期の土器群について(一)」 『年報』 3 茨城県教育財団 1984年
- 23 茨城県教育財団「奥山C遺跡」 『水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2』 1986年
- 24 20の報告書の第19図の44-12や44-5・8の土器は、当遺跡の2類a種に類似するかもしれない。
- 25 藤本彌城「祝町Ⅳ(磐船山)遺跡」 『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』 1980年
- 26 鈴木素行『武田Ⅲ－1989年度武田遺跡群発掘調査の成果－』 勝田市文化振興公社 1990年
- 27 領塚正浩「田戸下層式土器細分への覚書」 『土曜考古』 12号 土曜考古学研究会 1989年

- 28 川崎純徳他『藤本彌城先史資料整理調査報告書Ⅱ』 勝田市教育委員会 1988年
- 29 西川博孝他『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書 N07 遺跡』 千葉県文化財センター 1984年
- 30 藤本彌城「祝町Ⅲ遺跡」『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』 1980年
- 31 茨城県教育財団「埜遺跡」『鹿島線関係発掘調査報告書』 1980年
- 32 茨城県教育財団「廻り地B遺跡」『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5』 1981年
- 33 佐藤次男『水戸市柳崎貝塚貝層下出土の子母口式土器について』『茨城考古学』第2号 茨城考古学会 1969年
- 34 茨城県教育財団「新池台遺跡」『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2』 1983年
- 35 茨城県教育財団「大生郷遺跡」『大生郷工業団地内埋蔵文化財調査報告書』 1982年
- 36 川崎純徳他『遠原貝塚の研究（本編Ⅰ）』 勝田文化研究会 1980年
- 37 茨城県教育財団「外山遺跡」『石岡都市計画事業南台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1』 1982年
- 38 安藤文一「粟島台式土器の設定—東関東における縄文前期終末の一様相—」『房総文化』14 1977年
- 39 藤本彌城『常陸那珂川下流の弥生土器Ⅲ』 1983年
- 40 西野則史他「那珂町森戸遺跡出土の縄文式・弥生式土器及び古式土師器について」『年報』9 茨城県教育財団 1990年
- 41 阿久津久他『茨城県関係古代金石文資料集成—墨書・窺書—』 茨城県立歴史館 1985年
- 42 発掘調査は昭和63年1月～2月にかけてと平成2年2月～5月にかけて計3回実施されている。昭和63年度分は報告書が刊行されているが、他は未報告である。
- 43 川崎純徳他『後野遺跡』 勝田市教育委員会 1976年
- 44 川崎純徳他『額田大宮遺跡』 那珂町史編纂委員会 1978年
- 45 川崎純徳「茨城における細石刃核について」『婆良岐考古』第1号 1980年
- 46 山崎丈他『下里本邑』下里本邑遺跡調査会 1979年
- 47 小田静夫「スタンプ形石器」『縄文文化の研究』第7巻 雄山閣 1983年
- 48 茨城県教育財団「奥山下根遺跡」『水海道都市計画事業・内守谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書1』 1985年
- 49 茨城県教育財団「石山神遺跡」『茨城県立総合教育研修センター（仮称）建設地内埋蔵文化財調査報告書』 1990年

結 語

昭和63年10月に開始した内原町の五平遺跡・蔵田千軒遺跡・権現古墳群の3遺跡の発掘調査は、次に記すような遺構と遺物を検出して翌平成元年3月に終了した。これら3遺跡に対する調査は、県道友部内原線の改良工事に伴うもので、3遺跡合わせての調査面積は8,528㎡である。

五平遺跡外2遺跡から検出された遺構は、竪穴住居跡7軒、土坑121基、溝12条、古墳2基、井戸1基である。

五平遺跡の竪穴住居跡2軒は、平安時代前期9世紀後半のものと考えられる。土坑74基のうち出土遺物等から構築時期が推定できるものは少数で、縄文時代草創期・早期と思われるもの数基、古墳時代中期が1基、平安時代後期が数基である。古墳は墳丘を失っており、径約20m程の円墳で、全長9m弱の羽子板状の横穴式石室が構築されているが、攪乱が著しく時期は不明である。溝9条のうち時期が判明するのは第1号溝の古墳時代後期のみである。遺物で最も注目されるものはG2区、H3・I3区の遺物包含層から多量に出土した縄文時代草創期・早期の土器と石器である。擦糸文系土器・無文土器・沈線文系土器群が主となり、器形復元できた土器も数例ある。中でも井草Ⅰ式土器は優品である。第Ⅲ群1類とした沈線文土器、同群7類とした田戸上層式等は類例の少ないもので貴重である。また、石鏃・搔器・打製石斧・磨製石斧・局部磨製石斧・礫器・スタンプ形石器・磨石・敲石・石皿からなる縄文時代草創期後半から早期前半にかけての石器組成が把握できたことは大きな調査成果といえよう。

蔵田千軒遺跡の竪穴住居跡は1軒のみで、平安時代前期9世紀前半のものと考えられる。土坑32基のうち遺物を伴うものは少ないが、住居跡北側に集中する一群は平安時代のものであると思われる。井戸も出土遺物から平安時代前期9世紀後半のものと考えられる。溝1条は時期・性格とも不明である。遺物で注意されるものは表土から出土した「厨」の墨書土器である。

権現古墳群の竪穴住居跡4基は、いずれも平安時代前期9世紀前半のものと考えられるが、重複例があり、若干の時期差がある。土坑15基のほとんどは住居跡群の東南側にやや集中し、出土遺物等から平安時代のものである。溝2条は時期・性格とも不明である。遺物で注目されるものは第1号住居跡出土の須恵器の高台付坏で、器形・胎土・整形手法等から東海西部からの搬入品と考えられる。このことは、上記の「厨」の墨書土器の存在とともに当遺跡群（蔵田千軒遺跡）が古代の有力な集落跡であった可能性を示唆するものと考えられる。

以上、五平遺跡外2遺跡の調査と整理を担当し、調査成果をできる限り報告書に反映しようと努めたが、決して充分なものとは言えない。今後の再検討が必要と考えている。

なお、本書をまとめるにあたり、内原町教育委員会をはじめ、関係各位から多くの御指導・御教示を頂いた。文末ながら厚く感謝の意を表して結語としたい。

写 真 图 版



五平遺跡全景



五平遺跡全景

発掘前全景

PL 2

五平遺跡



テストピット土層



第1号墳確認状況



第1号墳周溝全景（北側）



第1号墳主体部調査状況



第1号墳土層



第1号墳玄室内遺物出土状況



第1号墳玄室内遺物出土状況
第1号墳



第1号墳玄室内遺物出土状況



第1号住居跡全景



第1号住居跡遺物出土狀況



第1号住居跡土層



第1号住居跡遺物出土狀況



第1号住居跡遺物出土狀況



第1号住居跡竈内遺物出土狀況



第1号住居跡竈内遺物出土狀況
第1号住居跡



第1号住居跡竈内遺物出土狀況

PL 4

五平遺跡



第 2 号住居跡全景



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡土層



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡遺物出土狀況



第 2 号住居跡遺物出土狀況
第 2 号住居跡



第 2 号住居跡竈全景



第8号土坑全景



第8号土坑遺物出土狀況



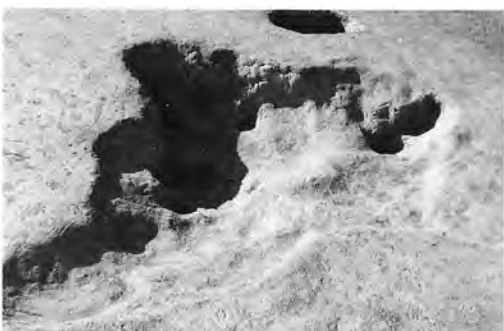
第20号土坑全景



第20号土坑遺物出土狀況



第20号土坑遺物出土狀況



第21号土坑全景



第25号土坑全景
第8・20・21・25・28号土坑



第28号土坑全景

PL 6

五平遺跡



第32号土坑全景



第35号土坑全景



第36号土坑遺物出土狀況



第37号土坑全景



第44号土坑全景



第47号土坑全景



第48号土坑全景

第32・35・36・37・44・47・48・51号土坑



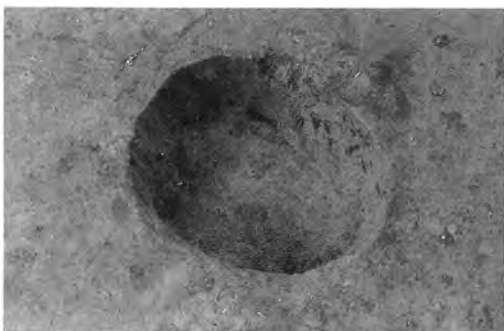
第51号土坑全景



第55号土坑全景



第57号土坑全景



第59号土坑全景



第64号土坑全景



第65号土坑全景



第67号土坑全景



第73号土坑全景
第55・57・59・64・65・67・73号土坑



第73号土坑土層

PL 8

五平遺跡



第1号溝全景



第1号溝遺物出土状況



第2号溝土層



第2号溝遺物出土状況



第3・5号溝全景



第4号溝全景



第7号溝全景
第1～5号溝・第7～9号溝



第8・9号溝全景



G 2 区包含層調査状況（北より）



G 2 区包含層調査状況（南より）



G 2 b4 区遺物出土状況（装飾品）



G 2 f 8 区遺物出土状況（石斧）



G 2 f 8 区遺物出土状況（スタンプ形石器）



G 2 f 8 区遺物出土状況（スタンプ形石器）



G 2 f 8 区遺物出土状況（土器片）
G 2 区包含層



G 2 9 6 区遺物出土状況（石皿）

PL10

五平遺跡



G 2g₆区遺物出土状況 (スタンプ形石器)



G 2g₇区遺物出土状況 (石斧)



G 2g₇区遺物出土状況 (磨石)



G 2g₉区遺物出土状況 (石鏃)



Nトレンチ遺物出土状況 (石斧)



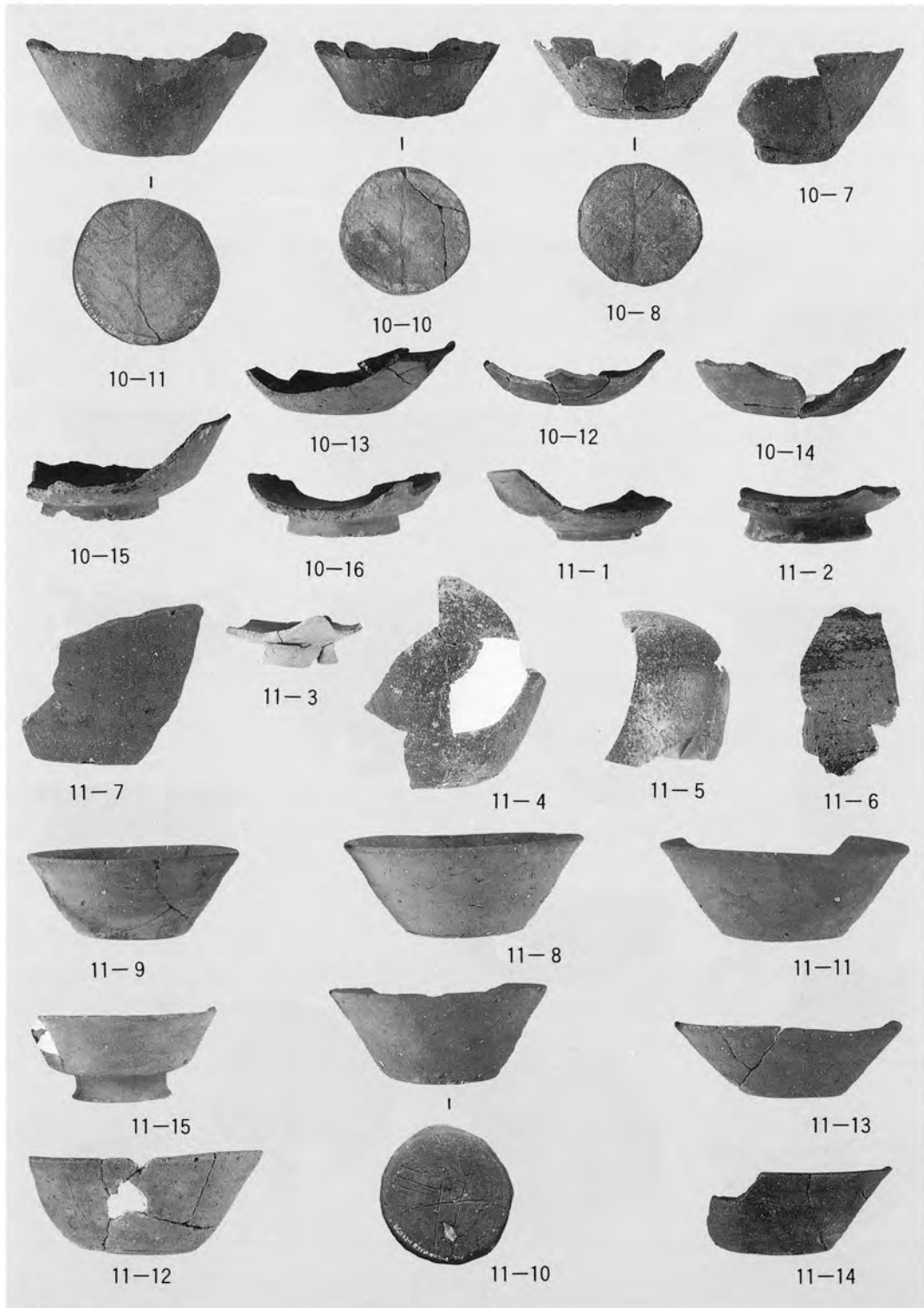
KLトレンチ遺物出土状況 (尖底土器)



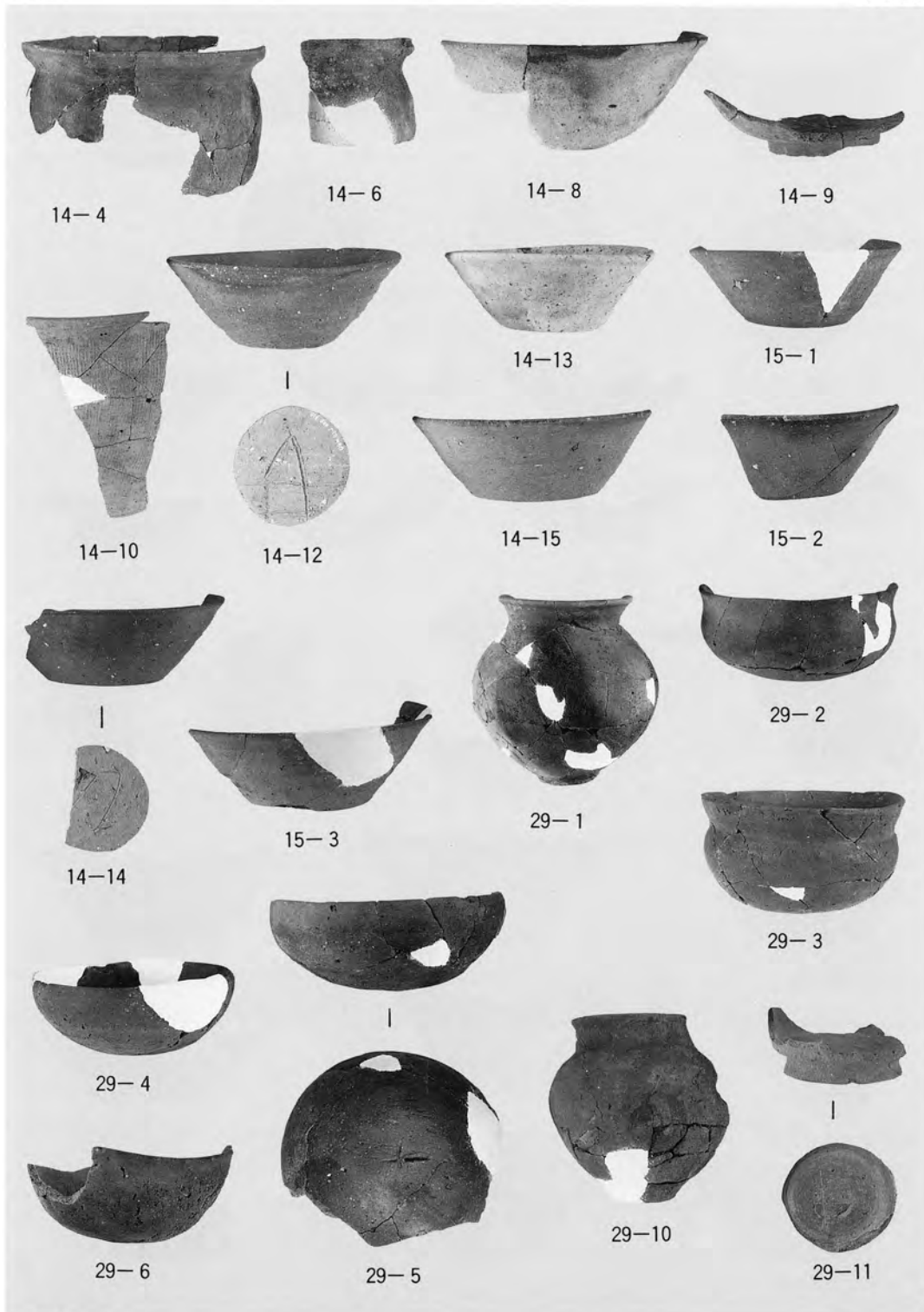
I 3a₈区遺物出土状況 (石鏃)
G 2区包含層・Nトレンチ・KLトレンチ・I 3区包含層



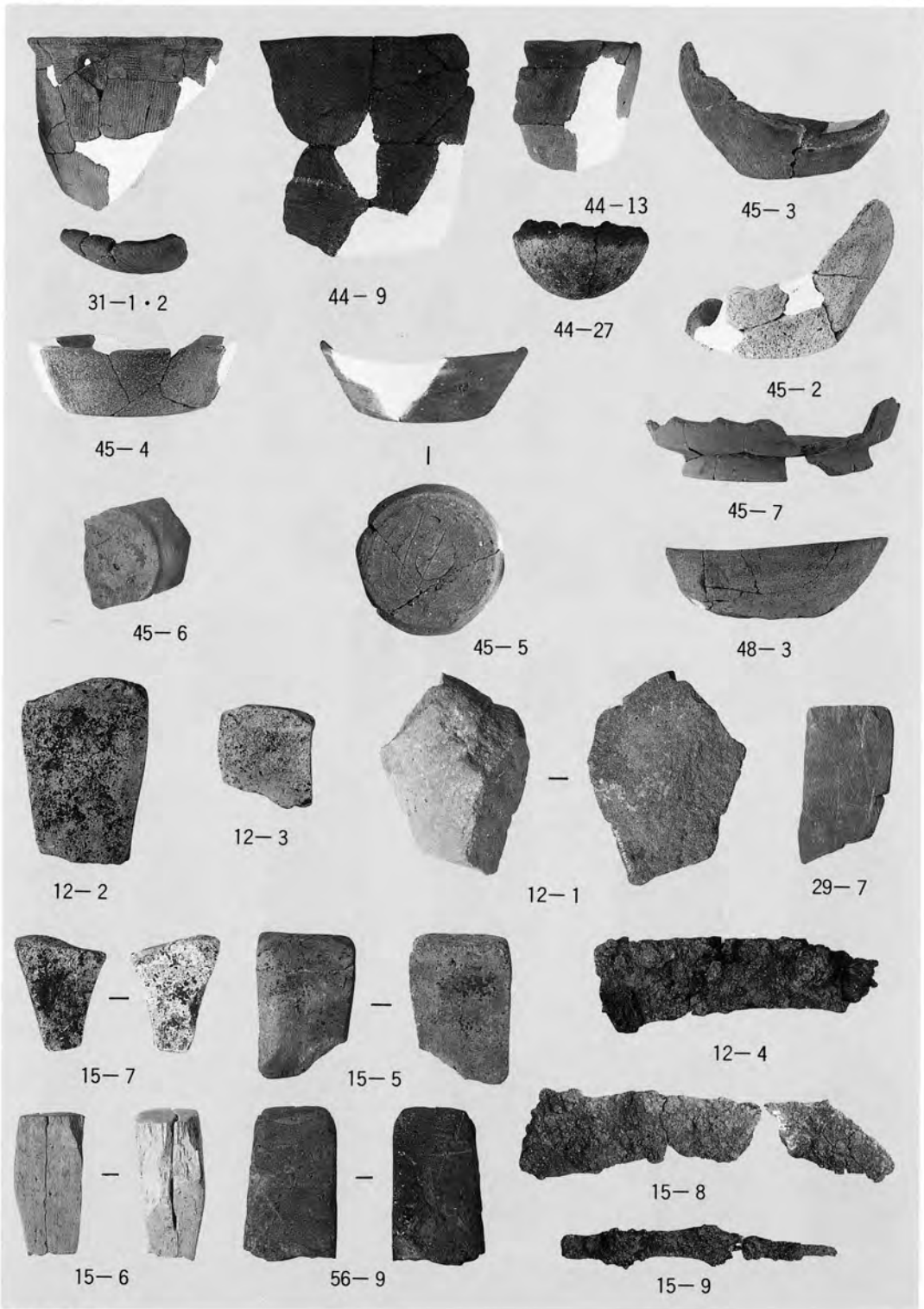
I 3区遺物出土状況 (尖底土器)



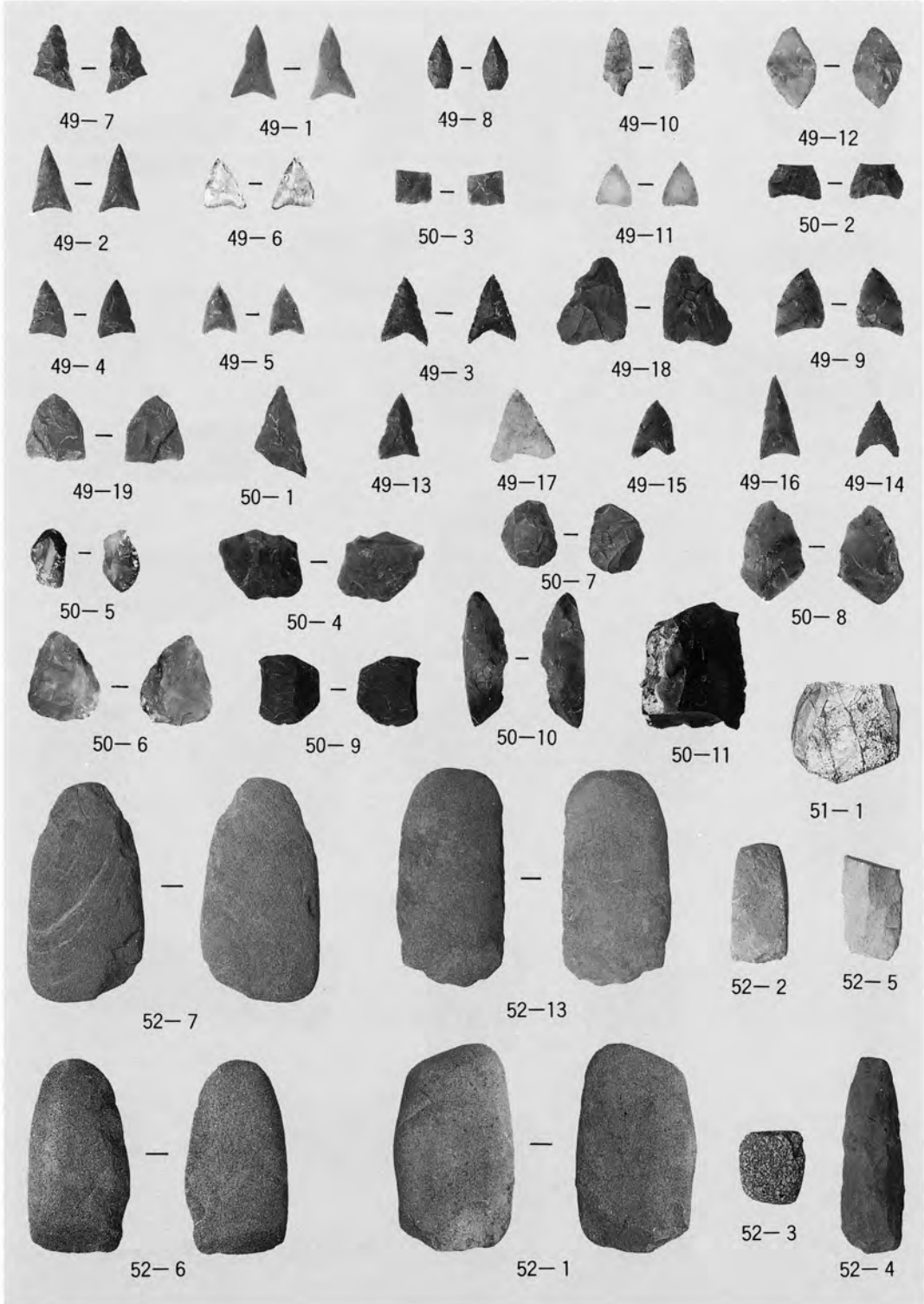
出土遺物(1)



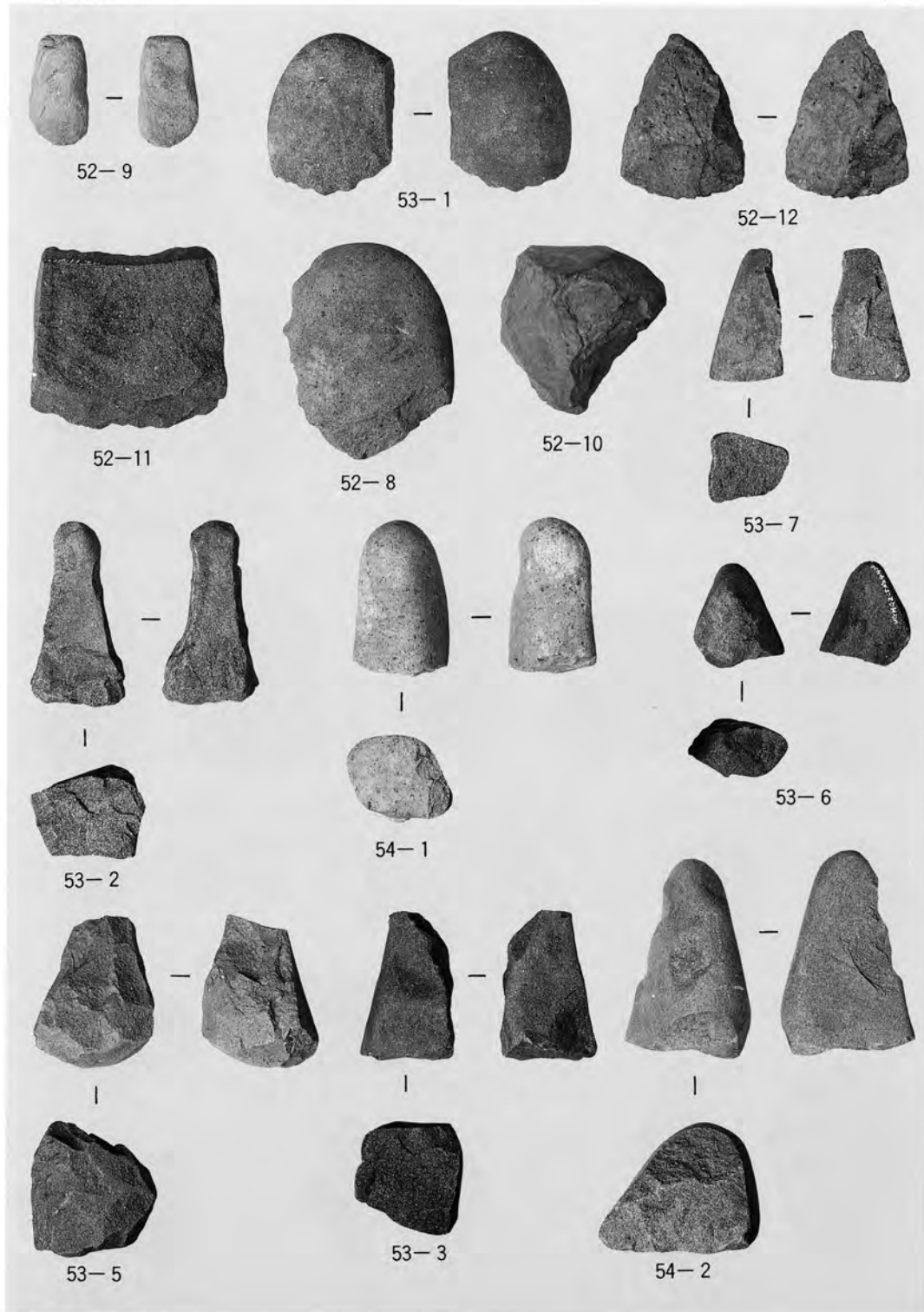
出土遺物(2)



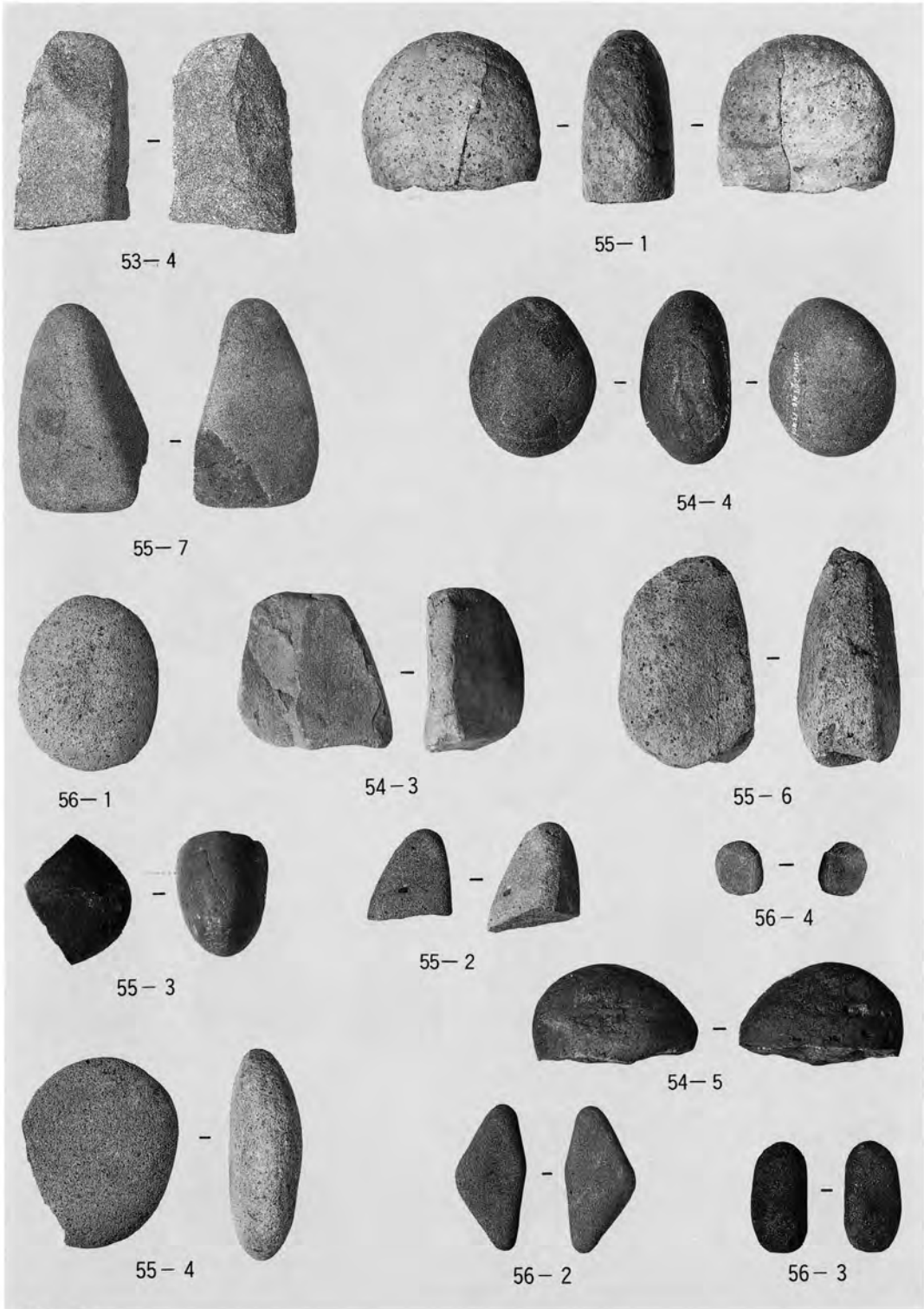
出土遺物(3)



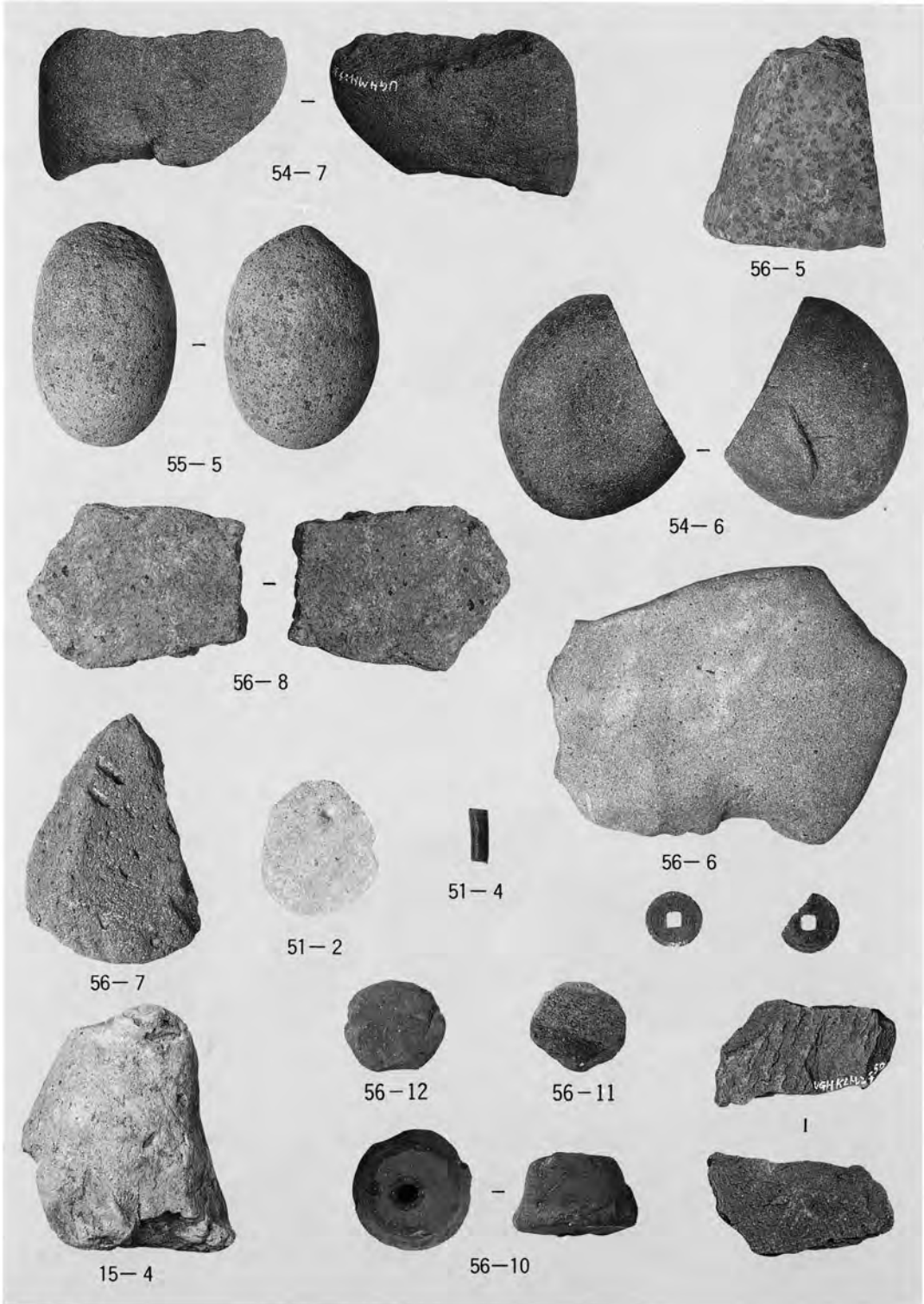
出土遺物(4)



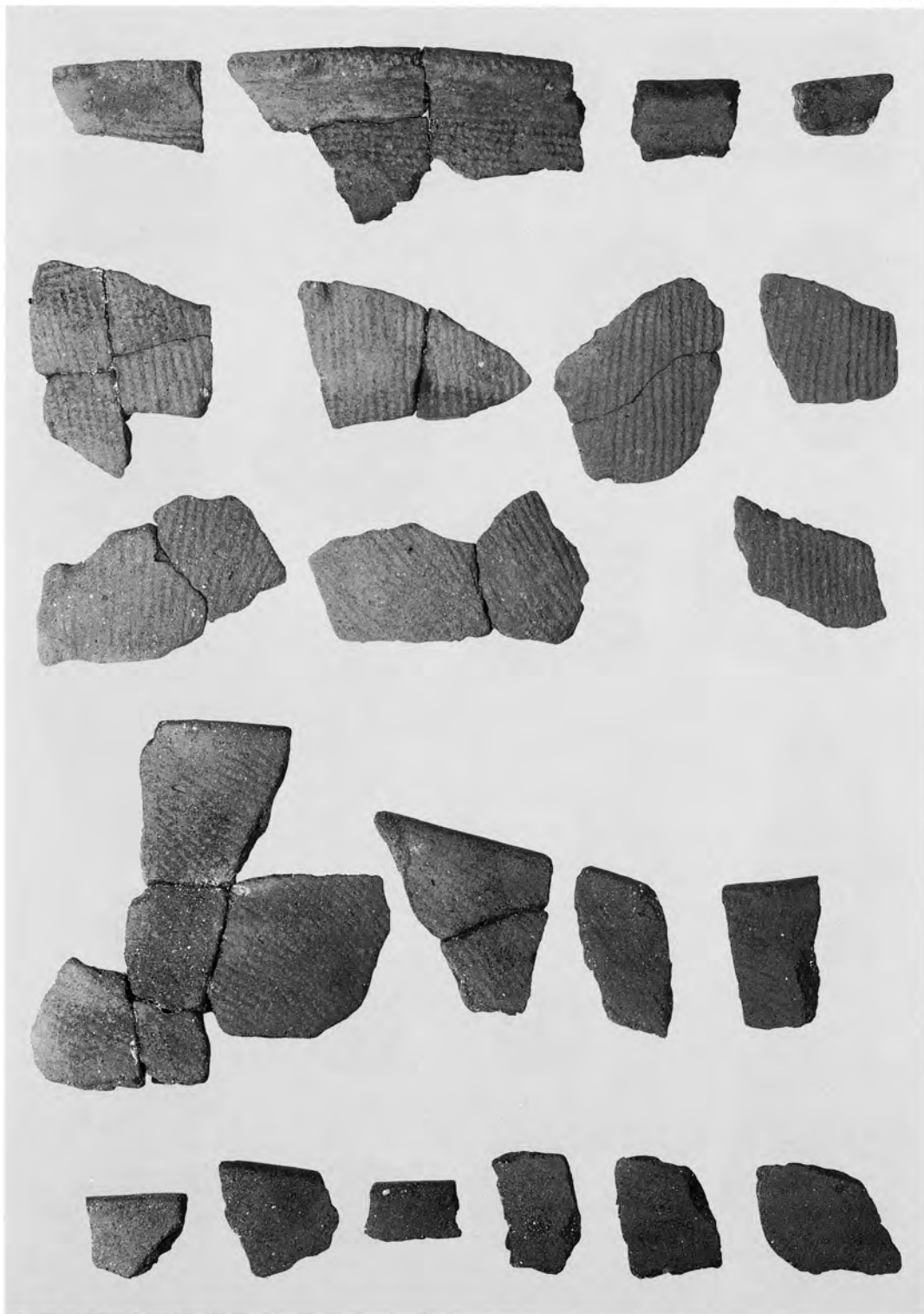
出土遺物(5)



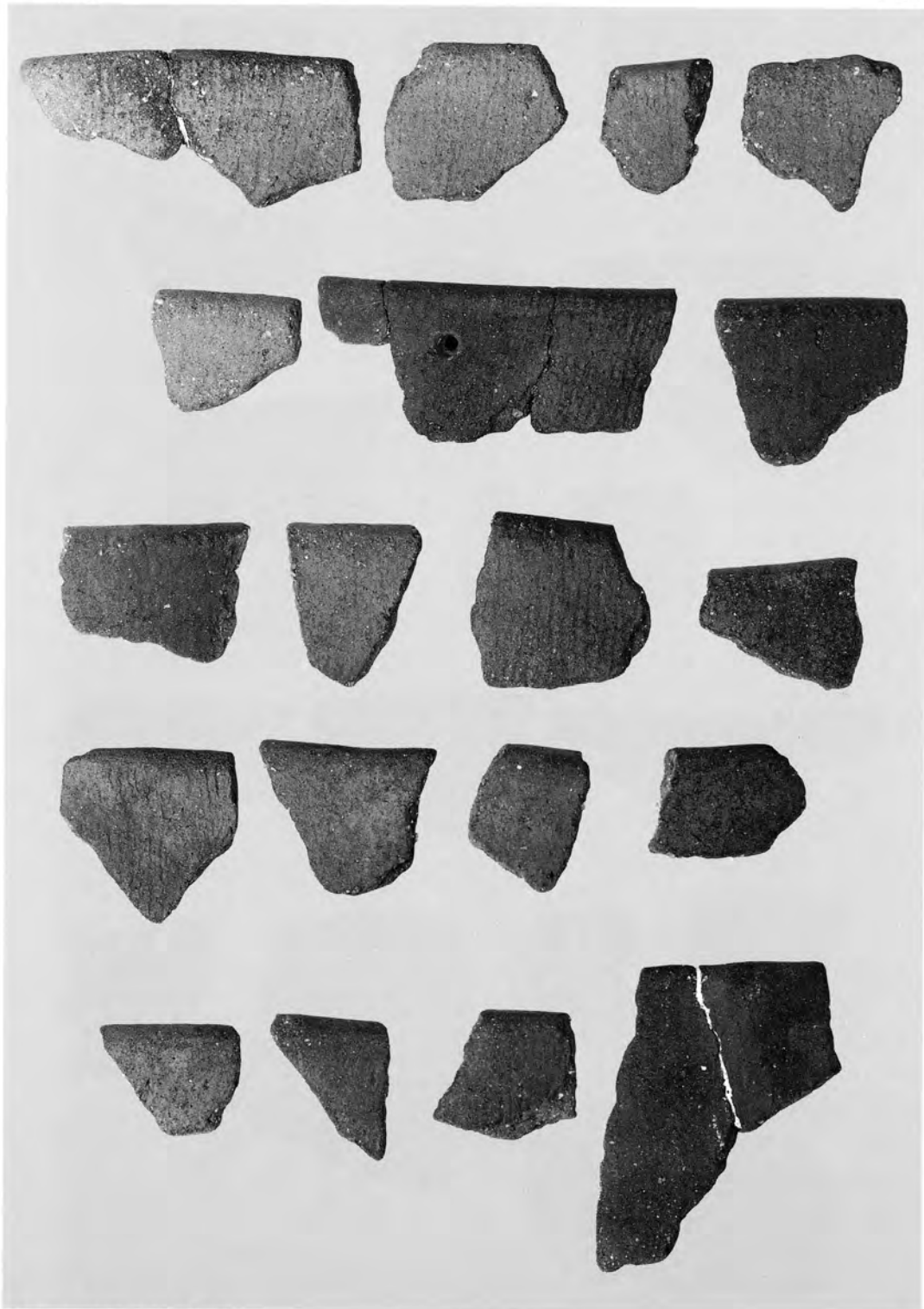
出土遺物(6)



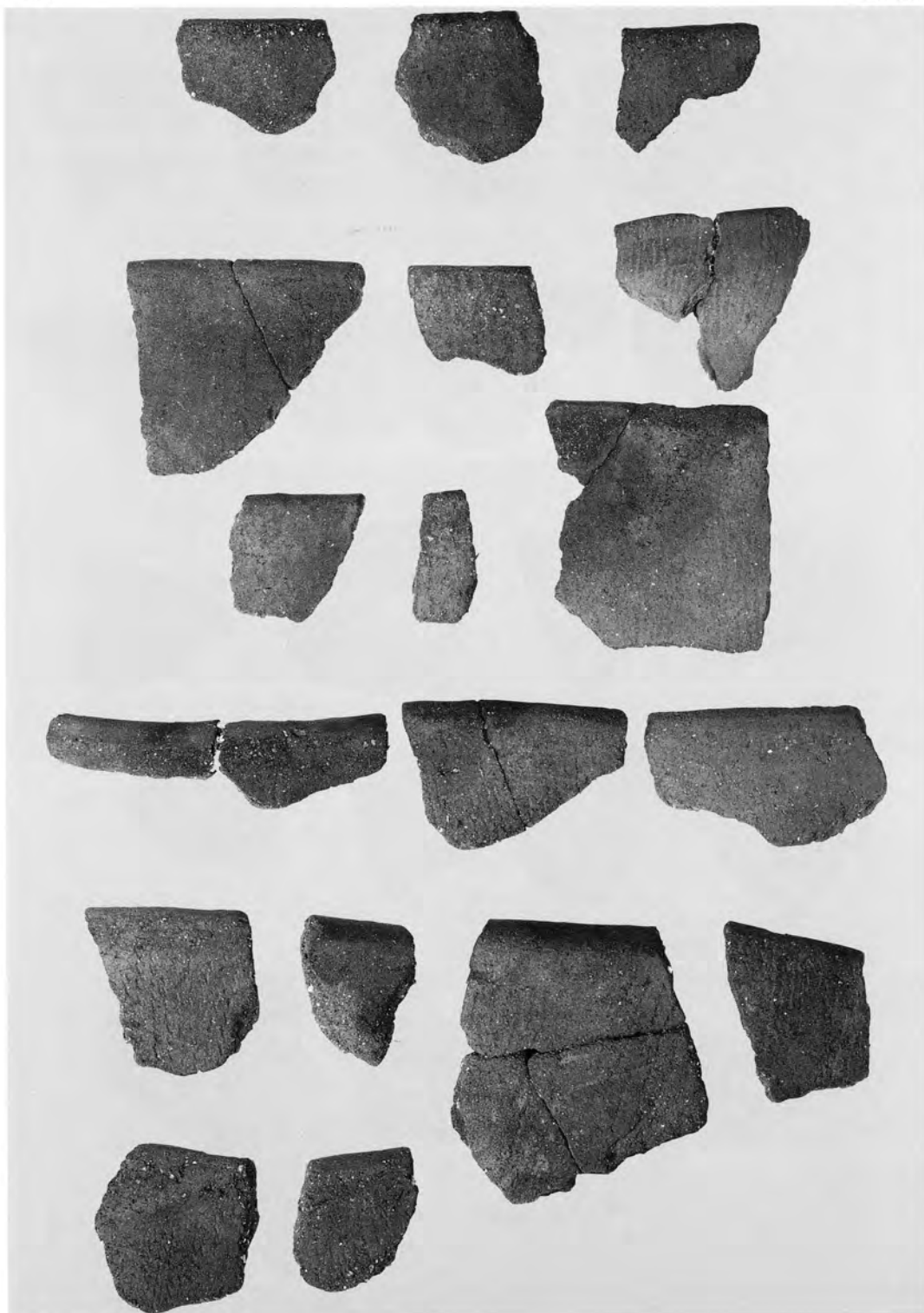
出土遺物(7)



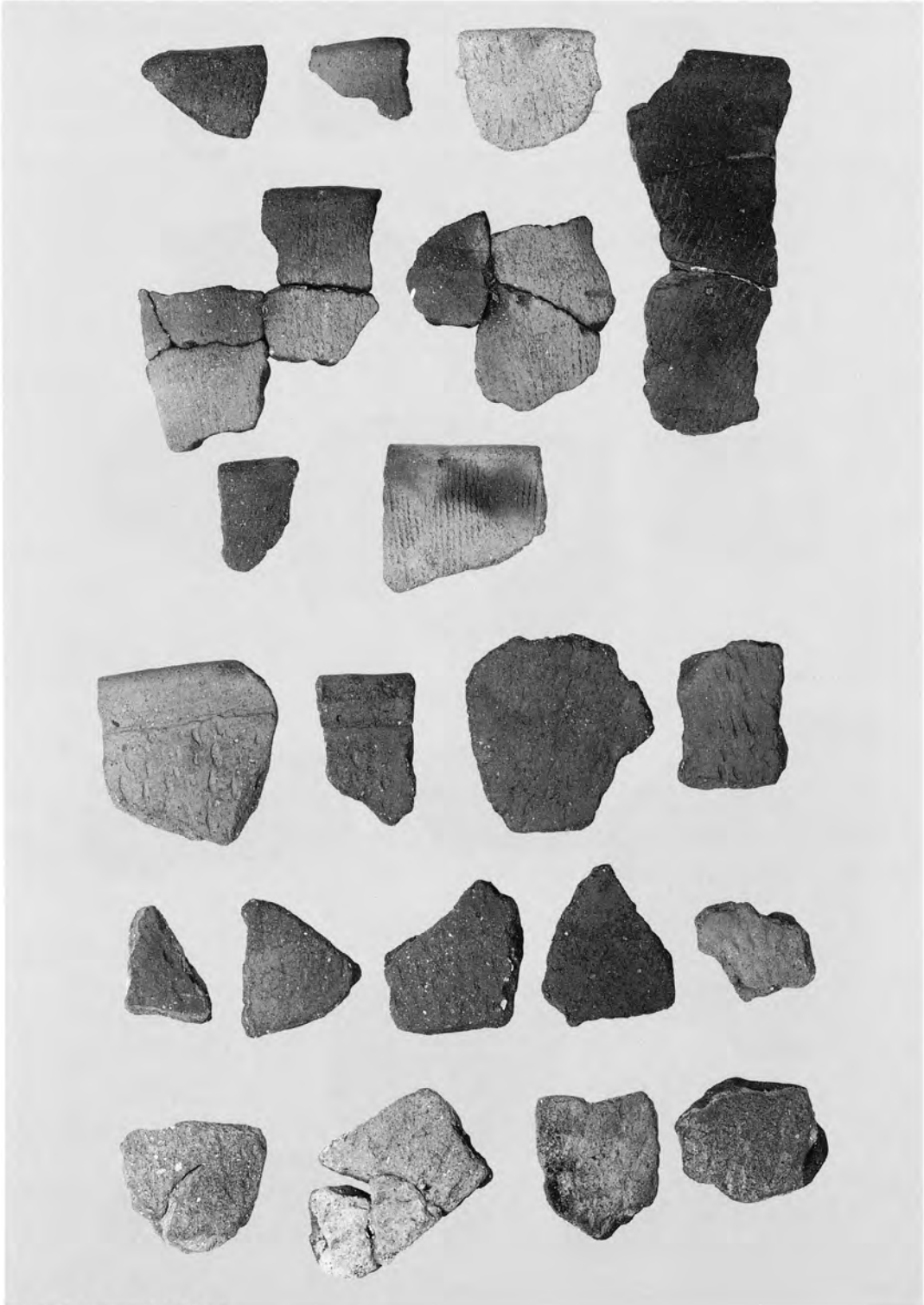
G 2 区包含層出土遺物(1)



G2区包含層出土遺物(2)



G2区包含層出土遺物(3)



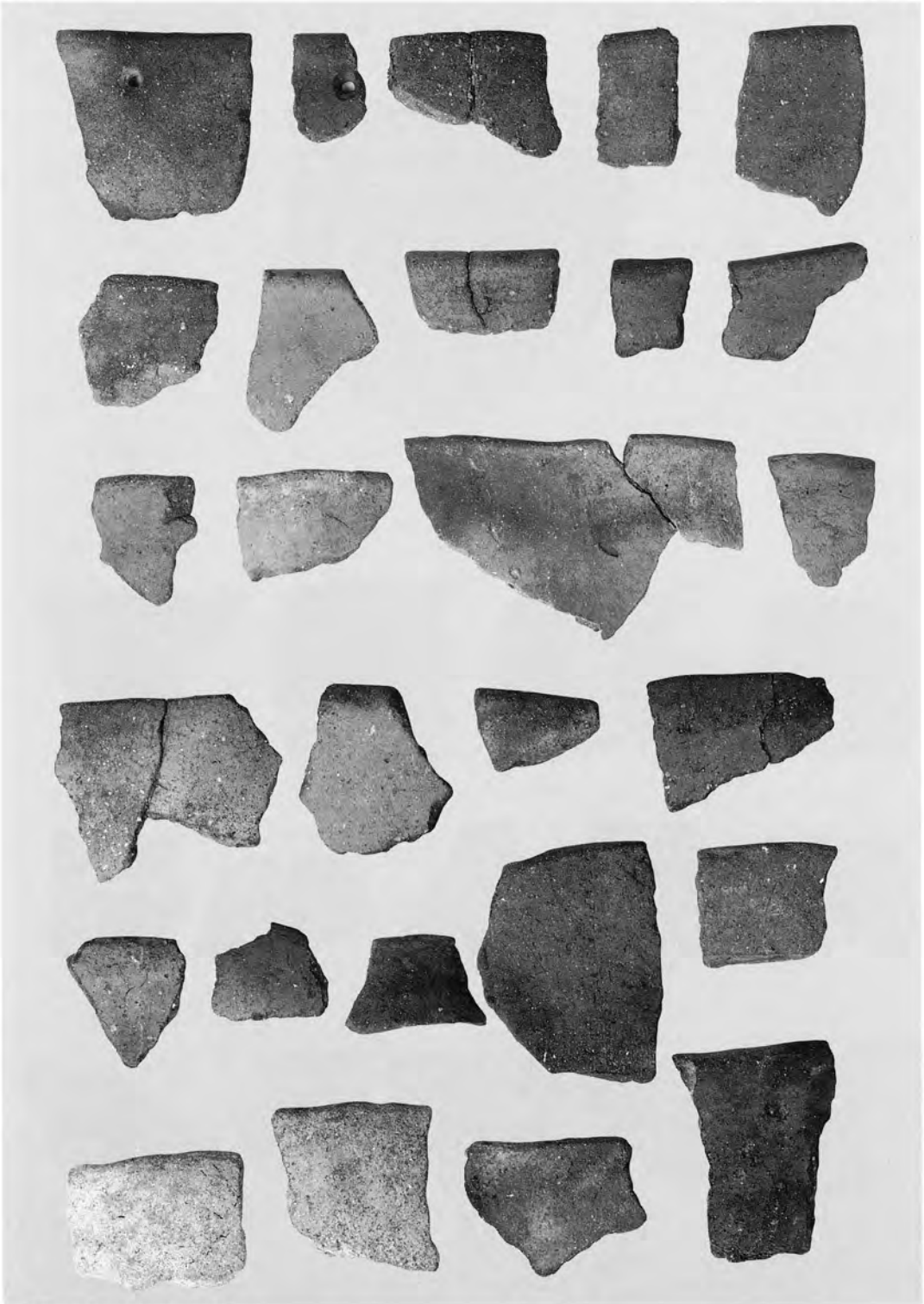
G2区包含層出土遺物(4)



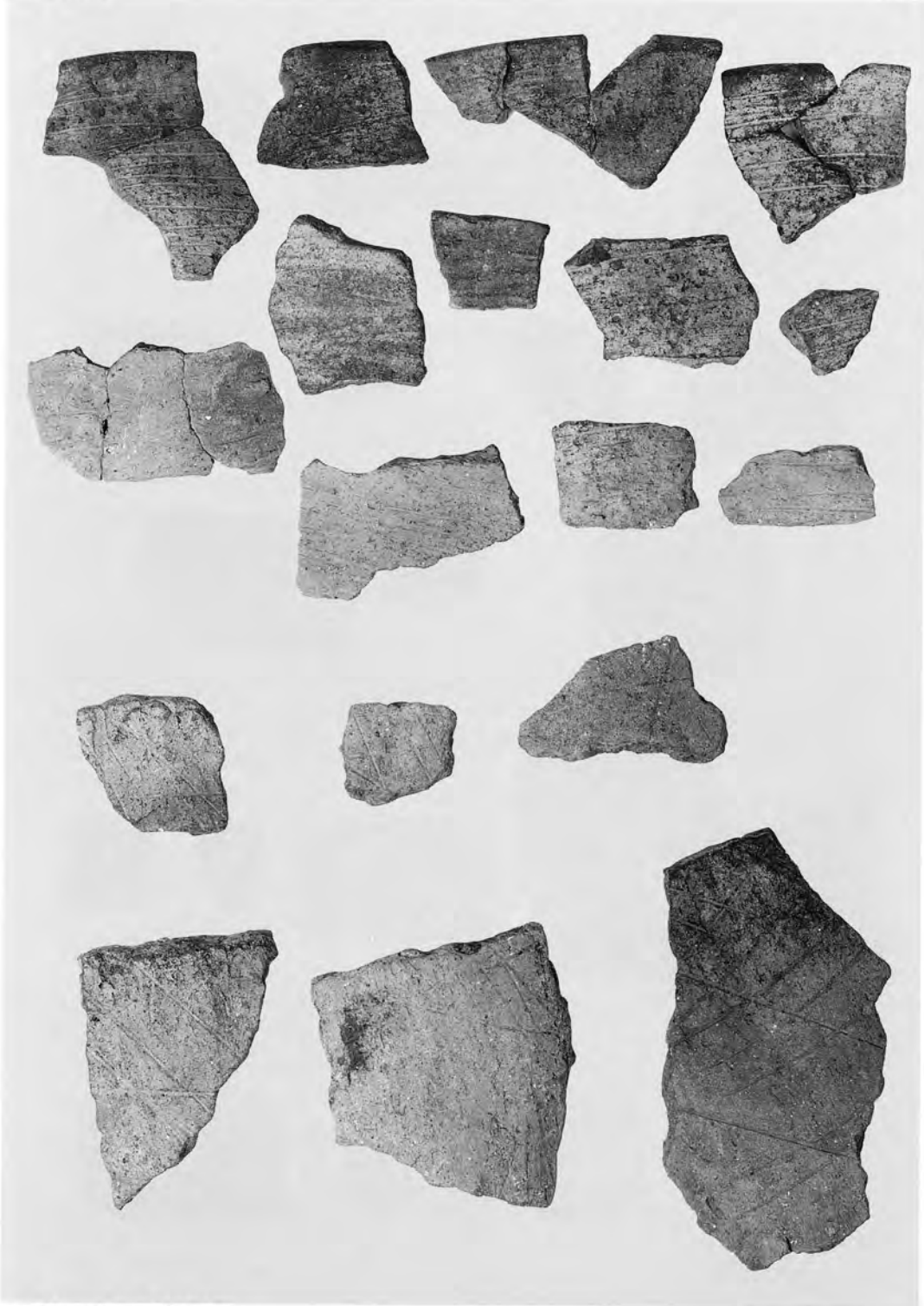
G 2 区包含層出土遺物(5)



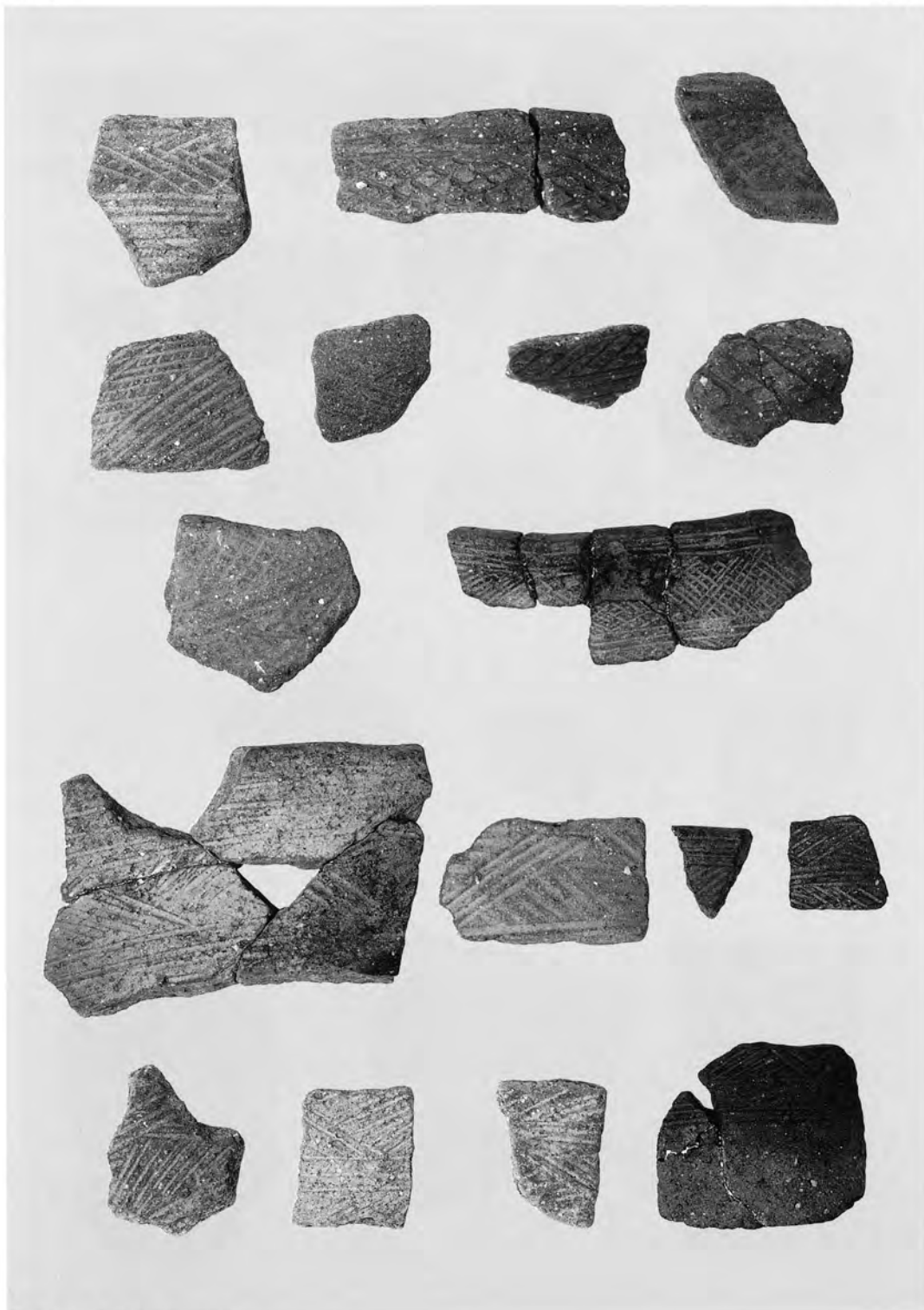
G2区包含層出土遺物(6)



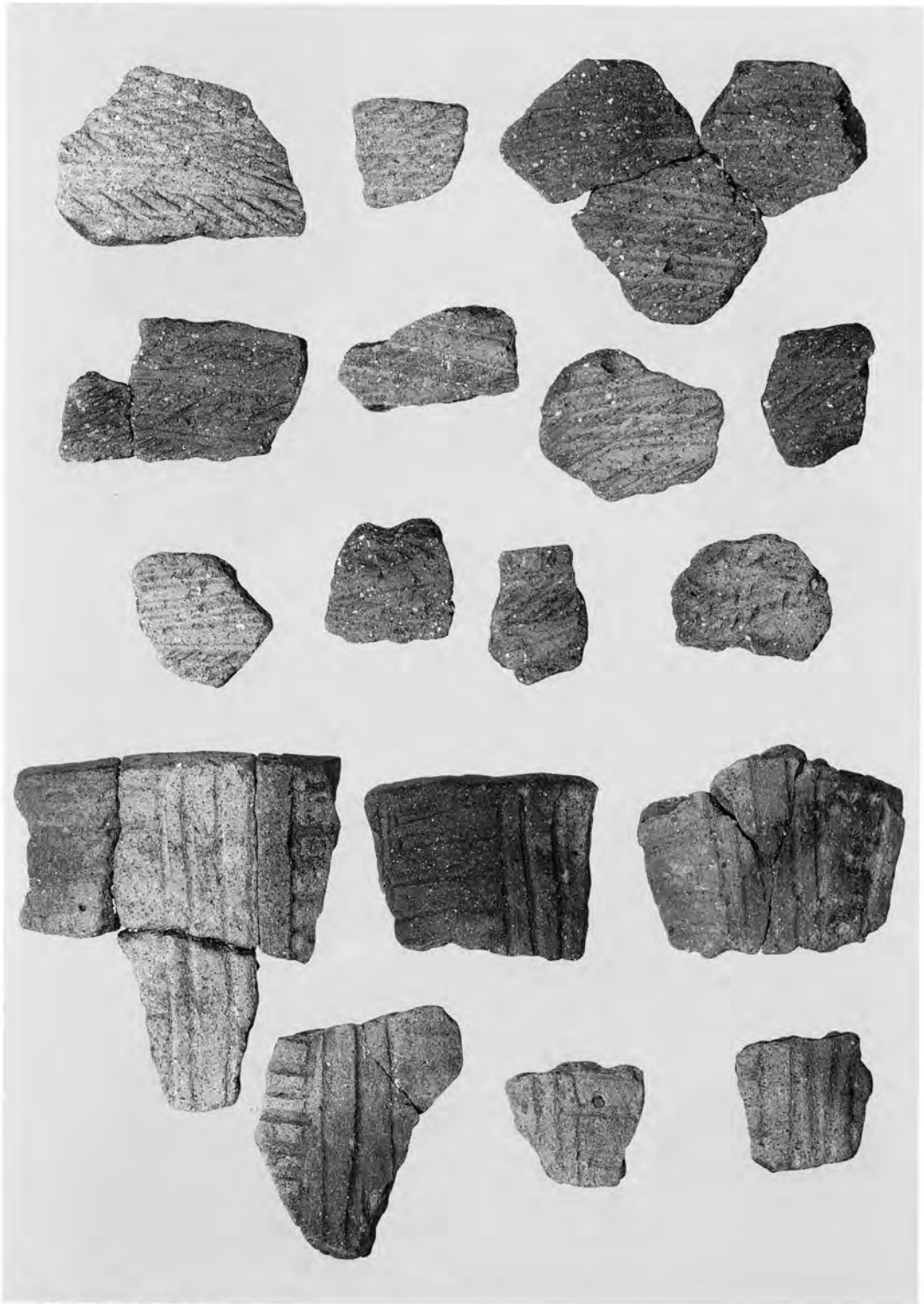
G2区包含層出土遺物(7)



G 2 区包含層出土遺物(8)



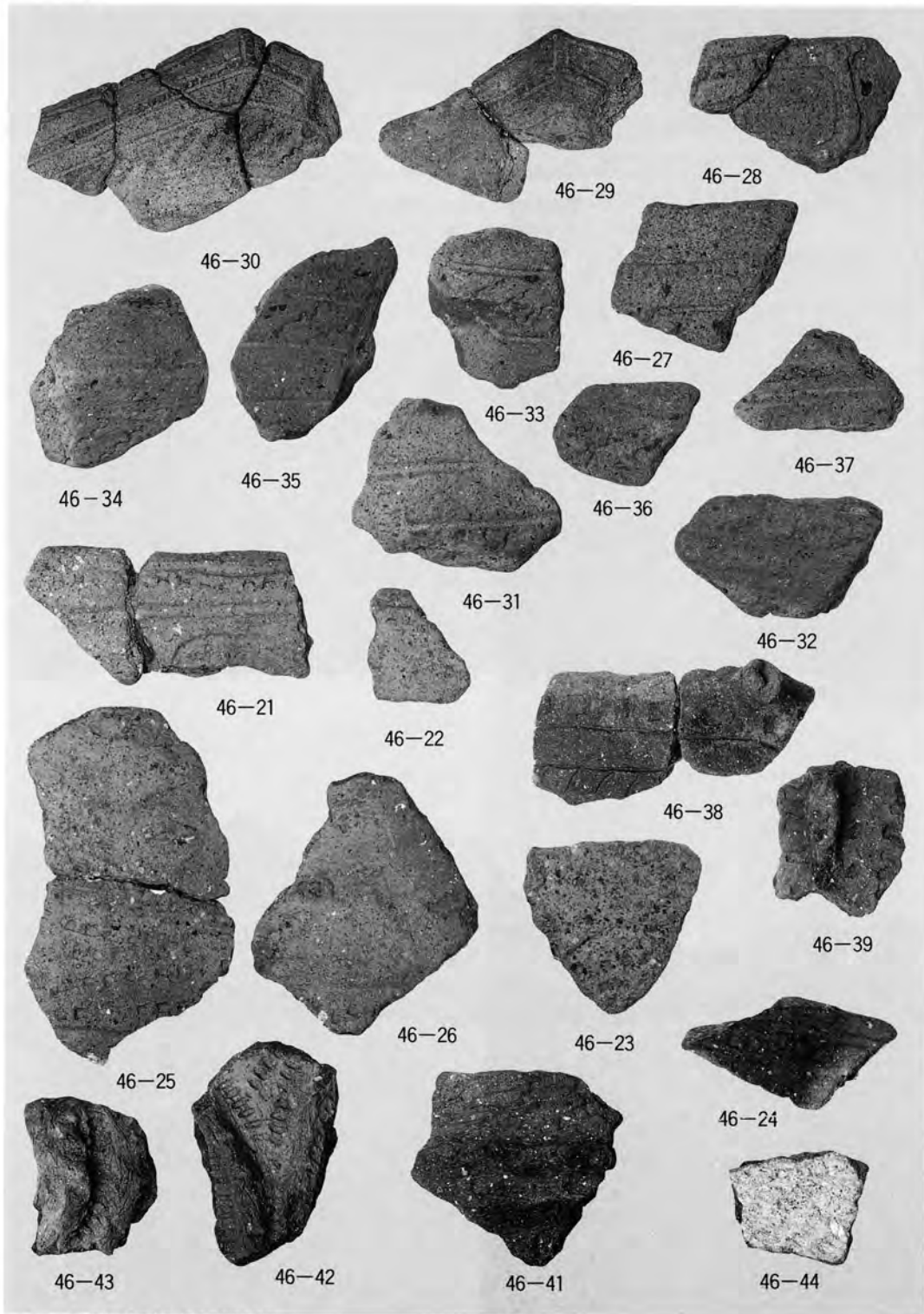
G2区包含層出土遺物(9)



G2区包含層出土遺物(10)



G2区包含層出土遺物(11)



H3・I3区包含層出土遺物



蔵田千軒遺跡全景



発掘前全景
蔵田千軒遺跡全景



第1号住居跡全景



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡土層



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡竈土層



第1号住居跡竈内遺物出土状況
第1号住居跡, 第1号溝



第1号溝全景



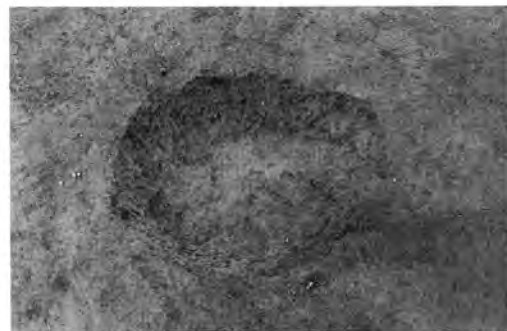
第1号井戸全景



第1号井戸遺物出土状況



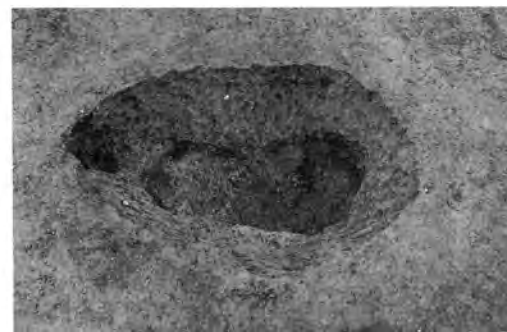
第1号井戸遺物出土状況



第1号土坑全景



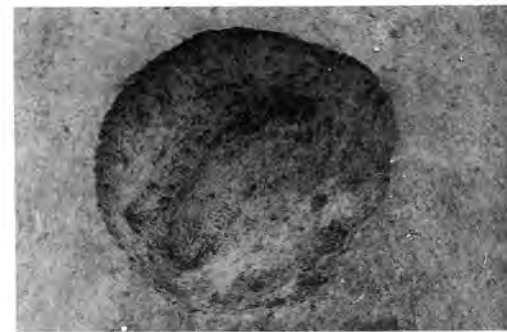
第2号土坑全景



第5号土坑全景



第9号土坑全景
第1号井戸, 第1・2・5・9・10号土坑



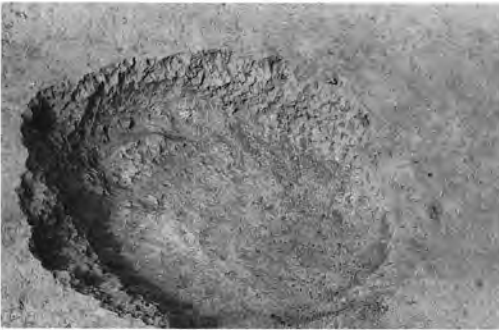
第10号土坑全景



第11号土坑全景



第13号土坑全景



第17号土坑全景



第18号土坑全景



第19号土坑全景



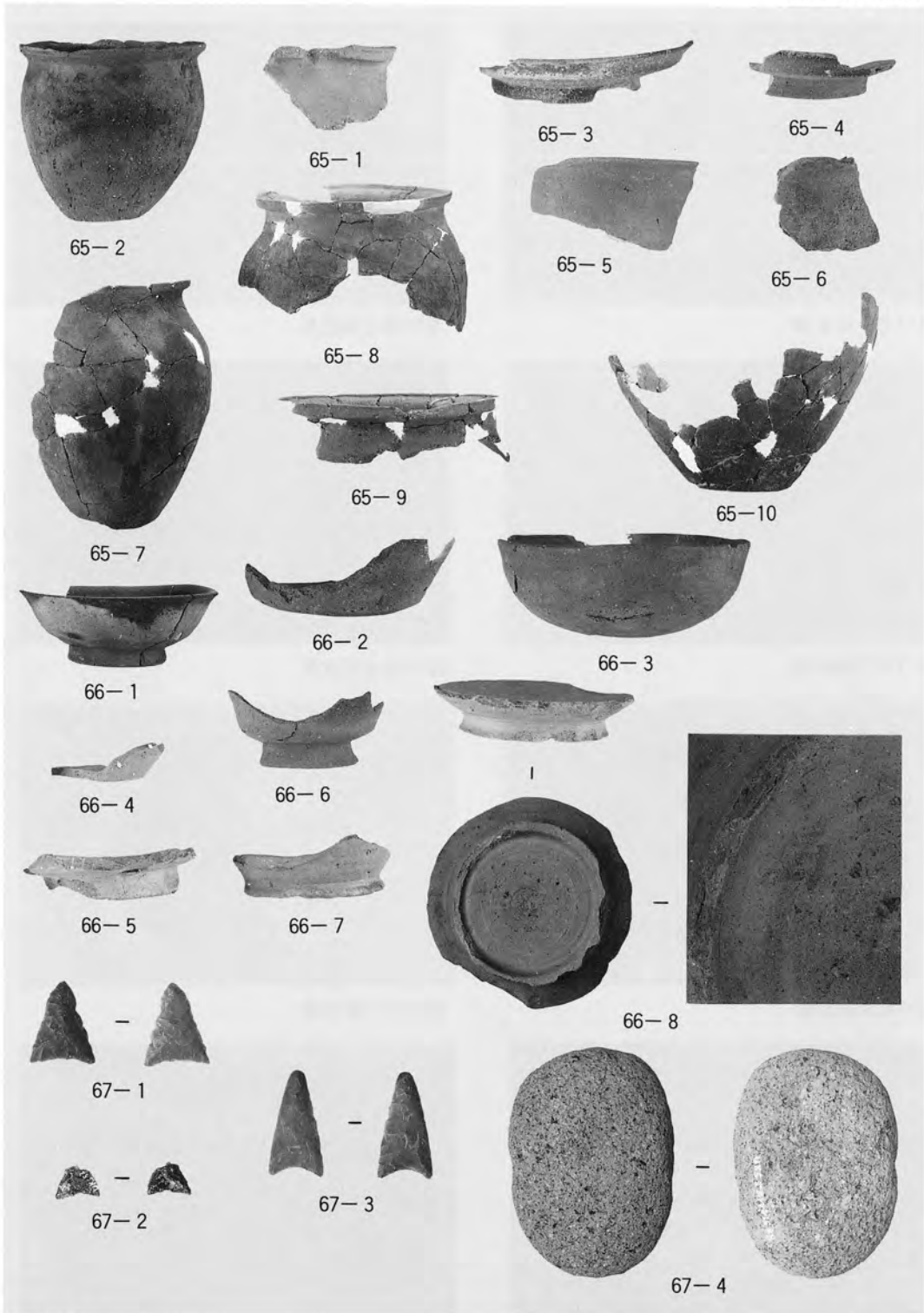
第20号土坑全景



第23号土坑全景
第11・13・17・20・23・29号土坑



第29号A・B土坑全景



出土遺物



権現古墳群全景



発掘前全景
権現古墳群全景



第1号墳発掘前全景



第1号墳全景



第1号墳調査状況



第1号墳3区墳丘土層



第1号墳4区墳丘土層



第1号墳1区周溝土層



第1号墳2区周溝土層
第1号墳



第1号墳3区周溝土層



第1号住居跡全景



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡竈全景



第2号住居跡全景
第1・2号住居跡



第2号住居跡土層



第2号住居跡遺物出土状況



第2号住居跡竈全景



第3号住居跡全景



第3号住居跡土層



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況
第2・3号住居跡



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況



第3号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡全景



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡遺物出土状況



第4号住居跡遺物出土状況



第2・3号住居跡全景
第1～4号住居跡



第1・2・3・4号住居跡全景

PL40

権現古墳群



第7号土坑全景



第9号土坑全景



第10号土坑全景



第12号土坑全景



第13号土坑全景



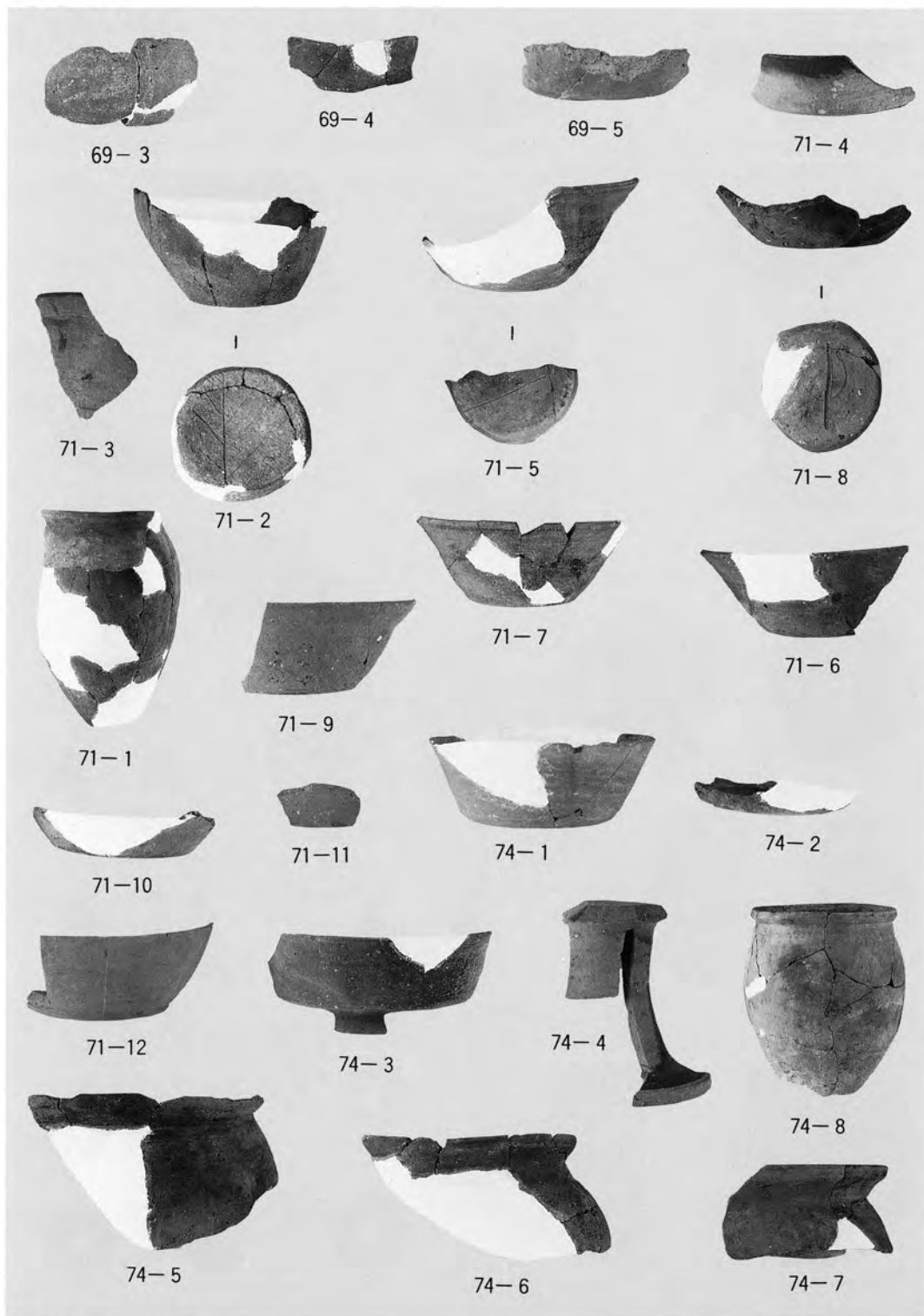
第14号土坑全景



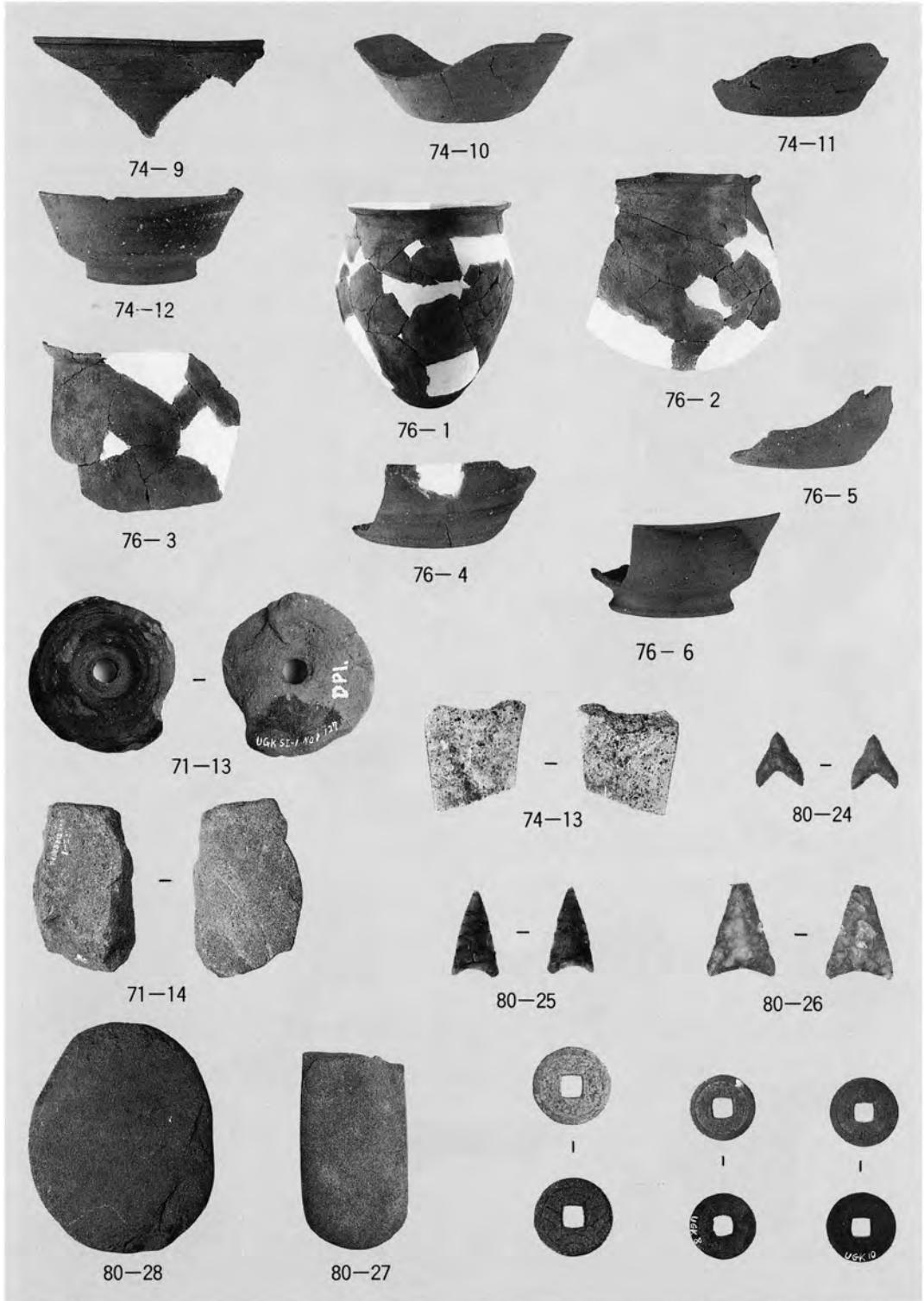
第1号溝全景
第7・9・10・12~14土坑, 第1・2号溝



第2号溝全景



出土遺物(1)



出土遺物(2)

茨城県教育財団文化財調査報告第67集

一般県道友部内原線道路改良工事
地内埋蔵文化財調査報告書

五平遺跡
蔵田千軒遺跡
権現古墳群

平成3年3月25日印刷

平成3年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310 水戸市南町3丁目4番57号

印刷 株式会社 高野高速印刷

水戸市東原2-8-1

TEL 0292-31-0989

